福　岡　市

柏原遺跡群 Ⅳ

— 縄文時代遺跡A-1·E遺跡の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第158集

1987

福岡市教育委員会

福　岡　市

柏原遺跡群 Ⅳ

— 縄文時代遺跡A-1・E遺跡の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第158集

遺跡略号 KWA-1・KWE

遺跡調査番号 7950・8153

1 9 8 7

福岡市教育委員会

序　文

住宅・都市整備公団は，福岡市南区柏原地区に68haにおよぶ開発事業を計画し，福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では，数度の現地踏査の上，昭和54年5月から発掘調査を開始し，昭和59年3月に完了しました。

本書は昭和54～58年に発掘調査を実施したA－1，E地区の先土器，縄文時代の遺構と出土遺物を収録したものです。

調査によって，縄文時代開始期の縄文式土器，住居址など，出土例の少なかった貴重な資料が検出されています。

本書が，埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるとともに，研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から出土資料の整理・報告書作製に至るまで，住宅・都市整備公団，調査指導委員の先生方をはじめ，多くの人々のご協力，ご助言に対し深甚の謝意を表するものです。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　言

1．本書は住宅・都市整備公団が計画した柏原地区の団地建設に伴う事前調査として，福岡市教育委員会文化部文化課（現・埋蔵文化財課）が1979～1983年にかけて発掘調査を実施した柏原遺跡群の調査報告書の第４集である。既報告書は以下のとおりである。

柏原遺跡群Ⅰ－縄文時代遺跡Ｆの調査－福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集1983

柏原遺跡群Ⅱ－柏原古墳群の調査－福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集1986

柏原遺跡群Ⅲ－中世居館，Ｋ遺跡の調査－福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集1987

2．本書の内容は柏原遺跡群の中でＡ－１遺跡（Ａ－１号墳墳丘下）とＥ遺跡とした縄文時代遺跡の報告である。

3．本書の執筆には山崎純男，小畑弘己があたった。

4．本書に使用した図の作成は山崎，小畑，平川祐介，今津啓子，宮田昌之，前島秀張，横大路俊明，丸山明宏，谷口麻里子，足立博子，宮元香子，門出悦子，塚本邦愛，福岡大学歴史研究部員考古学班があたった。

5．本書の図の製図は山崎，小畑，角浩行，永田留美によるものである。

6．本書に使用した写真は山崎，松村道博によるものである。

7．本書に使用した方位はすべて磁北である。

8．本書の編集は山崎がこれにあたった。

本 文 目 次

第１章　序説……1
１．はじめに……1
２．調査体制……1
第２章　遺跡群の位置と歴史的環境……3
１．遺跡群の位置……3
２．遺跡群とその周辺……3
(1)　開発地域内の先土器，縄文時代遺跡……5
(2)　周辺の遺跡……7
第３章　調査の概要……9
１．Ａ―１遺跡の調査概要……9
２．Ｅ遺跡の調査概要……9
第４章　Ａ―１遺跡の記録……11
１．遺跡の立地……11
２．層序……11
３．遺物出土状況……11
４．出土遺物……13
(1)　縄文土器……13
(2)　石器……19
(3)　小結……21
第５章　Ｅ遺跡の記録……23
１．遺跡の立地……23
２．発掘調査区の設定……23
３．層序……26
４．遺構の概要……26
５．竪穴住居址と出土遺物……28
(1)　第１号住居址……28
(2)　第２号住居址……31
(3)　第３号住居址……34
(4)　第４号住居址……34
(5)　第５号住居址……35
(6)　第６号住居址……39

(7) 第 7 号住居址……40
(8) 第 8 号住居址……43
(9) 第 9 号住居址……44
(10) 第10号住居址……48
(11) 第11号住居址……51
(12) 第12号住居址……53
(13) 第13号住居址……57
(14) 第14号住居址……58
(15) 第15号住居址……60
(16) 第16号住居址……61
(17) 第17号住居址……65
(18) 第18号住居址……67
(19) 第19号住居址……72
(20) 第20号住居址……75
(21) 第21号住居址……77
(22) 第22号住居址……77
(23) 第23号住居址……78
(24) 第24号住居址……79
(25) 第25号住居址……81
(26) 第26号住居址……85
(27) 第27号住居址……85
(28) 第28号住居址……87
(29) 第29号住居址……87
(30) 第30号住居址……87
(31) 第31号住居址……91
(32) 第32号住居址……92
(33) 第33号住居址……95
(34) 第34号住居址……96
(35) 第35号住居址……97
(36) 第36号住居址……98
(37) 第37号住居址……99
(38) 第38号住居址……99
(39) 第39号住居址 ……101

(40) 第40号住居址 ……101
(41) 第41号住居址 ……101
(42) 第42号住居址 ……103
(43) 第43号住居址 ……105
(44) 第44号住居址 ……107
(45) 第45号住居址 ……108
(46) 第46号住居址 ……109
(47) 第47号住居址 ……112
(48) 第48号住居址 ……115
(49) 第49号住居址 ……116
(50) 第50号住居址 ……117
(51) 第51号住居址 ……118
(52) 第52号住居址 ……119
(53) 第53号住居址 ……119
(54) 第54号住居址 ……120
(55) 第55号住居址 ……121
(56) 第56号住居址 ……124
(57) 第57号住居址 ……125
(58) 第58号住居址 ……127
(59) 第59号住居址 ……128
(60) 第60号住居址 ……129
(61) 第61号住居址 ……129
(62) 第62号住居址 ……131
(63) 第63号住居址 ……132
(64) 第64号住居址 ……133
(65) 第65号住居址 ……133
(66) 第66号住居址 ……134
(67) 第67号住居址 ……135
(68) 第68号住居址 ……135
(69) 第69号住居址 ……136
(70) 第70号住居址 ……139
(71) 第71号住居址 ……139
(72) 第72号住居址 ……139

(73) 第73号住居址 ……141
(74) 第74号住居址 ……141
(75) 第75号住居址 ……143
(76) 第76号住居址 ……146
(77) 第77号住居址 ……147
(78) 第78号住居址 ……147
(79) 第79号住居址 ……147
(80) 第80号住居址 ……149
(81) 第81号住居址 ……150
(82) 第82号住居址 ……151
(83) 第83号住居址 ……152
(84) 第84号住居址 ……152
(85) 第85号住居址 ……154
(86) 第86号住居址 ……155
(87) 第87号住居址 ……156
(88) 第88号住居址 ……156
(89) 第89号住居址 ……158
(90) 第90号住居址 ……158
(91) 第91号住居址 ……159
(92) 第92号住居址 ……161
(93) 第93号住居址 ……164
(94) 第94号住居址 ……164
(95) 第95号住居址 ……166
(96) 第96号住居址 ……166
(97) 第97号住居址 ……166
(98) 第98号住居址 ……167
(99) 第99号住居址 ……167
(100) 第100号住居址 ……171
(101) 第101号住居址 ……171
(102) 第102号住居址 ……171
(103) 第103号住居址 ……171
(104) 第104号住居址 ……172
6．土壙と出土遺物 ……172

(1) 第1号土壙 ……172
(2) 第2号土壙 ……174
(3) 第3号土壙 ……177
(4) 第4号土壙 ……178
(5) 第5号土壙 ……178
(6) 第6号土壙 ……181
(7) 第7号土壙 ……182
(8) 第8号土壙 ……182
(9) 第9号土壙 ……182
(10) 第10号土壙 ……182
(11) 第11号土壙 ……183
(12) 第12号土壙 ……183
(13) 第13号土壙 ……183
(14) 第14号土壙 ……184
(15) 第15号土壙 ……184
(16) 第16号土壙 ……184
(17) 第17号土壙 ……186
(18) 第18号土壙 ……186
(19) 第19号土壙 ……188
(20) 第20号土壙 ……188
(21) 第21号土壙 ……188
(22) 第22号土壙 ……188
(23) 第23号土壙 ……190
(24) 第24号土壙 ……190
(25) 第25号土壙 ……190
(26) 第26号土壙 ……191
(27) 第27号土壙 ……191
(28) 第28号土壙 ……192
(29) 第29号土壙 ……192
(30) 第30号土壙 ……192
(31) 第31号土壙 ……194
(32) 第32号土壙 ……194
(33)′ 第33号土壙 ……194

(34) 第34号土壙 ……195
(35) 第35号土壙 ……195
(36) 第36号土壙 ……195
(37) 第37号土壙 ……197
(38) 第38号土壙 ……197
(39) 第39号土壙 ……197
(40) 第40号土壙 ……199
(41) 第41号土壙 ……199
(42) 第42号土壙 ……199
(43) 第43号土壙 ……200
(44) 第44号土壙 ……200
(45) 第45号土壙 ……201
(46) 第46号土壙 ……201
(47) 第47号土壙 ……201
(48) 第48号土壙 ……201
(49) 第49号土壙 ……201
7．包含層出土の遺物 ……202
(1) 土器 ……202
(2) 石器 ……213
第6章　まとめ ……223
1．遺構について ……223
2．土器とその分布について ……224
3．石鏃について ……225
付編　福岡市柏原下遺跡出土の炭化木 ……231

挿図目次

Fig. 1　柏原遺跡群の位置周辺の縄文時代遺跡 …… 4
Fig. 2　柏原遺跡群の立地と遺跡の分布 …… 6
Fig. 3　A—1遺跡の地形 ……12
Fig. 4　A—1遺跡土層断面図 ……13
Fig. 5　A—1遺跡出土遺物実測図Ⅰ（土器） ……15
Fig. 6　A—1遺跡出土遺物実測図Ⅱ（土器） ……16

Fig. 7 A—1遺跡出土遺物実測図III（土器） ……18
Fig. 8 A—1遺跡出土遺物実測図IV（石器） ……20
Fig. 9 E遺跡の地形 ……24
Fig. 10 E遺跡発掘区の設定 ……25
Fig. 11 E遺跡遺構全体図 ……27
Fig. 12 第1号住居址（SC－001）実測図 ……29
Fig. 13 第1号住居址遺物出土状況と遺物実測図 ……30
Fig. 14 第2号住居址（SC－002）実測図 ……32
Fig. 15 第2号住居址遺物出土状況と遺物実測図 ……33
Fig. 16 第3～6号住居址（SC－003，004，005，006）実測図I ……36
Fig. 17 第3～6号住居址（SC－03～06）実測図II ……37
Fig. 18 第3～6号住居址遺物出土状況 ……38
Fig. 19 第4～5号住居址（SC－004，005）出土遺物実測図 ……39
Fig. 20 第7号住居址（SC－007）実測図 ……40
Fig. 21 第7号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……41
Fig. 22 第8号住居址（SC－008）実測図 ……42
Fig. 23 第8号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……43
Fig. 24 第9号住居址（SC－009）実測図 ……45
Fig. 25 第9号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図I ……46
Fig. 26 第9号住居址出土遺物実測図II ……47
Fig. 27 第10・11号住居址（SC－010，011）実測図 ……49
Fig. 28 第10・11号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……50
Fig. 29 第11号住居址出土遺物実測図II ……52
Fig. 30 第12号住居址（SC－012）実測図 ……54
Fig. 31 第12号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図I ……55
Fig. 32 第12号住居址出土遺物実測図II ……56
Fig. 33 第13・14号住居址（SC－013，014）実測図 ……58
Fig. 34 第13・14号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……59
Fig. 35 第15号住居址（SC－015）実測図 ……60
Fig. 36 第16号住居址（SC－016）実測図 ……61
Fig. 37 第16号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図I ……62
Fig. 38 第16号住居址出土遺物実測図II ……64
Fig. 39 第17号住居址（SC－017）実測図 ……65

Fig. 40 第17号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……66
Fig. 41 第18号住居址（ＳＣ－018）実測図 ……68
Fig. 42 第18号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……69
Fig. 43 第18号住居址出土遺物実測図II ……71
Fig. 44 第19号住居址（ＳＣ－019）実測図 ……72
Fig. 45 第19号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図Ｉ ……73
Fig. 46 第19号住居址出土遺物実測図II ……74
Fig. 47 第20号住居址（ＳＣ－020）実測図 ……75
Fig. 48 第20号住居址出土状況，出土遺物実測図 ……76
Fig. 49 第21号住居址（ＳＣ－20・21）実測図 ……77
Fig. 50 第22・23号住居址（ＳＣ－022，210，23），第４土壙（ＳＫ－04）実測図 ……78
Fig. 51 第22・23号住居址，第４号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……79
Fig. 52 第24・25号住居址（ＳＣ－024，025）実測図 ……80
Fig. 53 第24・25号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……82
Fig. 54 第26・27・28号住居址（ＳＣ－026，027，028）実測図 ……83
Fig. 55 第26・27・28号住居址遺物出土状況 ……84
Fig. 56 第29号住居址（ＳＣ－029），第６・７号土壙（ＳＫ－06・07）実測図 ……86
Fig. 57 第29号住居址，第６・７号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……88
Fig. 58 第30号住居址（ＳＣ－030），第９号土壙（ＳＫ－09）実測図 ……89
Fig. 59 第30号住居址，第９号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……90
Fig. 60 第31号住居址（ＳＣ－30）実測図 ……91
Fig. 61 第31号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……92
Fig. 62 第32～35号住居址（ＳＣ－032～035），第11～13号土壙（ＳＫ－11～13）実測図 …93
Fig. 63 第32～35号住居址・第11～13号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図Ｉ ……94
Fig. 64 第32～35号住居址・第11～13号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図II ……96
Fig. 65 第36号住居址（ＳＣ－036），第10号土壙（ＳＫ－10）実測図 ……98
Fig. 66 第36号住居址，第10号土壙遺物出土状況 ……99
Fig. 67 第37～39号住居址（ＳＣ－037～039）実測図 ……100
Fig. 68 第40号住居址（ＳＣ－040）実測図 ……102
Fig. 69 第40号住居址遺物出土状況 ……103
Fig. 70 第41号住居址（ＳＣ－041）実測図 ……104
Fig. 71 第42号・43号住居址（ＳＣ－042，043）実測図 ……105
Fig. 72 第42・43号住居址，遺物出土状況，出土遺物実測図 ……106

Fig. 73 第43号住居址出土遺物実測図 ……107
Fig. 74 第44号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……108
Fig. 75 第44号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……109
Fig. 76 第45・46号住居址（ＳＣ－045・046），第25号土壙（ＳＫ－25）実測図 ……110
Fig. 77 第45・46号住居址，第25号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……111
Fig. 78 第46号住居址出土遺物実測図 ……112
Fig. 79 第47・48号住居址（ＳＣ－047・048），第26号土壙（ＳＫ－26）実測図 ……113
Fig. 80 第47・48号住居址，第26号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……114
Fig. 81 第49号住居址（ＳＣ－049）実測図 ……115
Fig. 82 第49号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……116
Fig. 83 第50号住居址（ＳＣ－050）実測図 ……117
Fig. 84 第51・52号住居址（ＳＣ－051・052）実測図 ……118
Fig. 85 第51号住居址遺物出土状況 ……119
Fig. 86 第53号住居址（ＳＣ－053）実測図 ……120
Fig. 87 第53号住居址遺物出土状況 ……121
Fig. 88 第54・55号住居址（ＳＣ－054・055）実測図 ……122
Fig. 89 第54・55号住居址遺物出土状況 ……123
Fig. 90 第56号住居址（ＳＣ－056），第27号土壙（ＳＫ－27）実測図 ……124
Fig. 91 第56号住居址，第27号土壙遺物出土状況 ……125
Fig. 92 第57・59号住居址（ＳＣ－057・059）実測図 ……126
Fig. 93 第57・59号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……127
Fig. 94 第58号住居址（ＳＣ－058）実測図 ……128
Fig. 95 第53号住居址遺物出土状況 ……129
Fig. 96 第60・61号住居址（ＳＣ－060・061），第31号土壙（ＳＫ－31）実測図 ……130
Fig. 97 第62号住居址（ＳＣ－062）実測図 ……131
Fig. 98 第63・64号住居址（ＳＣ－063・064）実測図 ……132
Fig. 99 第65号住居址（ＳＣ－065）実測図 ……133
Fig. 100 第66号住居址（ＳＣ－066），第30号土壙（ＳＫ－30）実測図 ……134
Fig. 101 第66号住居址，第30号土壙遺物出土状況 ……135
Fig. 102 第67号住居址（ＳＣ－067），第32号土壙（ＳＫ－32）実測図 ……136
Fig. 103 第68～70号住居址（ＳＣ－068～070）実測図 ……137
Fig. 104 第68～70号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……138
Fig. 105 第71～73～104号住居址（ＳＣ－071～074）実測図 ……140

Fig. 106　第71～73～104号住居址実測図II ……141
Fig. 107　第71～73～104号住居址遺物出土状況 ……142
Fig. 108　第74～75号住居址（ＳＣ－074・075）実測図 ……143
Fig. 109　第76～79・83号住居址（ＳＣ－076・077・079・083），第38号土壙（ＳＫ－38）実測図 ……144
Fig. 110　第76～79・83号住居址，第38号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……145
Fig. 111　第80号住居址（ＳＣ－080），第35・36土壙（ＳＫ－35・36）実測図 ……148
Fig. 112　第80号住居址，第35・36土壙遺物出土状況 ……149
Fig. 113　第81・82号住居址（ＳＣ－081・082）実測図 ……150
Fig. 114　第81・82号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……151
Fig. 115　第84・85号住居址（ＳＣ－084・085）実測図 ……153
Fig. 116　第86号住居址（ＳＣ－086）実測図 ……154
Fig. 117　第86号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……155
Fig. 118　第87号住居址（ＳＣ－087）実測図 ……156
Fig. 119　第88・89号住居址（ＳＣ－088・089）実測図 ……157
Fig. 120　第91号住居址（ＳＣ－091）実測図 ……158
Fig. 121　第91号住居址遺物出土状況，出土遺物実測図 ……159
Fig. 122　第90・92・93号住居址（ＳＣ－090・092・093），第39号土壙（ＳＫ－39）実測図 ……160
Fig. 123　第90・92・93号住居址，第39号土壙遺物出土状況 ……161
Fig. 124　第92号住居址出土遺物実測図 ……162
Fig. 125　第94～96号住居址（ＳＣ－094・096），第41・48号土壙（ＳＫ－41・48）実測図 ……163
Fig. 126　第94～96号住居址，第41・48号土壙遺物出土状況，出土遺物実測図 ……165
Fig. 127　第97号住居址（ＳＣ－097）実測図 ……167
Fig. 128　第98～100号住居址（ＳＣ－098～100），第46号土壙（ＳＫ－46）実測図 ……168
Fig. 129　第101号住居址（ＳＣ－101）実測図 ……169
Fig. 130　第102号住居址（ＳＣ－102・103），第47号土壙（ＳＫ－47）実測図 ……170
Fig. 131　第１・２号土壙（ＳＫ－01・02）実測図 ……173
Fig. 132　第１号土壙出土遺物実測図 ……174
Fig. 133　第２号土壙出土遺物実測図 ……175
Fig. 134　第３号土壙出土遺物実測図 ……177
Fig. 135　第５・18・49号土壙（ＳＫ－05・18・49）実測図 ……179

Fig. 136　第４・５・６・12号土壙出土遺物実測図 ……180
Fig. 137　第15・17・19・22号土壙（ＳＫ－15・17・19・22）実測図 ……185
Fig. 138　第６・16・17・25・26・30・38・41号土壙出土遺物実測図 ……187
Fig. 139　第21・28・34号土壙（ＳＫ－21・23・24・28・34号）実測図 ……189
Fig. 140　第29号土壙（ＳＫ－29）実測図 ……193
Fig. 141　第37・48号土壙（ＳＫ－37・48）実測図 ……196
Fig. 142　第33・42・43・45号土壙（ＳＫ－32・33・42・43）実測図 ……198
Fig. 143　第44・45号土壙（ＳＫ－44・45）実測図 ……200
Fig. 144　包含層出土土器実測図Ⅰ ……203
Fig. 145　包含層出土土器実測図Ⅱ ……206
Fig. 146　包含層出土土器実測図Ⅲ ……208
Fig. 147　包含層出土土器実測図Ⅳ ……212
Fig. 148　包含層出土土器実測図Ⅰ ……214
Fig. 149　包含層出土土器実測図Ⅱ ……217
Fig. 150　包含層出土土器実測図Ⅲ ……218
Fig. 151　包含層出土土器実測図Ⅳ ……219
Fig. 152　包含層出土土器実測図Ⅴ ……220
Fig. 153　包含層出土土器実測図Ⅵ ……222
Fig. 154　石鏃の計測 ……225
Fig. 155　石鏃の形式とその類型 ……226
Fig. 156　石器のグリット別個数の分布 ……227
Fig. 157　石鏃の分布図 ……228
Fig. 158　遺構外出土石器分布図 ……229

図版目次

ＰＬ．１　(1)　Ｅ遺跡全景（南から）……233
　　(2)　Ｅ遺跡の立地（東から）……233
ＰＬ．２　(1)　Ｅ遺跡調査区北半部全景（南から）……234
　　(2)　Ｅ遺跡調査区南半部全景（西から）……234
ＰＬ．３　(1)　Ｅ遺跡南半部竪穴住居址群（南から）……235
　　(2)　ＳＣ－012，016～019近景（東から）……235

ＰＬ．４　(1)　Ｅ遺跡南半部竪穴住居址（ＳＣ－018）……236
(2)　ＳＣ－018近景（東から）……236
ＰＬ．５　(1)　Ｅ遺跡南半部竪穴住居址……237
(2)　ＳＣ－012近景（東から）……237
ＰＬ．６　(1)　Ｅ遺跡北半部竪穴住居址（西から）……238
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＫ－48）……238
ＰＬ．７　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＫ－37を中心に）……239
(2)　ＳＣ－076近景（西から）……239
ＰＬ．８　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－079を中心に）……240
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－092を中心に）……240
ＰＬ．９　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＫ－48を中心に）……241
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構近景（西から）……241
ＰＬ．10　(1)　ＳＣ－071近景（西から）……242
(2)　ＳＣ－104近景（西から）……242
ＰＬ．11　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－101を中心に）……243
(2)　ＳＣ－097近景（東から）……243
ＰＬ．12　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－095，096，ＳＫ－48）……244
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構（南西から）……244
ＰＬ．13　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－048を中心に）……245
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＫ－37を中心に）……245
ＰＬ．14　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（北西から）……246
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構近景（北西から）……246
ＰＬ．15　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－091を中心に）……247
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構近景（ＳＣ－101を中心に）……247
ＰＬ．16　(1)　Ｅ遺跡南半部遺構近景（ＳＫ－02を中心に）……248
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構近景（ＳＣ－091を中心に）……248
ＰＬ．17　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－093を中心に）……249
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構近景（ＳＣ－101を中心に）……249
ＰＬ．18　(1)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－094を中心に）……250
(2)　Ｅ遺跡北半部遺構（ＳＣ－093，094を中心に）……250
ＰＬ．19　(1)　ＳＫ－28近景……251
(2)　ＳＫ－22近景……251
ＰＬ．20　(1)　ＳＫ－01近景……252

(2)　ＳＫ－01近景……252
ＰＬ．21　(1)　ＳＫ－29近景……253
(2)　ＳＫ－37近景……253
ＰＬ．22　遺構出土土器Ⅰ……254
ＰＬ．23　遺構出土土器Ⅱ……255
ＰＬ．24　遺構出土土器Ⅲ……256
ＰＬ．25　遺構出土土器Ⅳ……257
ＰＬ．26　遺構出土土器Ⅴ……258
ＰＬ．27　遺構出土土器Ⅵ……259
ＰＬ．28　遺構出土土器Ⅶ……260
ＰＬ．29　遺構出土土器Ⅷ……261
ＰＬ．30　遺構出土土器Ⅸ……262
ＰＬ．31　包含層出土土器Ⅰ……263
ＰＬ．32　包含層出土土器Ⅱ……264
ＰＬ．33　包含層出土土器Ⅲ……265
ＰＬ．34　包含層出土土器Ⅳ……266
ＰＬ．35　包含層出土土器Ⅴ……267
ＰＬ．36　包含層出土土器Ⅵ……268
ＰＬ．37　包含層出土土器Ⅶ……269
ＰＬ．38　柏原Ｆ遺跡炭化木Ⅰ……270
ＰＬ．39　柏原Ｆ遺跡炭化木Ⅱ……271
ＰＬ．40　柏原Ｆ遺跡炭化木Ⅲ……272

第1章　序　　説

1．はじめに

1974年，住宅・都市整備公団による柏原地区の広大な面積の開発計画が市に提出された。この時点で，福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係は，計画地内における埋蔵文化財の分布調査を数回にわたって実施した。計画地内は雑木，雑草がおい繁り，また，開発予定地の面積が約68万m²と広大であり踏査には困難をきわめた。数回の現地踏査で，同地内に古墳20数基を確認したが，周辺の遺跡分布状況からみて，雑木，雑草の伐採後はさらに古墳等の遺跡が増加する可能性が強く文化課では同地内の開発計画の中止を住宅・都市整備公団に進言した。しかし，諸般の事情から住宅・都市整備公団では計画が着々と進められ，1979年より開発計画が具体化し，文化課では造成工事に先立って発掘調査を実施することを余儀なくされた。おりからの緊急調査の急増から文化課では充分な調査体制をととのえる間もなく発掘調査に突入した。

遺跡は分布調査時の予想をはるかに上まわり，本報告の先土器，縄文時代の遺跡の他，F，K遺跡のような大規模な縄文時代早期遺跡数カ所，古代集落，中世の居館址，完全なる一群の古墳群など，福岡の歴史を解明するにはかかせない貴重な発見があり，1983年に現地の発掘調査を終了し，現在，鋭意整理中で，一部は報告書を刊行して公にしている。発掘調査および整理にあたっては，住宅・都市整備公団をはじめ地元各位のご協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

2．調査の体制

以下に示す調査体制を組織したが，相次ぐ緊急調査で充分なる体制がとれなかった。しかし関係各位の協力と調査補助員諸氏の多大な協力でその進行が進められてきたことを明示しておきたい。

調　査　地　区　　福岡市南区柏原
調　査　面　積　　A－1　400m²，E　5,000m²
調　査　期　間　　1979年5月～1981年3月
調 査 委 託 者　　住宅・都市整備公団九州支社
調　査　主　体　　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係（現・埋蔵文化財課第

1係）

教育長　西津茂美（前）　佐藤善郎（現）　教育次長　佐藤孝安（前）　志鶴幸弘（前）　草場　隆（前）　野田養一（前）　尾花　剛（現）文化部長　志鶴幸　弘（前）　中田　宏（前）　河野清一（現）　文化課長　井上剛紀（前）甲能貞行（前）　生田征生（前）　埋蔵文化財課長　柳田純孝　埋蔵文化第1係長　三宅安吉（前）　柳田純孝（前）　折尾　学（現）

調査指導・協力　森貞次郎（九州産業大学教授）　坪井清足（前・奈良国立文化財研究所所長）　岡崎　敬　永井昌文　横山浩一（九州大学教授）　乙益重隆（国学院大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）　賀川光夫（別府大学教授）　三島　格（肥後考古学会会長）　佐原　真（奈良国立文化財研究所）　石野博信　中井一夫　菅谷文則（橿原考古学研究所）　渡辺　誠（名古屋大学助教授）　西谷　正（九州大学助教授）　甲元真之（熊本大学助教授）　下條信行（愛媛大学教授）　渡辺正気（前・九州歴史資料館参事）　後藤　直（福岡市埋蔵文化財センター所長）　藤井　功　宮小路賀宏（福岡県文化課）

調査担当者　山崎純男（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）

事務担当　岡島洋一（前）　古藤国生（前）　岸田　隆　松延好文

調査補助員　原　俊一（現・宗像市教育委員会）　横大路俊明　寺師雄二　石本晶義　矢野佳代子（九州大学）　小畑弘己　米倉秀紀　吉武　学（現・福岡市教育委員会）　谷口武範（現・宮崎県教育委員会）　入江久成　西谷　大　辻　満久　馬原和弘　茂山宏美（熊本大学）　妹尾周三　船井向洋　日置公二　植田　広　宮坂孝宏　蒲原　真　前島秀張　土井伸一（別府大学）　白土美実　其畑真二　難波新吾　来嶋久雄　堀川亮二　宮田昌之　片山重明　千々和謙策　倉田浩一　平川祐介　熊崎農夫博　沖　一郎　小井田佳代　武森安代　田端幸代　丸山　隆　牧口　明　池田一郎　日隈英敏　餅田浩治　時松良蔵　谷口麻里子　精野亮司　仲田善則　高木裕之　足立博子　井上隆興　荒川　理　松浦潤一郎　高瀬広之　中野治寿　丸山明宏　宮元香子　門出悦子　塚本邦愛　小口幸雄　堤　孝二　片岡葉子　前田　修　鎌田次男　小路永智明　他歴史研究部員（福岡大学）

整理補助員　平川祐介（現・小郡市教育委員会）　角　浩行（奈良大学）　今津啓子　李　弘鐘（九州大学）　内野　正（名古屋大学）

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

福岡市の平野部は地形的に東の福岡平野と西の早良平野に分断される。この境界をなすのが，背振山系の支脈である油山（標高569.4m）より派生した平尾丘陵（最高位は鴻ノ巣山の標高100.5m）や長尾，飯倉の低丘陵である。この低丘陵は，油山，片縄山（標高292.6m）に源を発する樋井川，一本松川，駄ヶ原川，片江川に開析され，狭小な沖積地を形成する。この小沖積地とそれを囲む低丘陵は，歴史的に一定のまとまりのある地域として把握され，古代には和名類聚抄に記される早良郡毘伊郷に比定されることは諸氏の認めるところである。

遺跡はこの低丘陵を開析する小河川の一つである樋井川の上流域に分布する。樋井川の上流域は油山東斜面と油山の支脈である片縄山の北斜面が接する地域にあたり，樋井川の支流が枝状に分岐し，舌状にのびる尾根の丘陵を数多くつくり出し，複雑な微地形を形成している。縄文時代遺跡はこれら丘陵斜面から川の流域に発達した小規模な河岸段丘上に存在する。

Ａ－１遺跡は樋井川の第１支流によって解析された谷，第１支流左岸の小規模な段丘上に位置している。しかし，この段丘上にはＡ－１号墳が築造されている。この古墳の築造および後世の開田によって遺物包含層は削平され，かろうじて古墳墳丘下に遺物包含層が残存していた。Ａ－１遺跡の対岸にはＡ－２遺跡が存在する。内容等からみて元来はＡ－１，Ａ－２遺跡は同一の遺跡であったものが，川の流路の変動によって分断されたものと考えられる。

Ｅ遺跡は樋井川第２支流によって解析された谷，第２支流左岸の丘陵端から小規模な河岸段丘にかけて位置している。

遺跡を含めた調査対象区の中心は国土地理院発行の五万分の一の地形図「福岡」の南から５cm，東から19.6cmで，福岡市の中心に所在する市役所から南へ約７kmの位置にあたる。

２．柏原遺跡群とその周辺

柏原遺跡群を含めた周辺の先土器，縄文時代の様相は，次第に明らかになりつつある。本開発地内でも調査の進展によって数多くの先土器，縄文時代遺跡が発見された。そこで先ず，本開発地内の当該期の遺跡の概略を述べ，次に周辺の遺跡を含めて，先土器，縄文時代の柏原地区周辺の歴史的環境をみていきたいと思う。

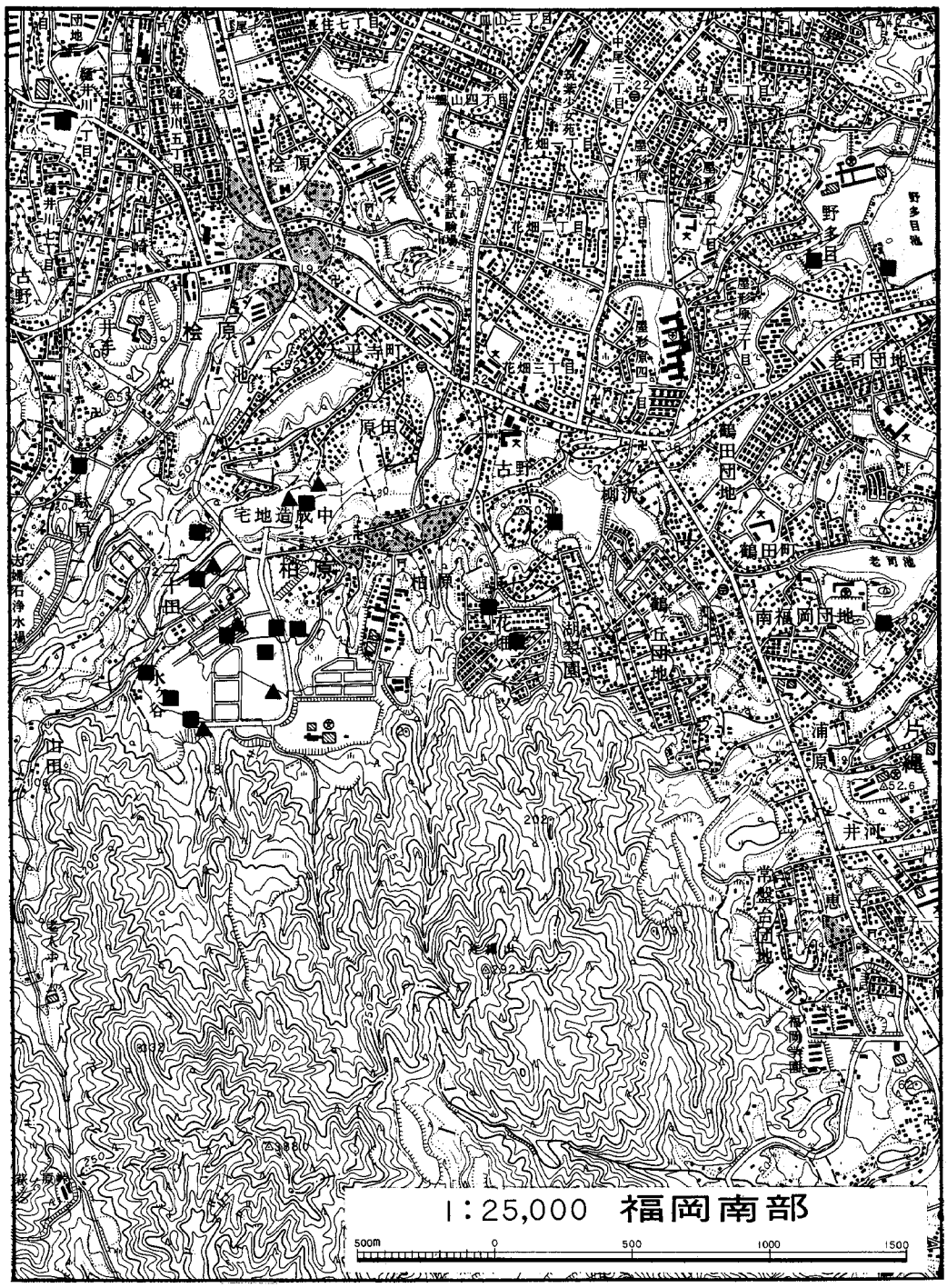


Fig.1　柏原遺跡群の位置と周辺の縄文時代遺跡

(1) 開発地域内の先土器・縄文時代遺跡

A－1遺跡　樋井川第1支流の河岸段丘上に位置し，包含層より縄文時代早期の押型文土器，撚糸文土器，条痕文土器，平栫式土器，石器が多数出土している。A－2遺跡と同一遺跡になる可能性は大きい。詳細は本報告に収録している。

A－2遺跡　樋井川第1支流右岸の山麓部から河岸段丘にかけて位置し，縄文時代早期の住居址，土壙等の遺構が数多く検出されている。包含層，遺構からは早期の押型文土器，条痕文土器，晩期の突帯文土器が出土している。石器には石匙，石鏃，磨石，磨製石鏃等がある。

B遺跡　樋井川第1支流左岸の丘陵上に位置する。明確な遺物包含層は存在しなかったが古墳の周囲より石匙，石鏃，黒曜石チップ等が検出されている。土器の出土がないため時期の比定は困難であるが，縄文時代前期頃が考えられる。

C遺跡　樋井川第1支流左岸の丘陵上，B遺跡と同一丘陵でさらに高い所に位置する。かなりの広さのゆるやかな斜面で，発掘の結果，上部に縄文時代の薄い遺物包含層が存在し，局部磨製石鏃，剝片鏃，石鏃，黒曜石剝片，チップが検出された。土器が無いため時期は明確にできないが，早～前期と考えられる。下部に先土器時代の包含層を確認し，台形石器，剝片が出土したが，数はきわめて少い。

E遺跡　樋井川第2支流の左岸，丘陵先端部からそれに続く河岸段丘上に位置する。包含層，各遺構からは縄文時代早～前期の住居址，土壙墓多数が検出された。遺物には草創期の刺突文，粘土粒貼付文を施文した条痕文土器，縄文土器，櫛描文土器，早期の押型文土器，撚糸文土器，吉田式土器，平栫式土器，前期の轟B式土器の他，石器として局部磨製石斧，石匙，石槍，局部磨製石鏃，石鏃，Uフレイク等が出土している。詳細は本報告に収録している。

F遺跡　樋井川第2支流の左岸，E遺跡の約300m上流の侵蝕崖とそこに形成された小規模な河岸段丘上に位置する。厚い包含層が存在し，遺物包含層の最下層から先土器時代の炉址とナイフ形石器が検出されている。縄文時代の包含層は大きく三層に分離でき，第III層には土壙が検出されている。草創期の刺突文を施文した条痕文土器，撚糸文土器，条痕文土器と，石器には局部磨製石鏃，スクレイパー類が出土している。第II層には石囲炉，集石遺構が検出されている。押型文土器，無文土器，石器は石鏃，磨製石斧，石匙，石錐，スクレイパー等が出土している。第I層は押型文土器，撚糸文土器，平栫式土器，沈線文土器，石器は石鏃，スクレイパー，磨製石斧，石皿，磨石等が出土している。詳細は報告書第1集に収録している。

H遺跡　樋井川第3支流右岸の丘陵斜面に位置する。古墳の調査において周辺より石鏃，黒曜石の剝片，チップが若干出土している。包含層は存在しない。時期は明確に比定できないが，早～前期と考えられる。

J遺跡　樋井川第4支流の左岸の小規模な河岸段丘に位置する。遺物包含層が若干存在する

Fig.2　柏原遺跡群の立地と遺跡の分布

が良好でない。スクレイパー，剝片，チップ，土器の小片が出土している。時期は明確に比定できないが早～前期と考えられる。

K遺跡　樋井川の右岸，河岸段丘上に位置する。約15,000m²の地域に縄文時代早期の住居址，土壙，土壙墓多数を検出した。本開発地内最大の規模を有する。遺物には草創期の刺突文，粘土粒貼付文の条痕文土器，早期の無文土器，押型文土器，前期の轟B式土器，中期の阿高式土器，晩期の突帯文土器とそれ以前の土器があり，石器としては石鏃，磨製石斧，磨石，石皿，石匙，石鏃，スクレイパー類等が出土している。

L遺跡　樋井川の左岸に位置する。K遺跡の下流約250mのところにあたる。遺物包含層が存在し，縄文時代前期，轟B式土器が単純に出土している。石器には石鏃，石匙，スクレイパー類がある。遺構として集石遺構，土壙が検出された。

M遺跡　樋井川の左岸，L遺跡の北側丘陵麓部に位置する。古墳～平安時代の造成によって遺物包含層，遺構は残存しないが，多くの遺物が存在する。先土器時代に属するものとしてナイフ形石器数点があり，縄文時代に属するものとして押型文土器，石鏃，石槍，石匙，スクレイパー等が存在する。遺物の散布はかなりの広範囲におよんでいる。

N遺跡　樋井川左岸，M遺跡の東約20mの丘陵上に位置している。表面採集資料として先土器時代のナイフ形石器，細石刃，細石核がある。発掘の結果，細石刃文化の包含層を確認したが，大きな広がりはみられなかった。

以上，開発地内には12ヶ所の先土器，縄文時代遺跡が存在する。先土器時代遺跡は遺物量も少く良好でないが，縄文時代遺跡には規模，遺構，出土遺物等に注目すべきものが多い。時期的には草創期，早期，前期，中期，晩期遺跡が存在するが，草創期，早期，前期は遺跡，遺物共に良好であるが，中期，晩期は遺物の量も少く内容は明らかにできない。

(2)　周辺の遺跡

次に柏原の開発地域外の先土器，縄文時代遺跡についてみてみよう。先ず，西の地区では，開発地に隣接して樋井川左岸の丘陵頂部に位置する羽黒神社遺跡があげられる。K遺跡と樋井川を狭んで対峙している。切り通しの断面に包含層の存在が確認できる。押型文土器，石鏃，黒曜石の剝片，チップが採集されているが，土器の量はきわめて少い。柏原と丘陵を１つへだてた西の井手遺跡では横型の石匙１点が採集されている。時期的に不明。また柏原遺跡群の北西1.5kmに位置する笹栗遺跡からは晩期土器および石器が出土している。さらに西にいくと油山山麓に位置する鳥越２号墳の調査に際し，古墳の周辺に遺物包含層が確認され，早期の押型文土器と石器が出土し，別地点の草苗田10号墳の調査でも，周辺から縄文時代早期の条痕文土器，晩期土器底部，土製紡錘車，磨製石斧，磨石，石鏃が出土している。七隈，干隈地区では五ヶ

村池遺跡から縄文時代前期の曽畑式土器，石器が採集され，熊添池から石匙，また，池の東側丘陵の干隈熊添古墳の調査に際して磨製石斧，局部磨製石鏃，石鏃，Ｕフレイクが出土している。

柏原遺跡群の東側では，丘陵を１つへだてた大牟田古墳群の調査で，縄文時代の遺物包含層が確認され，条痕文土器，石器が出土している。また，別地点の古墳の墳丘中から抉状耳飾り１点が出土している。さらに東に存在する箱ノ池遺跡からは押型文土器，石鏃，刃器，黒曜石の剝片，チップが採集されている。油山山麓をはなれた平野部にのびる丘陵部では老司池遺跡で押型文土器が採集され，野多目池遺跡でも押型文土器，阿高系土器，石器が採集されている。また，那珂川左岸の段丘面には数多くの縄文時代の遺物が採集されていて，野多目拈渡遺跡では後期前半のドングリ・ピットが数10基調査されている。

このように，柏原を中心とした油山山麓部には縄文時代遺跡，特に縄文時代早期～前期の遺跡が散在している。柏原地区は発掘調査以前は押型文土器１点が採集されていたのみで，縄文時代遺跡は皆無に等しかった。しかし，調査の結果では上記した遺跡の発見があり，その密集度はかなりの高さにのぼることが判明した。このような事実を考えれば，油山山麓に点在する縄文時代遺跡は今後の調査によってさらにその数が増加することは疑いなく，油山山麓に分布する縄文時代遺跡の有機的関連性をもとにした縄文時代の様相を語れるのもそう遠い時期ではないと思われる。現在の縄文時代遺跡の分布から若干の推測を混じえて，その傾向を述べれば次のようになろう。

先土器時代の遺跡は点々と散布する石器を除いて油山山麓には有望な遺跡は認められず，むしろ平野部に派出した丘陵部に良好な遺跡が発見されつつある。油山山麓に分布する先土器時代遺跡は狩猟時における一時的キャンプ遺跡と考えることができよう。

草創期，早期遺跡は柏原遺跡群の状況からすれば，ある一定のテリトリーにおける回帰的行動の結果とみることができ，その主な生産活動（狩猟）における行動範囲と集落の主な舞台が油山山麓を中心としたものであったことがわかる。前期についてはその傾向を把握する遺跡数の発見はない。中・後期については前述の野多目拈渡遺跡にみるようなドングリ・ピットの存在や遺跡立地からみて生産基盤の変化が読みとれる。ドングリ・ピットは最近の調査で福岡市内でも湯納遺跡（前期），飯盛遺跡（中～後期），有田遺跡（中～後期）等の平野部に派生した丘陵部に発見されている。また，四箇遺跡（後期）は平野部の河岸段丘（自然堤防）に位置し，多量の堅果類の皮を主体とする特殊泥炭層が形成されている。狩猟を主体とする経済基盤から植物質食料（ドングリ等の堅果類を含む）への経済基盤の変化として読みとることができる。遺跡立地も山間部から，より行動しやすい平野部へのびた丘陵部，段丘面に変化したものと考えられる。これと呼応したように海岸部にも貝塚遺跡の存在が目立ってくる。

今後の調査により縄文時代社会の様相が明白になることを期待したい。

第３章　調査の概要

発掘調査は1979年５月～1983年３月にかけて実施した。その間，調査員の不足，あるいは度重なる雨や工事の都合による調査区の移動，中断等で困難をきわめたが多くの人々の指導と激励によって多大な成果を得て調査を無事終了することができた。

１．Ａ－１遺跡の調査概要

調査は先ずＡ－１号墳より開始した。縄文時代遺跡は墳丘断面調査のために入れたトレンチによって墳丘中より押型文土器が出土し，周辺部に縄文時代遺跡の存在することが予想できたが，周辺部はすでに削平され，現水田下は砂礫層の互相の地山で遺跡の存在を確認することができなかった。古墳の調査の進展に伴い墳丘断面の精査を行いはじめて墳丘基底面下の一部にとり残されたように縄文時代の遺物包含層が存在することを確認した。また，墳丘盛土にも遺物包含層が利用されていることを知った。この所見から周辺部に存在した縄文時代遺跡は，古墳の築造や水田のために削平され，消滅していることが判明した。よって縄文時代の遺跡は古墳の調査終了後に実施することとした。古墳盛土を除去した結果，遺物包含層は墳丘北側において良好に残存していたが，南側では残存状態はきわめて不良であった。遺物の出土状況は散在する状態で押型文土器，撚糸文土器，平栫式土器が混在し，特別の集中区や層位関係はみられない。包含層の厚さは約40cmで，下面には若干の凹凸がみられたが遺構は存在しない。

２．Ｅ遺跡の調査概要

Ｅ地区の古墳をのせる丘陵は古墳の立地する部分から下流に向って平坦になり細長い舌状の丘陵となっている。調査時は段々に形成された畑地となっていた。表面採集では遺物は採集できず遺跡の存在はないものと考えていた。しかし，先行して実施したＥ－１号墳の調査および丘陵の断面観察から縄文時代の遺構，遺跡の存在が推測できた。古墳調査と平行し，丘陵上の表土層を機械で除去した結果，表土層の下部に存在する黄褐色砂質土層から縄文式土器が点々と出土し，遺跡の存在を確認することができた。よって遺跡の全面調査を目的とし丘陵全域の表土層を除去したが，北半部は削平され礫層の地山が露出し，遺構等の存在も認められなかった。調査は舌状丘陵の南半部について実施することとし，表土層除去後，地形にあわせて，２ｍ×２ｍのグリットを設定し発掘調査を進めた。遺物包含層は古墳周辺では厚く，約20～40cm

の厚さを有しているが，遺跡の東にいくにしたがい薄くなり，東半部には包含層は存在しなくなるばかりでなく，削平されて遺構の遺存状態も悪くなる。包含層は黄褐色砂質土一枚で，遺構の埋土も同一層である。調査はすべての遺物を記録し，遺跡の構造的把握につとめた。遺物の出土状況からは層位的な関係を把握することは困難であったが，分布的に違いがあり，遺跡が時期的に変化していることが判明した。この土器，石器の分布と遺構の関係を綿密に検討すれば興味ある問題を提供することができる。遺構は調査区全面，特に南半部に集中して，竪穴住居址，土壙，土壙墓を確認した。重複関係が顕著で相互に切り合い関係がみられるが，堆積土層に大きな変化がなく，正確な切り合い関係を把握することはできなかった。調査区西半部はブドウ畑で深い溝が掘削されていて部分的に消滅した遺構も多い。しかし，全体的に見た場合，遺構分布の傾向を把握することができる。遺構は調査区西端部と東端部に特に密集し，その間は比較的集中せず散在している。また，明らかに空間部が存在し，集落構造の解明に役立ちそうである。

遺構は規模構造から，内部に柱穴状のピットを持つものを住居址，柱穴状のピットを持たないものを土壙とした。この両者は明らかに埋没時は凹みとして残存し，壁は地山が砂礫層のためと廃棄以後の風化現象のためにゆるやかな傾斜を示し，断面形は皿状をなしている。土壙墓としたものは明らかに人工的に埋められたと考えられるもので平面プランは長方形を呈し，壁のたちあがりは垂直に近い。中には深さが極端に深く，木棺状の囲いのあるもの，石鏃を副葬した例などが知られる。

本調査で確認した遺構は竪穴住居址104軒，土壙21基，土壙墓28基である。縄文時代草創期から前期にかけての集落遺構の確認およびそれらに起因する諸問題の提出や，草創期に比定される新出の土器型式，石器組成等の確認など多大な成果を得ることができた。

第４章　Ａ－１遺跡の記録

１．遺跡の立地

Ａ－１遺跡は開発地内の東端部，樋井川の第１支流に開析された谷に面した左岸の小規模な河岸段丘上に位置するＡ－１号墳墳丘下にある。現在，この段丘と右岸の丘陵の間を第１支流が北流しているが，調査の結果，当時の川はＡ－１号墳とＢ支群の古墳をのせる丘陵との間を北流していて，この段丘は右岸にのびる丘陵麓部に接して発達したものと考えられる。よってＡ－１，Ａ－２遺跡は同一の遺跡と考えることができるが，今回は紙面の関係上，Ａ－１遺跡についてのみ述べる。この段丘堆積物は砂層と礫層の互層となっていてその上面に堆積する黄褐色土層が縄文時代包含層となっている。Ａ－１遺跡の包含層はＡ－１号墳墳丘基底面北側にのみ残存している。古墳周辺部は古墳築造時あるいは水田の造成によって削平され現存しない。また，樋井川第１支流の流路の変更によって，縄文時代遺跡の主体部は破壊流失した可能性が強い。Ａ－１遺跡遺物包含層の標高は45m前後で，Ａ－２遺跡西端の遺物包含層上面の標高が46mであることを考えあわせれば，平坦なやや幅広い段丘が存在した可能性が強く，Ｅ遺跡やＫ遺跡と匹敵する遺跡であったことが推測できる。現・樋井川第一支流との比高は約５ｍである。

２．層序 (Fig. 4)

Ａ－１号墳墳丘基底面下に遺物包含層が存在するために土層の上部は，墳丘基底面の整形段階に遺物包含層より上は削平されて存在しない。遺物包含層の上面は標高45.6～45.7m，包含層は黄褐色砂質土層で厚さ40～60cm。包含層の下位は砂層と砂礫層の互相となっていて河岸段丘堆積層の地山となっている。包含層より上位は古墳の墳丘盛土となっているが，盛土は遺物包含層である黄褐色砂質土層と地山の砂礫層を交互に版築しながら築き固めている。上層のアミ目は遺物包含層の土を盛ったもので，この中からも若干の遺物が出土している。

遺物包含層の残存範囲は墳丘北側で5.4m×８ｍの範囲で面積は約35m²とせまい。

３．遺物出土状況

Fig.3　A－１遺跡の地形

本遺跡は古墳墳丘下に存在する遺物包含層という特殊な事情のためと，遺物包含層の拡がりがないところから，グリットの設定や遺物出土状況について特別の配慮は払わなかった。発掘時における遺物包含層からの遺物の出土状況は散発的に遺物が出土する程度で，遺物の種類による層位関係（上下関係）や遺物の集中区は存在しなかった。柏原F遺跡の第Ⅰ層の遺物出土状況と類似していることが指摘できる。ただし，後述するように土器は多くの型式を含んでいて，時間的前後関係がみられる。堆積土層の少ないA－2遺跡，E遺跡，K遺跡と同様の層位形成が考えられる。

4．出土遺物

出土遺物には縄文式土器，石器がある。縄文式土器は総点数80点で比較的小破片が多い。石器には石匙，石鏃，スクレイパー，Uフレイク，磨石等がある。

(1) 縄文式土器（Fig. 5～7）

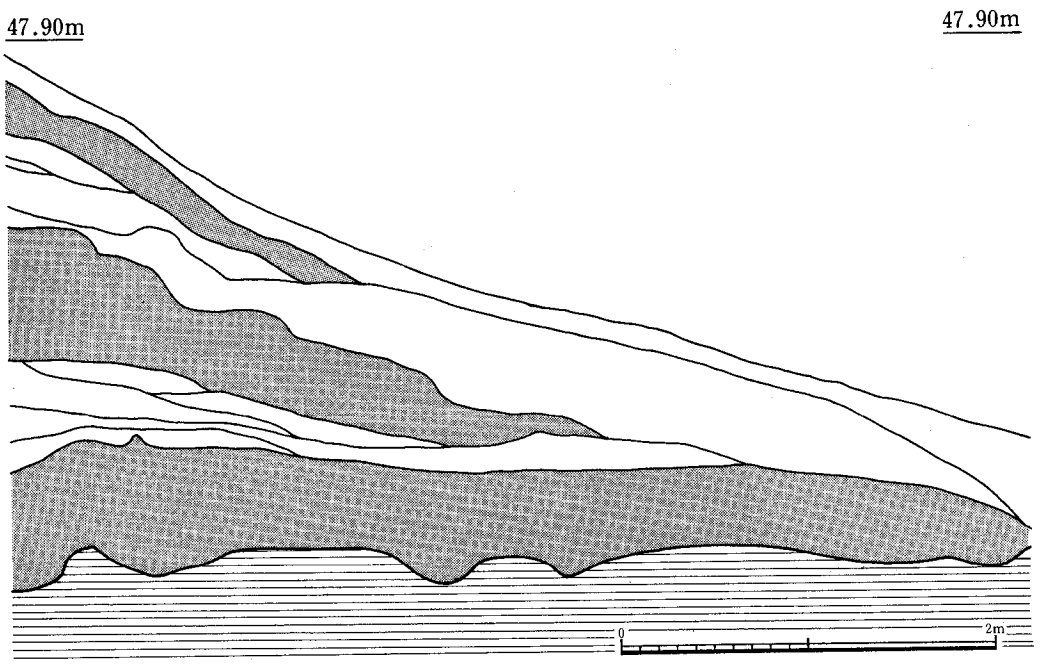


Fig.4 A－1遺跡土層断面図（アミが遺物包含層）

押型文土器，撚糸文土器，沈線文土器，条痕文土器，無文土器がある。いずれも早期に属するものでさらに細分が可能である。以下，各土器について説明する。

A．押型文土器 (Fig. 5, 6)

施文原体の大きさ，施文法，器形から5類に分類する。

A－1類（5，6）

薄手の土器で厚さ0.5cmヘラ削り状の調整後小さな楕円文をベルト状に横走施文する。原体は長さ2cm，文様は3条で単位は不明。胎土には花崗岩の砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は黄褐色をなす。同一個体の可能性もある。

A－2類（1～4，7，8，10）

薄手の土器で厚さ0.5cm前後，小さな押型文を，横走施文する。10の山形文を除いて他は楕円押型文である。2，3，8は口縁部，あるいは口辺部近くの破片で，口縁部外面に帯状の無文帯がある。口縁部内面にも楕円文を横走施文する。原体の長さは不明。文様は1，2，3が2単位で，1の原体径は0.54cm，2は0.38cm，3は0.48cm，4，7，8，10の単位は不明。胎土はA－1類と同様，焼成良好，色調は黄褐色～灰褐色，1の外面にはススが付着する。

A－3類（11～14，20）

土器はやや厚くなり，器壁の厚さ0.7～1cm，外面にはやや粒の大きくなる楕円文が横走施文される。11は口縁部近くの破片で，内側に原体条痕がある。14を除いていずれも小破片で原体の長さや文様単位は明らかにできない。14は上位が横走施文，下位が斜走施文である。原体の長さは3.6cm以上，文様単位は2単位で径0.61cmと算出できる。胎土には花崗岩の小さな砂粒を含むが，精良，焼成は良好，色調は黄褐色～赤褐色をなす。

A－4類（9，15，16，18）

土器は器壁がやや厚くなり，厚さ0.8～1.0cmである。外面にやや粒の大きくなる楕円文が縦走施文あるいは斜方向に施文される。いずれも胴部破片で器形等については不明。施文原体については破片が小さいために不明。胎土には石英，長石，花崗岩の砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は黄褐色～赤褐色をなす。

A－5類（17，19，21～37）

比較的厚手の土器で，器壁の厚さは0.8cm前後である。19，22～25，28は口縁部破片で他は胴部破片である。口縁部は大きく外側に外反し，底部が尖底なる深鉢形土器と考えられる。外面には菱形に近い楕円文が縦走，横走，斜走の不特定方向の施文があり，2～3回重複施文されるものもある。単位は2単位のものが多い。19は口端部が平坦に切りおとされ，内側に凹線が斜位に施される。補修孔が穿たれている。22，24，28は口唇部に原体で押圧し，刻みを入れ，内側には同様の原体で短い沈線が斜位に施されている。23，24は口唇部が平坦に削られ，口縁部内側に深い凹線が斜位方向に長く施されている。胎土は精製されていて良質である。石英，

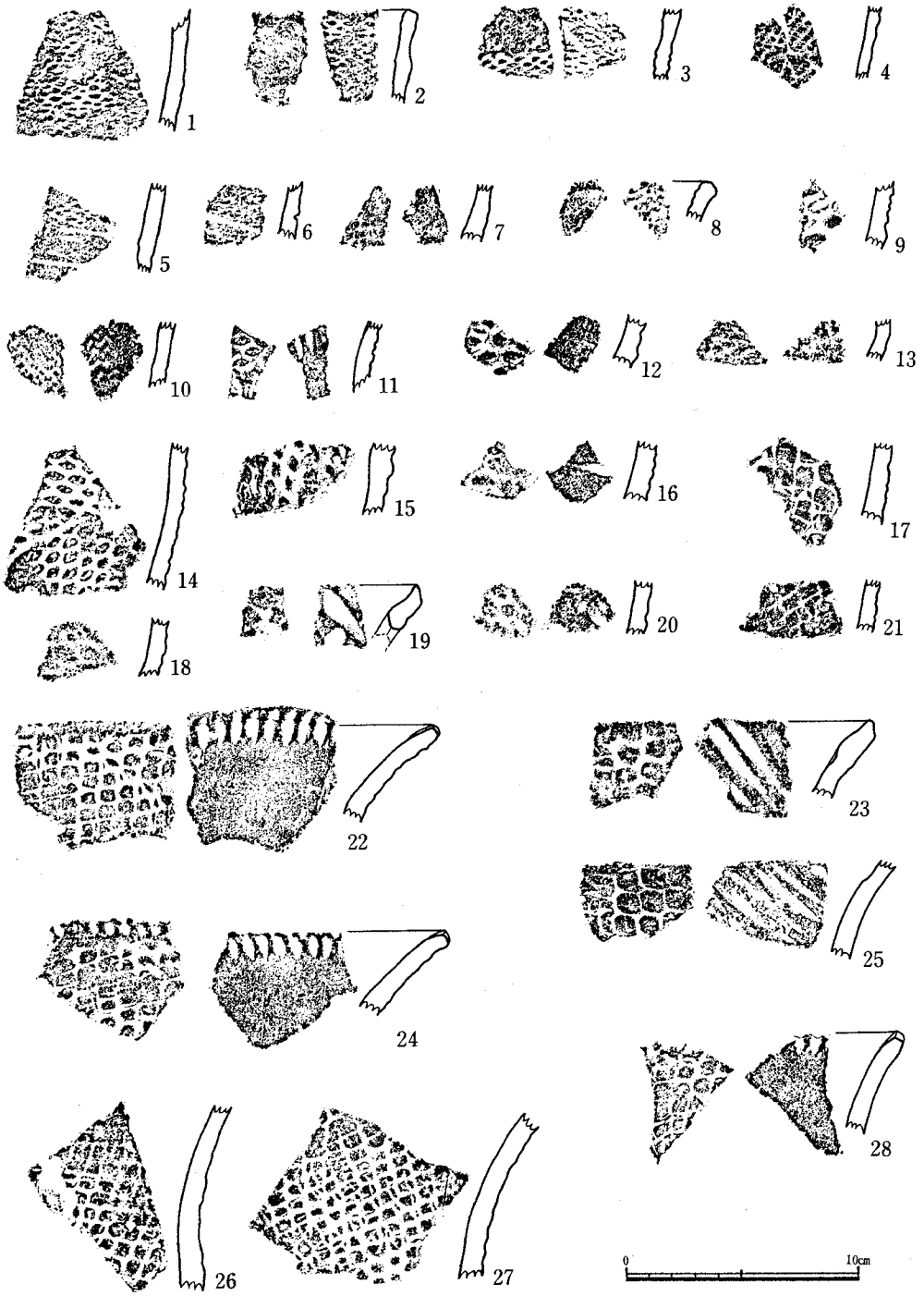


Fig.5　A－1遺跡出土遺物実測図Ⅰ（土器）

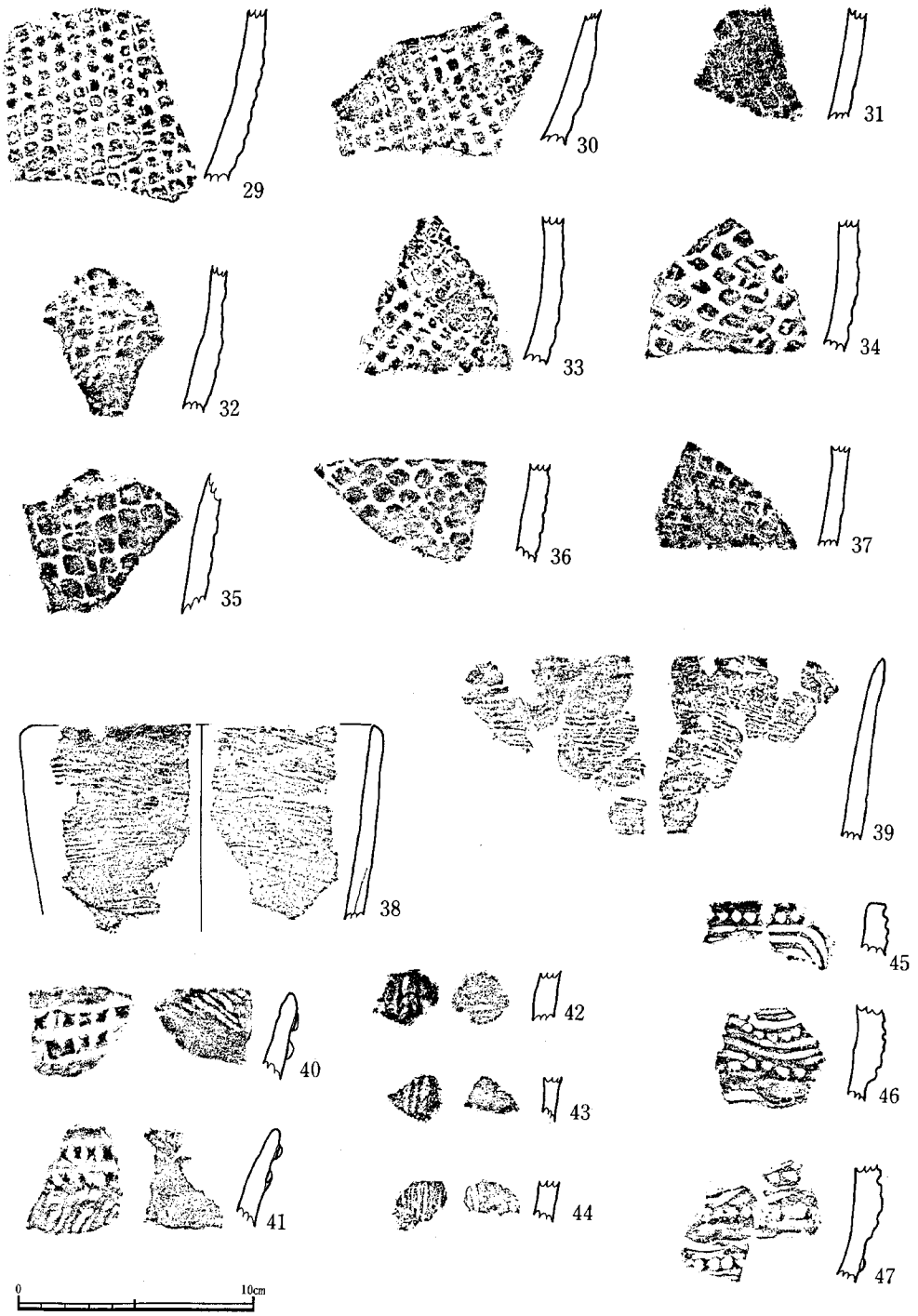


Fig.6　A－１遺跡出土遺物実測図Ⅱ（土器）

長石の砂粒を含む。焼成は良好で黄褐色～灰褐色をなす。土器の外面にススが付着しているものが若干存在する。

B．撚糸文土器 (Fig. 6－38, 39, 42～44)

撚糸の原体，施文法から2類に分類する。

B－1類 (38, 39)

やや薄手の土器で，器壁の厚さは0.6～0.7cm，器壁は凹凸がある。外面は指圧調整後，不定方向からの板ナデ調整，内面は横方向の板条痕調整を加えている。外面口縁部内側の5cmの間に0段ℓ撚りの撚糸文を横走施文しているが，器面の凹凸によって施文は部分的になる。器形口は口縁部が直口し，口縁端部は丸くおさめている。口縁部内側にススの付着がみられる。胎土には石英，長石の砂粒を含んでいる。焼成は堅緻で色調は赤褐色～黄褐色をなす。38，39は同一個体と考えられる。

B－2類 (42～44)

いずれも小破片で器形は知ることはできない。器壁の厚さは0.7～0.8cmでやや厚い。外面に0段ℓ撚りの撚糸文を縦走施文している。胎土には石英，長石の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で，色調は赤褐色～黄褐色をなす。

C．刻目隆帯文土器 (Fig. 6－40, 41)

同一個体と考えられる口縁部破片2点がある。口縁下に二条の隆帯をめぐらし，刻目を入れているが，刻目を入れる際，先端の尖った棒状の工具で口縁部上方からつき刺すように二条の隆帯に同時に刻目を入れている。地文は縄文でℓ{{の一段撚りの縄文を縦位に施文する。口縁部内側にも1～1.5cm幅で縦位の縄文が施される。縄文の原体は外面と同じである。口縁部外面にススが付着する。胎土には石英，長石の細かい砂粒を含む。焼成は良好で，色調は黄褐色～赤褐色をなす。

D．平栫式土器 (Fig. 6－45～47)　3点あるが，いずれも同一個体と考えられる。口縁部および口縁部近くの破片である。口縁部は肥厚している。口縁部が山形に隆起するか否かは不明。口縁端部および下端の肥厚端部に刺突文を配し，その間はやや幅広い池線を波状ないしは円孤状に連続して描き，その間に刺突文を施す。頸部には突帯状に隆起させ，そこに刺突文を施し，その間は一本の沈線を波状にめぐらしている。器面は丁寧な調整で仕上げている。器壁の厚さ0.7～1.1cmでやや厚い。胎土には石英，長石の細かい砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は黄褐色から黒褐色をなす。

E．条痕文土器 (Fig. 7－48～62)

いずれも胴部，底部破片である。48は内外面に主に縦位の不定方向の条痕がみられる。49は外面が指頭による調整で，内面は斜位の荒い条痕を施す。50は棒状の工具によってナデ(削り)状の条痕がみられる。内面は丁寧に研磨されている。51は外面が無文で，内面に横方向の深い

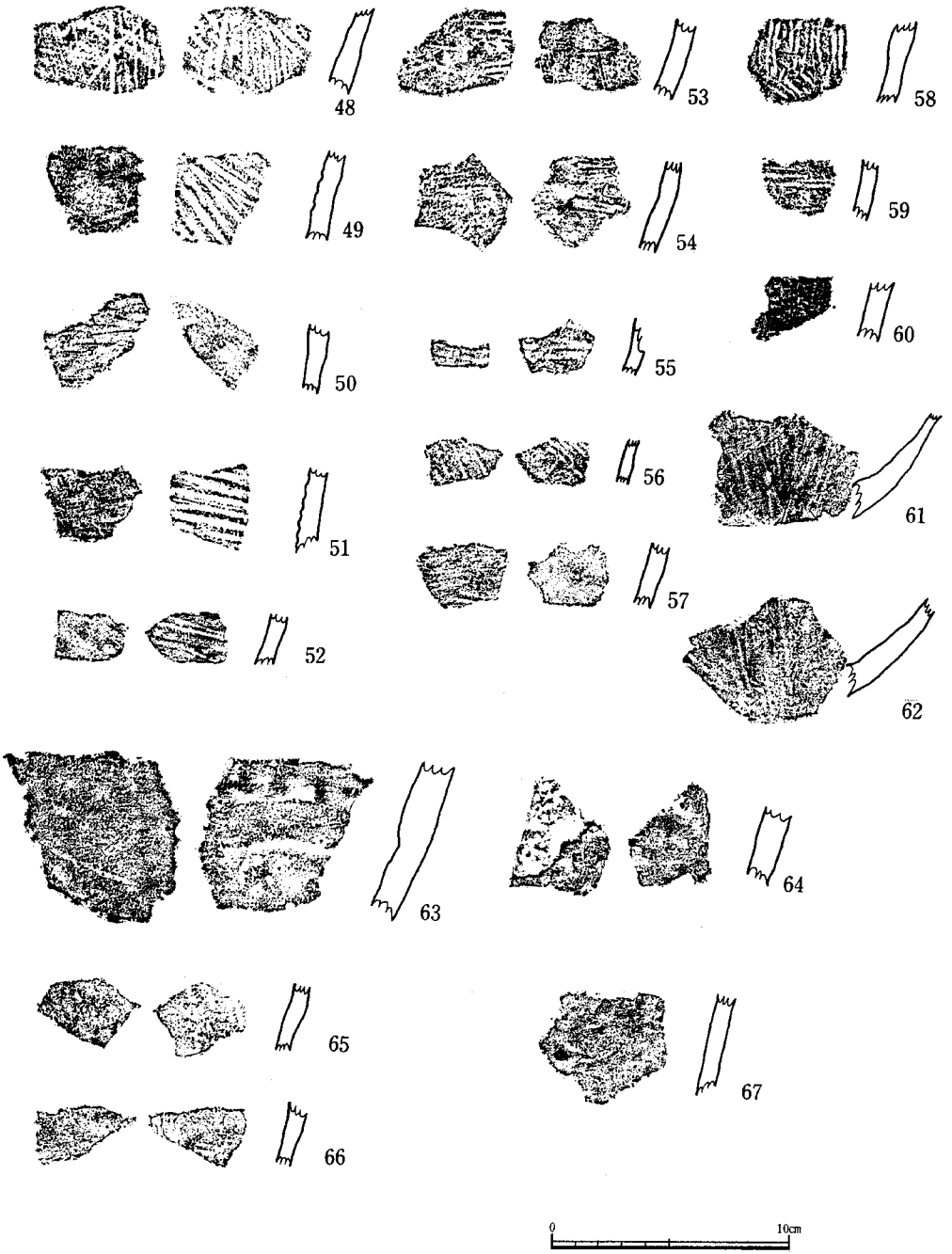


Fig.7　A－１遺跡出土遺物実測図Ⅲ（土器）

条痕が施される。52は外面がヘラ研磨調整，内面は棒状工具による横方向の条線が施される。53は外面に部分的に横方向の細い条痕が施され，内面は縦方向の細い条痕が部分的にみられる。54は横方向の細い条痕を施した後，指による調整，内面は棒状工具に条線がみられる。外面にススの付着がみられる。55は内外面共に棒状工具による条線がみられる。56は内外面共貝殻条痕のある薄手の土器である。57は外面が棒状工具による細い条痕，内面は板ナデ調整である。58は外面に斜位の条痕を施した後，縦位の条痕を施す。内面は器面が剝離し不明。59は外面に横方向の貝殻条痕を施す。内面は無文。60は外面が横条痕を施した後，棒状工具で縦位のナデ線が数条施される。61，62は底部で，いずれも丸底状の尖底をなす。61は棒状工具で縦位の条線がはいる。62も61と同様とみられるが磨滅し，やや不鮮明。以上，条痕文土器は条痕，器壁の厚さ等に均一性はみられず，個々に特徴が異なる。胎土には石英，長石等の砂粒を含んでいる。焼成は良好で色調は黄褐色，赤褐色，黒褐色をなす。

F．無文土器 (Fig. 7－63～67)

器壁の厚さから2類に分類できる。

F－1類（63，64）2点あり器壁の厚さ1.0～1.3cmの厚手の土器である。大型品になると考えられる。63には指頭による調整奪がみられる。粘土帯の奪跡が明瞭に残り，粘土帯は2～3cm前後である。胎土は63が石英，長石，金雲母の砂粒を混入する。64には金雲母はみられない。焼成は良好である。色調は63が黒灰色，64が赤褐色をなす。

F－2類（65～67）薄手の土器で器壁の厚さは0.5cm前後である。内外面とも丁寧に調整されている。胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で色調は黄褐色～灰褐色をなす。

(2) 石器 (Fig. 8)

1，2は打製石鏃で，表裏加工を加え，1は平面形三角形に整形し，2は基部に抉りが入っている。横断面は凸レンズ状になっている。3は石匙で，自然面を打点とする不定形剝片を素材として剝片先端部に両縁辺から抉りを入れ，つまみ部を造り出している。片側の縁辺に主要剝離面に向って，角度のある剝離加工を加え鋭い刃部を造り出している。4，5，6は削器で，4は剝片縁辺に剝離加工を加え，刃部を造り出している。5，6，は剝片縁辺に刃こぼれがみられる。7は，敲打・剝離加工によって隅丸長方形に整形し，表裏は研磨しているが，厚みのある縁辺は敲打のままである。敲打器か。1は良質の黒曜石，2～6は古銅輝石安山岩，7は硬砂岩を素材としている。他に黒曜石製の石核・石核打面再生剝片・剝片・削片・古銅輝石安山岩製の剝片削片がある。

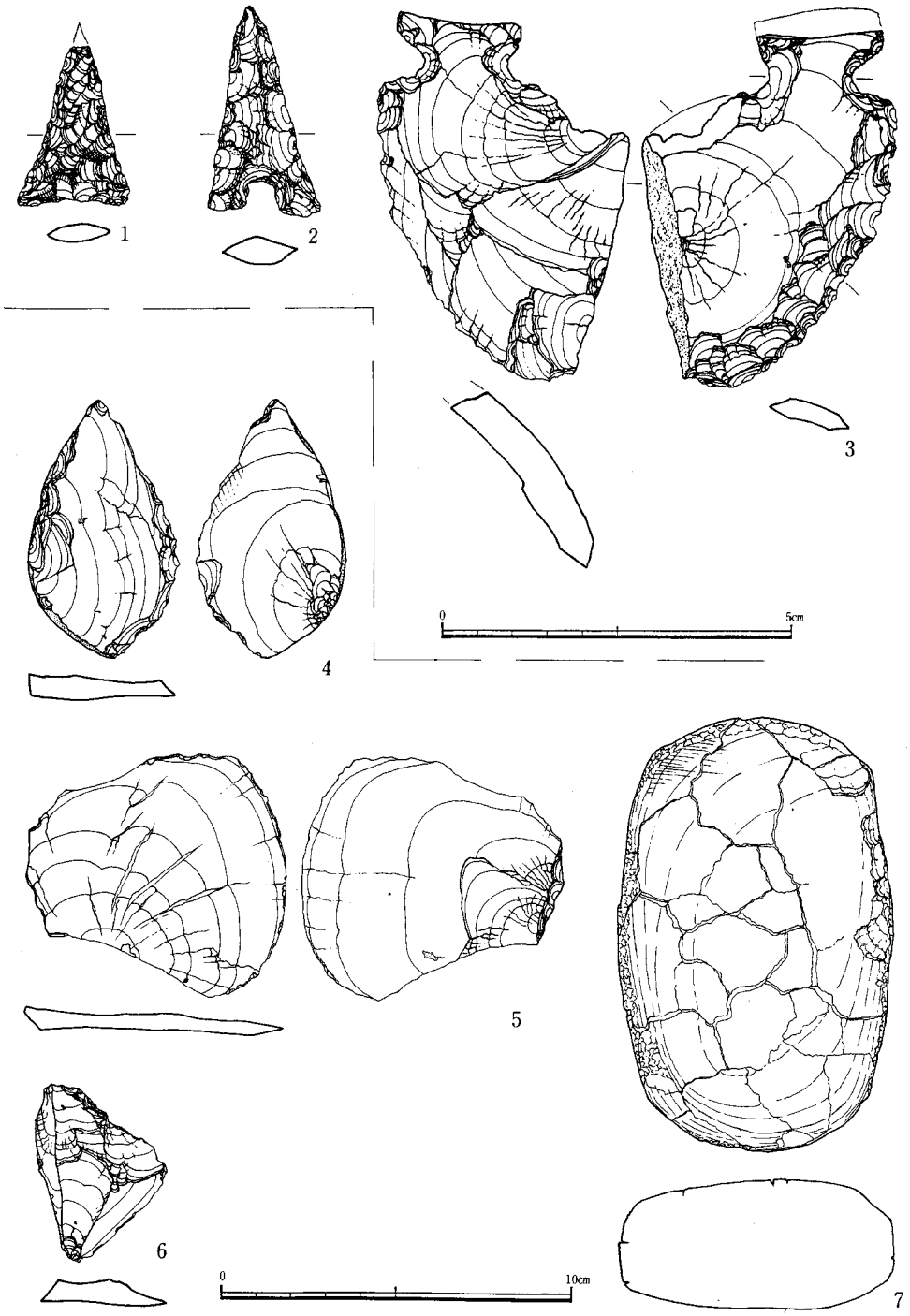


Fig.8　Ａ－１遺跡出土遺物実測図Ⅳ（石器）

5．小結

本遺跡は古墳墳丘下にわずかに包含層が遺存していたにとどまるがその内容は注目する必要がある。遺跡としてはA－2遺跡と同一になる可能性があるが，その内容は若干異なり，地点ごとに遺跡が移動していたことが知られる。このような状況は本開発地内の他の遺跡（A－2，E，K遺跡など）とも共通している。また，遺跡の立地が河岸段丘面という点で他遺跡と共通していることが指摘できる。今後，油山山麓における類似遺跡の確認に大きな参考となろう。

出土遺物には土器と石器がある。土器は押型文土器，撚糸文土器，刻目隆帯文土器，平栫式土器，条痕文土器，無文土器がある。石器には石鏃，石匙，磨石，使用痕ある剝片がある。残念なことに発掘調査では層位的な把握が充分でなく，各遺物の上下関係は不明であるが，土器の形成からみてかなりの時間幅が考えられる。押型文土器では量的に少く問題点もあるが，A－1類としたベルト施文の押型文土器は横走のベルトで，文様が楕円文で薄手である。東九州の川原田式土器相当期段階に比定できる。A－2類はやはり小さな押型文を横走施文し，口縁部内面にも同様の押型文が施文され，薄手の土器であることから，東九州の稲荷山式土器相当期段階に比定できる。A－3類は横走施文で口縁部内側に原体条痕を持つ。破片が小さく比定は困難であるが，早水台式土器とするよりは下菅生B式土器の相当期が考えられる。A－4類は縦走施文であり，他の特徴からみてもA－3類同様に下菅生B式土器に対比できよう。A－5類は施文原体の大きさや器形が口縁部が大きく外反するなど，東九州の田村式土器に対比できる。撚糸文土器は薄手でO段の撚糸を横走させたものである。類例が少く，今後の問題として検討する必要があるが，押型文土器と共伴する可能性もある。刻目隆帯文土器は地文として縄文を持ち，口縁部に刻目隆帯文を付した土器である。口縁部が外反する可能性があるが，小破片のため不明。類似例の少い土器であるが，大分県政所遺跡では押型文土器と共伴して出土している。本例も押型文土器を伴出しており，押型文土器に伴う1群と考えられる。器形・刻目隆帯文等からみて手向山式土器との関連性も考えられる。平栫式土器は北部九州には類似が少いが，最近の調査でわずかながら類例の増加をみている。柏原遺跡群ではF遺跡にほぼ完形に復原し得る平栫式土器が出土している。また，E遺跡，K遺跡でも数点の出土がある。柏原遺跡群内にみられる平栫式土器はいずれも沈線文，刺突文，ミミズ張れ状の隆起線文を施文したもので，縄文を地文とする平栫式土器は認められない。南九州と大きく異なるところである。平栫式土器の分布は最近の調査で大きく広がり，西日本全域に点々と確認されている。今後の検討によっては大きな問題を描出できよう。条痕文土器・無文土器は押型文土器に共伴するものと考えられる。押型文土器と条痕文土器との関係は最近の調査で検討がはじめられている。柏原F遺跡では押型文土器の内面調整に条痕文が施されている例がある。

石器については量的に少く，問題点の描出はできないが，そのセット関係は他の遺跡と異な

ることはない。

今後，A－2遺跡の報告でさらに検討を加えてみたいと思う。

第５章　Ｅ遺跡の記録

１．Ｅ遺跡の立地（Fig. 9）

Ｅ遺跡は開発地域内のほぼ中央部，樋井川の第２支流と第３支流によって解析された谷の出口に位置する両支流にはさまれ舌状にのびた河岸段上に立地する。この段丘面は第２・３支流にはさまれた丘陵麓部に連接して形成されたものである。段丘面は標高53mから46.5mを測る。南西部から北東部に向って序々に傾斜している。丘陵麓部の基部の幅は約70m，先端部20m，長さ160mの細長い舌状をなしている。現水田との比高は約3.0m，第２支流との比高差は約５mを測る。第３支流との比高差は約３mを測る。段丘基盤層は礫層，砂層，粘土層の互層となっている。発掘の所見からみると約1.3m以下に紫色の粘土層が厚く堆積している。その上位に小礫層，粗砂層が互層となって堆積している。粘土層の下位は切りとおしの観察からは拳大～人頭大の礫層が存在している。上位の砂礫層の上には黄褐色土層が堆積している。この土層は丘陵麓部に厚く，段丘面は序々に薄くなり，段丘中位より先端部にはみられない。これは畑地による開墾等で削平された可能性が強く，先端部近くでは遺構内にわずかに認められる程度である。遺構の状態も同様で，段丘基部の遺構は保存状態は比較的良好であるが，先端部は削平残存状態がきわめて悪い。

２．発掘調査区の設定（Fig. 10）

Ｅ遺跡は地表面には遺物の散布は皆無で調査前は遺跡としての注意は払わなかった。排水用土管の設置工事により，段丘の一部が削られた段階で，断面に黄褐色土層の落ち込みがみられた。土層断面の観察結果では遺物の出土はなく，また人工的な遺構であるか否かも判定が困難であったので，同段丘基部に存在したＥ－１号墳調査で，その確認をすることとした。Ｅ－１号墳の調査を開始し，周辺の表土層を除去する段階で縄文式土器，石器の出土があり，前述の掘り込みも人為的な遺構としての確信を持ち，段丘面の全面調査に切りかえ，段丘基部より表土層の除去を開始した結果，遺物包含層，遺構は東斜面に密集し，段丘中央部より西は直接地山層となり，遺構も存在しなかったので，２m×２mのグリットを地形にあわせ，設定し，西よりＡ，Ｂ，ＣのアルファベットでＹまでの50m，南から１，２，３の数字で55までの110mを設定したが，表土層の除去の進展に伴い発掘区中央部でさらに西に広がることがわかったので，

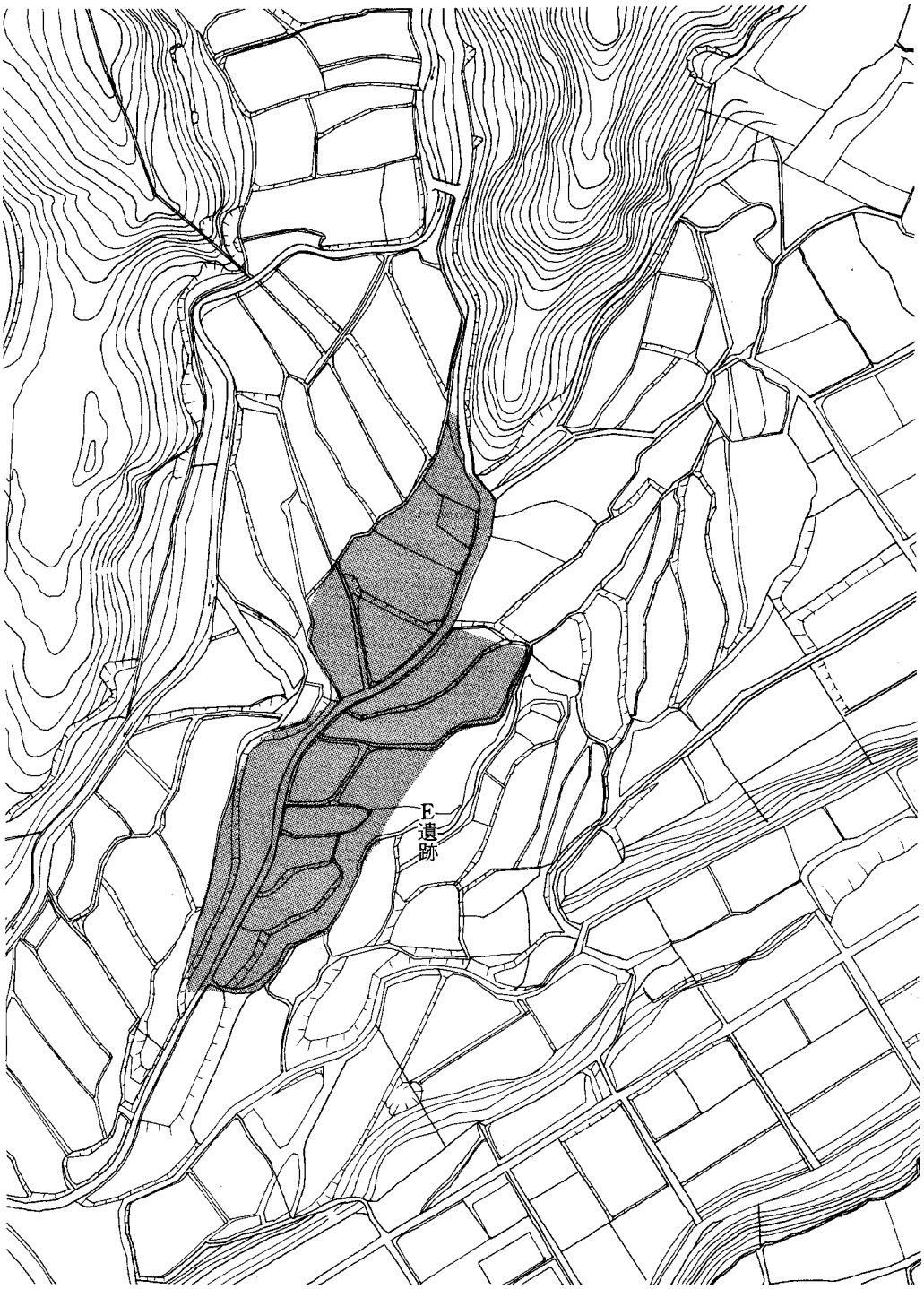


Fig.9　E遺跡の地形（2,000分の１）

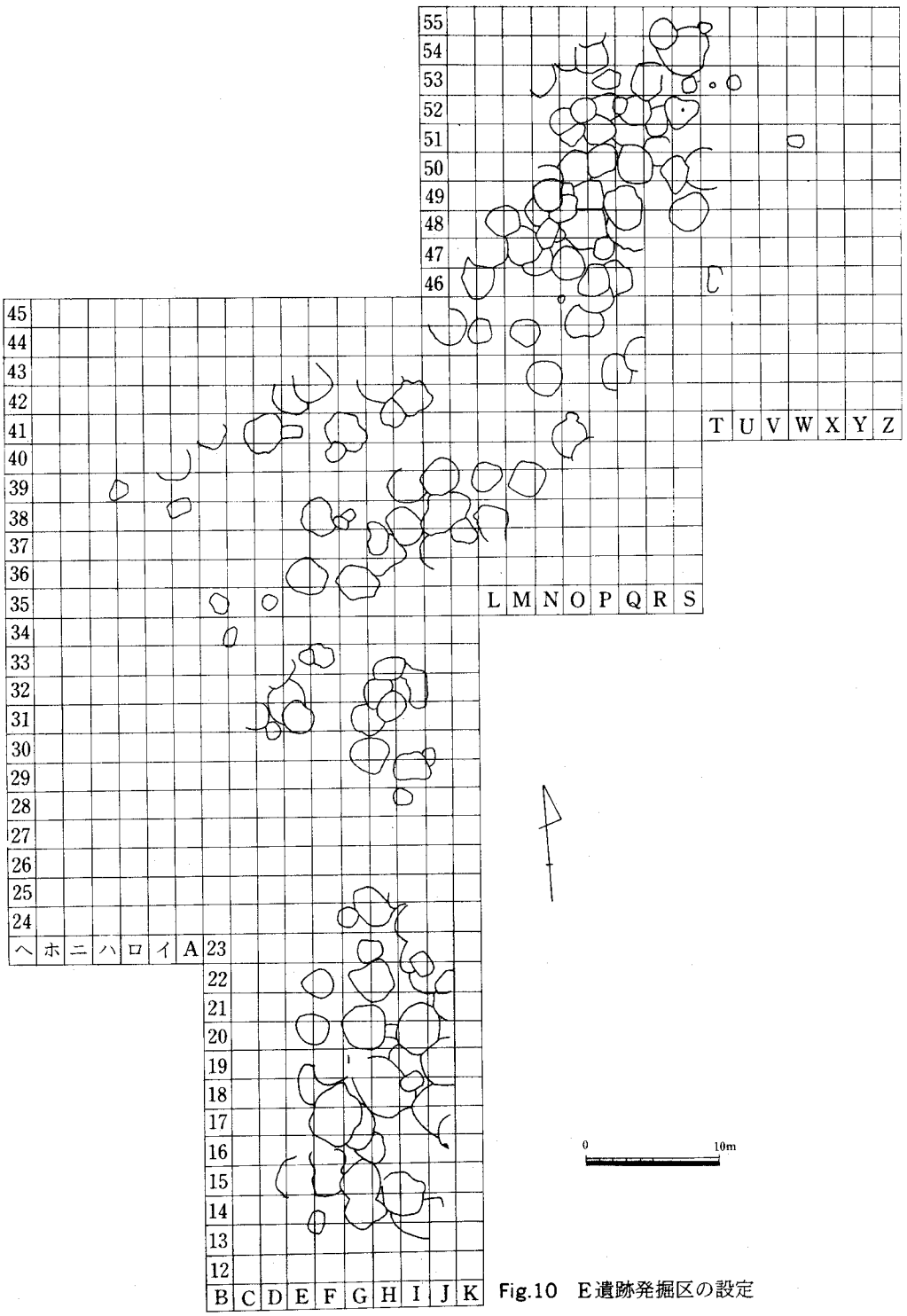


Fig.10　E遺跡発掘区の設定

Ａグリットの西にイグリットを設定し，東から西へ，イ，ロ，ハグリットを設定した。一部排土の関係で全掘できなかった遺構が存在するが，ほぼ全面を調査することができた。

３．層序

遺跡の基本層序は先に示したとおりである。現畑地の耕作土（20cm前後の厚さ）下に黄褐色土層の遺物包含層がある。厚さ10～40cmで，段丘中位より先端部は遺構内のみにみられる。遺存状態の良好な丘陵側は厚いが土層の変化はみられない。やや上層部が耕作土からの汚染で色が暗くなる程度である。遺構内の土層もほぼ遺物包含層の状態と同じであるが，判別できない若干の差があり，遺構の一部は包含層中からの掘り込みであることは判明するが，遺構としては把握できなかった。また，土壙墓と考えられる土壙の内部の土は，包含層の土より若干明るく，遺構検出段階において識別できた。土壙内に，意識的にきれいな土を選び埋めたことが考えられる。

４．遺構の概要

遺構は調査区南側は比較的残存状態が良好であったが，北側，段丘先端部は削平のために遺存状態は不良であった。各遺構は壁のたちあがりがゆるやかでいずれも断面皿状をなしているが，これは各遺構が廃棄された以後の風化によるものと考えられる。土壙と考えられる遺構がいずれも垂直に近い壁のたちあがりをみせるのとは大きな差がある。重複関係が著しく，かつ遺構の数は多い。遺構の使用目的等について判別できるものが少いが，やや大型の土壙で，中に柱穴状のピット，土壙を有するものを住居址，土壙が比較的小型で内部に柱穴状のピット，土壙を持たないものを土壙として整理した。土壙の中でも先に指摘したように，埋土の状態や遺構のプラン等から，土壙墓として区別できるものがある。

遺構の分布は主に段丘面の東斜面に集中してみられ，西斜面には存在しない。ほぼ全面にわたって分布しているが，部分的に粗密の状態が把握できる。Ｃ～Ｊ－13～25グリットにかけての発掘区南側の集中区と，Ｋ～Ｔ－46～55グリットにかけての北側の集中区の２つの集中区が存在し，中央部は比較的粗である。南側集中区と中央部の間はブドウ畑のために，遺構はすべて破壊されていたので除外するが，発掘区中央部の遺構のあり方は集中部と遺構のない空間部が存在することが指摘できる。密接な分析を行えば一時期の集落構造が把握できよう。また，住居址，土壙墓，土壙の分布は１ヶ所に集中するような傾向はみられず，全域にわたっている。

出土遺物の分布は時期的に特徴的な傾向をみせる。発掘区南側では草創期に属すると考えられる刺突文土器，撚糸文土器，櫛歯文土器，縄文土器が集中し，北側では押型文土器が多く，

Fig.11　E遺跡遺構全体図

中央部では貝殻文土器，微隆起線文土器，押型文土器がみられ，時期的に居住地の変遷があったことが知られる。

５．竪穴住居址と出土遺物

竪穴住居址と考える土壙内に柱穴状のピット，土壙をもつものは104基を確認した。以下，各遺構の説明と遺構内の遺物出土状況と出土遺物について説明を加える。ただし，遺物の出土状況については時間の関係で断面図は省略した。出土遺物の説明については以下の凡例で説明する。

１．石器番号は調査時の番号をそのまま付与し，再検討の便を図った。

２．石器の石材については，漆黒色及び透明感のある黒曜石をｏｂ－ａ，青灰色黒曜石をｏｂ－ｂ，灰色不透明黒曜石をｏｂ－ｃと略して記載してある。

３．石器の石材は実測図中のスクリーントンの色調で区別し，サヌカイト製の石器は白抜きで表示している。

４．石器の記述にあたっては，使用痕のある剝片；Ｕｆ，加工痕のある剝片；Ｒｆの略号を用いている。

５．石器はそのほとんどを実大掲載したが，一部大きな石器を２分の１で掲載している。

６．土器はすべてを３分の１で掲載した。

(1)　第１号住居址（ＳＣ－001）(Fig. 12)

発掘調査区の南西端に近い，Ｈ－13，14，Ｉ－13，14，Ｊ－14グリットにわたって検出した遺構である。第２号竪穴住居址と重複関係にあり，第２号竪穴住居址に切られている。遺存状態は悪い。径４ｍ以上の円形～楕円形プランをなすと考えられる竪穴住居である。深さ30～40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，東に片寄って２ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは深さ12～30cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土層で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況 (Fig. 13)

住居址が切られているため遺物量は少い。竪穴中央部に大部分が集中しており，土器，石片若干が存在する。

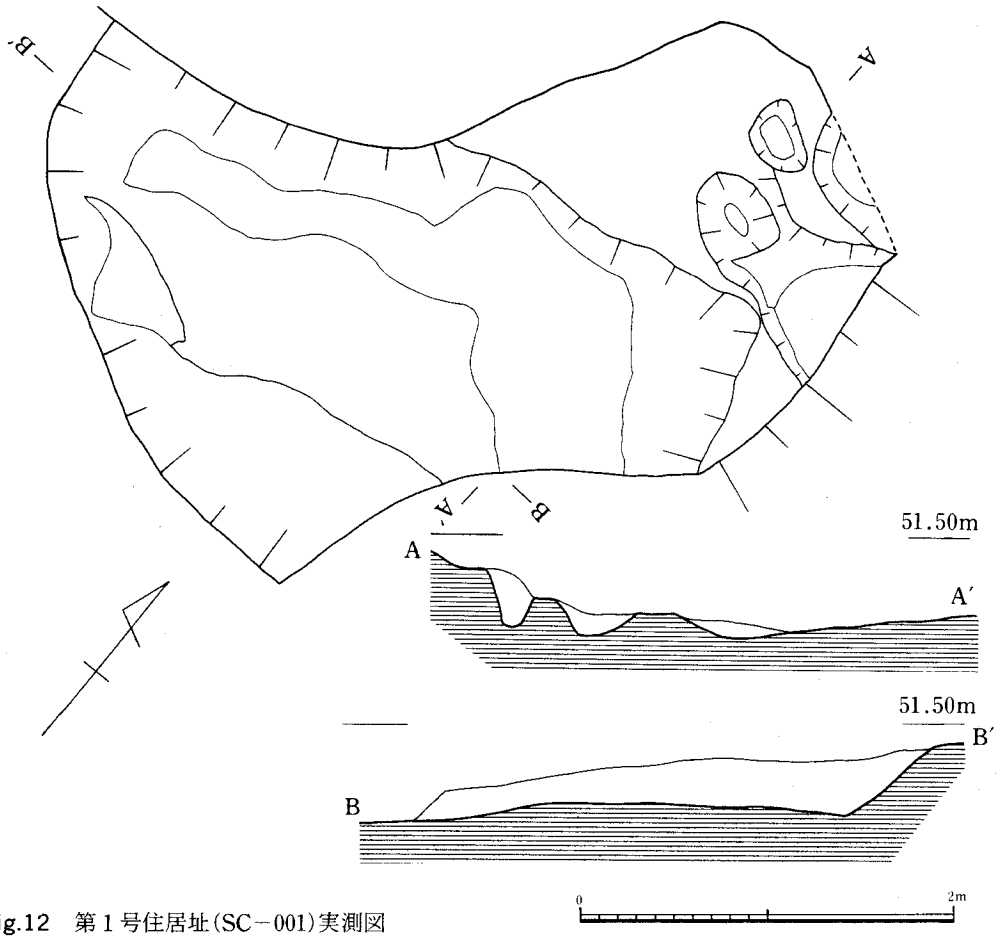


Fig.12　第１号住居址(SC－001)実測図

土器 (Fig. 13)

総数10点の土器が出土した。比較的破片が大きく特徴をそなえている５点を図示した。１は外面に斜位の荒い条痕を施す。内面も同様の荒い条痕を横位に施し，その上をナデている。内面にはススが付着する。胎土には石英，長石の細かい砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が赤黄褐色，内面が黒褐色をなす。２はやや磨滅している。外面に縦位の細い条線がみられる。３は外面に横位の荒い条痕を施し，その上を指ナデで調整している。内面は指圧による調整で凹凸が著しい。厚手の土器で器壁は１cm前後の厚さである。４は外面に縦位，内面に横位の貝殻条痕が施される。５は内外面共縦位～斜位の貝殻条痕を施している。４，５は器壁がやや薄く0.7cm前後の厚さである。以上の４点は胎土に石英，長石，花崗岩の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好である。色調は２，３，４が黄褐色，５が赤褐色をなす。いずれも条痕文土器である。

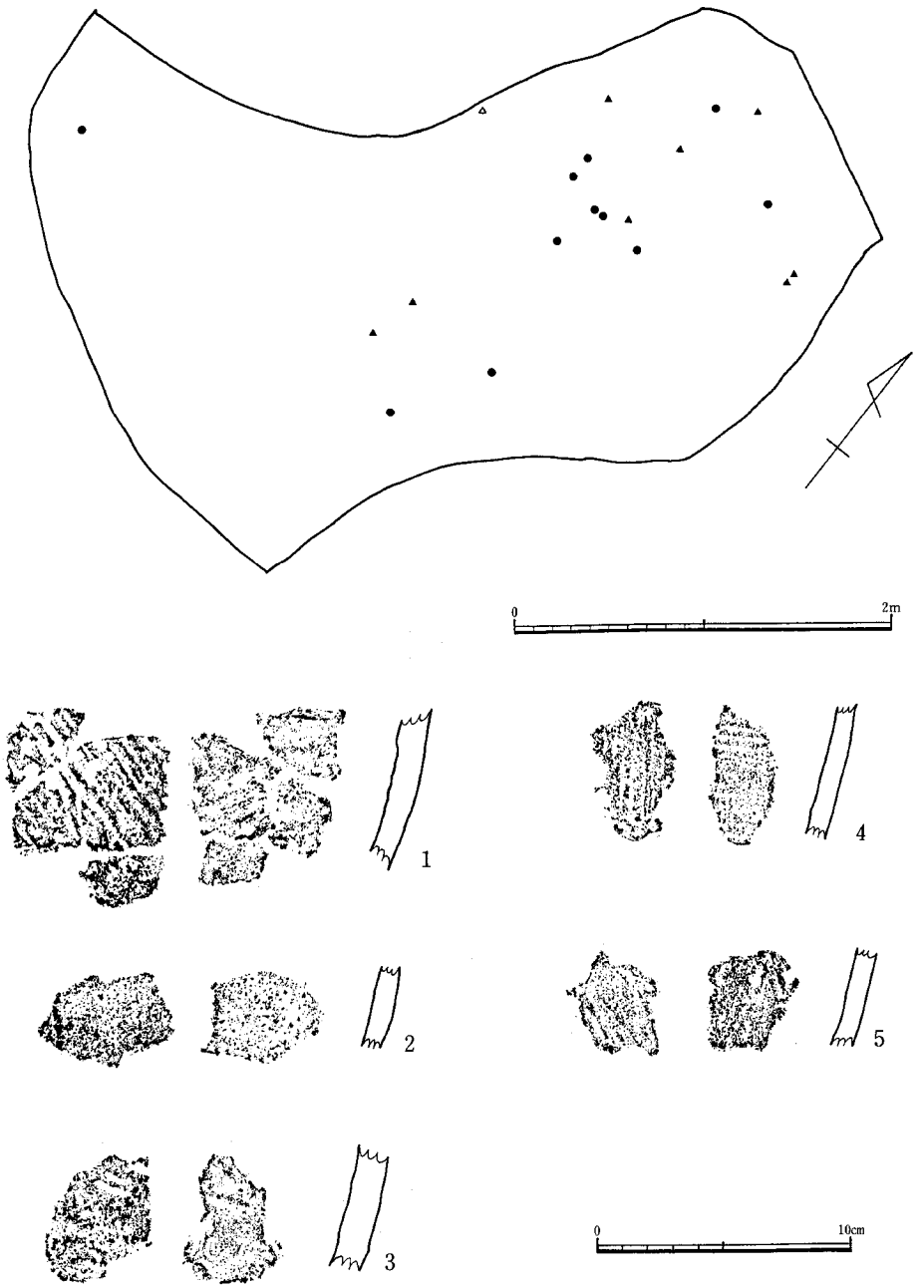


Fig.13　第１号住居址遺物出土状況と遺物実測図

(2) 第2号住居址（ＳＣ－002）(Fig. 14)

発掘調査区の南西端に近い，Ｈ－14，15，Ｉ－14，15グリットにわたって検出した遺構である。第1号竪穴住居址と重複関係にあり，第1号竪穴住居址を切っている。長径3.1m，短径2,7mの楕円形プランをなす。深さ44～65cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそった南東方向の相対する2ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは深さ12～15cmである。また，壁の上面にそった部分の4ヶ所に径30～60cmのピットが存在する。ピットは深さ13～20cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土層で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況 (Fig. 15)

遺物は竪穴中央部の深いところに集中する傾向があり，いずれも流れ込み，投棄された状態を示している。住居址も完全に遺存しており，遺物量も多い。土器片35点，石器・石片42点がある。

土器 (Fig.15－1～3)

いずれも小破片であり，3点を図示した。1は外面に縦位の条痕を施した後，指ナデによって調整している。内面は指頭による凹凸が顕著である。2は外面が縦位，横位の不定方向からの貝殻条痕調整，内面は横位の貝殻条痕調整。3はやや磨滅しており調整痕は不明。いずれも器壁が薄く，0.5～0.7cmの厚さである。胎土には石英，長石の細かい砂粒を混入するが良質である。焼成は良好。色調は1が灰褐色で他は黄褐色である。他の土器も条痕文土器か無文土器である。

石器 (Fig.15)

875はｏｂ－ａ製の鍬形鏃である。片脚の全部と片脚の一部を欠損する。調整剝離は入念である。長さ27.0＋α mm，巾21.0＋α mm，重さ1.45＋α gを測る。875'はサヌカイト製の石鏃の尖端部である。裏面に素材剝離面を大きく残している。長さ19.0＋α mm，巾14.0＋α mm，重さ1.0＋α g。823はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。基部にわずかに抉りが入る。長さ13.5＋α mm，巾13.0mm，重さ0.4＋α g。尖端部をわずかに欠損する。833はｏｂ－ｂ製の局部磨製石鏃の脚部である。全体形は抉りの深い二等辺三角形を基本形としたものと考えられる。表裏面とも研磨している。現存で重さ0.3gである。871はサヌカイト製の局部磨製石鏃である。先端部を欠損する。抉りは浅い三角形状である。表裏面とも研磨している。長さ15.5＋α mm，巾16.5mm，重さ0.7＋α g。867はｏｂ－ａ製の楔形石器である。断面形は凸レンズ状をなし，上下両端に潰れた細かい剝離痕が認められる。長さ23.5mm，巾16.4mm，厚さ8.9mmを測る。

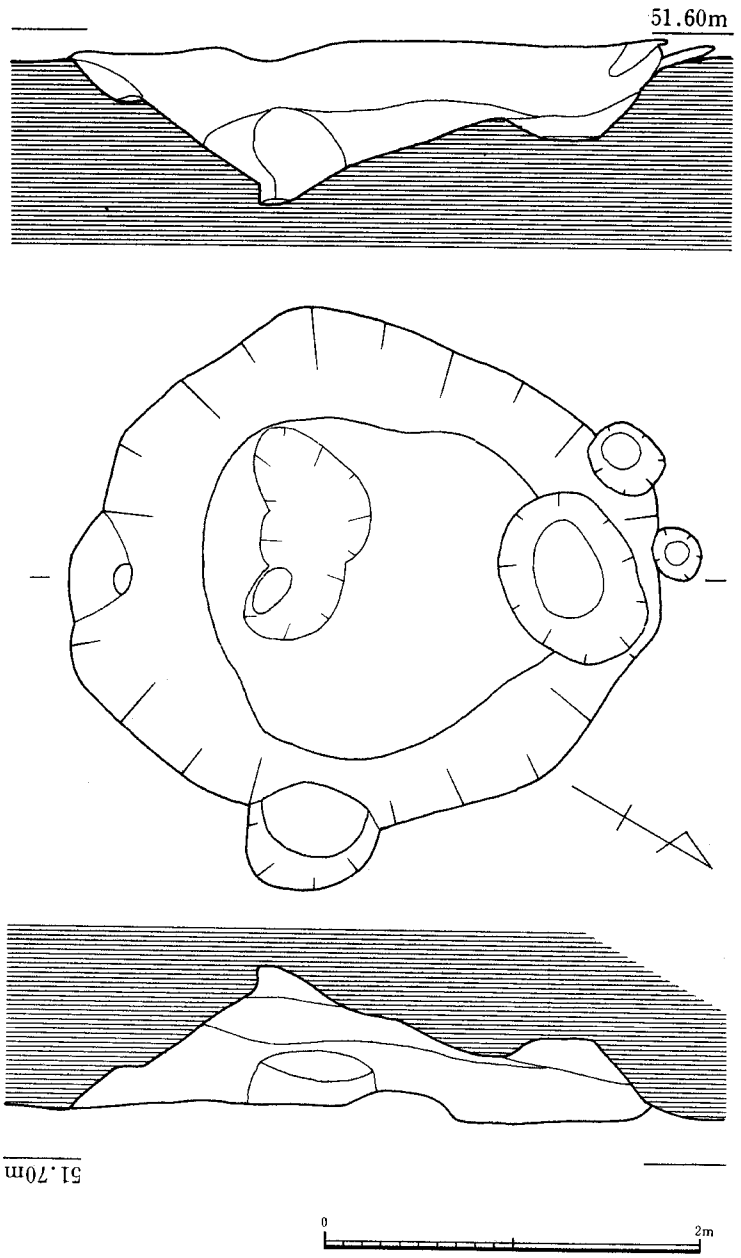


Fig.14　第２号住居址(SC－002)実測図

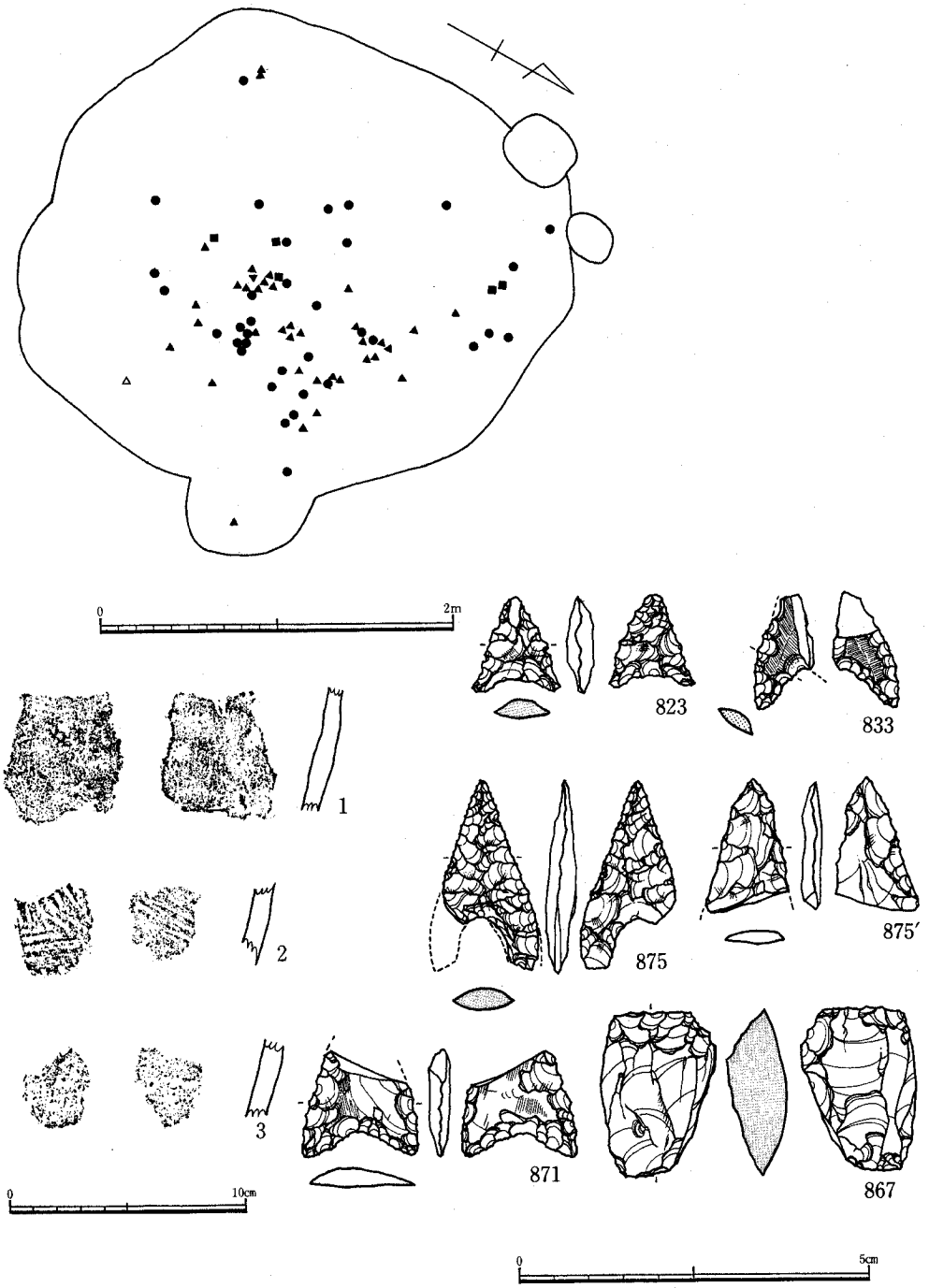


Fig.15　第２号住居址遺物出土状況と実測図

(3) 第3号住居址（SC－003）(Fig. 16)

発掘調査区の南端部に近い，F－14，G－14，15，H－14グリットにわたって検出した遺構である。第4号竪穴住居址と重複関係にあり，第4号竪穴住居址に切られている。長径2.9m，短径2.4mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～28cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなし，ほぼ平坦である。床面の東側に片寄って土壙が掘り込まれている。土壙は135cm×73cm，深さ28cmの楕円形プランで断面皿状を呈している。土壙以外に柱穴状のピットは存在しない。竪穴内には角礫10数個が投げ込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況 (Fig. 18)

竪穴住居の中央部よりやや南に片寄って，土器，石片が集中しているが，その数は少ない。土器4点，石片3点があるのみである。土器片は小破片で特筆すべきものはない。いずれも条痕文・無文土器である。

(4) 第4号住居址（SC－004）(Fig. 16)

発掘調査区の南端部に近い，F－15，G－14，15，16，H－14，15グリットにわたって検出した遺構である。第3号，5号，7号竪穴住居址と重複関係にあり，第3号，5号，7号竪穴住居址を切っている。長径2.89m，短径2.8mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ5～10cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面西半部に土壙が掘り込まれ一段深くなる。土壙は210cm×130cmの楕円形プランをなし，深さ20cmで断面形は皿状をなしている。床面壁部には柱穴状のピットが無秩序に8個存在する。ピットは径30～50cm，深さ4～15cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況 (Fig. 18)

竪穴住居址内の全面に出土し，特別の集中区はみられない。中央部より縁辺部に多く，いずれも竪穴内に流れ込んだ状態を示している。土器片20点，石片13点が存在する。

土器 (Fig. 19－1, 2)

いずれも小破片であり2点を図示した。1は底部近くの破片で，上部の割れ口は凸状になり擬口縁状をなす粘土帯の接合部である。外面は研磨した上に貝殻腹縁（？）による圧痕がある。内面は剝離していて詳細は不明。胎土には多量の花崗岩の砂粒を含み良好ではない。焼成は良好である。色調は黄褐色をなす。胎土，文様施文は柏原F遺跡の最下層の刺突文土器と類似し

ている。２はやや磨滅している。胴部破片で内外面共無文である。調整等は不明。胎土には石英，長石の砂粒を多量に含む。焼成は良く，赤褐色をなす。他の土器も上記二例と同じであるが，器壁の厚いもの（1.0～1.8cm）と薄いもの（0.6cm前後）の二者がある。

(5) 第５号住居址（ＳＣ－005）(Fig. 16)

発掘調査区の南端部に近い，Ｇ－16，Ｈ－16，17グリットにわたって検出した遺構である。第４号，６号竪穴住居址と重複関係にあり，第４号，６号竪穴住居址を切っている。長径2.24m，短径2.2mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ８～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面の東半部は土壙状に深くなる。最も深い部分は80cm×50cmの楕円形プランで深さ50cmである。南側壁面に径20cm，深さ20cmの柱穴状のピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 18）

第４号住居址と同様に竪穴住居の全面に遺物が出土し特別の集中部分はなく，いずれも流れ込みの状態を示している。ただし，竪穴の北側に土器が多く，南側に石片が多い傾向がみられる。土器片15点，石片15点がある。

土器（Fig.19－1～5）

小破片が多く５点を図示した。１は胴下半部の破片である。外面に斜位の貝殻条痕を施し，内面には横位の貝殻条痕を施し調整している。器壁は比較的薄く0.7cm前後である。胎土には花崗岩の砂粒を若干含む。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。２は胴下半部の破片である。器壁は厚く1.5～1.7cmを測る。外面は丁寧なヘラ研磨，内面はヘラ状工具による調整で稜線がついている。破片の上下端共に粘土帯の接合部で擬口縁状をなしている。粘土帯の幅は約５cmで，内傾接合である。胎土には石英，長石，黒雲母の砂粒をわずかに混しているが，粘土分が多く焼成はもろい。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。３，５は同一個体で接合できる。底部付近の破片で器壁が厚く1.7～2.0cmである。丸底をなすと考える。外面は剝離が著しく調整は不明。内面は条痕を施した後になでているが，アバタ状の小さな凹凸が顕著である。胎土には花崗岩の砂粒を多く含み焼成は良好。色調は褐色をなす。胎土等は４号住居址出土の１と同様でＦ遺跡の最下層出土の刺突文土器に類似している。４は胴部破片で，外面は風化が著しく剝離している。胎土には石英，長石，黒雲母の砂粒を混入している。焼成は不良，色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。

石器（Fig. 19）

硬砂岩製の長楕円礫である。表面は風化している。その大きさから，磨石などの用途は考え

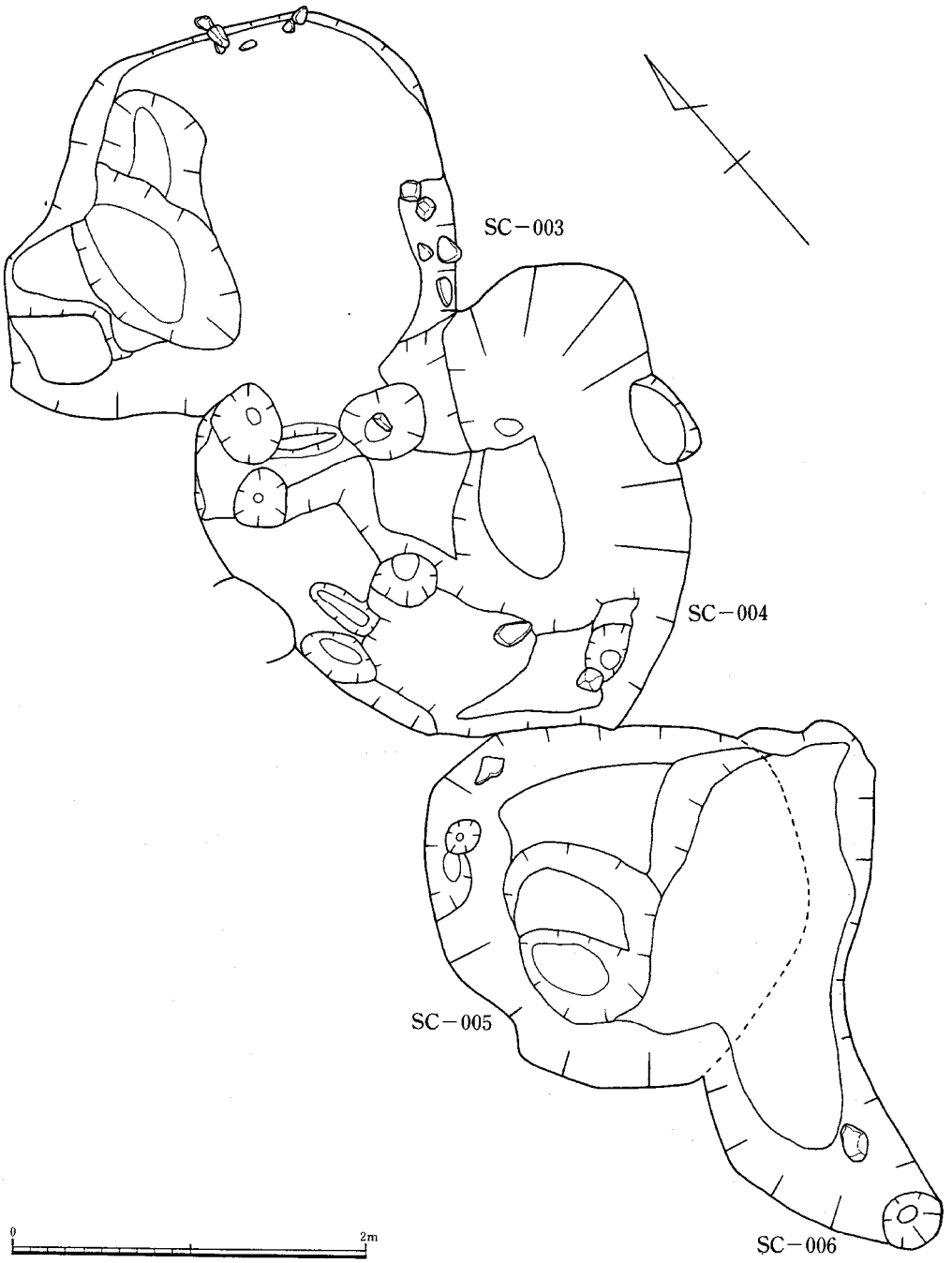


Fig.16　第3～6号住居址(SC－003，004，005，006)実測図Ⅰ

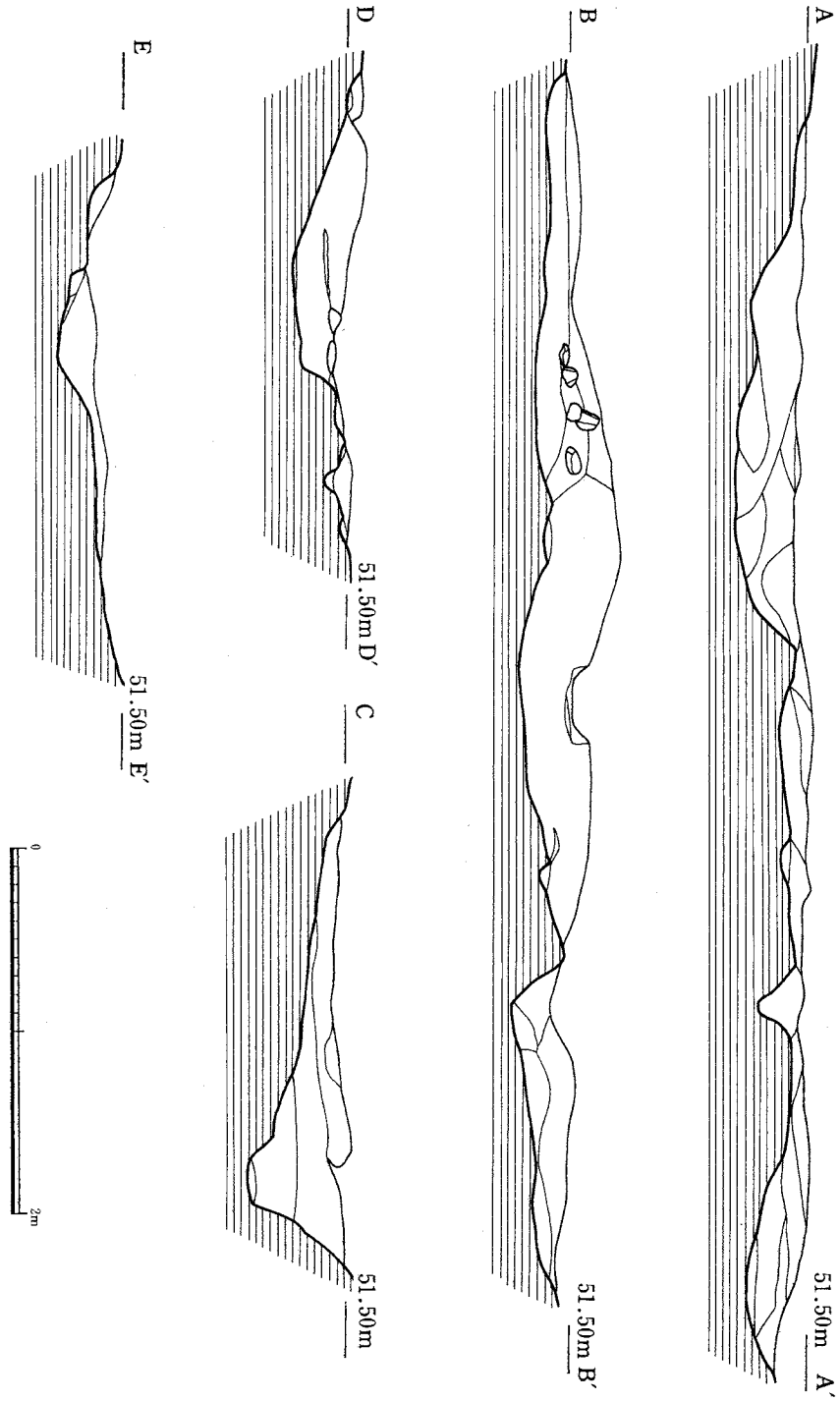


Fig.17　第３～６号住居址（SC－03～06）実測図Ⅱ

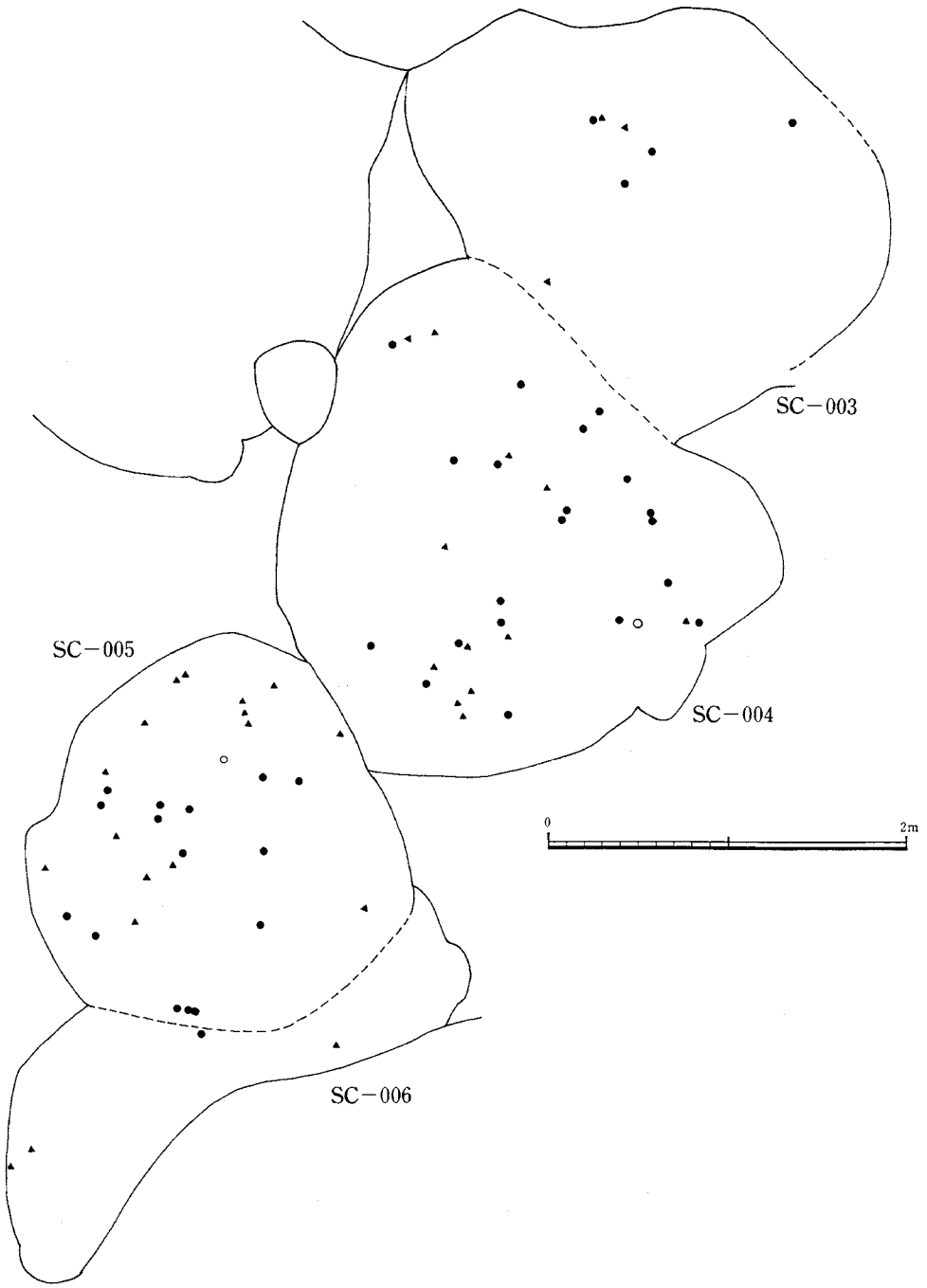


Fig.18　第３～６号住居址遺物出土状況

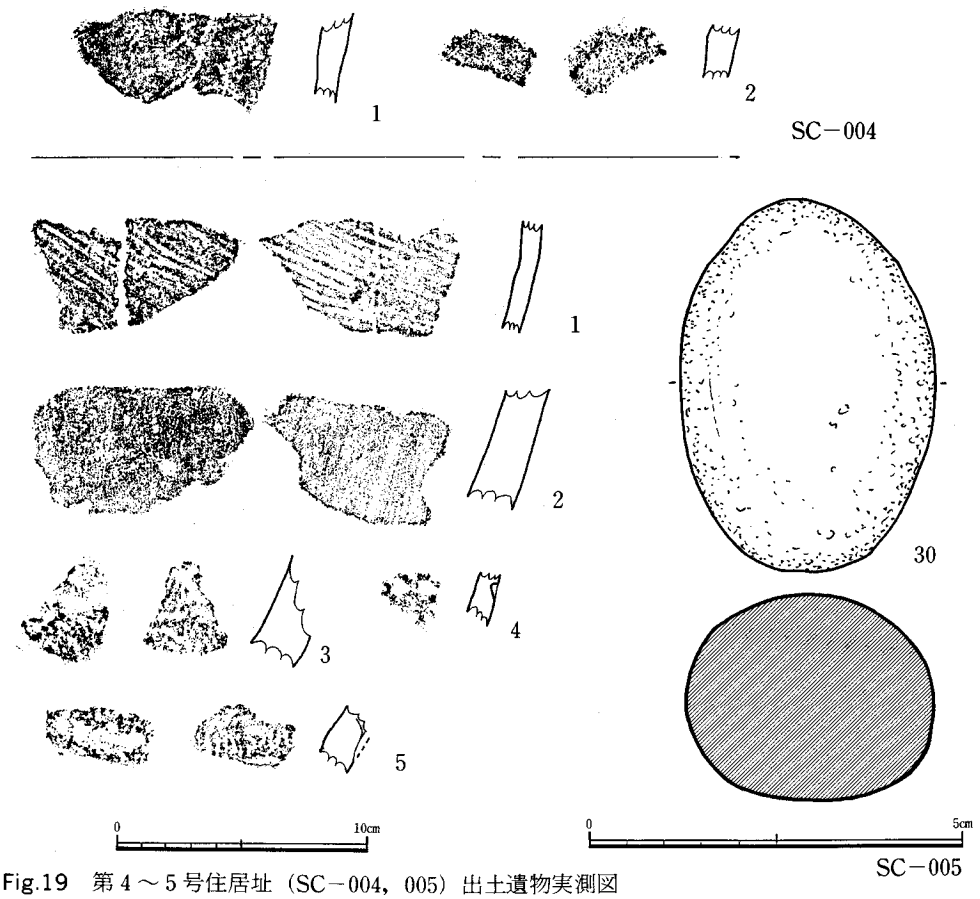


Fig.19　第４～５号住居址（SC－004，005）出土遺物実測図

難い。長さ49.1mm，巾33.9mm，重さ　gを測る。

(6)　第６号住居址（ＳＣ－006）(Fig. 16, 17)

発掘調査区の南端部に近い，Ｇ－16，17，18，Ｈ－17グリットにわたって検出した遺構である。第５号，９号竪穴住居址と重複関係にあり，第５号，９号竪穴住居址に切られている。長径3.0cm以上，短径0.8m以上の円形プランないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。北側壁に径35cm，深さ10cmの柱穴状のピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 18）

竪穴住居址の遺存状態が悪いために出土遺物はきわめて少く，土器片３点と石片１点があるのみである。４，５号住居址と比較して遺物のあり方は散在している。土器片はいずれも小破片で図化できるものはない。

(7)　第７号住居址（ＳＣ－007）(Fig. 20)

発掘調査区の南西端に近い，Ｅ－15，16，Ｆ－15，16グリットにわたって検出した遺構である。第４号竪穴住居址と重複関係にあり，第４号竪穴住居址に切られている。長径3.1m，短径2.6mの不整楕円形プランをなす竪穴住居である。深さ20～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそった５ヶ所と中央部に浅いピットが存在する。ピットは径20～40cm，深さ15～20cmである。竪穴住居址の中には角礫14個が存在

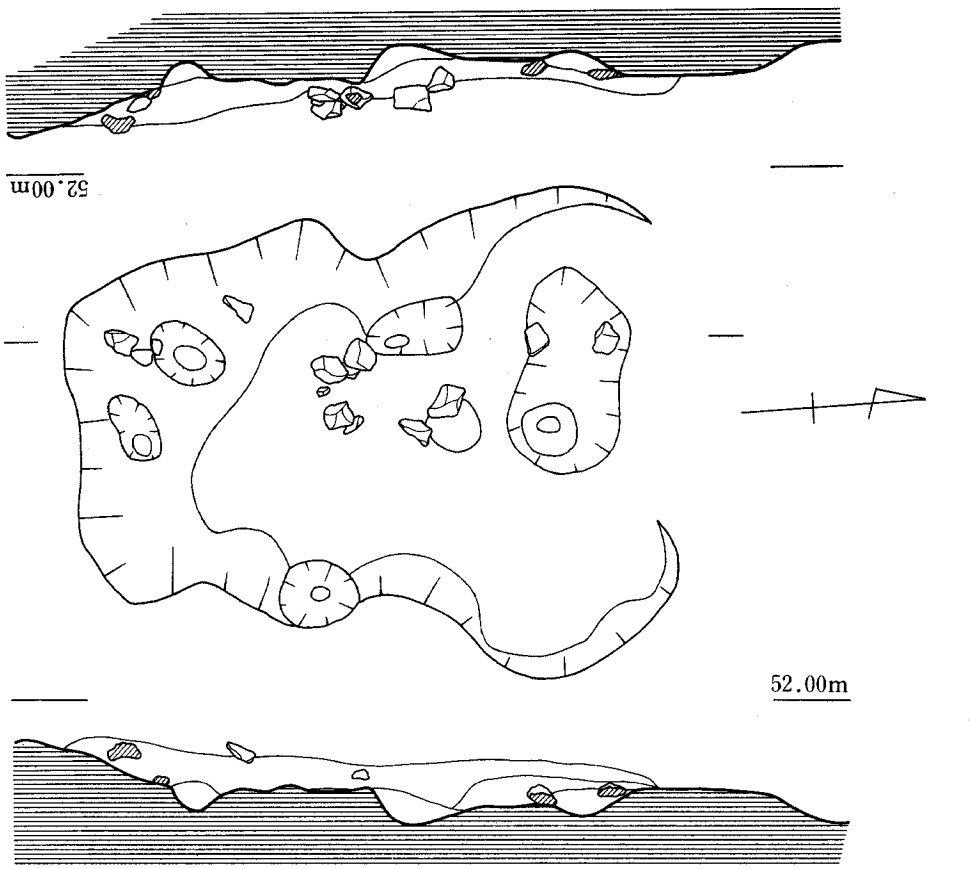


Fig.20　第７号住居址(SC－007)実測図

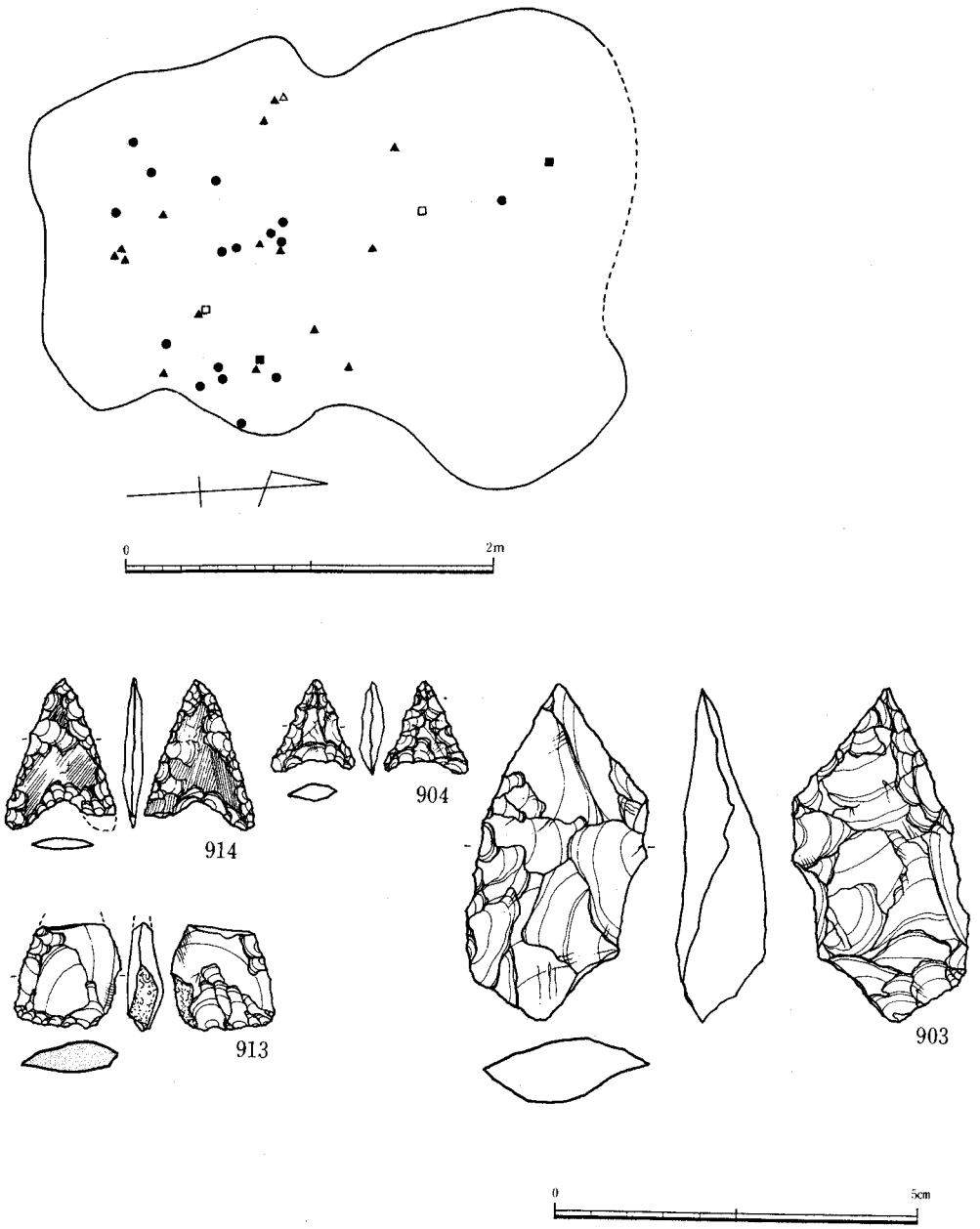


Fig.21　第７号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

するが，これはもともとこの住居址にあったものではなく，この住居址の廃棄後，投げこまれたものである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 21）

遺物は竪穴住居址の南半部に集中してみられ，北半部には散発的である。このことは，竪穴住居の遺存状態に関連するものと考えられる。北半部は削平によって住居址の壁も失われていて埋土層が薄いことが指摘できる。出土遺物には土器が16点，石器・石片20点がある。

土器

すべてが小片で図示していないが，薄手の条痕文土器と厚手の無文土器がある。土器は磨滅したものが多く流れ込んだものと考えられる。

石器（Fig. 21）

914はサヌカイト製の局部磨製石鏃である。片脚の一部を欠損している。研磨は表裏面の中位以下に限られる。長さ20.5＋α mm，巾15.0＋α mm，重さ0.55＋α gを測る。904はサヌカイト製の小形石鏃である。抉りはゆるく浅い。長さ12.5mm，巾11.5mm，重さ0.3g。913はｏｂ－ａ製のＲｆで，石鏃の未製品とも考えられる。加工は表裏面に及ぶが，全面もしくは全周に至っていない。自然面を一部残したままである。長さ14.3＋α mm，巾13.7mm，厚さ4.4mmを測る。903はサヌカイト製の尖頭状石器である。粗い両面加工を施し，尖頭部のみ細かい調整を行ってい

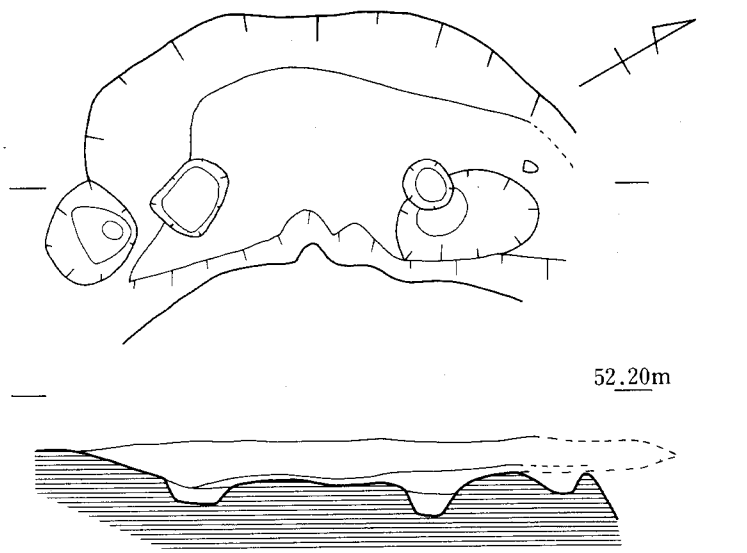


Fig.22　第8号住居址(SC－008)実測図

る（尖頭部の加工は片面からのみである）が，錐としての用途も考えられる。長さ45.6mm，巾23.1mm，

(8) 第８号住居址（ＳＣ－008）（Fig. 22）

発掘調査区の南西端に近い，Ｄ－15，16，Ｅ－14，15，16グリットにわたって検出した遺構である。他の竪穴住居址と直接の重複関係は認められないが，削平された欠損部を復原すると第５号住居址と重複し，第５号住居址に切られている可能性が強い。遺存状態が悪く約⅓を残すのみである。径2.7m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居と考えられる。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面の南北２ヶ所に相対してピットが２個ずつ存在する。ピットは径20～40cm，深さ10～18cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

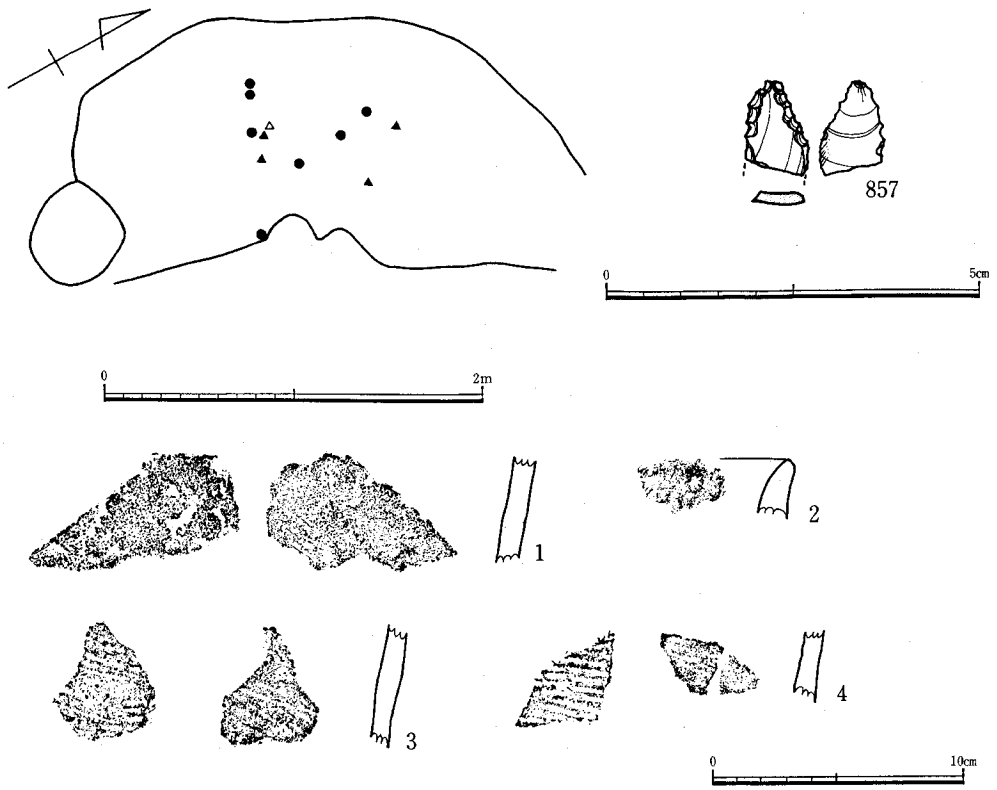


Fig.23　第８号住居址遺物出土状況

遺物出土状況（Fig. 23）

竪穴住居址の遺存状態が良好でないので，遺物量は少い。ほぼ中央部に集中して遺物が出土している。周辺部から凹地の中心に流れ込んだ状態を示していると考えられる。土器7点，石器・石片5点が存在する。

土器（Fig. 23→1～4）

4点を図示した。1，2は無文の土器で若干磨滅している。1は胴部破片，2は口縁部破片である。口縁部は指による調整のために，ややいびつである。1は胎土に石英，長石の細かい砂粒を含むが精良な粘土を使用している。2は胎土に花崗岩の砂粒を含んでいる。焼成は共に良好で，色調は黄褐色～灰褐色をなす。3，4は同一個体と考えられる胴部破片である。外面は横方向の貝殻条痕調整。ススの付着が顕著である。内面は横方向の貝殻条痕調整後にナデ消している痕跡が観察できる。胎土には石英，長石，金雲母の細かい砂粒を混入しているが精良である。焼成は良好で，色調は外面が黒褐色，内面が黄褐色をなす。他の土器片も条痕文土器および無文の土器である。

石器（Fig. 22）

857はｏｂ－ａ製の小さなＲｆである。加工は腹面→背面のみである。長さ12.5＋α㎜，巾8.5㎜，厚さ1.4㎜を測る。

(9)　第9号住居址（ＳＣ－009）（Fig. 24）

発掘調査区の南端に近い，Ｅ－17，Ｆ－16～18，Ｇ－16～18グリットにわたって検出した遺構である。第6号，13号竪穴住居址と重複関係にあり，第6号，13号竪穴住居址を切っている。長径4.5m，短径3.3mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦であるが，東に向ってやや傾斜する。床面には10個の柱穴状のピットが存在する。ピットの配置は一見規則性はないが東西方向と南北方向に並列するピットに分けられる。径20～60cmである。竪穴内の南半部には16個の角礫が存在するがこれは竪穴の廃棄後，投げこまれたものである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 25）

ほぼ竪穴住居の全面に認められるが，主に住居址の東半部に集中する傾向がみられる。東側（6号住居址側）より投棄ないしは流れ込んだ可能性が強い。遺物は土器26点，石器，石片26点がある。

土器（Fig. 25, 26－1～13）

特徴のわかる13点を図示した。1は口縁部破片である。口縁端部がわずかに外反する。口唇

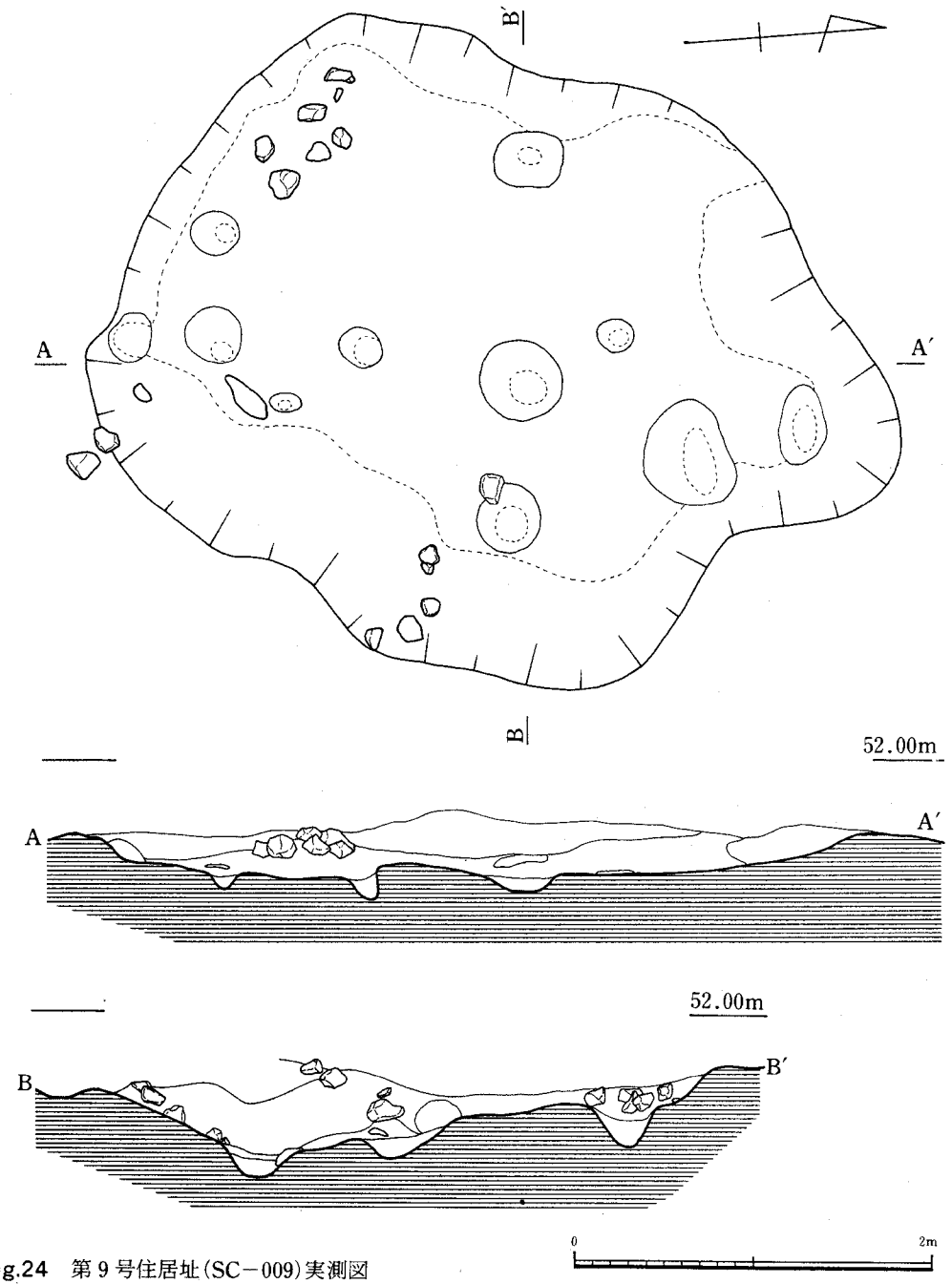


Fig.24　第９号住居址(SC－009)実測図

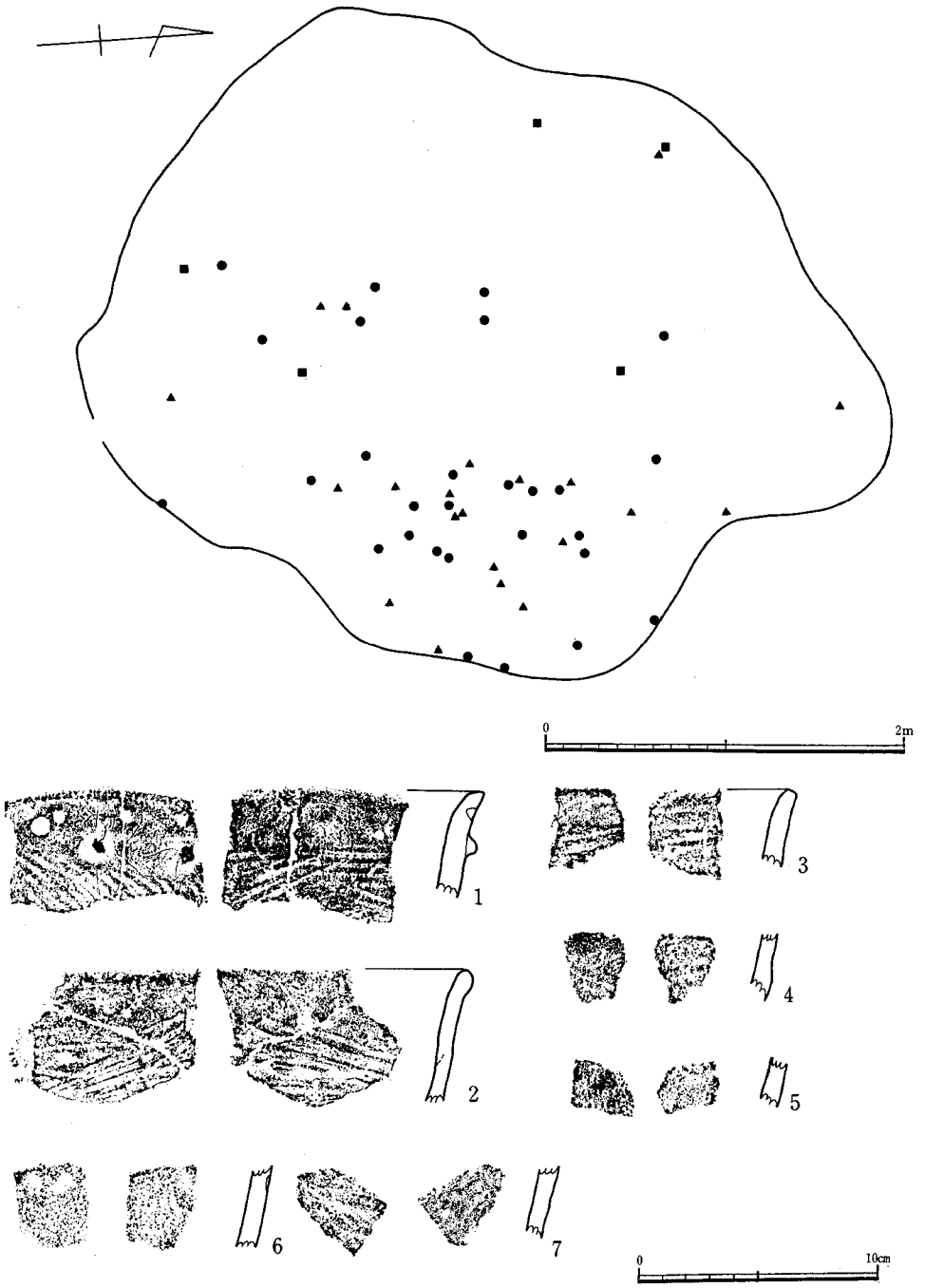


Fig.25　第９号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図Ⅰ

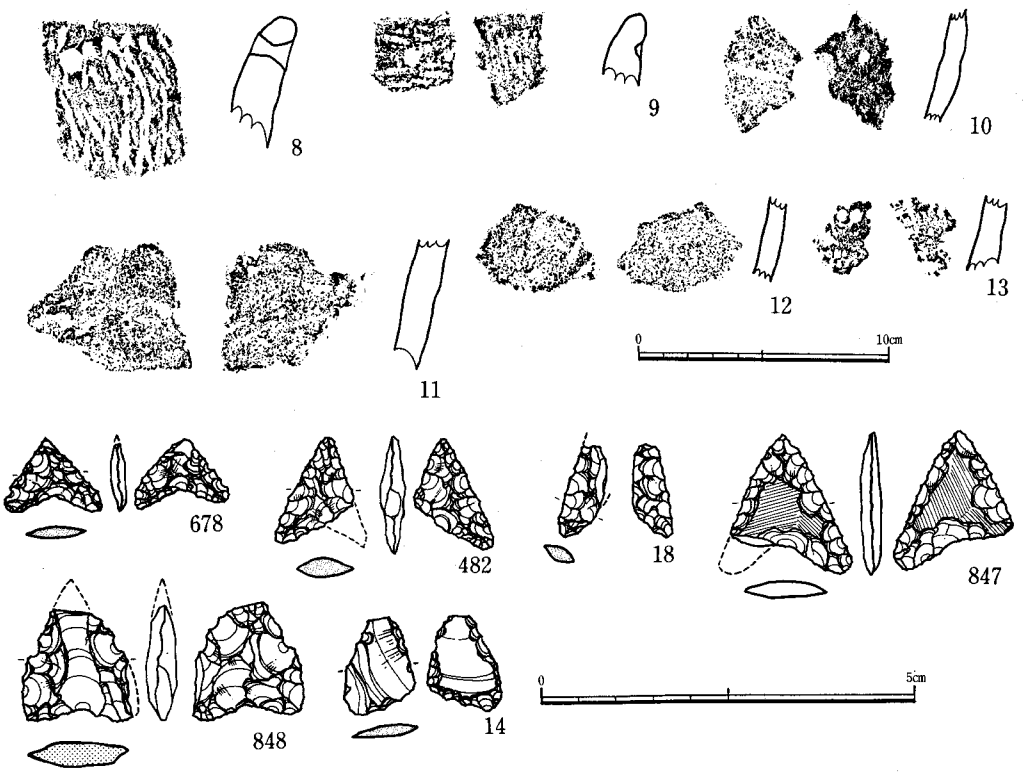


Fig.26　第９号住居址出土遺物実測図Ⅱ

部に細い沈線で刻み目を入れ，口縁直下に先端の尖った工具で約２cm間隔で刺突文を並列施文し，さらに，その下に豆粒状の粘土ハリ付け文が３cm間隔で並列している。刺突文は横から刺突し下方に引き抜いているためやや楕円形をなす。外面は斜方向の貝殻条痕調整で口縁部文様帯部分はナデ消されている。内面も同様の貝殻条痕が横，斜位に施され，口縁部はナデ消されている。口縁直下に補修孔がみられるが途中でやめていて貫通していない。外面および内面口縁部にススの付着がみられる。２も口縁部破片である。口縁部がやや外反し，端部は丸くおさめる。内外面斜位の条痕調整で，口縁部の内外面はナデ消されている。内面には粘土帯の接合部が明瞭に残る。接合は内傾である。３も口縁部破片である。内外面に横位の条痕を施す。以上の３点は胎土に石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は１が外面褐色，内面赤褐色，２，３は赤褐色をなす。４，５，６は内外面とも無文，７は内外面に横位の条痕がみられる。胎土には石英，長石の細かい砂粒が混入されている。焼成は良好，色調は黄褐色から赤褐色をなす。８は口縁部破片。直口縁で端部は丸く尖る。厚手の土器で器壁の厚さは1.3～1.5

cmである。外面には０段ℓ撚りの撚糸文を縦位に施文している。内面は丁寧に研磨されている。口縁直下に補修孔が穿たれている。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含んでいるが良質。焼成はややもろい。色調は灰褐色をなす。９は口縁部の小破片。８同様に厚手の土器で器壁の厚さ1.1～1.3cm。外面には貝殻腹縁の押圧文を横位に施文し，口縁直下に１cm間隔で刺突文を並列施文している。口縁内側には貝殻腹縁の押圧文が縦位に施文される。胎土には花崗岩の砂粒を含む。焼成は良好で，色調は黒褐色をなす。10，11，12は表裏共無文で調整痕は不明。11は器壁がやや厚く1.1cmを測る。下端面に粘土接合部が凹部として残る。胎土には石英，長石等の砂粒を含む。焼成は10は良好，11，12はやや不良，色調は10が赤褐色，11，12が黄褐色をなす。13は口縁部破片であるが，口縁部を欠失する。口縁直下に刺突文を並列施文し，その下位に櫛（？）の押圧文を縦位にベルト状に施文しているが全形については不明。内外面共ヘラ研磨が丁寧に行われている。胎土は良質で砂粒を含まず繊維を含んでいる。焼成は良好で赤褐色をなす。この他の土器はいずれも小破片であるが，１点縄文を施文した土器片がある。この土器片はＳＫ－02の縄文式土器と同一個体になると考えられる。

石器（Fig. 26）

678はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。長さに比べ巾がかなり広い。先端部を欠損している。長さ9.0＋α mm，巾13.0mm，重さ0.2＋α ｇを測る。482はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。抉りはやや深い。片脚を欠損している。長さ15.0mm，巾11.0＋α mm，重さ0.3＋α ｇ。18はｏｂ－ａ製の局部磨製石鏃の脚である。表面の中位に研磨の痕が認められる。現存で重さ0.15ｇ。847はサヌカイト製の局部磨製石鏃である。片脚を欠損している。表裏面とも研磨。長さ18.0mm，巾16.0＋α mm，重さ0.6＋α ｇ。848はｏｂ－ａ製の抉りの浅い二等辺三角形鏃である。調整の剝離が大きく粗い感がある。基部からの大きな剝離によって尖頭を欠損しており，加工途上のものとも考えられる。現存で，長さ15.0mm，巾14.0mm，重さ0.85ｇである。14はｏｂ－ａ製のＵｆである。不定形な小形の剝離の周囲に使用によると考えられる剝離痕を持つ。長さ12.5mm，巾9.5mm，厚さ1.5mmを測る。

⑽　第10号住居址（ＳＣ－010）（Fig. 27）

発掘調査区の南端部，丘陵東斜面の縁辺部のＪ－16，17グリットにわたって検出した遺構である。半部以上が崖面に失われている。第11号竪穴住居址と重複関係にあり，第11号竪穴住居址を切っている。径2.4m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

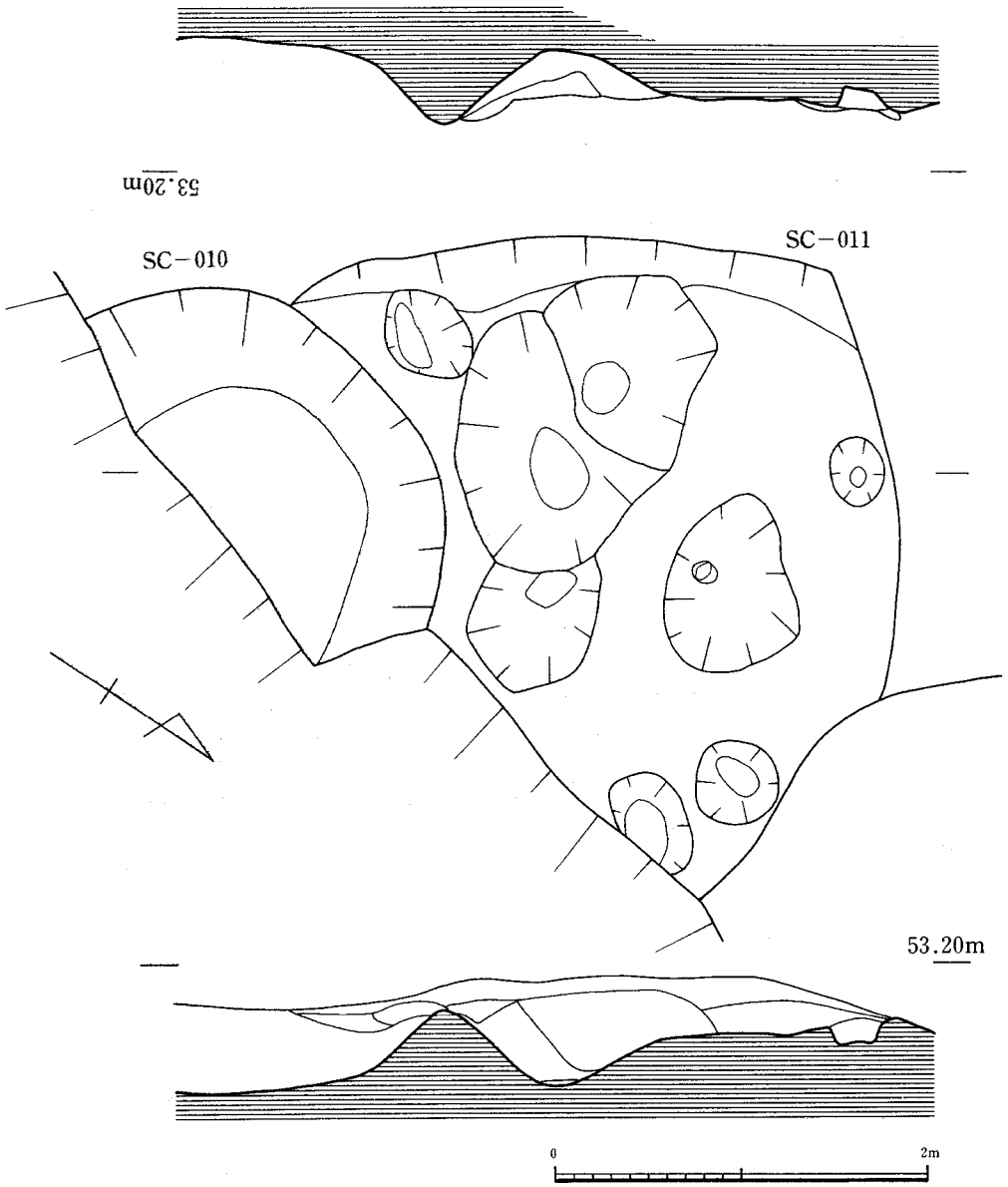


Fig.27　第10，11号竪穴住居址(SC－010，011)実測図

Fig.28　第10，11号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

遺物出土状況（Fig. 28）

竪穴住居址が崖によって半分以上が失われているために遺物量は少いが，竪穴中央部に集中している。いずれも投棄されたものか，流れ込んだものである。土器７点，石器・石片12点がある。

土器（Fig. 28－1）

１点を図示した。底部近くの破片と考えられる。外面には一部条痕が波状に施される部分があるが，器面が荒れているためにはっきりしない。内面は指ナデ調整，胎土には石英，長石の細かい砂粒を混入するが良質。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。

石器（Fig. 28）

374はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。片脚が他方に比べ短い特徴を持つ。加工は周辺部に限られ素材の面を大きく残している。長さ15.0㎜，巾10.0㎜，重さ0.2ｇ。638はｏｂ－ａ製の石核再利用のスクレイパーである。石核は剝片もしくは円礫を素材として求心的に剝片剝離を行っている。その後一側辺を加工，利用している。長さ26.5㎜，巾23.0㎜，厚さ9.5㎜を測る。

(11) 第11号住居址（ＳＣ－011）（Fig. 27）

発掘調査区の南端部に近い，丘陸東斜面縁辺部のＩ－17，18，Ｊ－17，18グリットにわたって検出した遺構である。第10号，16号，17号竪穴住居址と重複関係にあり，第10号，16号竪穴住居址に切られていて，第17号住居址を切っている。径3.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。他の住居址の切り合いと崖によって遺存状態は悪い。深さ30cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面に８個の柱穴状のピットがある。ピットは径30～130cm，深さ12～30cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 28）

竪穴住居址が他の住居址との切り合いや，崖によって約半分がないが，多量の遺物が出土している。遺物は住居址のほぼ全面に分布しているが，中央部が最も密集している。破片も大きいものが多いが，いずれも投棄ないしは周辺部から流れ込んだものである。土器36点，石器，石片48点がある。

土器（Fig. 28，29－1～13）

大きな破片で特徴的な土器13点を図示した。１は口縁部破片。口縁部がわずかに外反する部分と直口する部分がある。口唇部に刻目があるが判然としない。口縁直下に刺突文が並列施文されると考えられるが間隔は不明。さらにその下位に豆粒状の粘土のハリ付け文が５cm間隔で

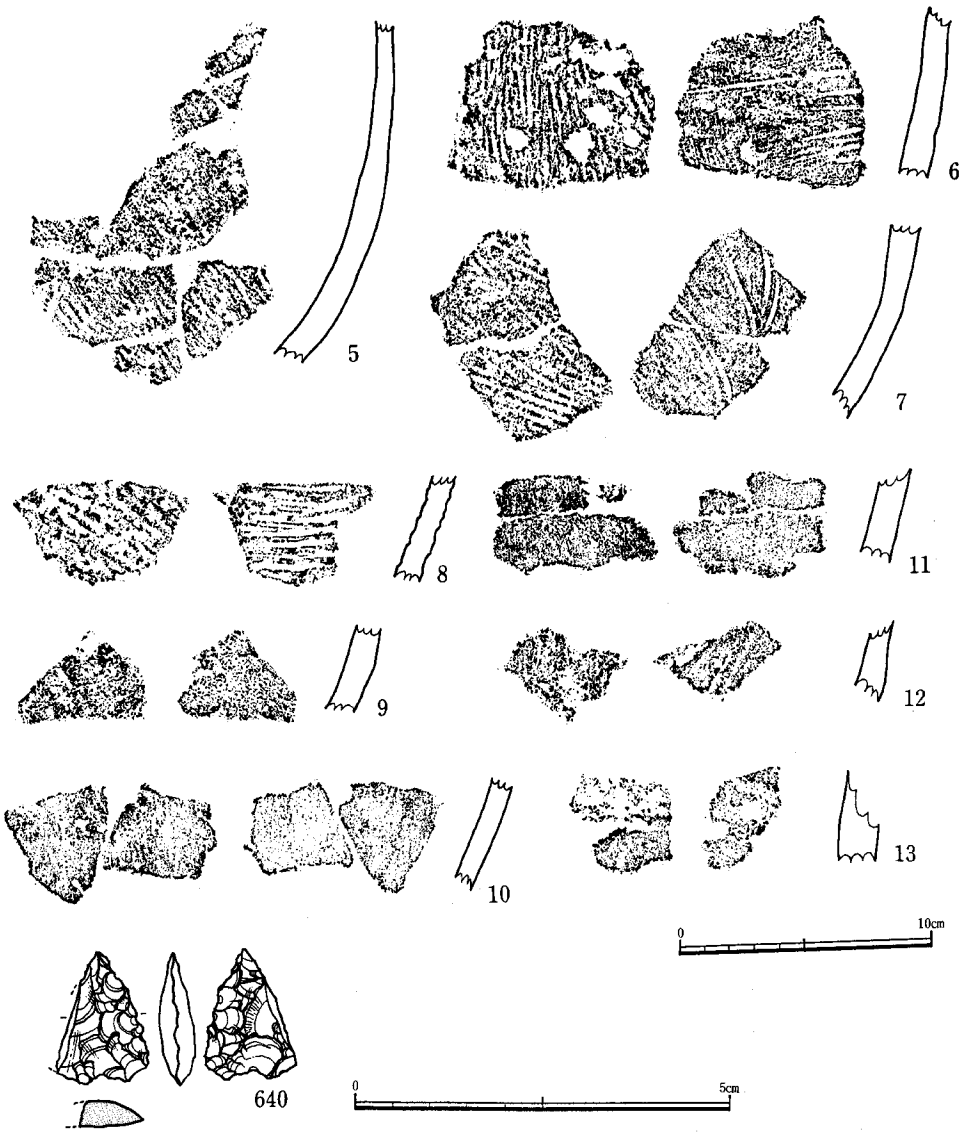


Fig.29　第11号住居址出土遺物実測図

施文される。内外面は斜方向の貝殻条痕調整で，口縁部の内外はナデ消されている。2は口縁部破片。口縁部がわずかに外反する。口縁直下に刺突文が並列施文されると考えられるが，間隔は不明。内外面は斜方向の貝殻条痕調整で，内面は後からナデ消している。刺突文のため内側でふくらみ突瘤状になる。3～13は胴部破片である。3は外面が横～斜位，内面が斜位の貝殻条痕調整。4は内外面共斜位の条痕調整後，ナデを加えている。5は外面が斜方向の貝殻条痕調整，内面が横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えている。6は外面が縦方向の貝殻条

痕調整，内面が横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えている。6は外面が縦方向の貝殻条痕調整。内面が削り状の板ナデ調整。7は外面が斜方向の貝殻条痕調整，内面が横，斜方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えている。5と同一個体の可能性が強い。8は外面が斜方向，内面が横方向の強い貝殻条痕調整。9，10，11は内外面ともヘラ研磨調整，12は外面は無文で，内面は横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加える。13は外面がナデ調整，内面は指頭による調整で，凹凸が著しい。いずれの土器も胎土には石英，長石の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で，色調は1が黒褐色，6，8，10が外面赤褐色，内面黒褐色，他は赤褐色をなす。1，2は外面にススが付着し，6，8，10は内面にススが付着している。

石器（Fig. 29）

640はｏｂ－ａ製の石鏃である。片側を一部欠損している。加工途上のものと考えられる。長さ17.3㎜，巾13.0＋α，重さ0.8＋α g，を測る。

(12) 第12号竪穴住居址（ＳＣ－012）（Fig. 30）

発掘調査区の南西端に近い，Ｇ－17～19，Ｈ－17～19，Ｉ－17～19グリットにわたって検出した遺構である。第17号竪穴住居址，第2号土壙墓と重複関係にあり，第17号竪穴住居址を切っている。また第2号土壙墓に切られている。東側には溝状の攪乱坑が存在する。長径4.4m，短径3.4mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ40～50cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。傾斜側（東）の壁は低く10cm前後である。床面はほぼ平坦で，床面に三角形をなすような柱穴状のピット3ヶ所，壁のたちあがり部分の三方にピットが存在する。ピットは径40～80cm，深さ14～30cmである。また，壁の上面にそった部分の1ヶ所に径40×70cmのピットが存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 31）

竪穴住居がほぼ完全に遺存するので出土遺物の量は多い。住居址全面に遺物は分布しているが中央部に集中する傾向が強い。南・北側壁には少く散発的である。投棄あるいは周辺から流れ込んだ遺物で当初からの遺物はない。土器67点，石器，石片24点がある。

土器（Fig. 31, 32－1～18）

特徴ある土器18点を図示した。1は口縁部破片。口縁がわずかに外反する。口縁直下に竹菅状の工具で施文された刺突文が3.5cm間隔で並列施文される。その下位に豆粒状の粘土ハリ付け文が同様に並列施文されるが，間隔は不明。外面は斜方向の貝殻条痕調整，内面は斜方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えている。口縁部内側には指圧痕が凹部として残る。2は口縁部破片。直口縁で口端部は丸くおさめる。外面には0段ℓ撚りの撚り糸文を斜方向に施文してい

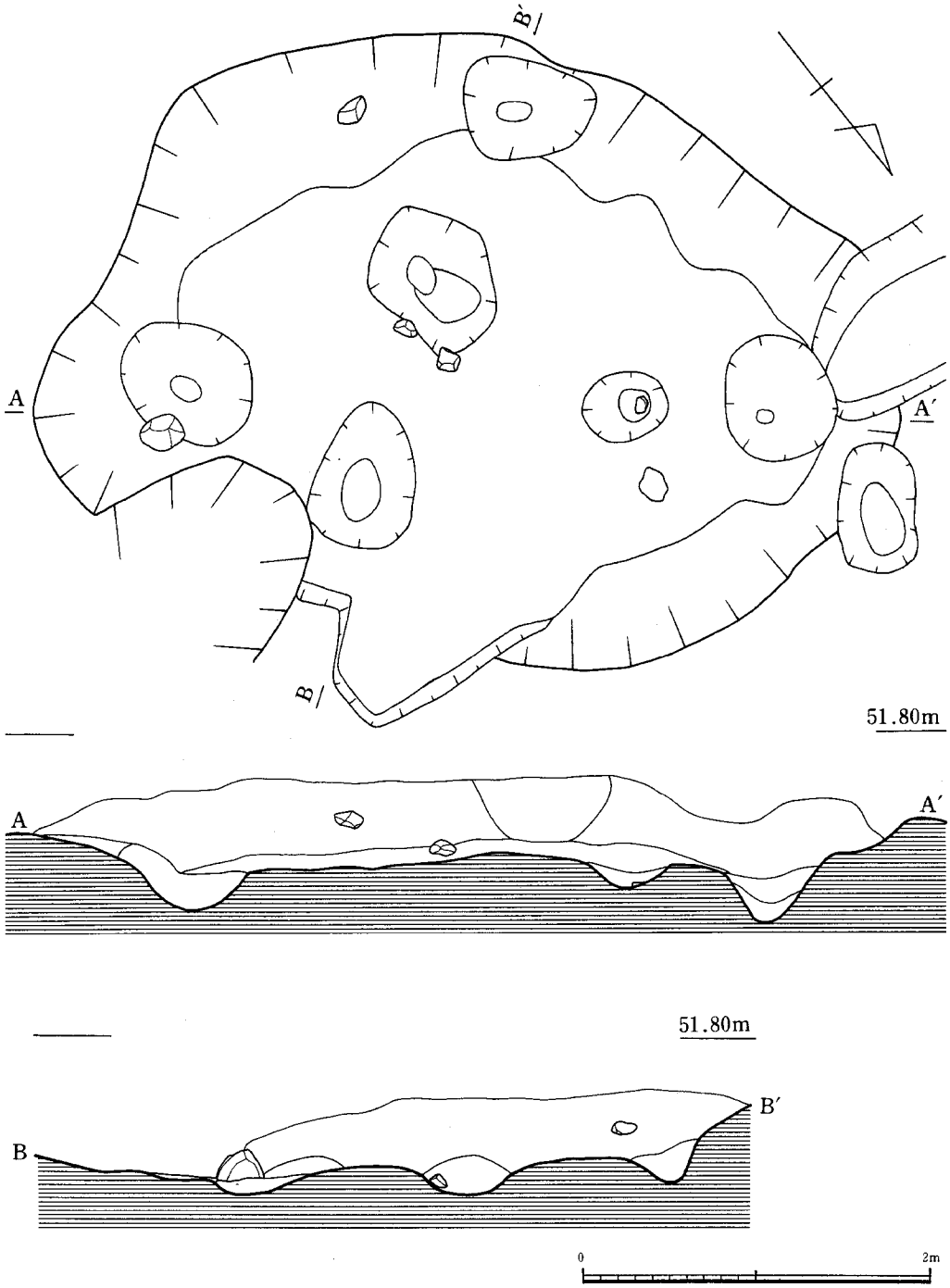
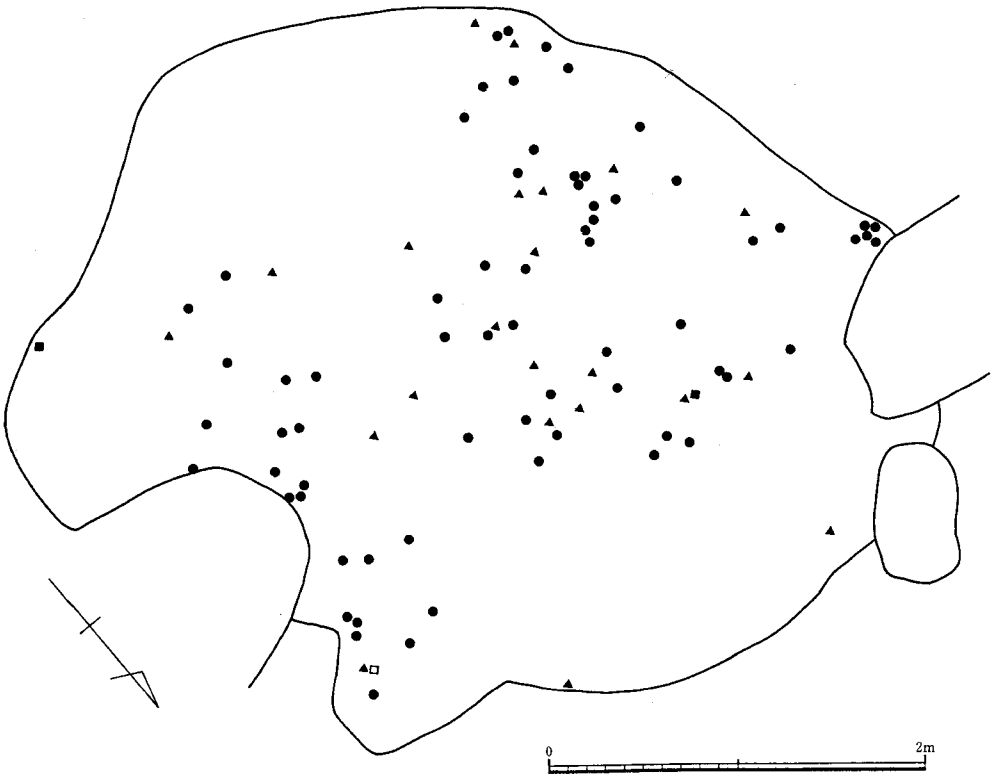


Fig.30　第12号住居址(SC－012)実測図



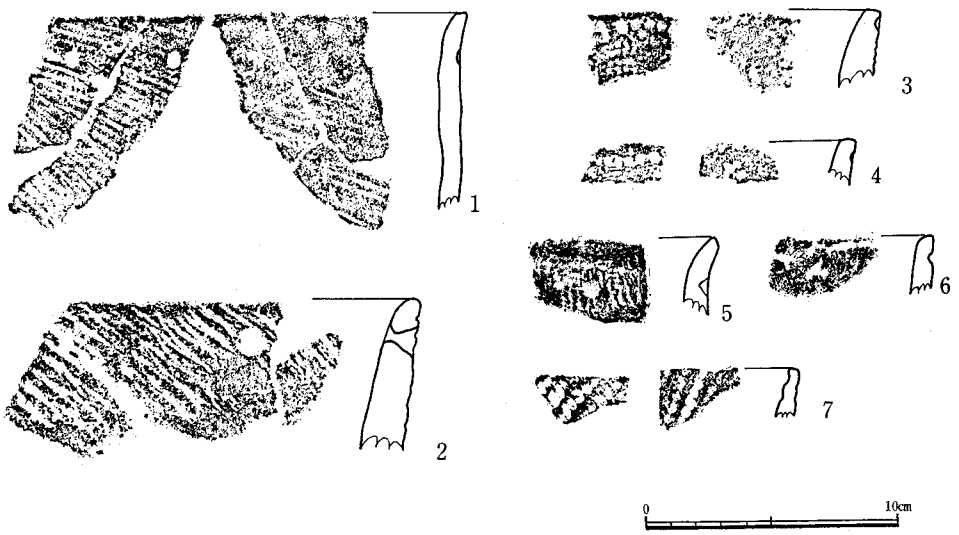


Fig.31　第12号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図 I

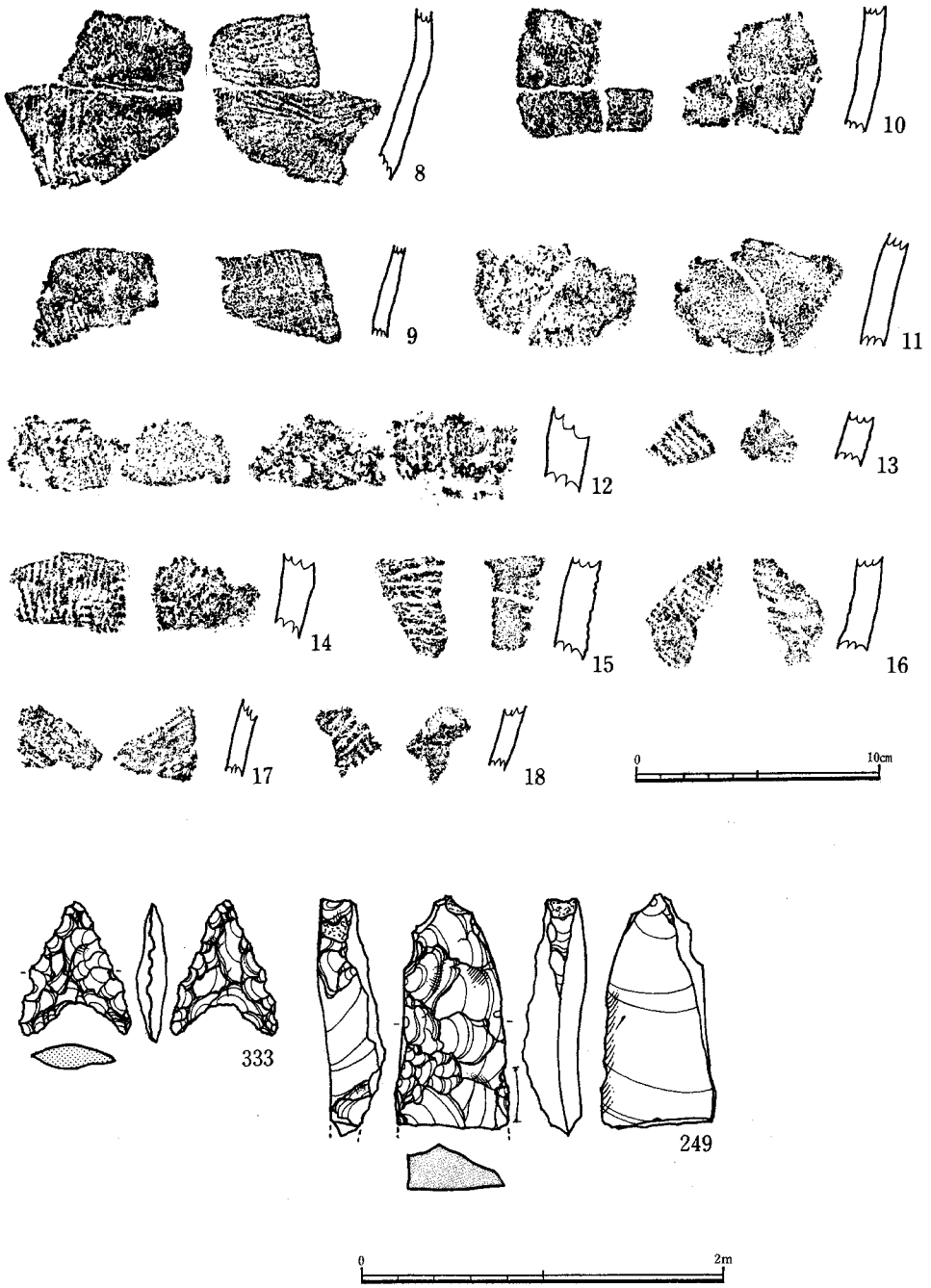


Fig.32　第12号住居址出土遺物実測図II

る。一部重複する部分があり，正位の状態では逆時計まわりの進行方向が把握できる。内面は丁寧なヘラ研磨調整，厚手の土器で器壁の厚さは1.0～1.5cmである。口縁部直下に補修孔が穿たれ，その横の土器破片にも補修孔の痕跡をとどめている。3，4も口縁部片である。文様構成は同一であるが別個体と考えられる。口縁直下に刺突文を連続的に並列施文し，その下位に櫛歯の押圧文をベルト状に縦に施文する。器面は丁寧なヘラ研磨調整，いわゆる繊維土器である。5は口縁部破片，やや磨滅している。口縁上端部に刻み目を施し，口縁直下に刺突文を施文するが判然としない。6も口縁部破片である。口縁部がやや外反する。外面には口縁下約1cmのところに横に撚糸の圧痕を施文し，それ以下に目の細かい1段R<ℓの撚糸文を縦位に施文している。内面は丁寧なヘラ研磨調整。口縁下に補修孔が穿たれるが，貫通していない。7は口縁部の小破片である。薄手の土器で器壁の厚さは0.3～0.5cmである。内外面に斜方向の目の大きい1段撚りR<ℓの縄文が施文される。8は胴部破片で条痕調整後，丁寧なヘラ研磨調整で仕上げている。内面は横方向の貝殻条痕後，ナデ調整を加えている。9は内外面とも縦方向の貝殻条痕調整後ナデ調整を加えている。粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。粘土帯の幅は1cmで内傾接合である。10は内外面共ヘラ研磨調整であるが，凹凸がある。11は保存状態が悪く調整痕は明瞭でないが，ヘラ研磨調整であろう。器壁の凹凸が著しい。12は胴部破片，外面は縦方向の細かい条痕調整，内面はケズリ状の調整，いわゆる繊維土器である。13は胴部破片，外面は斜方向の貝殻条痕調整。14，16は胴部破片，外面は不定方向の貝殻条痕調整，内面は貝殻条痕調整後，ナデ調整を加える。15は外面に横位の撚糸文を施文すると考えられるが判然としない。厚手の土器で器壁の厚さは1.2cm程度である。16，17は内外面に条痕調整を施した後ナデ調整を加えている。胎土は3，4，12は砂粒を含まず繊維が混入されている。2，5は花崗岩の砂粒を混入する。他の土器には石英，長石の細かい砂粒を含み，焼成は2，5がやや不良である以外は良好である。色調は2～5が黒褐色で他は黄褐色～赤褐色をなす。

石器（Fig. 32）

333はｏｂ－ｂ製の石鏃である。抉りの深い二等辺三角形を基本とした形状である。長さ19.0㎜，巾15.0㎜を測る。249はｏｂ－ａ製のＵｆである。本来は打面再生剝片であり，背面が石核の剝片別離面，左側面が打面。右側辺下部に使用痕があるが，あまり顕著でない。長さ31.5㎜，巾15.5㎜，厚さ6.1㎜である。

(13) 第13号住号址（ＳＣ－013）（Fig. 33）

発掘調査区の南端部に近い，Ｅ－18，19，Ｆ－18グリットにわたって検出した遺構である。第9号，14号竪穴住居址と重複関係にあり，第9号，14号竪穴住居址に切られている。重複により遺存状態は良くない。径2.8m以上の円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ

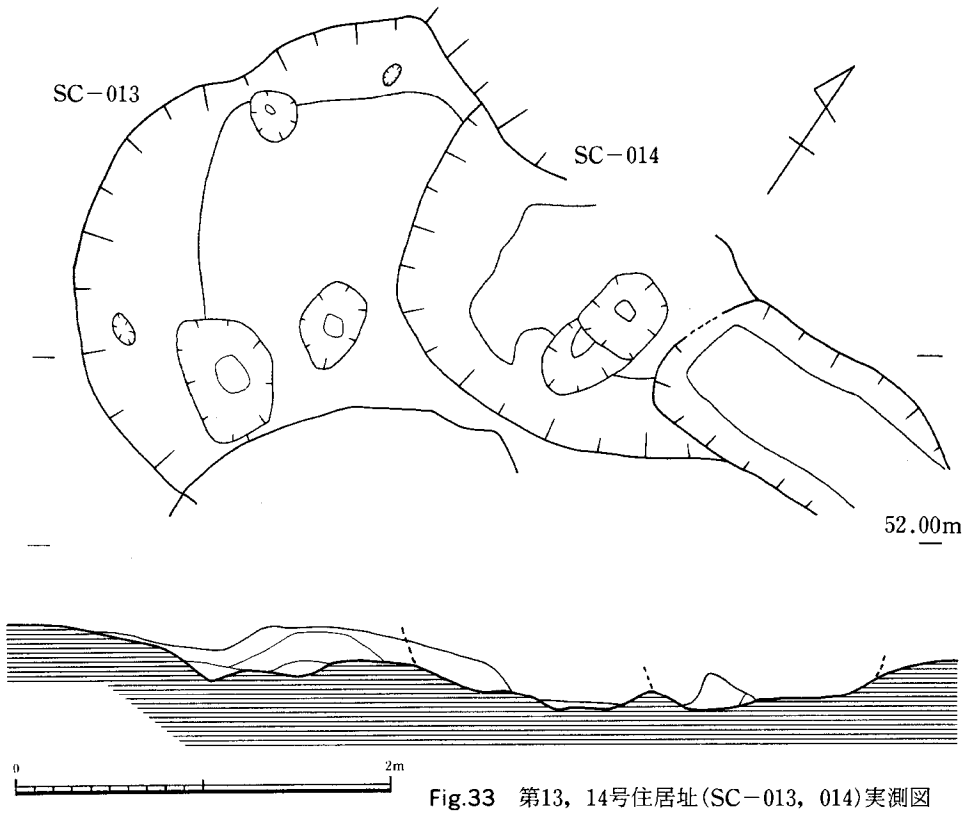


Fig.33　第13，14号住居址(SC－013，014)実測図

14～16cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面3ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは径26～50cmで深さ8～10cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石鏃，黒曜石，石銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 34）

遺物量は少い。竪穴住居の北と南の縁辺部に分布し，竪穴中央部に遺物はみられない。流れ込んだ遺物と考えられる。土器3点，石片6点がある。土器は小破片である。

土器（Fig. 34－1）

小破片1点を図示した。外面に条痕を施す土器で，一部山形状に交差している。内面は剝離して不明。胎土には石英，長石の細かい砂粒を含む。焼成は良好で，色調は黒褐色をなす。

(14)　第14号住居址（ＳＣ－014）（Fig. 33）

発掘調査区の南端部に近い，Ｅ－19，Ｆ－18，19，Ｇ－19グリットにわたって検出した遺構

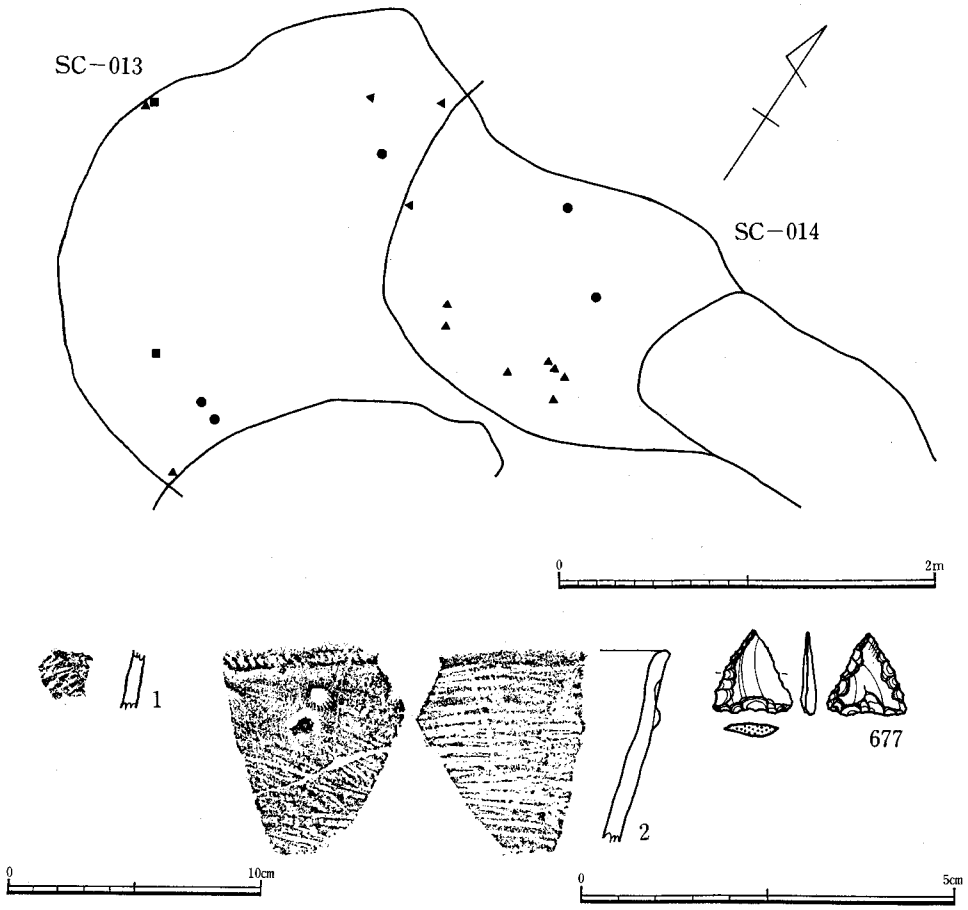


Fig.34　第13，14号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

である。第13竪穴住居址と重複関係にあり，第13号竪穴住居址を切っている。北半部は削平のため壁は明らかでない。東側に近世の攪乱溝がある。径2.3m以上の円形プランをなす竪穴住居址と考えられるが遺存状況はよくない。深さ20cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面南側２ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは径40cm前後，深さ８～10cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 34）

竪穴住居址が削平により完全に残っていないので遺物量は少い。ほぼ全面に遺物がみられるが，特に南側壁に集中して石片が存在する。土器２点，石器，石片８点がある。

土器（Fig. 34−2）

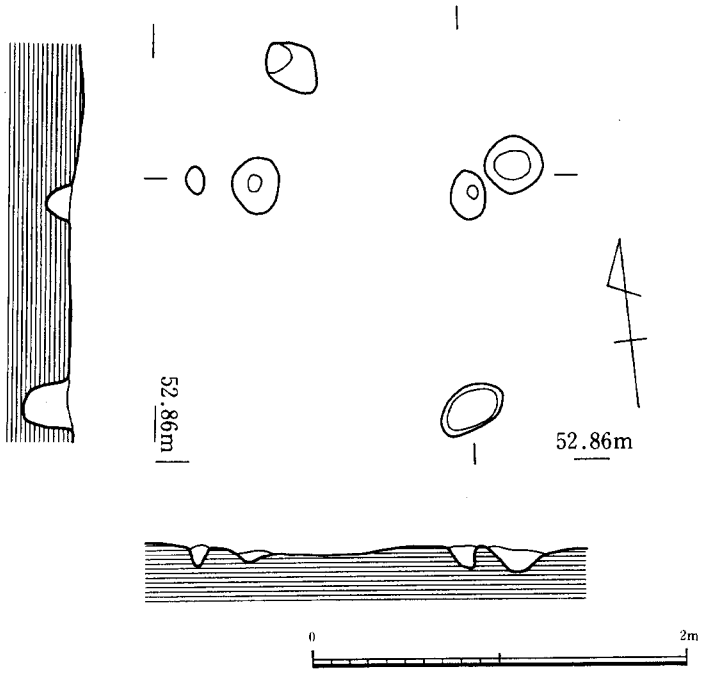


Fig.35　第15住居址(SC－015)実測図

2は口縁部破片，口縁部がわずかに外反する。口唇端部に細かい刻み目を入れる。口縁部直下に貝殻頂部を押圧した押圧文が2～2.5cmの間隔で並列施文される。さらにその下位に貝殻殻頂部内側で型どりした豆粒状の粘土をハリ付けて並列施文すると考えられるが不明。外面は斜方向の貝殻条痕調整で，口縁部文様帯がナデを加えて消されている。内面は横方向の貝殻条痕調整。胎土には長石，石英等の砂粒を若干混入しているが良質である。焼成は良好で，色調は内外面共黒褐色をなす。

石器（Fig. 34）

677は縞状の節理の入るｏｂ－ｂ製の小形石鏃である。16号住居址出土の423の石核と同一母岩と考えられ，この石材を用いた石器はこの2点のみである。整形加工の剝離は周辺部のみで素材の面を大きく残したままである。長さ11.5mm，巾10.5mm，重さ0.2ｇを測る。

⒂　第15号竪穴住居址（ＳＣ－015）（Fig. 35）

発掘調査区の南西端に近い，Ｃ－18，Ｄ－17～19，Ｅ－18グリットにわたって検出した遺構である。他の竪穴住居址と重複関係はない。削平されて壁等は消滅し平面プランは不明。6個の方形状に配置された柱穴より竪穴住居であることがわかる。柱穴は径10～30cm，深さ8～22cm，柱穴の配置からこの住居址は円形あるいは楕円形をなすものと考えられる。柱穴の埋土は

他の住居址と同じ黄褐色砂質土である。

⑯ 第16号住居址（ＳＣ－016）（Fig. 36）

発掘調査区の南端部に近い，丘陵東斜面縁辺部のＩ－18，19，Ｊ－18～20グリットにわたって検出した遺構である。第11号，18号竪穴住居址と重複関係にあり，第11号竪穴住居址を切っていて，第18号住居址に切られる。約半分が崖によって欠損する。径3.3m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ30～40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそって床面の北半部に３個の連接したピットが存在する。ピットは径40～120cmで，深さ16～28cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土

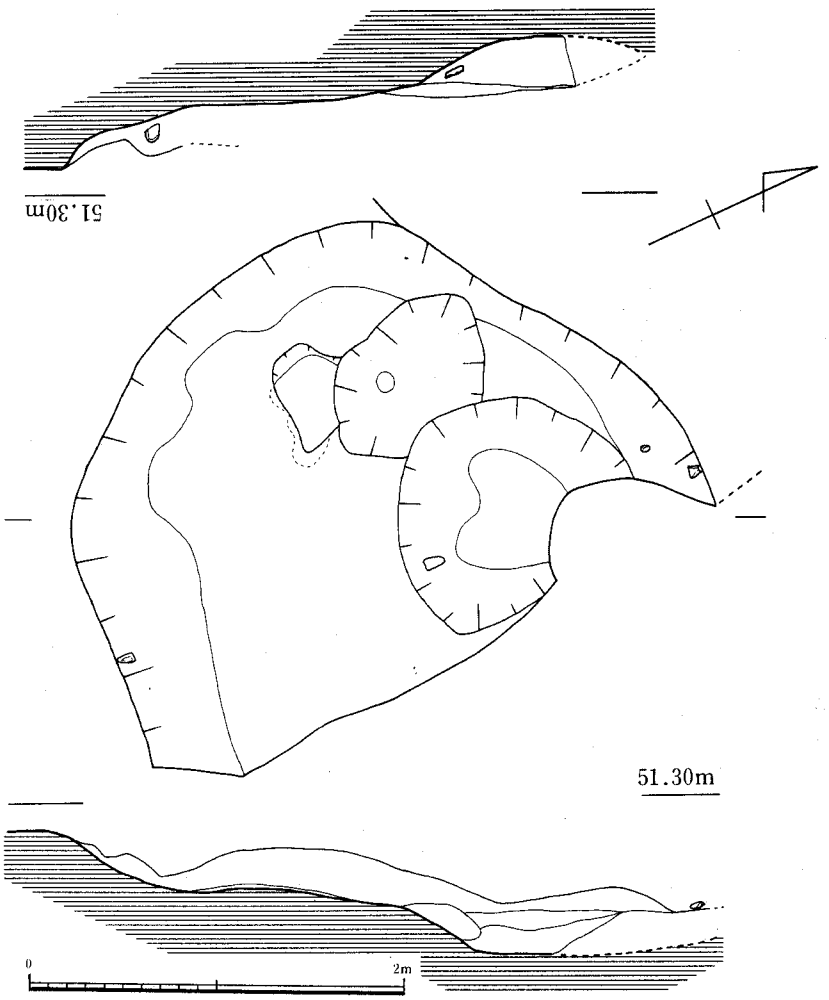


Fig.36　第16号住居址(SC－016)実測図

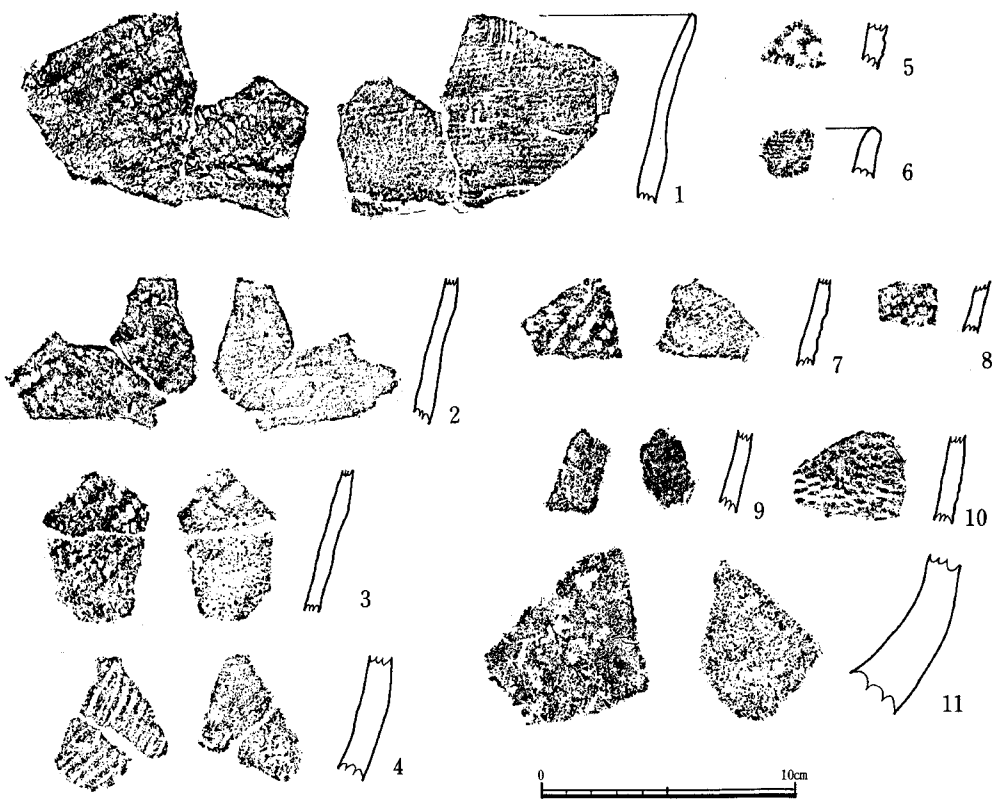


Fig.37　第16号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図Ⅰ

中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 37）

約半分が遺存する竪穴住居址であるが，遺物量はきわめて多い。竪穴全面に分布するが全体的に北側に片寄って遺物が集中する傾向にある。特に土器は北側に片寄っている。第18号住居址の方向からの投棄，流れ込みが考えられる。土器片も他の住居址出土と比較すると大きな破片が多い。石器，石片はこれと対称的に南側に集中している。出土遺物は土器が74点，石器，石片15点がある。

土器（Fig. 37－1～12）

特徴的な土器12点を図示した。1は口縁から胴部にかけての破片である。薄い土器で器壁の厚さは0.4～0.5cmである。口縁端部はやや角ばる。外面には全面にR＜$\frac{\ell}{\ell}$の1段撚りの太い縄文が斜位に施文されている。内面は横方向の条痕調整後，その上にヘラナデを加えているが，口縁部近くはさらに縦方向の条痕調整が加えられている。粘土帯の接合部の痕跡が明瞭に残っている。粘土帯の幅は1.0～2.5cmで，内傾接合である。外面にススの付着が顕著である。2も同様の土器で同一個体の可能性がある。胴部破片で外面にR＜$\frac{\ell}{\ell}$の1段撚りの縄文が斜位に施文されているが，下部はヘラ研磨で消されている。ススの付着が顕著である。内面は条痕調整後，ヘラナデ調整。粘土帯の接合痕が明瞭である。粘土帯の幅2.5cm前後で内傾接合である。3も同様の土器である。外面にはR＜$\frac{\ell}{\ell}$1段撚りの縄文を斜方向に施文するが，下半部まではおよんでいない。内面にも同様の縄文が施文される。口縁部近くの破片である。4はやや厚手の土器で，器壁は1cm前後の厚さである。外面は斜方向の貝殻条痕調整，内面はヘラナデ調整である。5は胴部破片．6は口縁部破片で直口縁で端部は丸くおさめる。外面は細かいハケ目状の条痕調整。7～9は外面にR＜$\frac{\ell}{\ell}$の1段撚りの太目の縄文を斜方向に施文している。内面はヘラナデ調整。9の外面にススが付着している。10は胴部破片。外面に楕円押型文が横走施文されている。押型文の原体，単位は不鮮明で明らかにできない。内面はススの付着が顕著である。11は底部付近の破片で厚い土器である器壁は1.2～2.2cmである丸底ないしは尖底になると思われる。外面は丁寧なヘラ研磨調整．いずれの土器も胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は3，5，6，11がやや不良で他は良好。色調は4，5が黒褐色で他は黄褐色～赤褐色である。図示していない土器の中には繊維土器，条痕文土器，無文土器がふくまれている。

石器（Fig. 38）

35はｏｂ－ａ製の平基の二等辺三角形を呈する石鏃である。長さ17.2㎜，巾15.0㎜，重さ0.85ｇを測る。403はｏｂ－ａ製の抉りの深い長脚の石鏃である。片脚を欠損している。長さ20.5㎜，巾13.5＋α㎜，重さ0.45＋αｇ。418はサヌカイト製の大形の石鏃である。両側辺及び背面に自然面を大きく残しており，未製品の可能性もある。長さ31.0㎜，巾22.0㎜，重さ3.7ｇ。409はサヌカイト製の小形の局部磨製石鏃である。両面に研磨を施している。尖端部を欠損してい

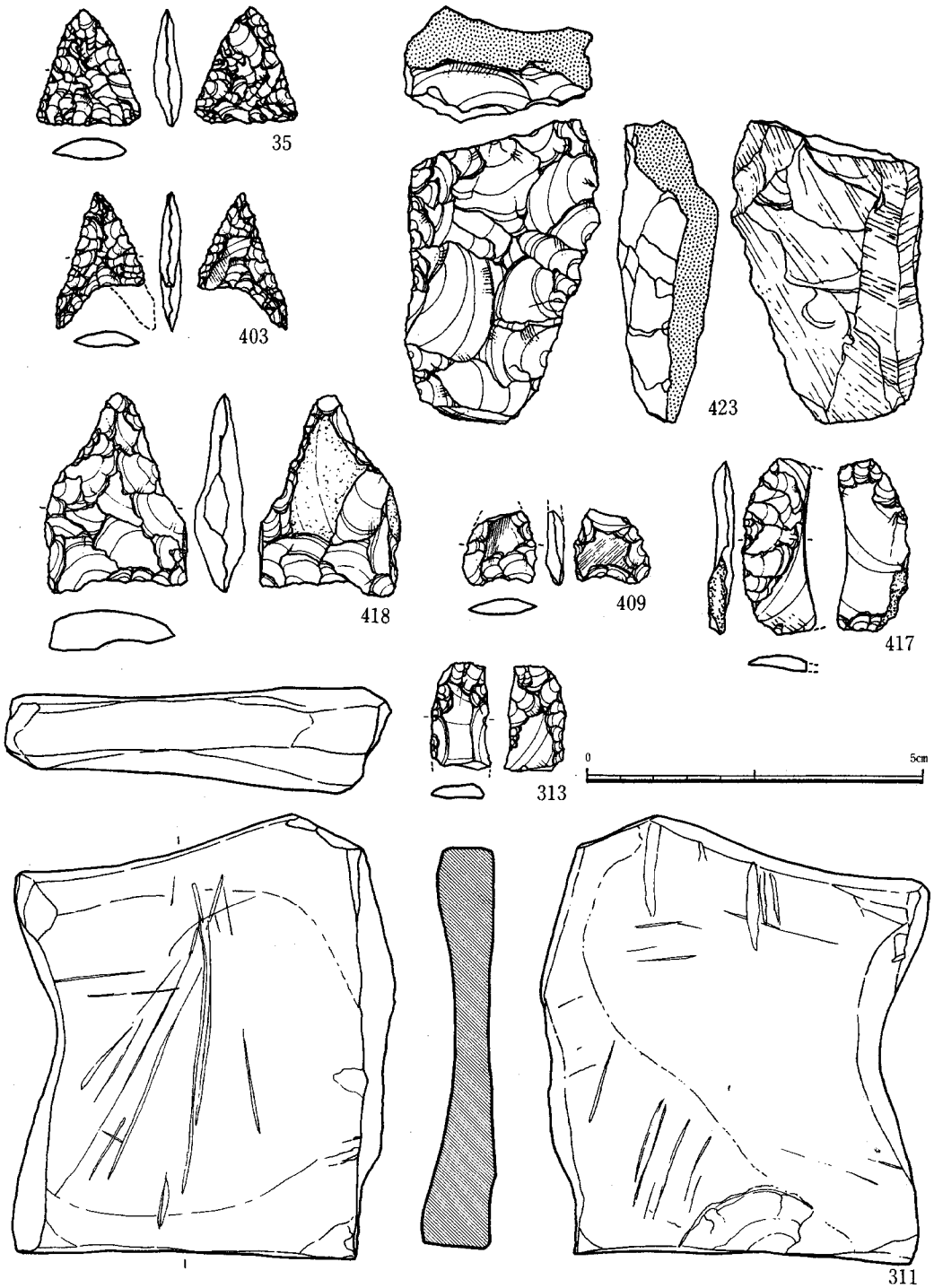


Fig.38　第16号住居址出土遺物実測図Ⅱ

る。長さ11.0＋α mm，巾11.0mm，重さ0.35＋α g。417はｏｂ－ａ製の剝片を利用したＲｆである。略半分を欠損するが，片側辺に自然面を残している。加工は周辺のみで，とくに腹面側の一側辺に顕著である。現存で長さ26.0mm，巾9.1mm，厚さ1.9mmを測る。313はｏｂ－ａ製のＲｆである。下端が欠損しているが，全周に調整剝離を施している。長さ15.7mm，巾8.5mm，厚さ1.6mmを測る。423は縞入りのｏｂ－ｂ製の石核である。素材の形状は不明であるが，背面に大きく自然面を残しており，角礫もしくは角礫から剝ぎとった剝片の一面を求心的に剝離している。よって剝離角は鋭角で，打面調選は認められない。長さ44.0mm，巾28.0mm，厚さ14.5mmである。311は砂岩製の砥石である。片面の中央部と他面の略半分が凹む。両面とも線状の傷が認められる。片面は特に顕著で，凹レンズ状を呈する。側面は割面以外の３側面が砥面として利用されている。長さ86.0mm，巾65.0mm，厚さ10.0mmである。

(17) 第17号住居址（ＳＣ－017）(Fig. 39)

発掘調査区の南端部に近い，Ｈ－19，Ｉ－18，19グリットにわたって検出した遺構である。

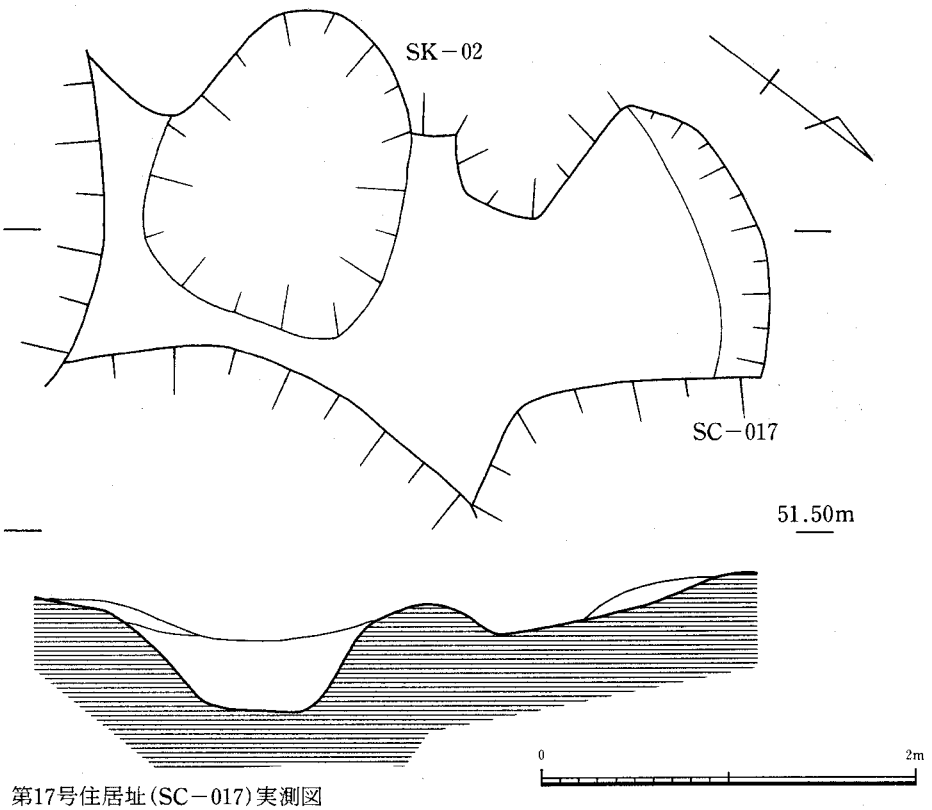


Fig.39　第17号住居址(SC－017)実測図

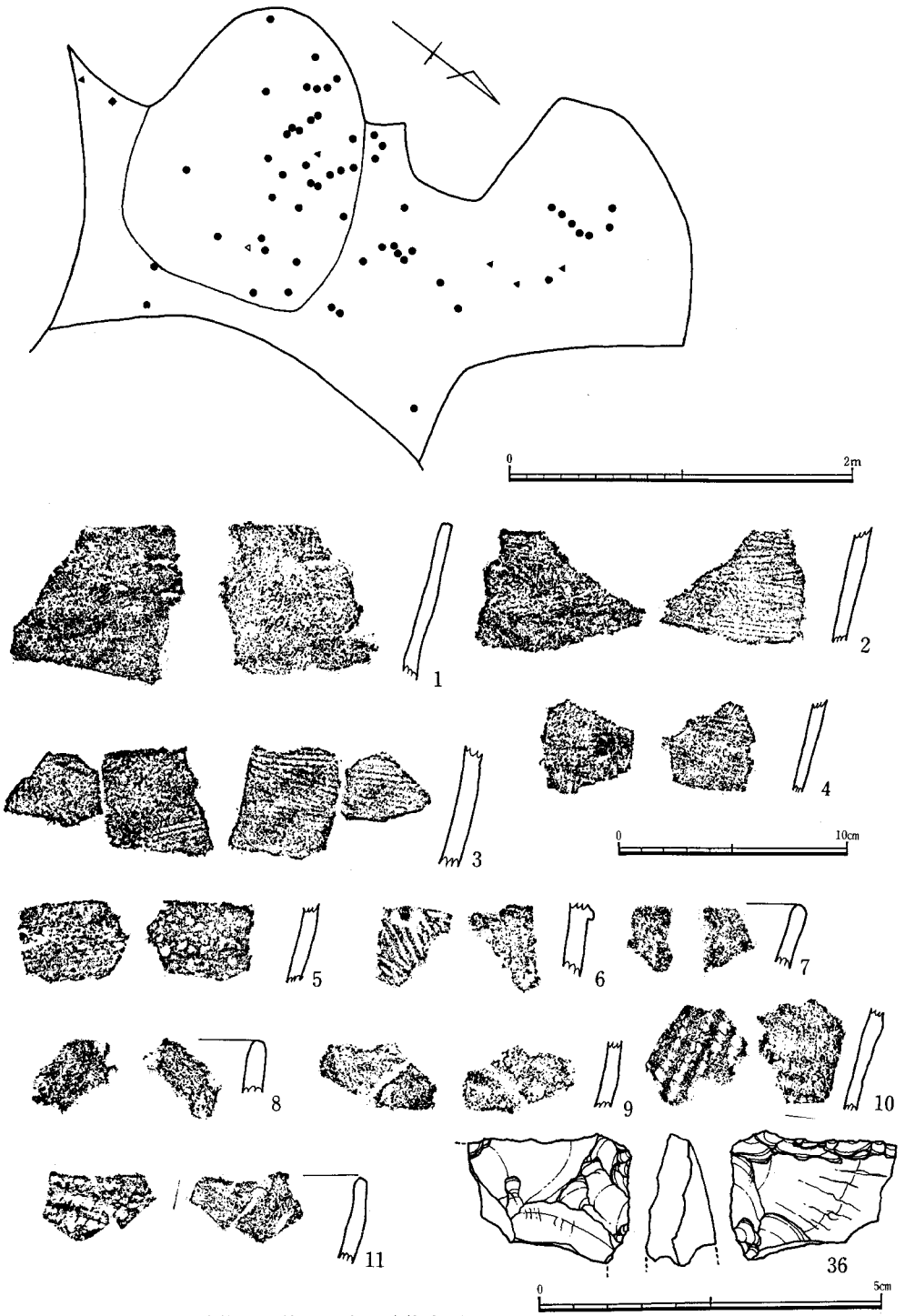


Fig.40　第17号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

第11号，12号，16号，18号竪穴住居址，第２号土壙と重複関係にあり，第11号，12号，16号，18号竪穴住居址，第２号土壙に切られていて残存状態はきわめて不良である。平面プランが径3.5m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は凹凸があるがほぼ平坦である。床面には柱穴状のピットの存在はないが，これは遺存状態が悪いためと考えられる。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 40）

竪穴住居址は切り合いでほとんど残存しないが遺物は比較的多い。竪穴住居の中央部に集中しているが，ＳＫ－02と重複するために正確なところは不明，ＳＫ－02にはいる遺物は土壙のところでふれる。遺物としては土器が多く，土器22点，石器，石片５点である。

土器（Fig. 40－1～11）

特徴のある土器11点を図示した。１は口縁部破片，直口縁で口縁端部は丸くおさめる。外面は横方向の条痕調整後，削り状のヘラナデ調整，内面は横方向の貝殻条痕調整であるが，やや器面が荒れている。粘土帯の接合痕が明瞭で，口縁下1.5cmと５cmのところにあり，内傾接合である。２は胴部破片，外面は条痕調整後，ナデ調整，内面は横方向の貝殻条痕調整，３も２とほぼ同様の調整。４は内外共横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整で消している。外面にススの付着がみられる。５は外面が横方向の板によるケズリ状の擦過痕の調整，砂粒は右から左へ移動している。内面は横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えている。６は胴部破片，外面には豆粒状の粘土のハリ付け文がある。器面は斜方向の貝殻条痕調整，内面はナデ調整である。７，８は口縁部の小破片，共に直口縁で端部は丸くおさめている。９は胴部破片で内外面共にナデ調整である。10，11は同一個体と考えられる破片である。10は胴部，11は口縁部破片である。口縁部はわずかに内傾している。外面にはＲ＜$\frac{0}{1}$１段撚りの縄文を斜位に施文している。11の口縁内側にも同じ縄文を施文するが明確でない。以上の土器の胎土は石英，長石，金雲母の砂粒を混入している。焼成は６，７，10，11がやや不良で，他は良好である。色調は６，７が褐色，10，11が外が黒褐色で内面は黄褐色，他は黄褐色をなす。

石器（Fig. 40）

36はサヌカイト製の楔形石器か石核の破片である。

⒅ 第18号住居址（ＳＣ－018）（Fig. 41）

発掘調査区の南東部の丘陵縁辺部に近い，Ｈ－20，Ｉ－19～21，Ｊ－20，21グリットにわたって検出した遺構である。第16号，22号，23号竪穴住居址，第３号土壙と重複関係にあり，第

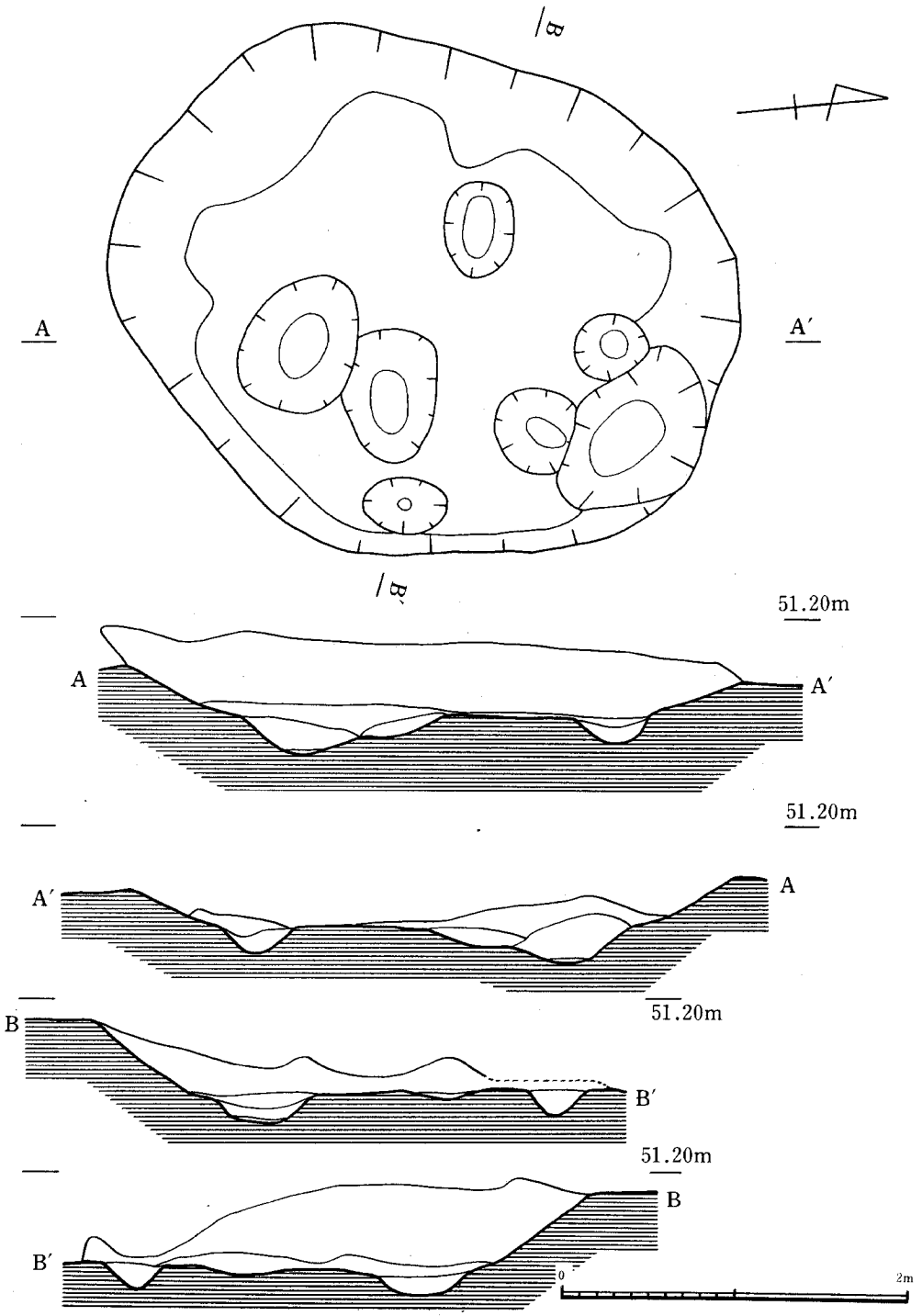


Fig.41　第18号住居址(SC－018)実測図

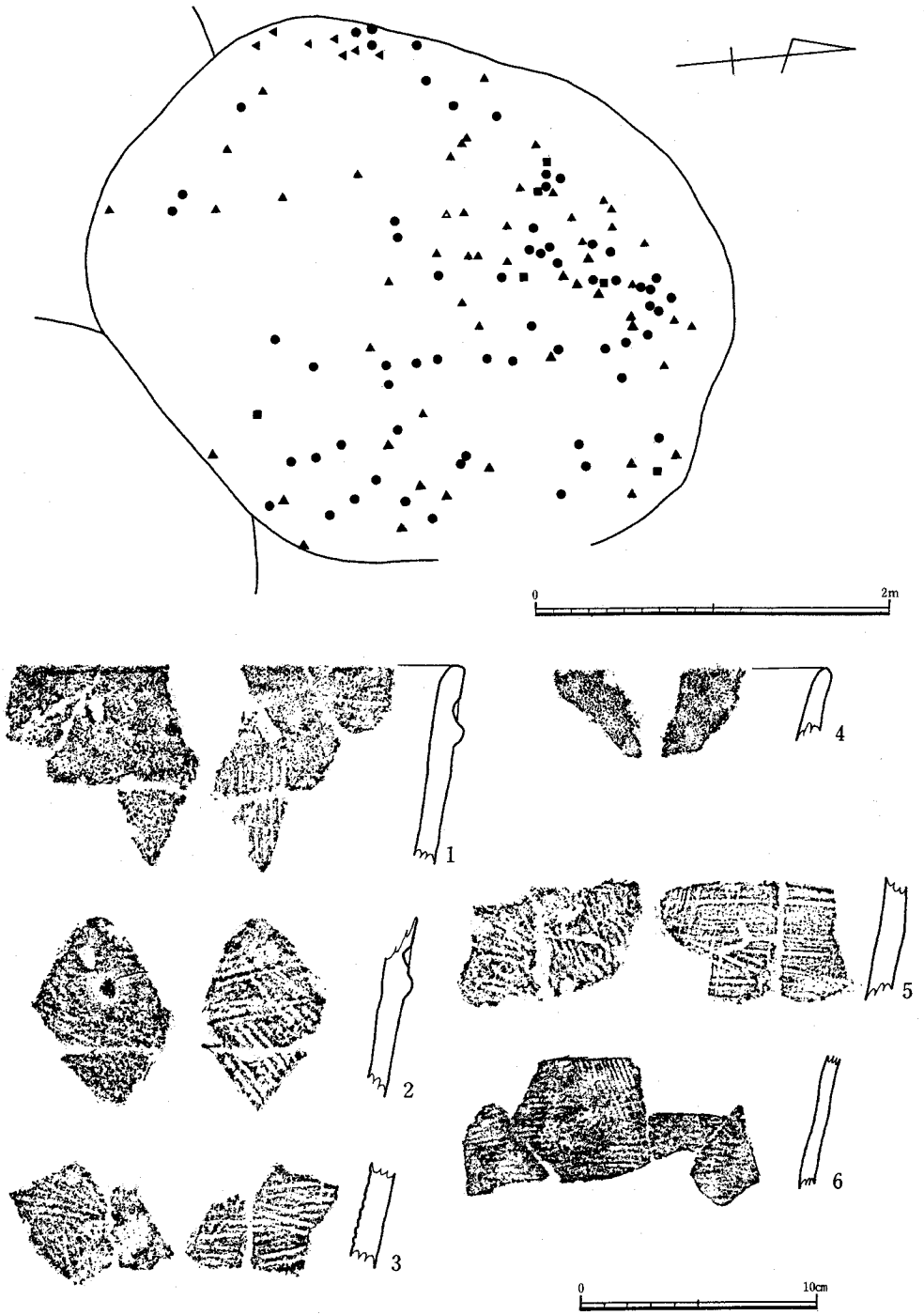


Fig.42　第18号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

16号，22号，23号竪穴住居址，第3号土壙を切っている。長径3.7m，短径3.0mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ50cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面に7ケ所のピットが存在する。ピットは径30～80cmで，深さ16～30cmである。また，竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 42）

竪穴住居址内全面に遺物が散布し，その量はきわめて多い。特に北側に遺物土器が集中し，南側は希薄である。北側から投棄ないしは流れ込んだ可能性が強い。土器片は比較的大きく，接合可能なものが多い。石器，石片は特に集中する部分はみられない。出土遺物は土器が58点，石器，石片63点がある。

土器（Fig. 42，43－1～9）

破片が大きく，特徴的な9点を図示した。1は口縁部破片。直口縁で端部は丸くおさめる。口縁直下に刺突文を並列施文すると考えられるが間隔は不明。刺突文の下位には豆粒状の粘土ハリ付け文が刺突文同様に並列施文されると考えられるが，間隔は6cm以上でかなり粗である。外面は斜方向の貝殻条痕調整と考えられるが，器面の保存状態が悪いので明確にしがたい。内面は口縁部が横方向，それより下位は縦方向の貝殻条痕調整で，後からナデ調整を加える。2は口縁部破片。口縁がわずかに外反する。口縁直下に刺突文を並列施文するが，その間隔は不明。刺突文の下位には豆粒状の粘土ハリ付け文が並列施文されると考えられるが1同様に間隔は粗であろう。外は斜方向の貝殻条痕調整，内面は口縁部横方向，その下位が斜方向の貝殻条痕調整である。3は胴部破片，外面が横，斜方向，内面が横方向の貝殻条痕調整である。4は口縁部破片，内外面共，指ナデ調整，器壁にやや凹凸がみられる。直口縁で端部は丸くおさめる。5は胴部破片，外面は斜方向，内面は横方向を基調とした多方向の貝殻条痕調整，6は胴部破片。上記の土器に比較し薄い，器壁は0.5cmの厚さである。外面は横ないしは縦位の丁寧な貝殻条痕調整後ナデ調整を加える。ススの付着が顕著である。内面は横方向の丁寧な貝殻条痕調整。7は胴部破片，外面は保存状態が悪いために明確でないが，斜方向の貝殻条痕調整である。内面は縦～斜位の深い貝殻条痕調整を施している。8は口縁部破片，口端がわずかに内傾する。外面には縦位に$R<^{\ell}_{\ell}$の一段撚りの太目の縄文を施文している。ススの付着がみられる。内面は細かい貝殻条痕の上をヘラナデ調整している。9は胴部破片で内外面とも指ナデ調整。以上の土器の胎土は石英，長石の砂粒を含んでいる。焼成は1～3，5，7がやや不良で，他は良好で堅緻である。焼成は1～3，5，7が外面赤褐色，内面黒褐色をなす。他は黄褐色をなす。1～3，5，7は同一個体の可能性がある。

石器（Fig. 43）

98はサヌカイト製の抉りの深い石鏃である。基本形は二等辺三角形。長さ18.0mm，巾15.0mm，

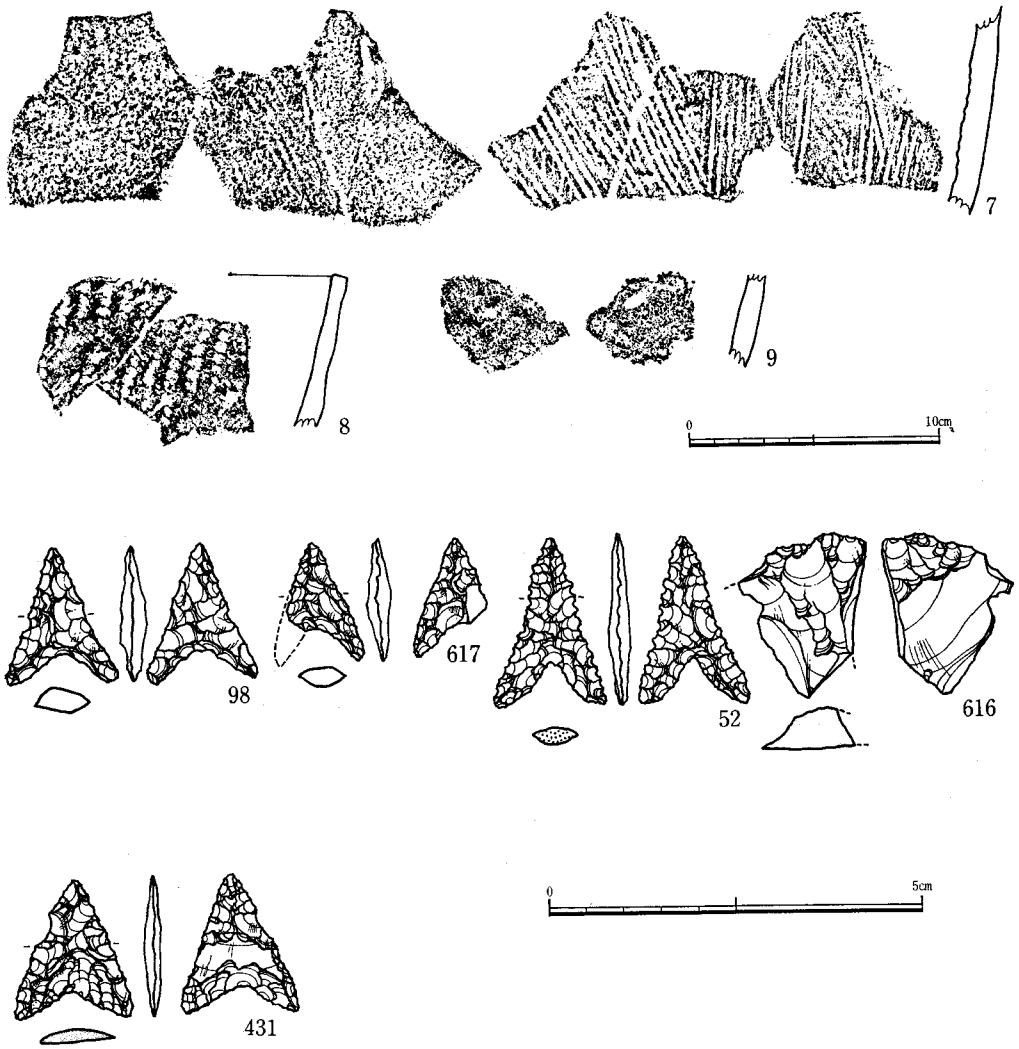


Fig.43　第18号住居址出土遺物実測図II

重さ0.45ｇを測る。617はサヌカイト製のほぼ同形の石鏃である。片脚を欠損している。長さ16.0㎜，巾11.0＋α㎜，重さ0.3＋α ｇ。52はｏｂ－Ｃ製の鋸歯状の側辺を持つ石鏃である。側辺も直線的でなく外弯気味で，抉りも深い。この石材は唯一この石鏃のみである。長さ22.0㎜，巾15.0㎜，重さ0.45ｇ。431はｏｂ－ａ製の石鏃である。裏面に素材剝片の主要剝離面を残している。長さ18.0㎜，巾15.5㎜，重さ0.4ｇ。616はｏｂ－ａ製の不定形剝片を素材としたＲｆである。両側は分割面である。長さ21.5㎜，巾17.0㎜，厚さ6.6㎜を測る。

⒆　第19号住居址（ＳＣ－019）（Fig.　44）

発掘調査区の南半部，Ｆ－20，21，Ｇ－20，21，Ｈ－20，21グリットにわたって検出した遺構である。第３号土壙と重複関係にあり，第３号土壙を切っている。長径3.2m，短径3.0mの不整円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。床面には相対する２ケ所にピットがあり遺

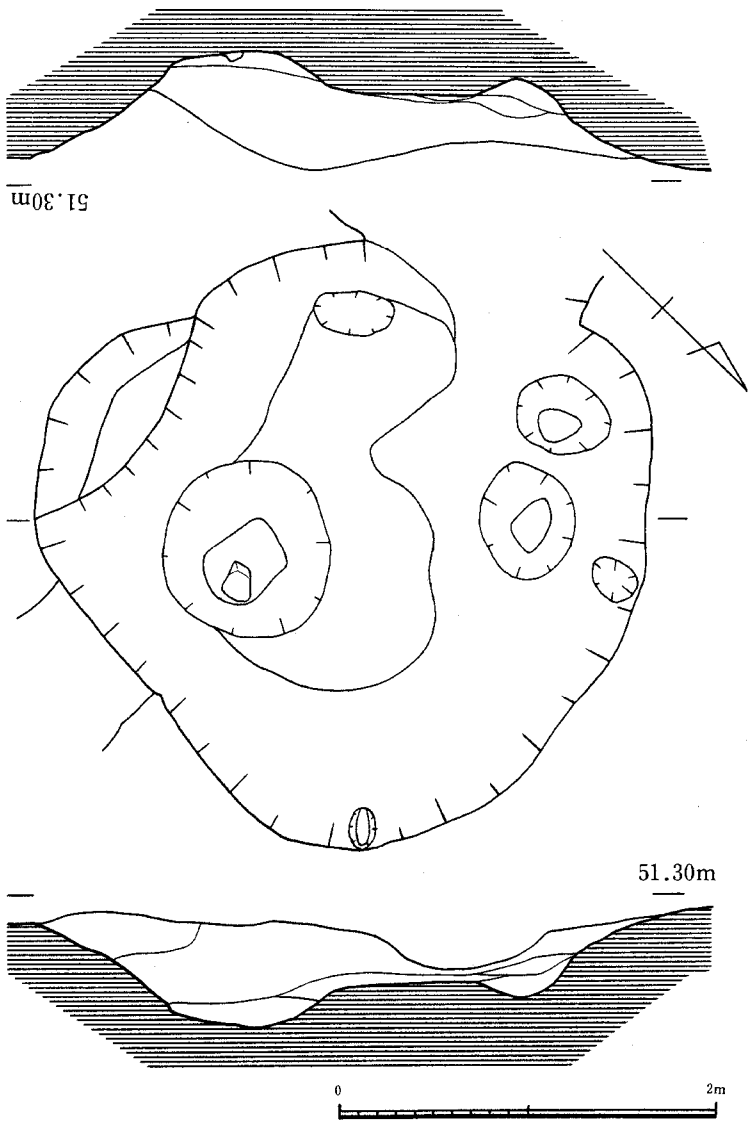


Fig.44　第19号住居址(SC－019)実測図

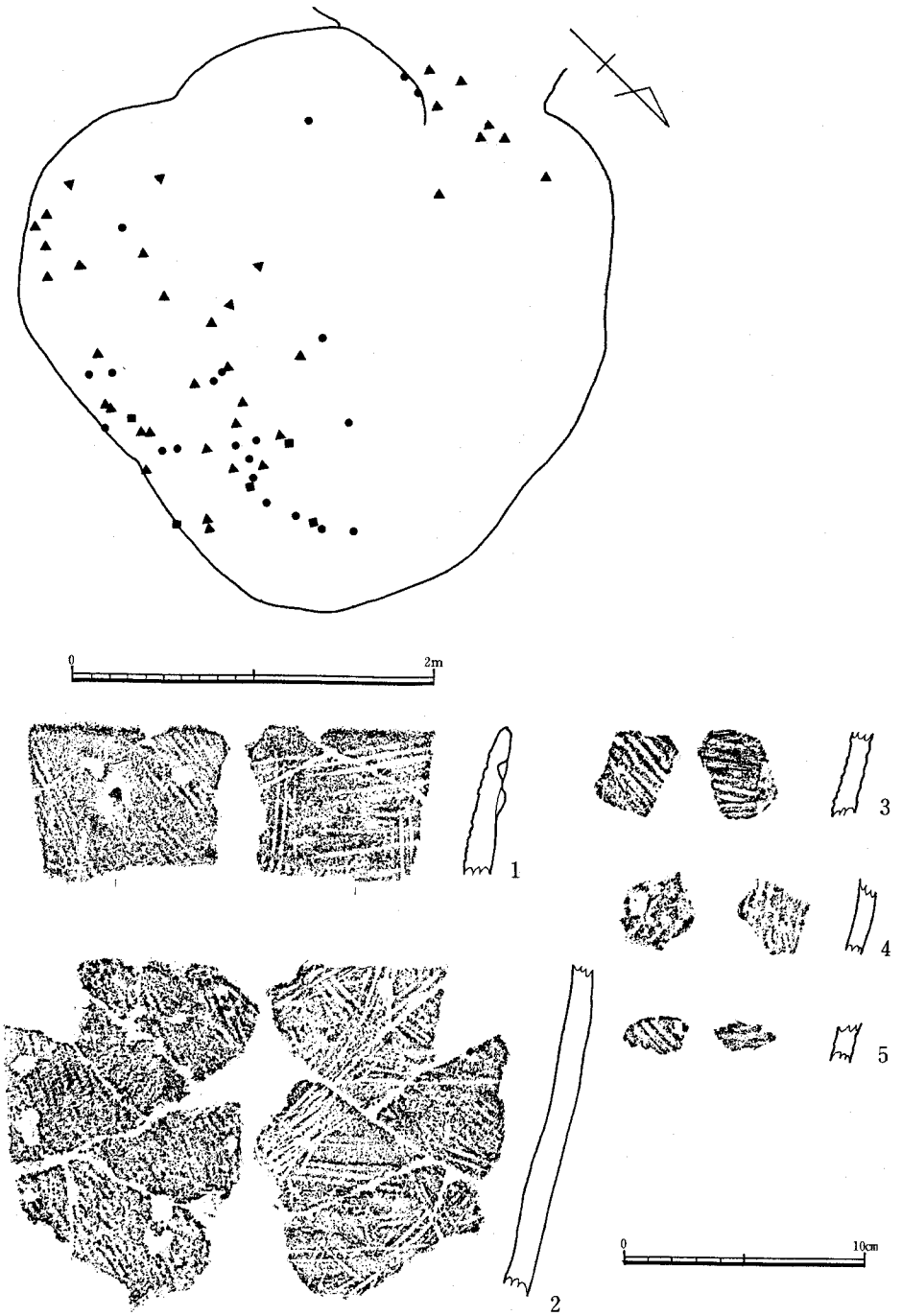


Fig.45　第19号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図Ⅰ

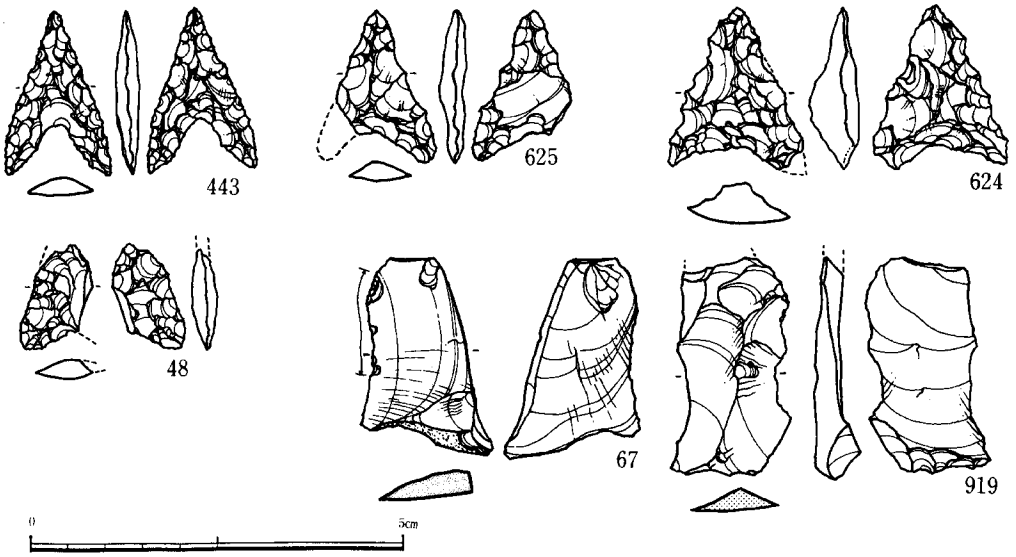


Fig.46　第19号住居址出土遺物実測図II

構上縁部にそって４ケ所のピットが存在する。ピットは床面の２ケ所は径40～80cm，深さ15cm前後で南東側ピットには角礫１個が存在する。他のピットは径10～40cmで，深さは比較的浅い。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 45）

竪穴住居址がほぼ完全に遺存しているので遺物の出土量は比較的多い。遺物の出土状況の特徴的な状況を示している。すなわち，竪穴中央部には遺物はみられず，東と西に片寄って集中している。西側は石片が主体，東側は土器，石片がみられるがやや石片が多い。ＳＣ－018の出土状況を加味すればＳＫ－03を中心とした部分に遺物が多量に出土していることが判明する。北側から投棄された遺物と考えることができる。遺物は土器が21点，石器，石片が42点ある。

土器（Fig. 45－1～5）

５点を図示した。１は口縁部破片。直口縁で端部は丸くおさめる。口縁直下に刺突文を３cm間隔で並列施文し，さらに下位に豆粒状の粘土ハリ付け文が並列施文されるがハリ付け文の間隔は不明。外面は斜方向の貝殻条痕調整で，ススが付着している。内側は横あるいは縦位の貝殻条痕調整後ナデ調整を加えている。２は胴部破片，外面は斜方向の貝殻条痕調整。器面の保存状態が悪く部分的に剝離している。内面は横，斜方向の貝殻条痕調整で部分的に後からナデ調整を加えている。３～５は胴部小破片である。内外面共斜方向の貝殻条痕調整。以上の土器の胎土は石英，長石等の砂粒を混入している。焼成はやや不良で，色調は１～４が外面赤褐色，

内面黒褐色をなす。5は内外面共に黒褐色をなす。1，2，4は同一個体の可能性もある。

石器（Fig. 46）

443はサヌカイト製の石鏃である。基部には逆u字形の深い抉りが入る。長さ22.0㎜，巾14.0㎜，重さ0.6gを測る。625はサヌカイト製の石鏃である。裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残している。整形加工はやや粗い。片脚を欠損している。長さ20.0㎜，巾13.5＋α㎜，重さ0.6＋α g。624は同じくサヌカイト製の石鏃である。素材の形状からかやや部厚く，背面の加工も粗い。長さ22.0㎜，巾18.0㎜，重さ1.3＋α g。48はｏｂ－ａ製の石鏃の脚部である。現存で重さ0.35gを測る。47はｏｂ－ａ製の縦長剥片を利用したｕｆである。長さ26.5㎜，巾17.8㎜，厚さ3.4㎜を測る。919はｏｂ－ｂ製の縦長剥片である。端部に石核の下方のエッジの痕をとめている。断面レンズ状の剥片製石核から剥取されたものと考えられる。現存で，長さ2.9㎜，巾14.5㎜，厚さ3.25㎜である。

⑳ 第20号住居址（ＳＣ－020）（Fig. 47）

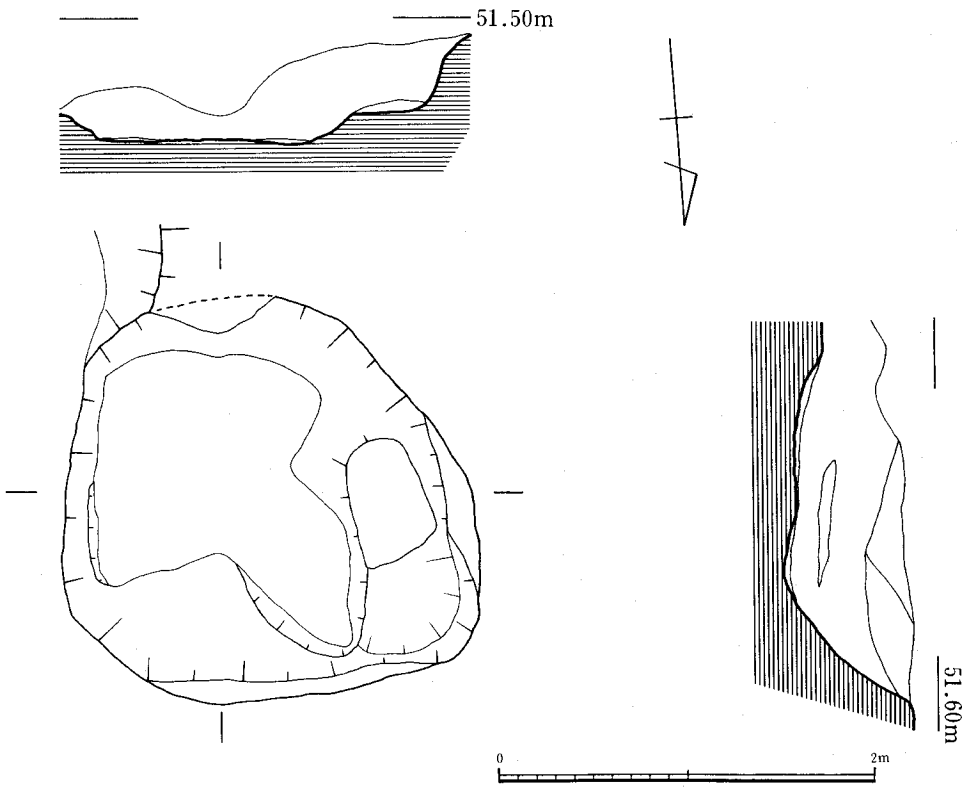


Fig.47　第20号住居址(SC－020)実測図

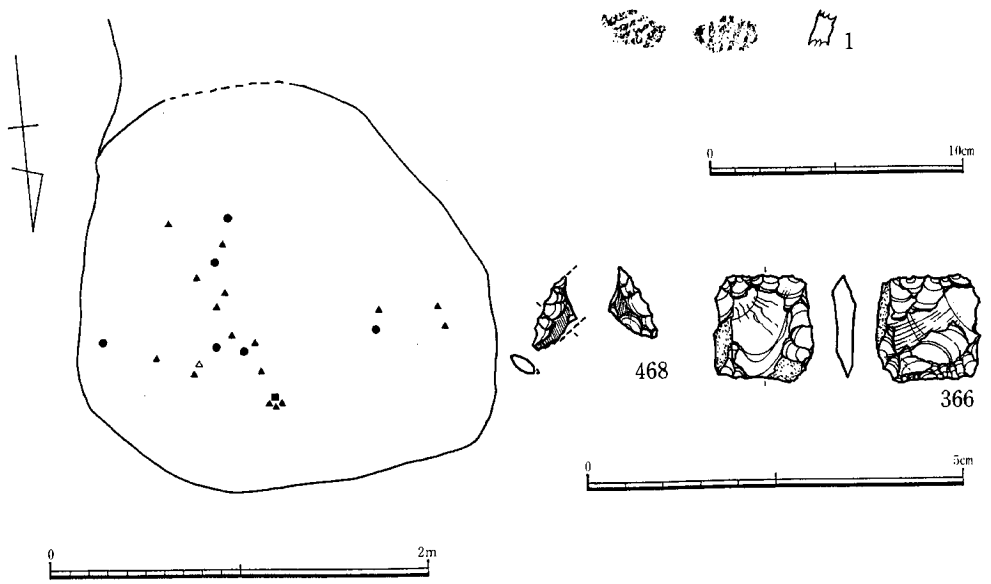


Fig.48　第20号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

発掘調査区の南半部の丘陵尾根に近い，E－20，21，F－20，21グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。長径2.5m，短径2.1mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～60cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦であるが，平面形はいびつである。壁の西側に階段状のおちこみがある。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 48）

竪穴住居址は完全に遺存しているが遺物量はきわめて少ない。出土遺物は竪穴中央部よりやや東に片寄って集中している。出土遺物は土器6点，石器，石片17点である。土器片等が小さいことから考えれば周辺部から流れ込んだ可能性が強い。

土器（Fig. 48－1）

1点を図示した。内外面を貝殻条痕調整する土器で，器壁は0.6cm前後の厚さである。胎土には石英，長石の砂粒を混入する。焼成はやや不良で，色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。図示しなかったが，楕円押型文土器の小破片がある。横走施文したもので，器壁は0.4cm前後と薄い。胎土には石英，長石の砂粒を含むが精良で，焼成は良好，色調は赤褐色をなす。

石器（Fig. 48）

468はｏｂ－ａ製の局部磨製石鏃の脚部である。両面とも研磨している。現存で重さ0.1ｇである。366はｏｂ－ａ製の小形のＲｆである。四角形を呈し，3側辺に加工痕を留めるが相対す

る２側辺が顕著である。長さ14.0㎜，巾13.0㎜，厚さ3.0㎜を測る。

(21) 第21号住居址（ＳＣ－021）（Fig. 49）

発掘調査区の南半部，丘陵尾根に近い，Ｅ－21，22，Ｆ－21，22グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し他の竪穴住居址と重複関係はない。長径21.5m，短径1.95mの円形に近い楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ13～15cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，４ケ所に浅いピットが存在する。ピットは径30～60cmで深さ15～25cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土層で，埋土中より遺物の出土はない。

(22) 第22号住居址（ＳＣ－022）（Fig. 50）

発掘調査区の南半部，丘陵縁辺部のＪ－20，21グリットにわたって検出した遺構である。第16号，18号，23号竪穴住居址と重複関係にあり，第16号，18号，23号竪穴住居址に切られてい

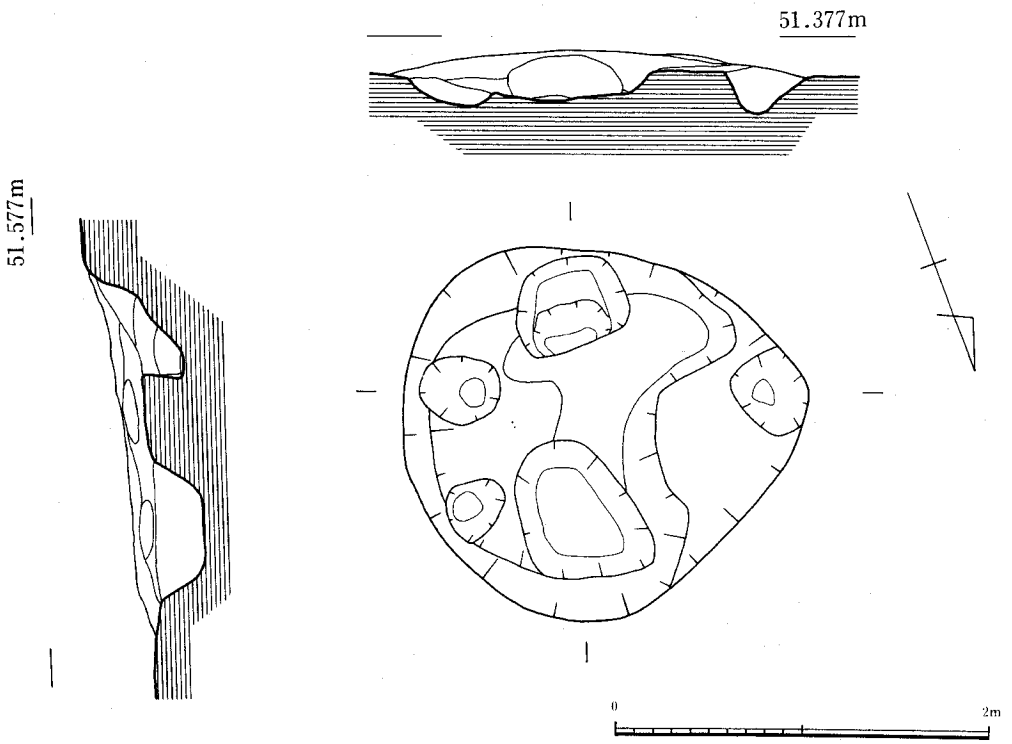


Fig.49　第21号住居址(SC－021)実測図

て，床面のみ残存している。平面プランは明らかにしがたい。現存長は1.6mで，他の遺構からみて楕円形ないしは円形プランをなすと考えられる。深さ10cm前後である壁は存在しないが他と同様にゆるやかにたちあがり，断面形は皿状をなしていると考えられる。床面はほぼ平坦で，床面に１ケ所柱穴状のピットがある。ピットは径30cm以上で深さ10cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 51）

竪穴住居址の遺存状態が極端に悪いので，出土遺物の量は多くない。竪穴中央部に集中している。土器７点，石片８点がある。土器はいずれも小片で図示できない。

石器（Fig. 51）

618はｏｂ－ａ製の石鏃である。片脚を欠損している。抉りが深く長脚を持つ。長さ21.0mm，巾14.0＋α mm，重さ0.45＋α ｇを測る。

(23)　第23号住居址（ＳＣ－023）（Fig. 50）

発掘調査区の南半部，丘陵縁辺部のＪ－21グリットに検出した遺構である。第18号，22号竪穴住居址，第４号土壙と重複関係にあり，第22号竪穴住居址を切っていて，第18号竪穴住居址，第４号土壙に切られている。遺構の半部以上が崖によって欠損し遺存状態は悪い。現存長２ｍで，径３ｍ以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居と考えられる。深さ25cm前後で，

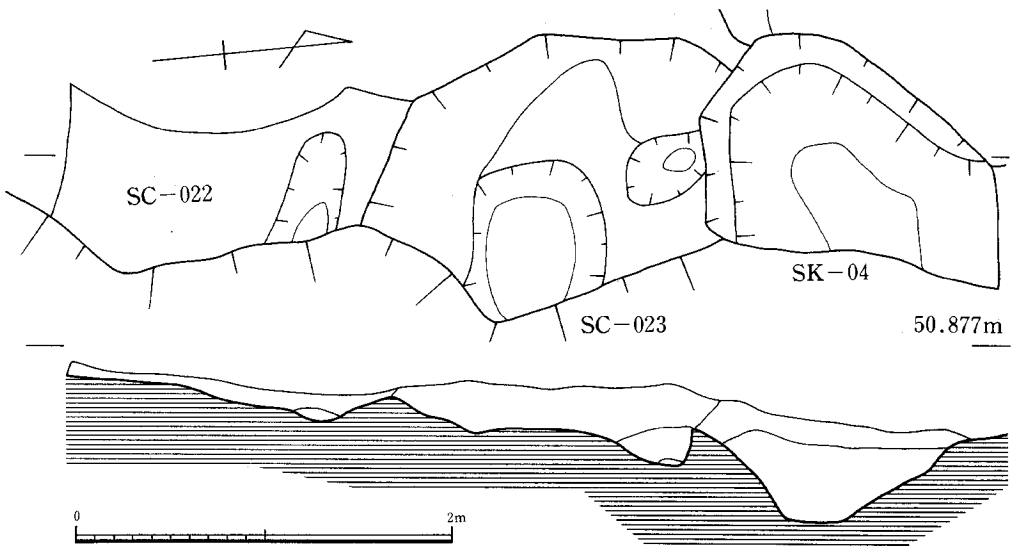


Fig.50　第22，23号住居址(SC－022，023)　第４号土壙(SK－４)実測図

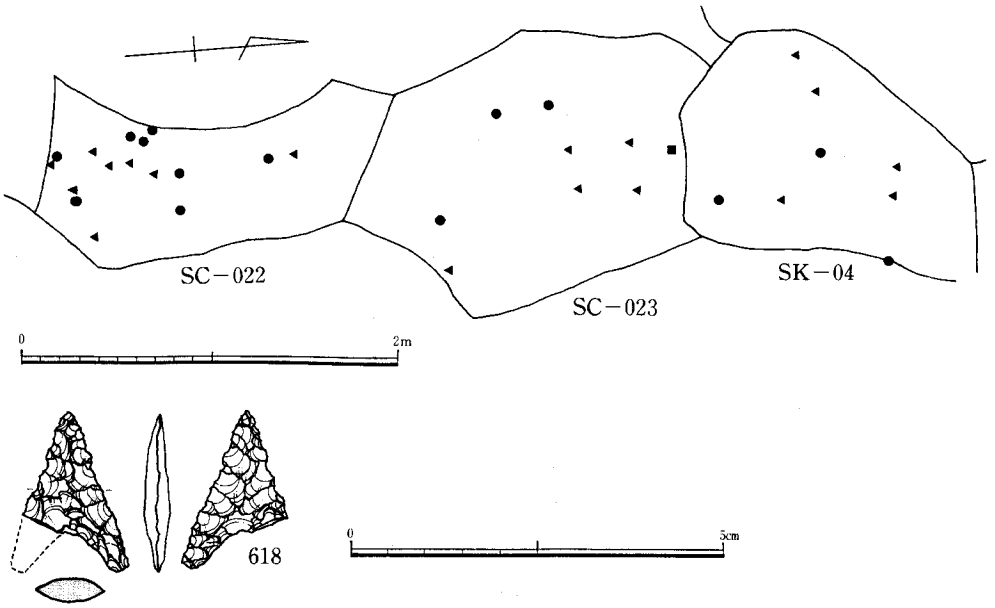


Fig.51　第22，23号住居址，第４号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそった南側に70cm×80cm，深さ10～18cmの隅丸方形の浅いピットが存在し，西側に径35cm，深さ10cmのピットが存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石鏃，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

10cmのピットが存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石鏃，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 51）

竪穴住居址の遺存状態が不良のため，出土遺物の量は少ない。しかし，出土状況からみると遺物散発的で集中部はみられない。周辺部から流れ込んだ遺物であろう。土器３点，石器，石片６点がある。土器はいずれも小破片で図示できない。薄手の土器で内外面に条痕調整をもっている。

(24)　第24号住居址（ＳＣ－024）（Fig. 52）

発掘調査区の南半部の東斜面の，Ｇ－21，22，Ｈ－21～23グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，隣接して存在する25号竪穴住居址以外の竪穴住居址と重複関係はない。長径3.25m，短径2.9mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ25～45cmで，壁のた

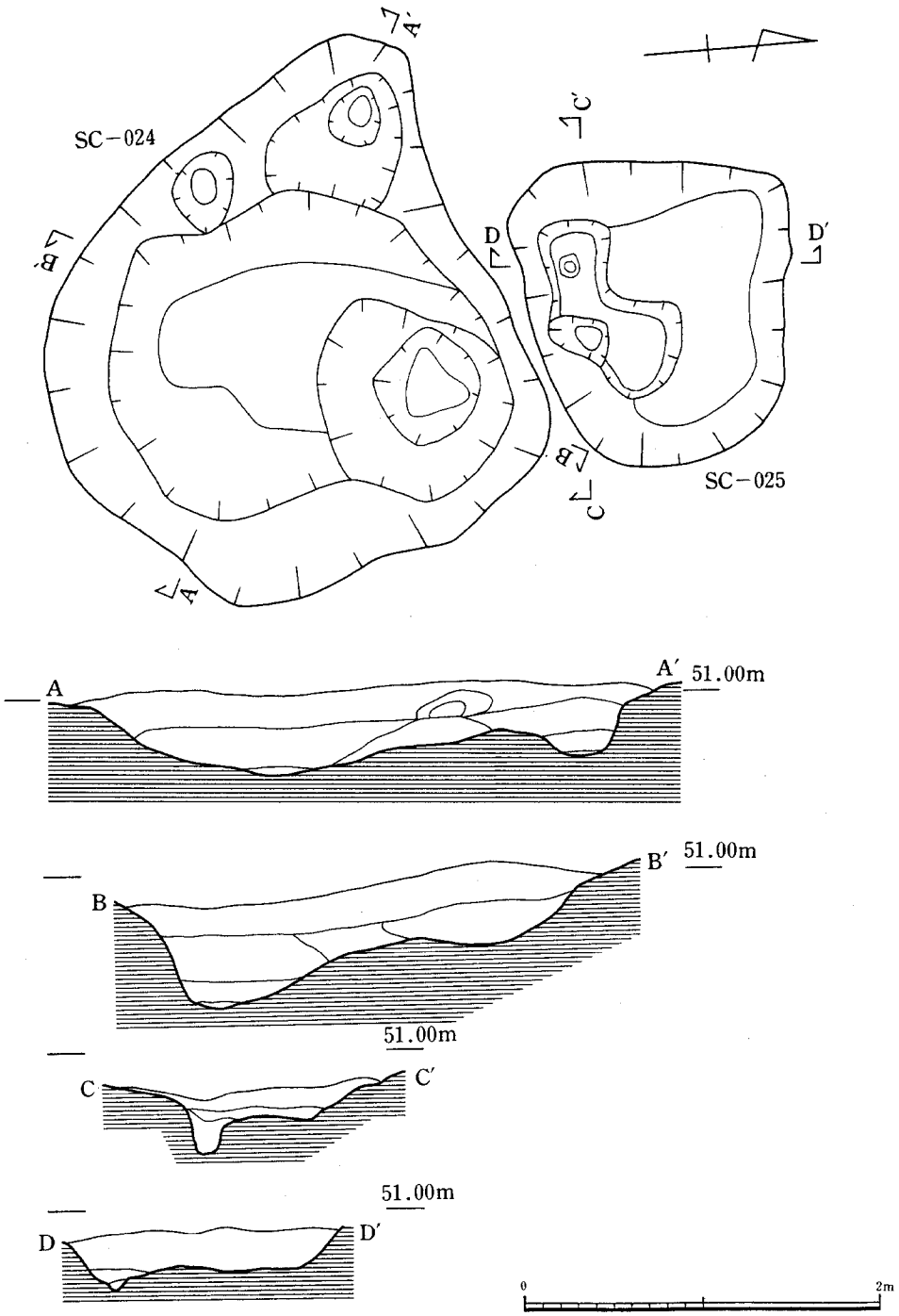


Fig.52　第24，25号住居址(SC－024，025)実測図

ちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそった北側に100×115cm，深さ37cmの不整円形プランのピット１ケ所があり，西側は張り出し状になっていて，径30cm前後のピットが２ケ所に存在する。ピットの深さは10cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 53）

竪穴住居址が完全に遺存しているので遺物量は比較的多い。竪穴全面には出土せず竪穴の東北部に集中して出土している。この部分は竪穴住居址の中で最も深い部分である。土器片が比較的小さいところから，周辺部から流れ込んだ遺物と考えられる。土器11点，石器，石片19点がある。

土器（Fig. 53－1）

いずれも小破片で特徴がないので１点を図示した。１は胴部破片で内外面共丁寧なヘラ研磨調整で仕上げている。外面にはススが付着する。器壁の厚さは0.7～1.1cmをはかる。胎土には石英，長石，黒雲母の砂粒を含む。焼成は良好，色調は外面が黒褐色，内面が黄灰褐色をなす。

石器（Fig. 53）

62はサヌカイト製の局部磨製石鏃である。主要剝離面側のみ研磨している。長さ23.0mm，巾17.5mm，重さ0.95＋α gを測る。64はｏｂ－ａ製のＲｆである。石核と思われる両面に剝離痕のある石器の破片の一部に加工したもので，スクレイパーとも考えられる。長さ18.5mm，巾22.5mm，厚さ8.0mmを測る。505はサヌカイト製のＲｆである。円礫から剝取された背面に自然面を残す縦長剝片の側辺に両面から連続する別離を加えたものである。長さ34.0mm，巾23.5mm，厚さ6.5mm以上を測る。

(25) 第25号住居址（ＳＣ－025）（Fig. 52）

発掘調査区の南半部の丘陵東斜面のＧ－23，Ｈ－23グリットにわたって検出した遺構である。第24号竪穴住居址に隣接するが他の竪穴住居址と重複関係はない。長径1.7m，短径1.5mの不整の楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～25cm，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，南側の壁にそった部分にＬ字形の掘り込みがあり，中に径10cmと径20cmのピットが２ケ所に存在する。ピットは深さ５cmと12cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器１点が出土している。

遺物出土状況（Fig. 53）

竪穴住居址は完全に遺存しているが，出土遺物は極端に少なく，中央部に土器１点があるのみである。土器は小破片で図示していない。

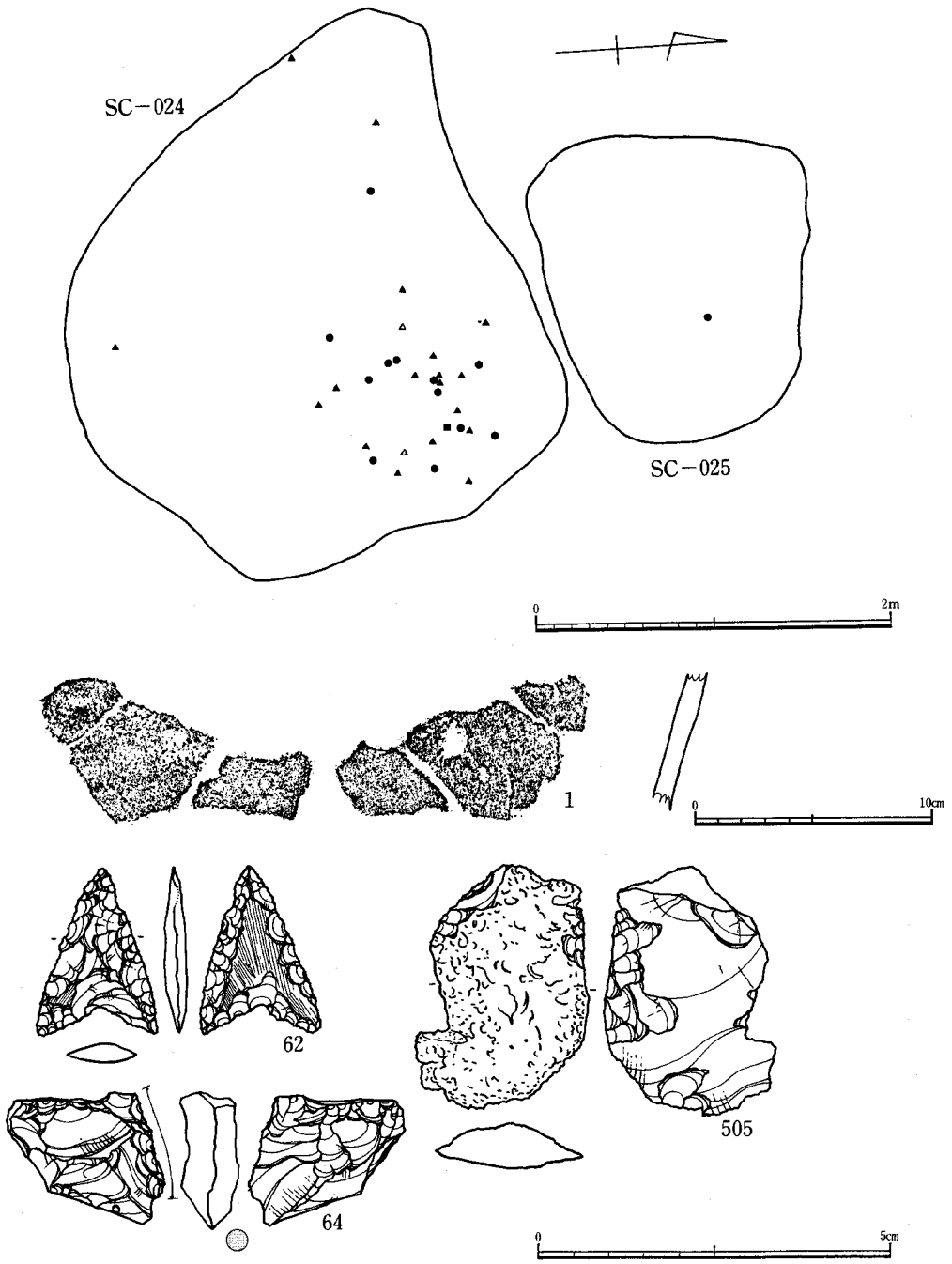


Fig.53　第24，25号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

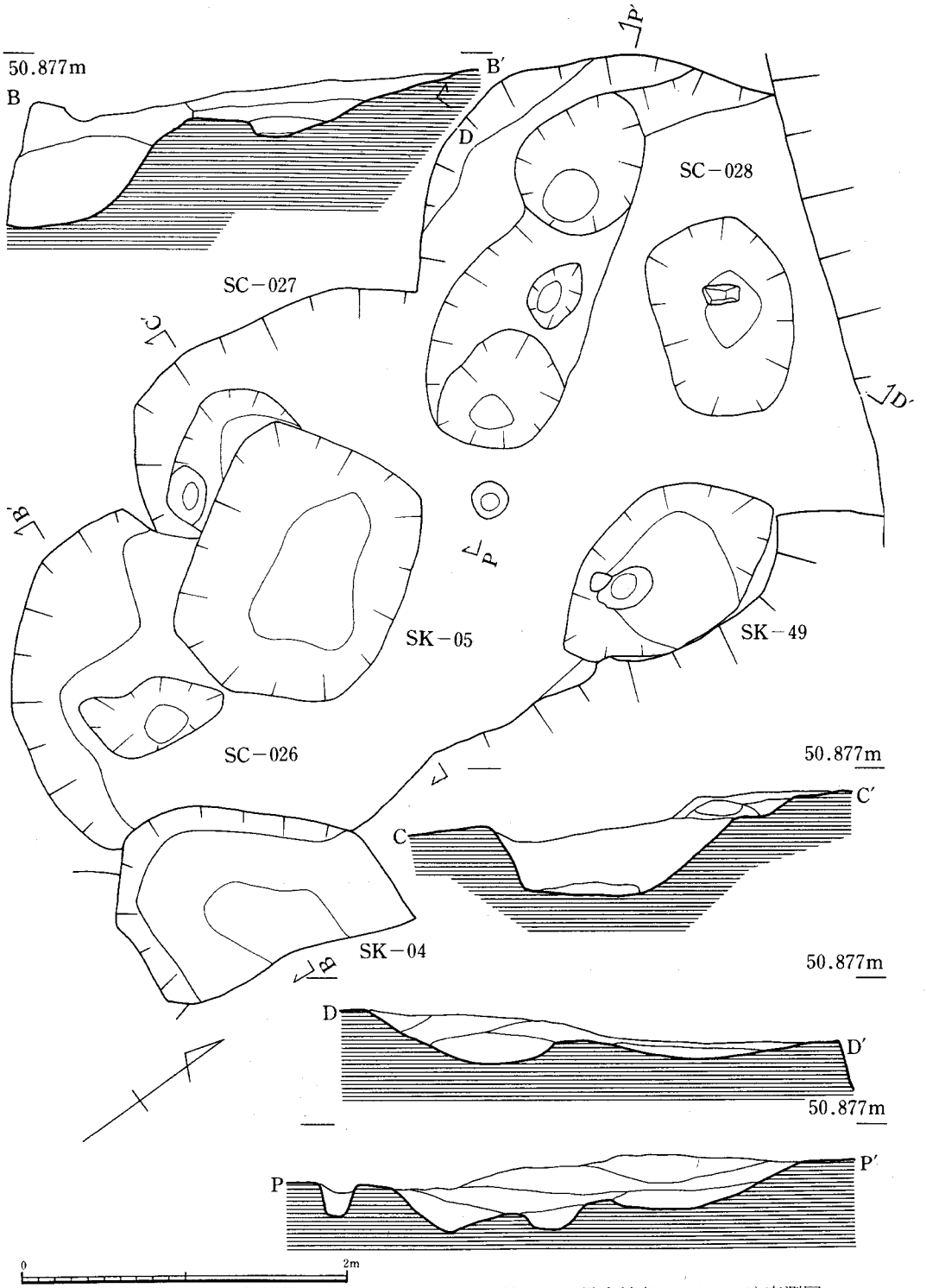


Fig.54　第26，27，28号住居址(SC－026，027，028・第4，49号土壙(SK－04，49)実測図

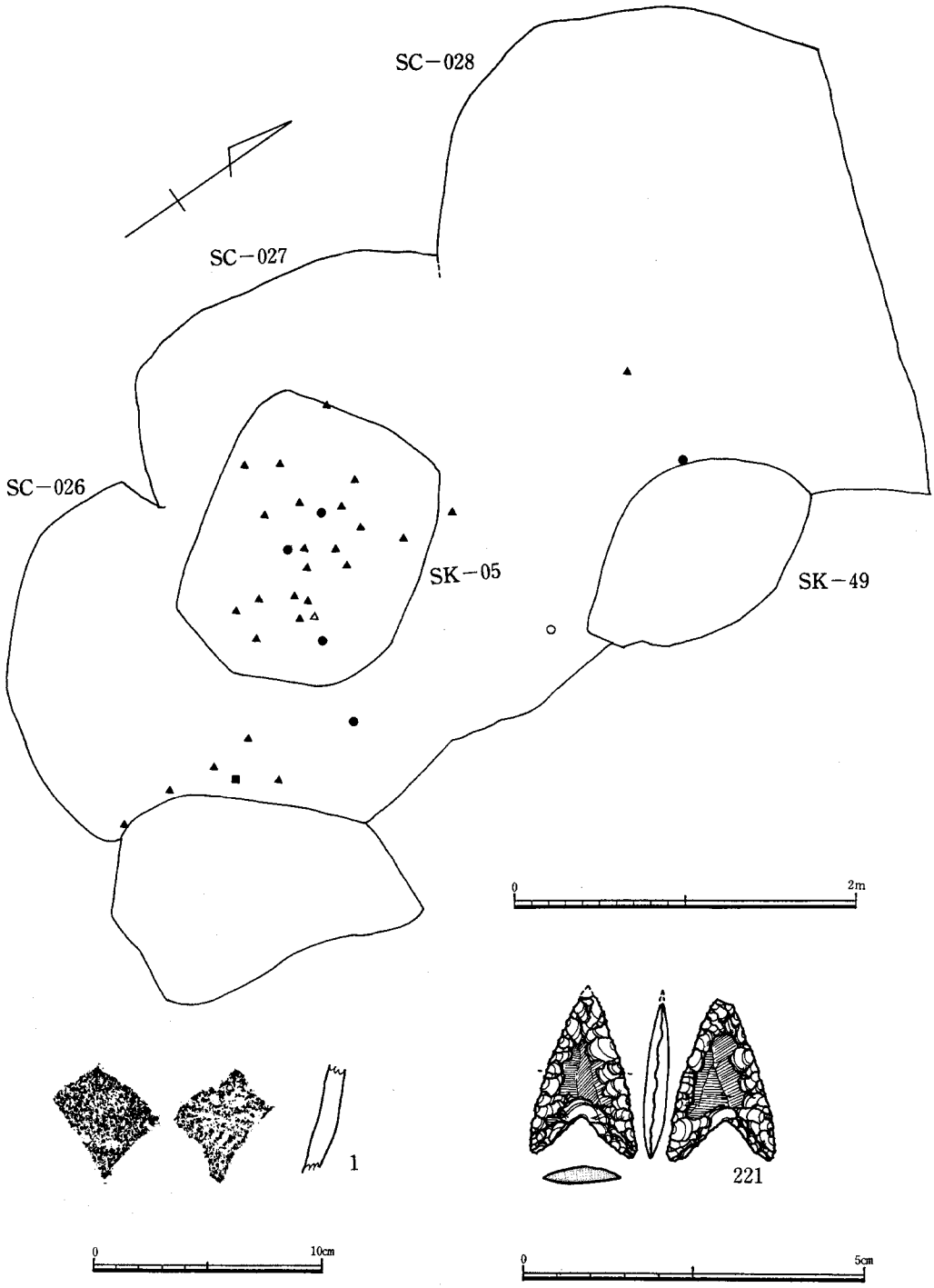


Fig.55　第26，27，28号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

(26) 第26号住居址（ＳＣ－026）(Fig. 54)

発掘調査区の南半部丘陵東斜面の崖の縁辺部，Ｉ－21，22，Ｊ－21，22グリットにわたって検出した遺構である。第27号竪穴住居址，第４，５号土壙と重複関係にあり，第４，５号土壙に切られている。第27号竪穴住居址との先後関係は不明。崖，および他の遺構に切られていて，その残存状態は良くない。径2.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ30～40cm，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面に不整形のピットが１ケ所存在する。ピットは深さ10cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石鏃，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 55）

竪穴住居址の遺存状態が悪いために遺物の量は少ないが，ＳＫ－04とＳＫ－05にはさまれた竪穴の中央部に若干出土している。土器１点と石器，石片６点がある。

土器（Fig. 55－1）

１は器面の保存状態が良好でないために明瞭でないが，外面は縦位の貝殻条痕調整，内面は不定方向の貝殻条痕調整である。器壁は0.8cm前後の厚さを有している。胎土には石英，長石等のやや粗い砂粒を含む。焼成はやや不良，色調は外面が赤褐色，内面が灰褐色をなす。

石器（Fig. 55）

221はｏｂ－ａ製の局部磨製石鏃である。両面とも研磨している。先端部を欠損している。基部の抉りは三角形で深い。長さ23.5＋α mm，巾16.0mm，重さ0.85＋α gを測る。

(27) 第27号住居址（ＳＣ－027）(Fig. 54)

発掘調査区の南半部，丘陵東斜面の崖の縁辺部，Ｉ－22，23，Ｊ－22，23グリットにわたって検出した遺構である。第26号，28号竪穴住居址，第５号土壙と重複関係にあり，第28号竪穴住居址，第５号土壙に切られている。第26竪穴住居址との関係は不明。崖および他の遺構との切り合いが多く平面プランは把握しにくいが，径３m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15～25cm，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦であるが，わずかに東に向って傾斜している。ピットは床面の南西側に95cm×60cm(前後)，深さ10cm前後のピットが存在するが，ＳＫ－05に切られている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より剝片，チップが出土している。

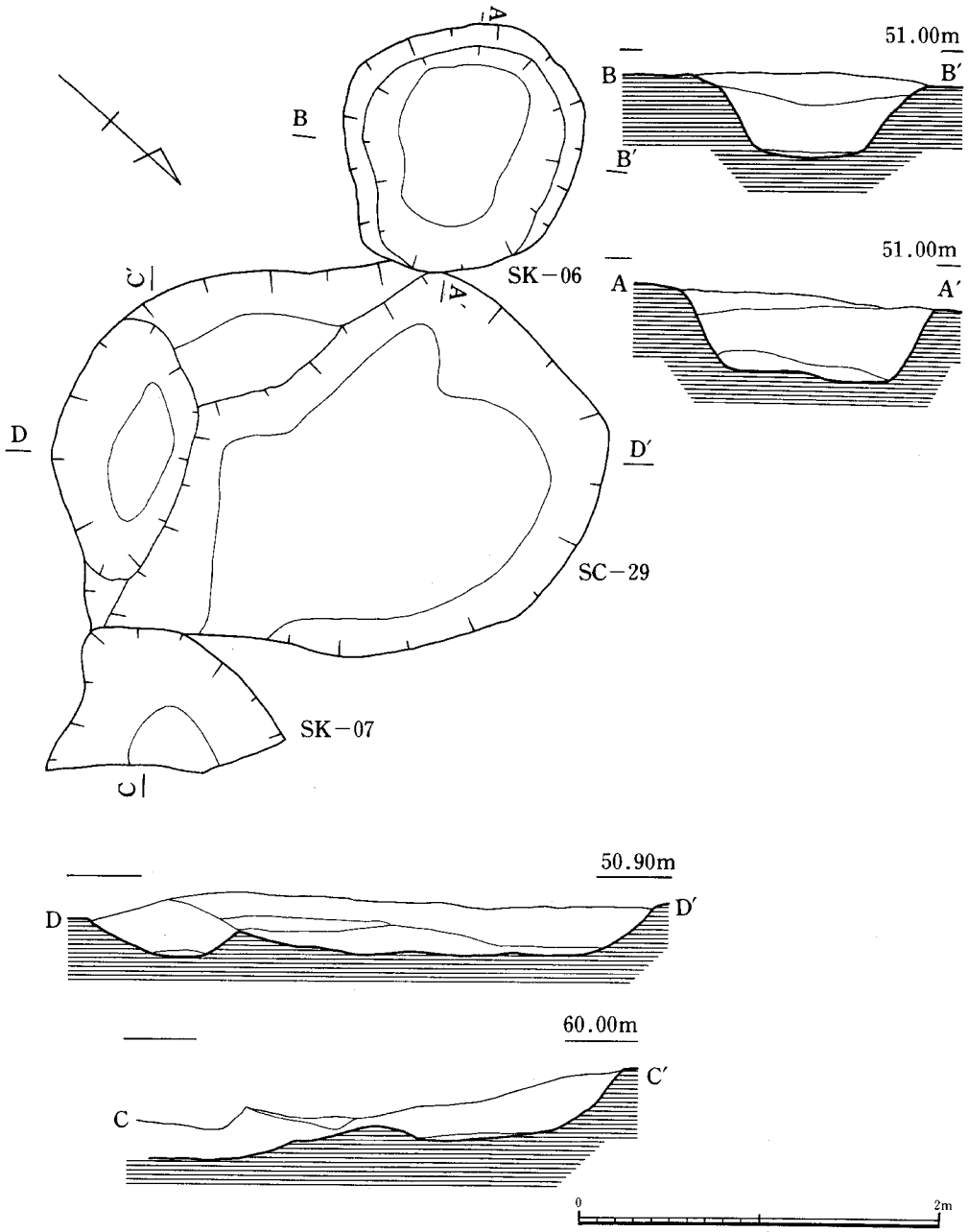


Fig.56　第29号住居址(SC－029)　第6，7号土壙(SK－06，07)実測図

(28) 第28号住居址（ＳＣ－028）(Fig. 54)

発掘調査区の南半部，丘陵東斜面の崖の縁辺部のＨ－24，Ｉ－23，24，Ｊ－23，24グリットにわたって検出した遺構である。第27竪穴住居址と重複関係にあり，第27号竪穴住居址を切っている。崖，およびブドウ畑の攪乱によって一部破壊されていて，竪穴の遺存状態は良くない。径3.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。床面の中央部には120cm×75cm，深さ10cmの楕円形のピットがあり，内部に角礫１個が存在する。ピットは径20～80cmで，深さ10～30cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器の剝片，チップが出土している。数は少ない。

(29) 第29号住居址（ＳＣ－029）(Fig. 56)

発掘調査区の南半部丘陵東斜面のＧ－24，25，Ｈ－24，25グリットにわたって検出した遺構である。第６号・７号土壙と重複関係にあり，第６号・７号土壙に切られている。長径3.1m，短径2.1mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ25～30cm，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦であるが，床面は不整形である。壁の南東部に150cm×70cm，深さ30cmのピットが存在する以外，床面に他のピットは存在しない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 57）

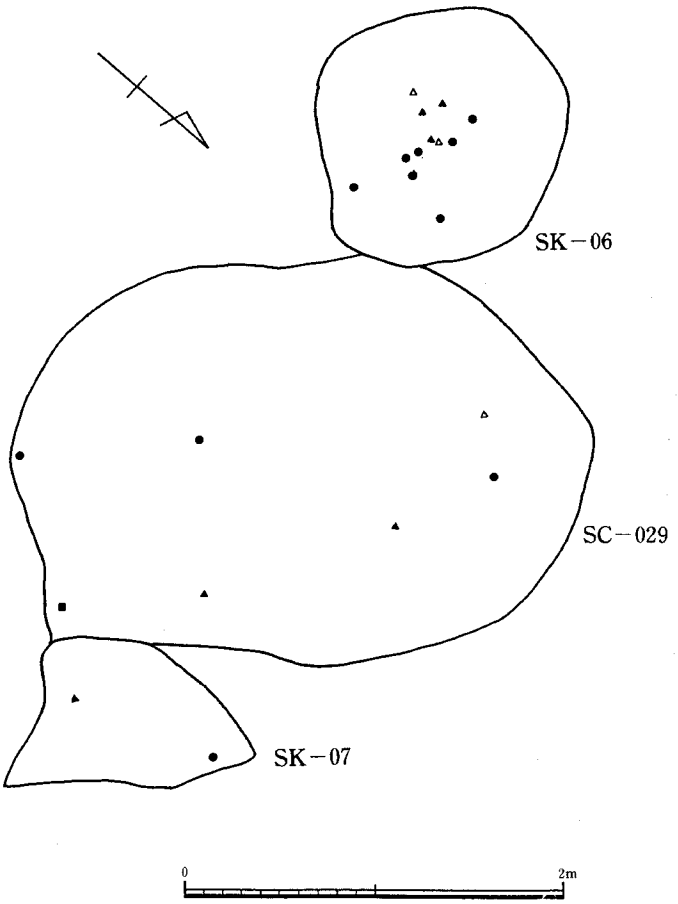
竪穴住居址は完全に遺存しているが，出土遺物はきわめて少ない。竪穴内に散発的に出土している。土器３点，石器，石片４点がある。土器片は小破片で図示できない。

石器（Fig. 57）

96はｏｂ－ａ製のＲｆである。両面及び側辺の一部を研磨している。用途不明。長さ13.0mm，巾12.0mm，厚さ1.5mmを測る。91はサヌカイト製の石杭の破片である。両面加工品及び楔形石核とも考えられる。

(30) 第30号住居址（ＳＣ－030）(Fig. 58)

発掘調査区の中央部に近い，Ｈ－29，Ｉ－29，30，Ｊ－29グリットにわたって検出した遺構である。第９号土壙と重複関係にあり，第９号土壙を切っている。長径2.5m，短径1.75mの不整の隅丸長方形プランをなす竪穴住居址である。深さ80cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，



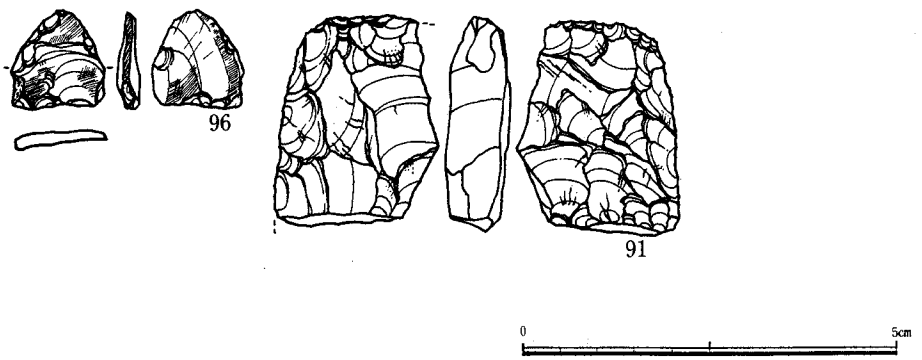


Fig.57　第29号住居址，第６，７号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。床面の広さは80cm×80cmの方形で広くない。また床面に柱穴状のピットの存在もなく，住居址とするより，土壙とした方が良いかもしれない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig.59）

竪穴住居址は完全に遺存するが，出土遺物はきわめて少ない。竪穴の西側に片寄ってわずかに集中している。土器4点，石器，石片6点がある。

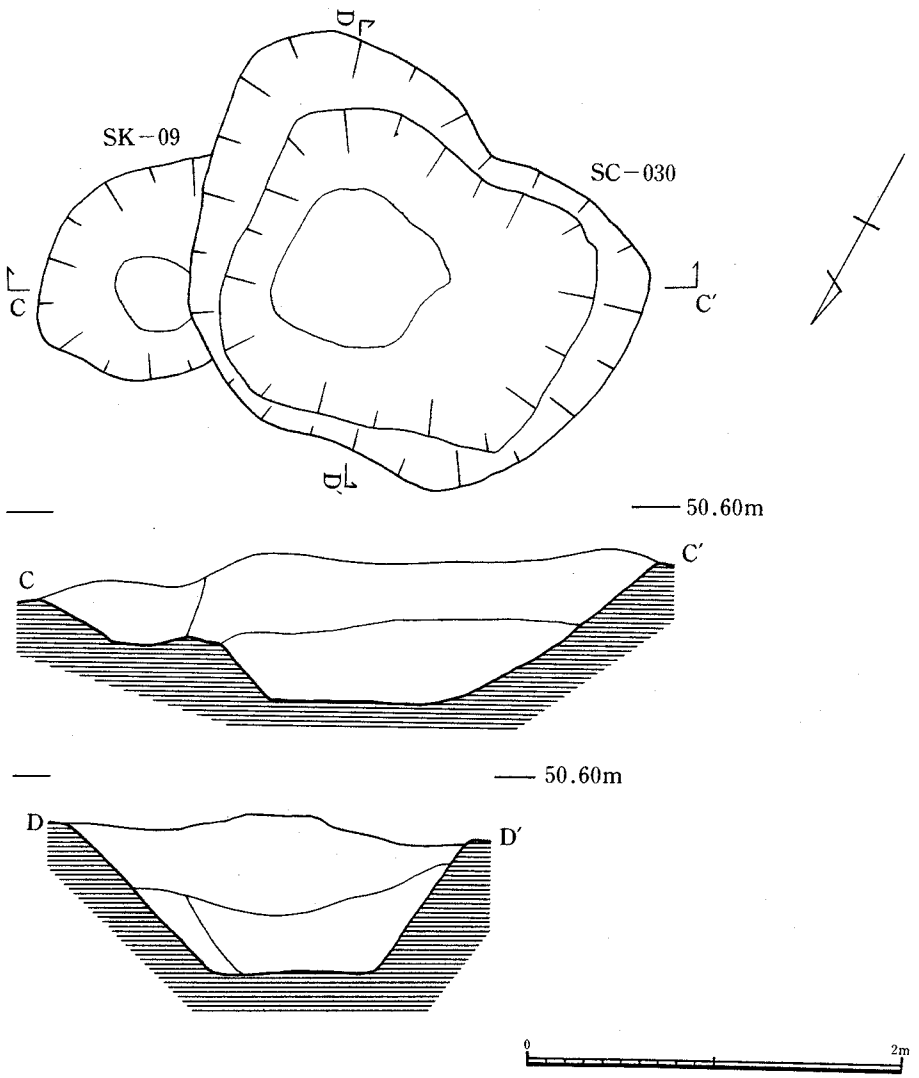


Fig.58　第30号竪穴住居址(SC－030)，第9号土壙(SK－09)実測図

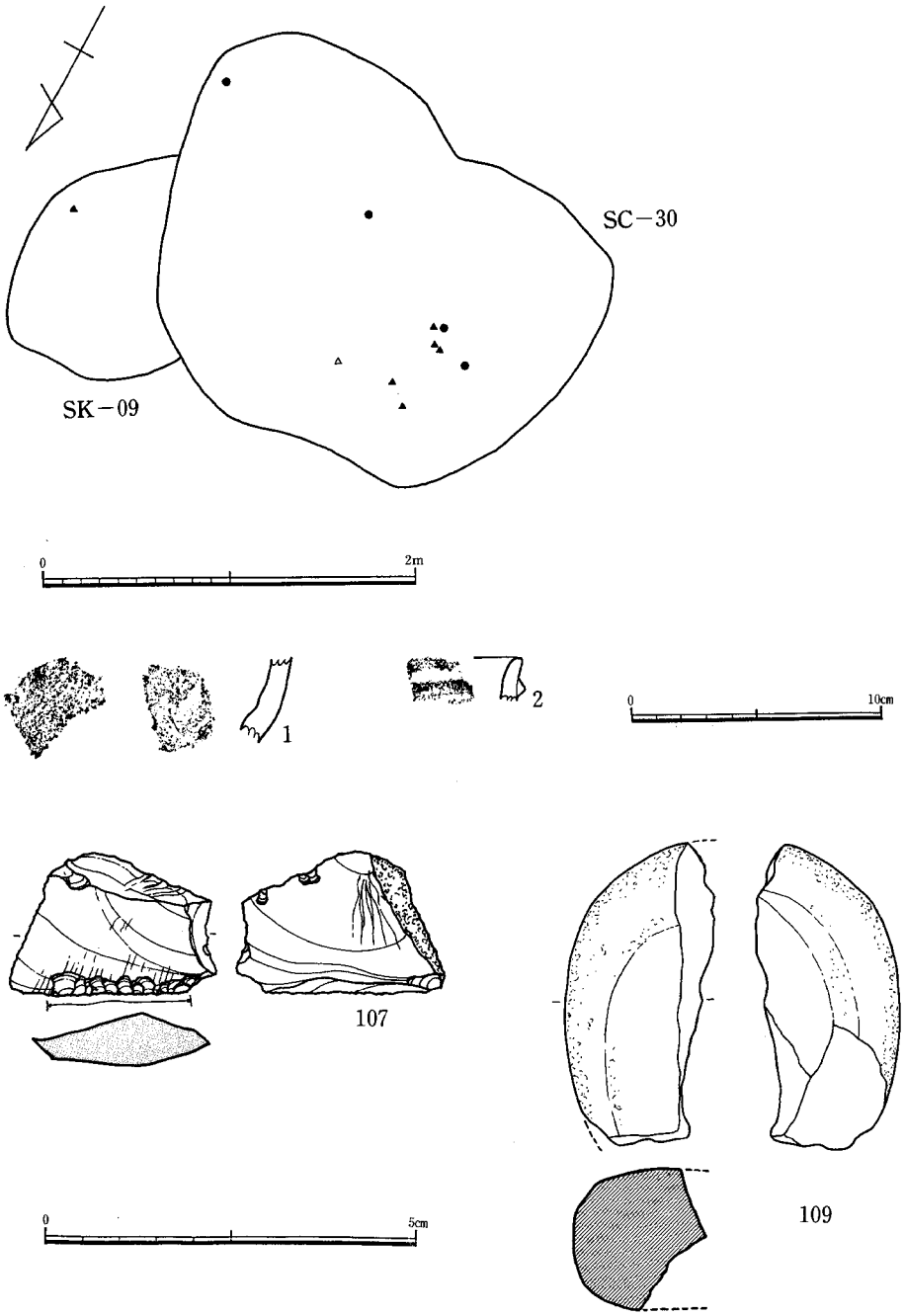


Fig.59　第30号住居址，第９号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

土器（Fig. 59－1，2）

2点を図示した。1は胴部破片。外面には細かな斜方向の条痕調整がみられる。内面は板状工具によるケズリ状の調整，2は口縁部破片，直口縁で端部は丸くおさめる。口縁直下に断面形カマボコ状の粘土帯をはりつけている。1，2は胎土に石英，長石の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で，色調は黄褐色をなす。

石器（Fig. 59）

107はｏｂ－ａ製のＵｆである。不定形な横長剝片の一辺に主要剝離面側のみに剝離痕がある。108は安山岩製の磨石の破片である。両面に平坦な面がある。

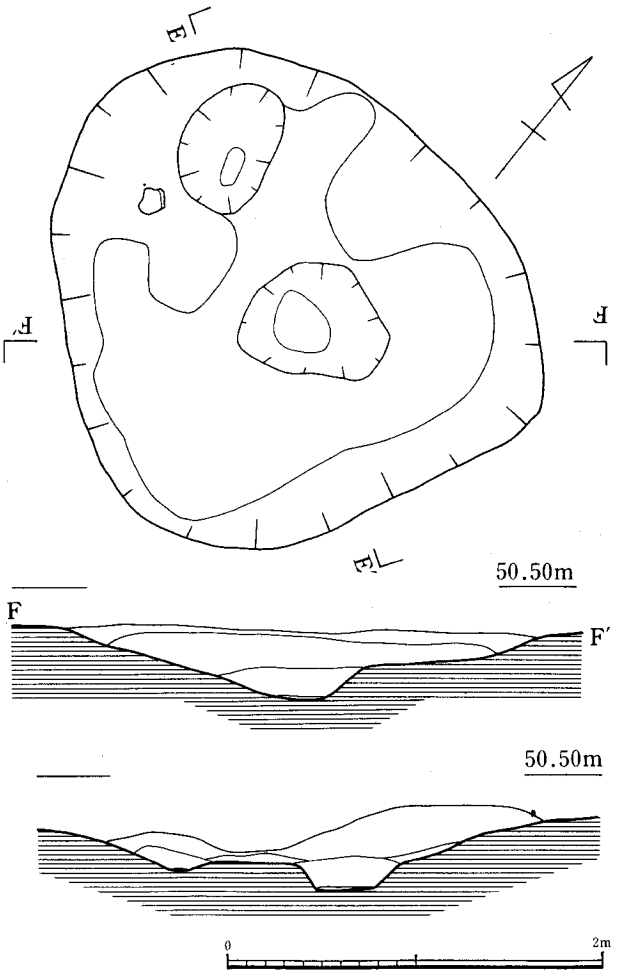


Fig.60　第31号住居址（SC－30）実測図

(31)　第31号住居址（ＳＣ－031）（Fig. 60）

発掘調査区の中央部に近い東斜面のＧ－29，30，Ｈ－29，30グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し他の竪穴住居址等の遺構との重複関係はない。長径2.65m，短径2.45mの不整円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦であるが，いびつである。床面の東西方向に相対して2ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは径60cm前後で，深さ8～18cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

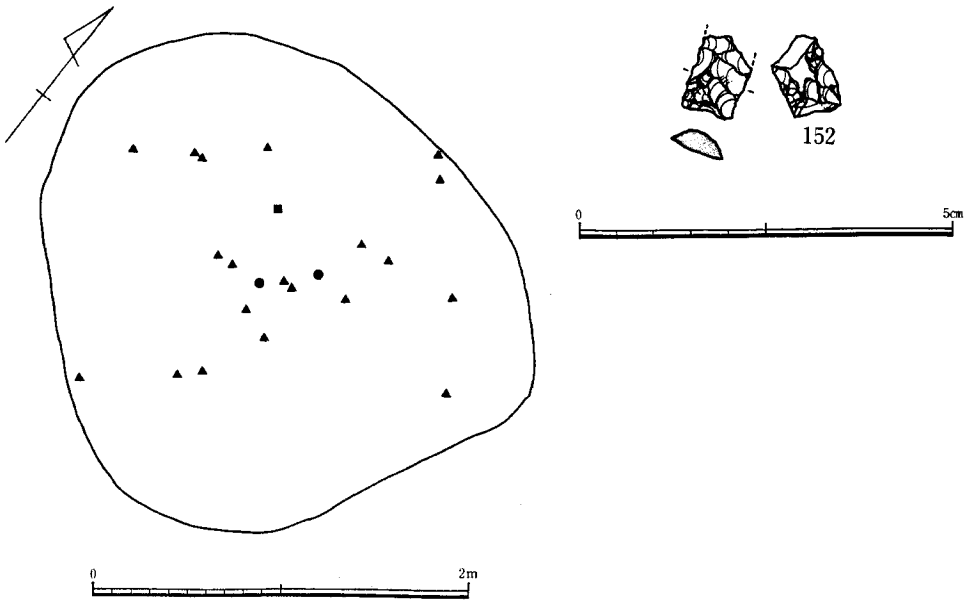


Fig.61　第31号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

遺物出土状況（Fig. 61）

竪穴住居址が完全に残存しているので比較的遺物の出土量は多い。竪穴中央部に集中する傾向が読みとれる。土器がきわめて小さいことなどを考慮すると周辺部より流れ込んだ可能性が強い。ここで注意されるのは土器が少なく，石片が多いことである。土器２点，石器，石片21点がある。

土器

小破片で図示していないが，特徴的な土器であるので説明しておく。１点は外面に楕円押型文を横走施文した土器，他の１点は微隆起文を一条はりつけた土器である。

石器（Fig. 61）

152はｏｂ－ａ製の石鏃の脚部であるが，鍬形鏃のものと思われる。現存で重さ0.35ｇを測る。

㉜　第32号住居址（ＳＣ－032）（Fig. 62）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＧ－30，31，Ｈ－30，31グリットにわたって検出した遺構である。第33号，34号竪穴住居址と重複関係にあり，第33号，34号竪穴住居址に切られている。長径2.45m，短径2.2mの円形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～20cmで，壁のたち

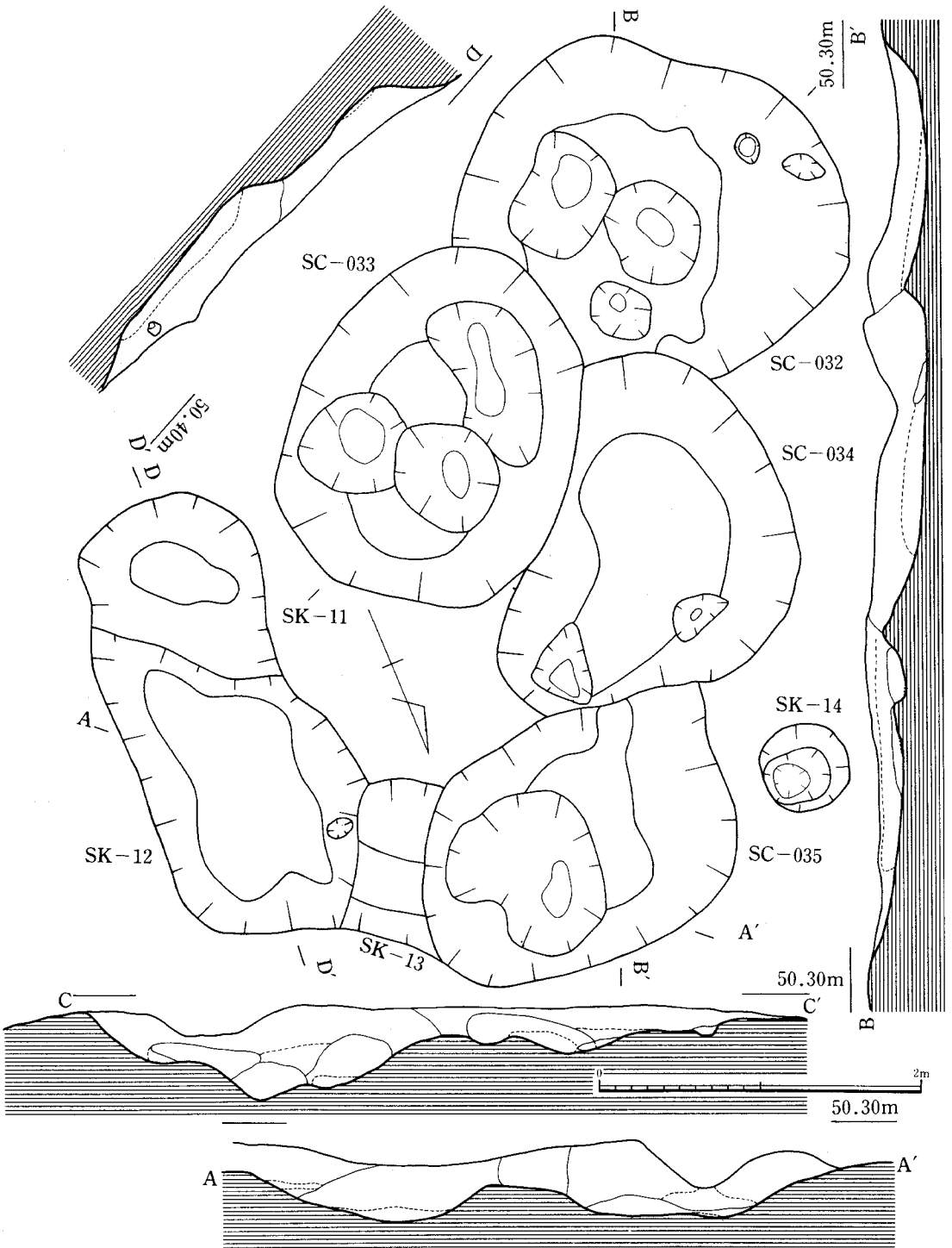


Fig.62　第32～35号住居址(SC－032～035)，第11～13号土壙(SK－11～13)実測図

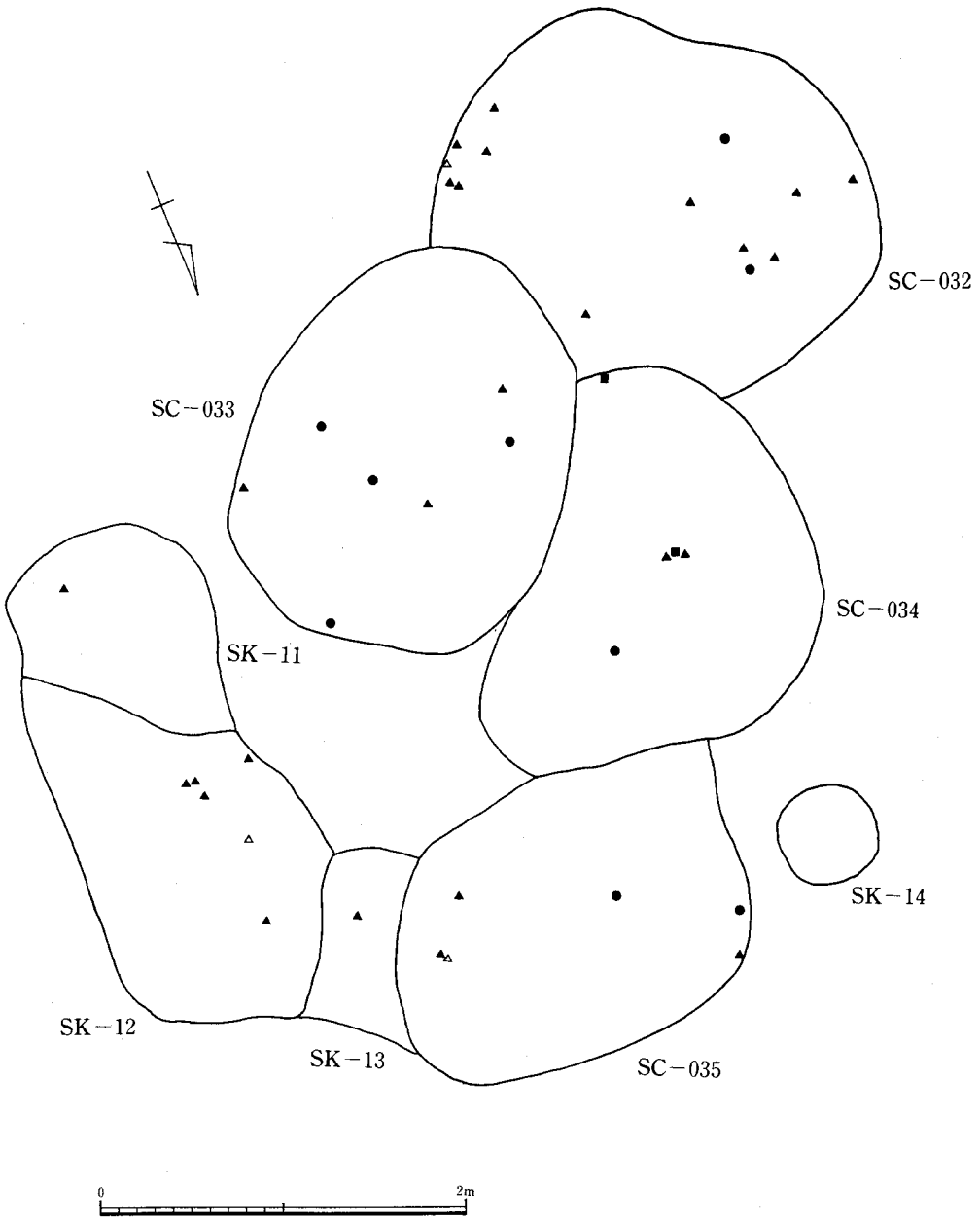


Fig.63　第32～35号住居址，第11～13号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図Ⅰ

あがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，３ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは径30～75cmで，深さ５～15cmである。また，壁面の２ヶ所に径15cm前後の小ピットがある。ピットは深さ５cm前後である。竪穴埋土は黄褐砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 63）

竪穴住居址の全面に散在的に遺物が出土しているが竪穴の東側と西側に集中する傾向がみられる。いずれも流れ込みの遺物とみられる。土器２点と石器，石片12点があり，第31号住居址同様，石片の多いことが注意される。

土器（Fig. 64－ＳＣ－032－１）

１点を図示した。胴部の小破片である。外面は楕円押型文を横走施文する。内面は丁寧なナデ調整，器壁は0.5～0.6cmと薄い。胎土には石英，長石の砂粒を若干含むが良質，焼成は良好で，色調は内外面共黒褐色をなす。他の１片は無文である。

石器（Fig. 64－ＳＣ－032）

779はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。整形加工は背面の略半分，裏面の周辺に施され，素材の剝離面を大きく留めている。長さ13.0mm，巾17.0mm，重さ0.2ｇを測る。168はｏｂ－ａ製の楔形石器と考えられる。古いパティナで覆われた剝片を利用している。長さ22.5mm，巾17.0mm，厚さ8.5mmを測る。

(33) 第33号住居址（ＳＣ－033）（Fig. 62）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＨ－31，32，Ｉ－31，32グリットにわたって検出した遺構である。第32号，34号竪穴住居址と重複関係にあり，第32号，34号竪穴住居址を切っている。長径2.3m，短径1.8mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はピットのため平坦面は少ない。床面には３ヶ所にピットが存在する。ピットは径60cm前後で，深さ30cm程度である。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 63）

竪穴住居址が良好に遺存しているが，出土遺物はきわめて少ない。全面に散在的な出土状況である。土器４点，石片２点がある。

土器（Fig. 64－ＳＣ－034－1.2）

破片が大きく，特徴的な土器２点を図示した。１は胴部破片，外面に同心円状，波状に沈線を３～４条めぐらし，その中に連続刺突文を配する文様構成をもっている。いわゆる平栫式土器である。内面はヘラナデ調整であるがやや凹凸がある。２は口縁部付近から胴部にかけての

破片である。外面に楕円押型文を横走施文するが明瞭でなく，原体の大きさ，単位は不明。内面上端部にも原体の端部が観察でき，楕円押型文が横走施文されていることがわかる。共に胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は１がやや不良で，２は良好。色調は１が外面黄褐色，内面黒褐色，２は内外面共黄褐色をなす。

(34)　第34号住居址（ＳＣ－034）(Fig. 62)

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＧ－32，Ｈ－31，32グリットにわたって検出した遺構である。第32号，33号，35号竪穴住居址と重複関係にあり，第32号，35号竪穴住居址を切り，第33号竪穴住居址に切られている。長径2.35m，短径1.6m以上の楕円形プランをなす竪穴住居址で

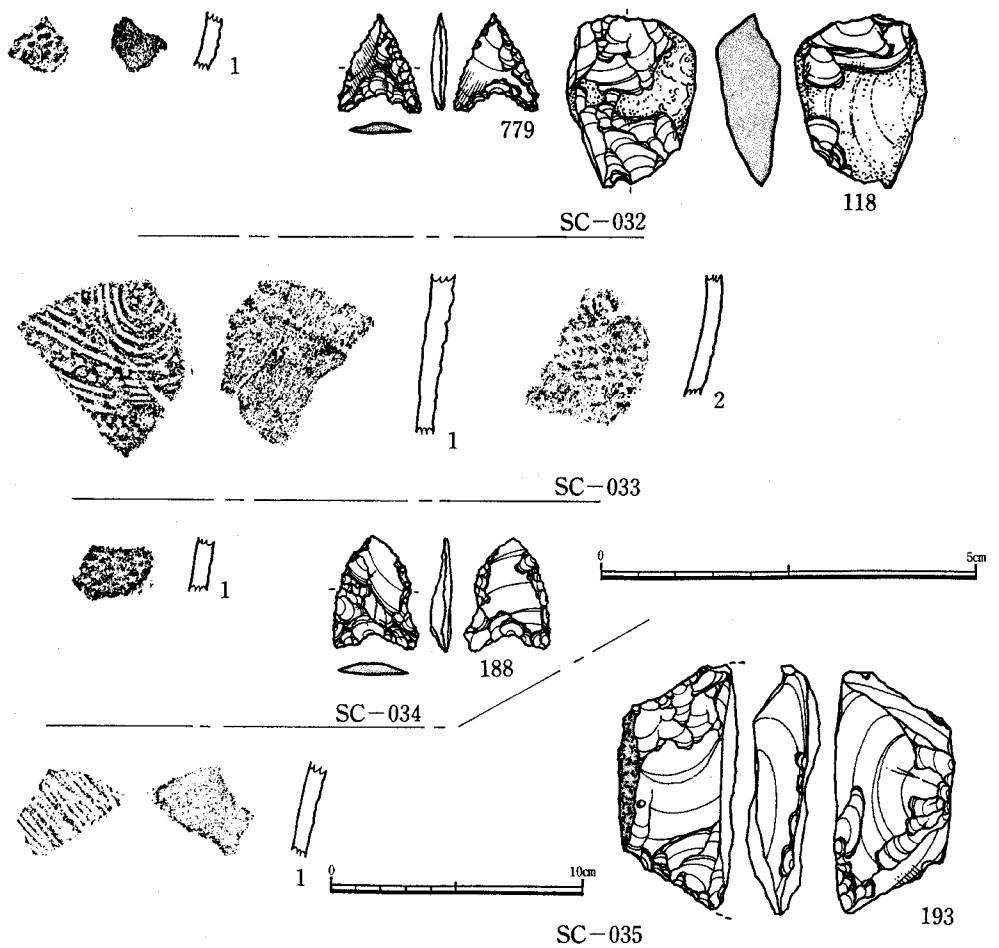


Fig.64　第32～35号住居址出土遺物実測図

ある。深さ25～35cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形で，ほぼ平坦である。壁にそった北側２ヶ所に浅いピットが存在する。ピットは径20～30cmで深さ５cm前後と浅い。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 63）

比較的保存の良い住居址であるが遺物の出土は，きわめて少ない。散在的に遺物が出土している。土器１点，石器，石片４点がある。

土器（Fig. 64－ＳＣ－034－１）

胴部破片である。外面に楕円押型文を横走施文している。不鮮明で原体の大きさ，文様単位は不明。器壁は0.6cm前後の厚さできわめて薄い。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が灰褐色をなしている。

石器（Fig. 64－ＳＣ－034）

188はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。側辺は内弯し，基部には浅い抉りが入る。素材の剝離面を大きく留めている。長さ15.0mm，巾11.5mm，重さ0.4ｇを測る。

(35) 第35号住居址（ＳＣ－035）（Fig. 62）

発掘調査区の中央部丘陵　斜面のＨ－32，33，Ｉ－32，33グリットにわたって検出した遺構である。第34号竪穴住居址，第13号土壙と重複関係にあり，第34号竪穴住居址を切り，第13号土壙を切っている。長径2.0m，短径1.55mの楕円形プランをなせ竪穴住居址である。深さ30～45cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面の東側に片寄って径１m前後の浅い不整形ピットが存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 63）

本竪穴住居址もこの地区の他の竪穴住居址同様に遺物の出土状況は散在的である。いずれも周辺部からの流れ込みと考えられる。遺物には土器２点，石器，石片４点がある。

土器（Fig. 64－ＳＣ－035－１）

１点を図示した。外面は斜方向の丁寧な細かい貝殻条痕調整，内面は横方向の貝殻条痕調整後，丁寧なヘラ研磨で条痕を消している。胎土に石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は外面が黒褐色，内面が黄褐色をなす。外面にススの付着がみられる。

石器（Fig. 64－ＳＣ－035）

193はｏｂ－ａ製の石杭の破片である。剝片素材の両側辺から剝離を行っている。

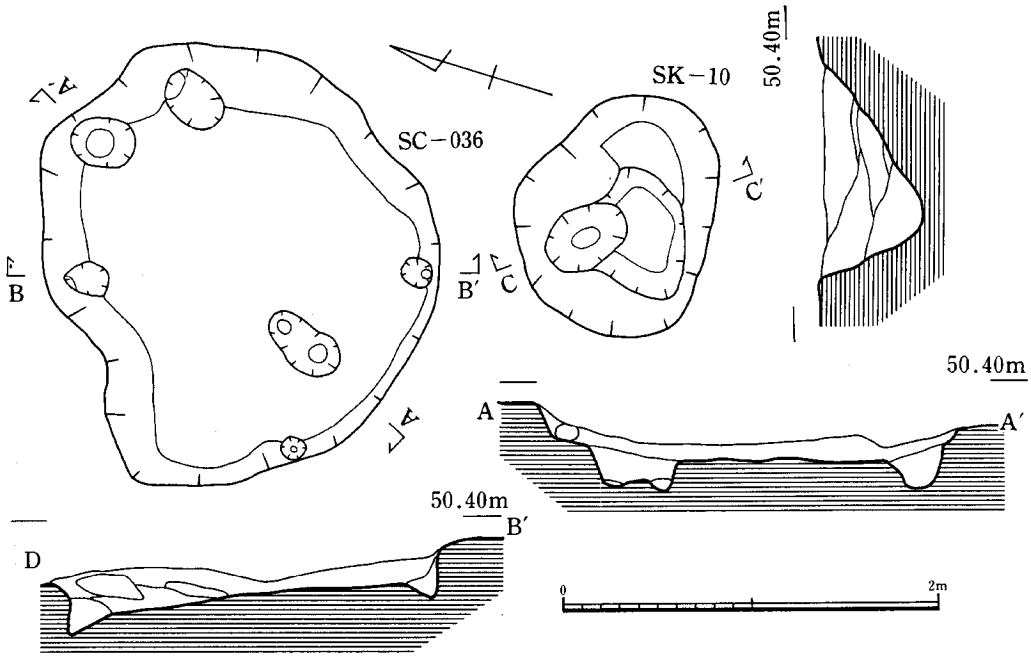


Fig.65　第36号住居址(SC－036)，第10号土壙(SK－10)実測図

(36)　第36号住居址（ＳＣ－036）(Fig. 65)

発掘調査区の中央部丘陵尾根部に近い，Ｅ－30～32，Ｆ－31グリットにわたって検出した遺構である。第38号竪穴住居址と重複関係にあり，第38号竪穴住居址を切っている。長径2.4m，短径2.2mの不整の楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそった南北方向に相対してる主柱穴と考えられるピットがある。北側ピットは径30cm，深さ20cm，南側ピットは２個連絡したもので長径40cm，短径20cm，深さ20cmである。この主柱穴を中心にして，壁面に４本の柱穴がある。径10～20cm，深さ20cmでいずれも内側に向って内傾している。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

遺物出土状況（Fig. 66）

本竪穴は保存状態は良好であったが出土遺物は皆無で，隣接するＳＫ－10に土器２点が存在する程度で，周辺の住居址にも遺物は出土していない。

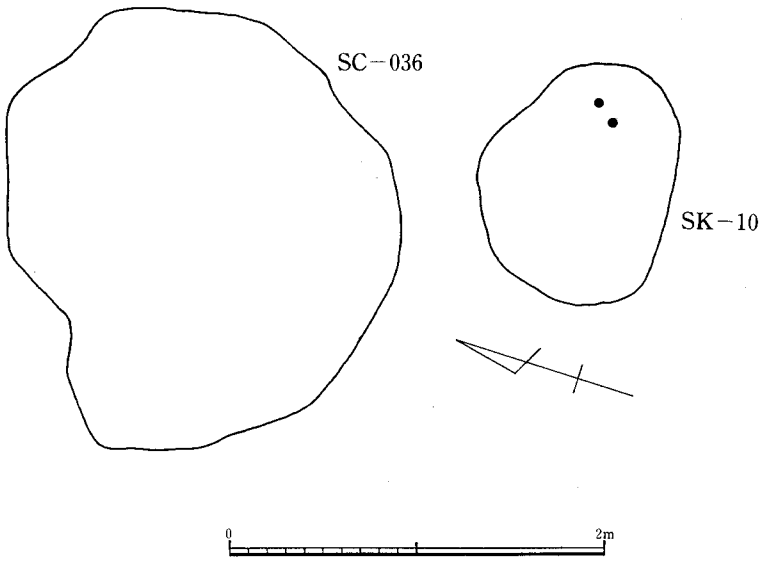


Fig.66　第36号住居址，第10号土壙遺物出土状況

(37)　第37号住居址（ＳＣ－037）(Fig. 67)

発掘調査区の中央部陵尾根に近い，Ｃ－31，Ｄ－31，32グリットにわたって検出した遺構である。第38号竪穴住居址と重複関係にあり，第38号竪穴住居址を切っている。道路によって西側を破壊されていて全体の½程度が残存している。長径1.5m以上(2.1m前後)，短径1.85m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面は皿状をなしている。床面は円形あるいは楕円形プランをなすと考えられ，ほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットはないが，東側壁に径15cmと20cm，深さ18cmの柱穴状ピット２個が並列して存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(38)　第38号住居址（ＳＣ－038）(Fig. 67)

発掘調査区の中央部丘陵尾根に近い，Ｄ－31，32，Ｅ－31，32グリットにわたって検出した遺構である。第36号，38号，39号竪穴住居址と重複関係にあり，第36号，38号，39号竪穴住居址に切られている。全体の約⅔が遺存する。長径3.0m，短径2.1m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿

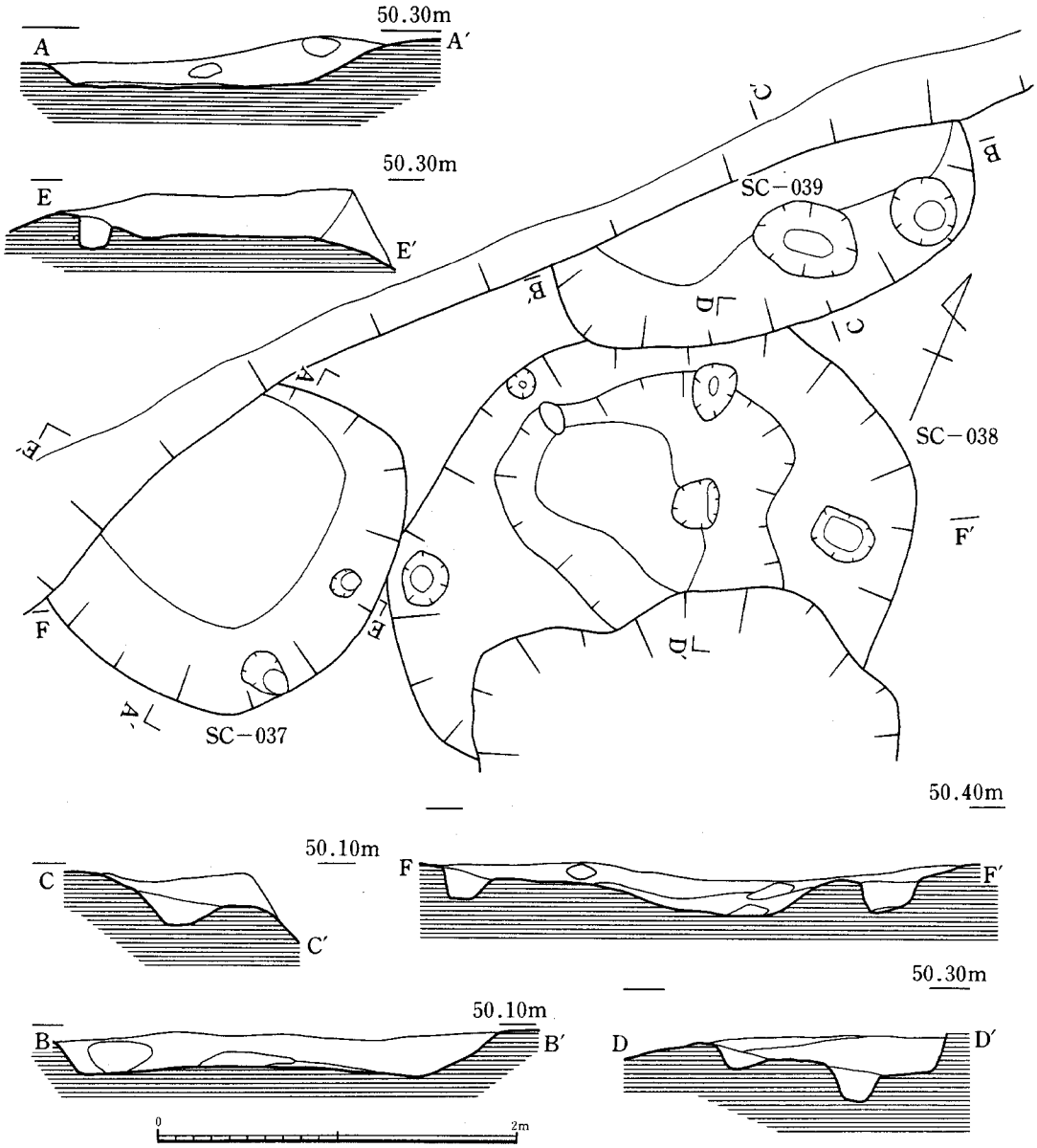


Fig.67　第37～39号住居址(SC－037～039)実測図

状をなしている。床面はほぼ平坦である。床面の中央部には130cm以上×165cm，深さ10cmの不整楕円形の土壙が掘り込まれている。柱穴状のピットは土壙の中央部に1個，北端部に1個が南北方向に並列し，それに直交する形で東西方向で竪穴壁に相対して2個が存在する。ピットは径25cm前後で，深さ12～18cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(39) 第39号住居址（ＳＣ－039）(Fig. 67)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根に近い，Ｄ－32，Ｅ－32，33グリットにわたって検出した遺構である。第38号竪穴住居址と重複関係にあり，第38号竪穴住居址を切っている。竪穴の北西側は道路によって大きく破壊され，その遺存状態はきわめて悪い。長径2.4m，短径0.85m以上の隅丸方形ないしは隅丸長方形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ16～21cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面もほぼ上面と同様のプランをなすと考えられほぼ平坦である。現存する床面には土壙，柱穴状のピットは存在しないが，南東側壁に径40cm，深さ15cmの柱穴状のピット2個が並列して存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(40) 第40号住居址（ＳＣ－040）(Fig. 68)

発掘調査区の中央部に近い，Ｅ－35，36，Ｆ－35，36グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他遺構との重複関係はない。長径2.8m，短径2.5mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，床面中央部に並列した3ヶ所のピットが存在する。ピットは径40～60cm，深さ16～20cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土である。

遺物出土状況（Fig. 69）

竪穴住居址が良好に残存しているので，比較的遺物が良く出土している。遺物はほぼ全面に散布しているが，竪穴中央部には少なく，北側と南側の縁辺部に集中する傾向がある。周辺からの流れ込みによるものであろう。遺物には土器4点，石片15点がある。

土器

破片が小さく図示していないが1点のみ外面に楕円押型文を横走施文する土器がある。内面は貝殻条痕調整である。

(41) 第41号住居址（ＳＤ－041）(Fig. 70)

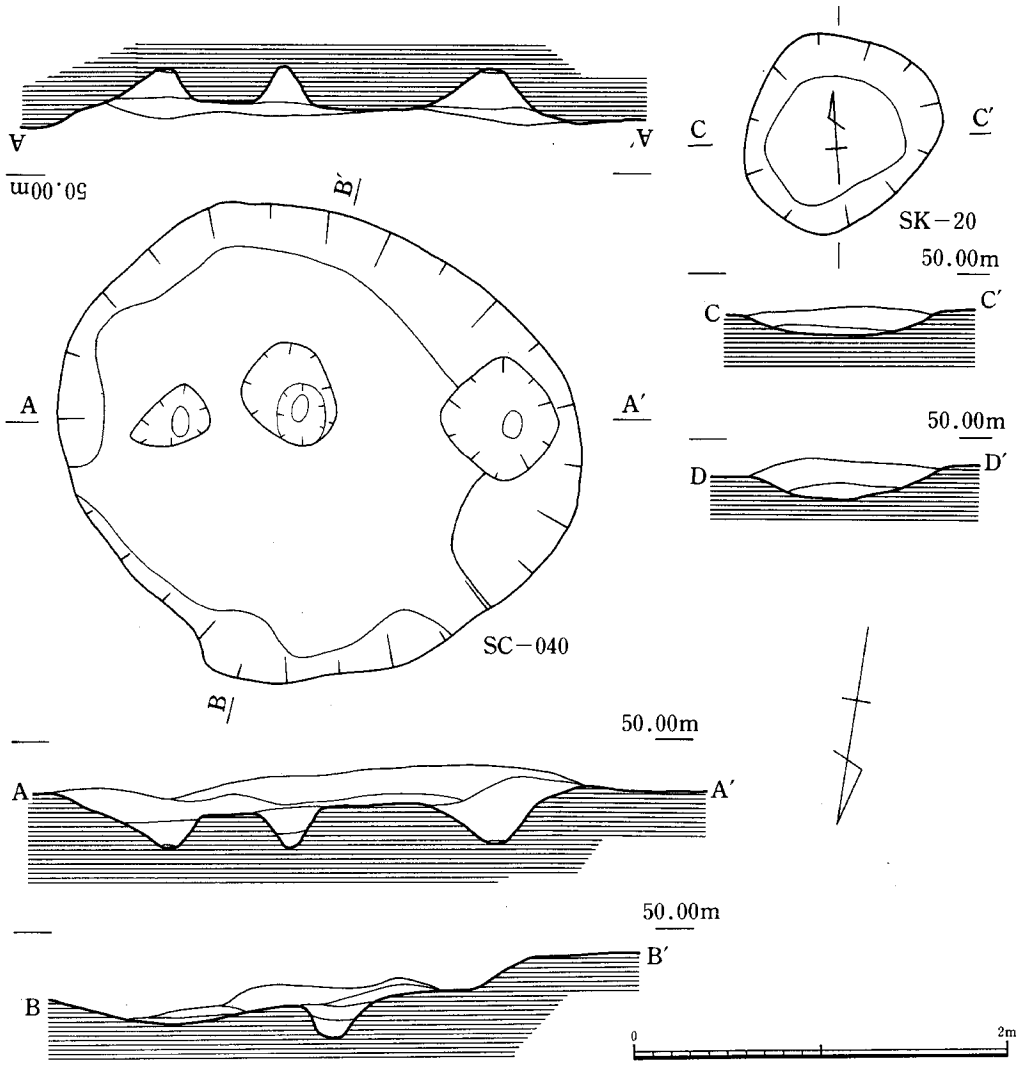


Fig.68　第40号住居址(SC－040)，第10号土壙(SK－10)実測図

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＥ－37，38，Ｆ－37，39グリットにわたって検出した遺構である。第23号土壙と重複関係にあり，第23号土壙に切られている。長径2.74m，短径2.12mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面の東側に片寄って120cm×55cm，深さ12cmの不整楕円形プランの土壙が掘り込まれている。床面の壁際および壁にそって５個の柱穴状のピットがまわっている。ピットは径30～60cm，深さ10～50cmである。

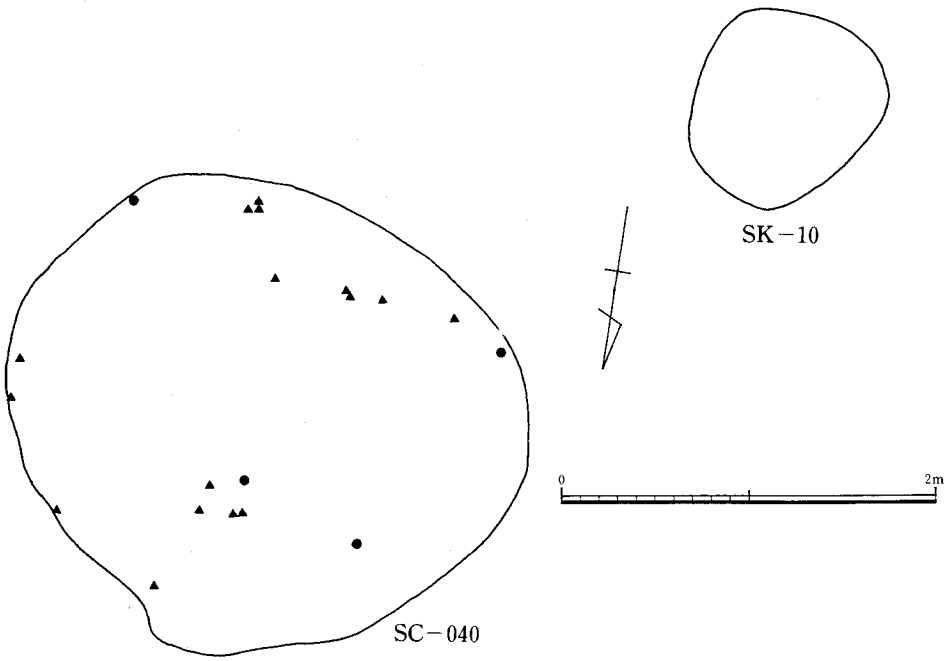


Fig.69　第40号住居址遺物出土状況

竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(42)　第42号住居址（ＳＣ－042）(Fig. 71)

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＦ－36，Ｇ－35，36，Ｈ－35，36グリットにわたって検出した遺構である。第43号竪穴住居址と重複関係にあり，第43号竪穴住居址を切っている。長径3.0m，短径2.2mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～35cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。壁にそって南東方向に相対する２個のピットがあり，これが主柱穴になると考えられる。柱穴は径20cm前後で深さ15～20cm，柱穴より西側の床面には径60cm，深さ10cmと95cm×65cm，深さ15cmの不整楕円形のピットが掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 72）

竪穴住居址は良好に残っているが，遺物量はきわめて少ない。これは遺構上部が削平されていることと大きな関連性があるものと思われる。遺物は竪穴の北側にやや多いが散発的である。

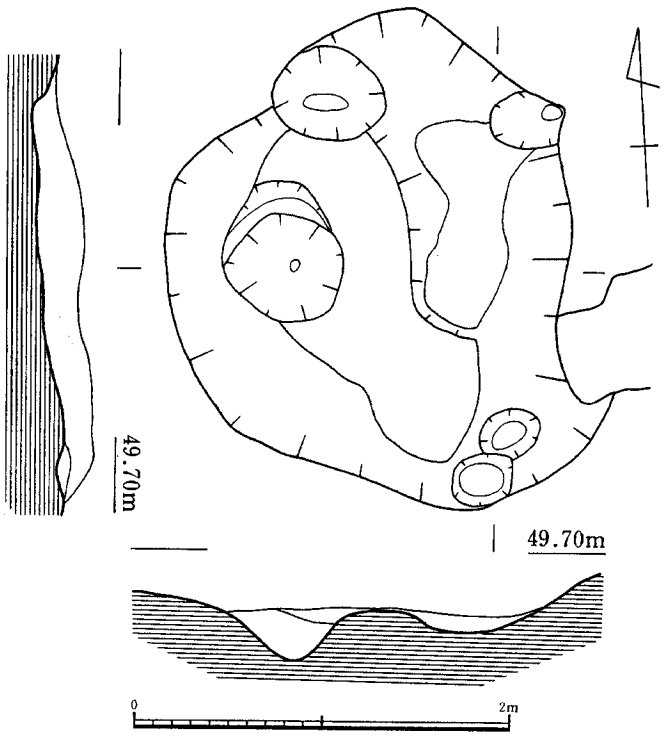


Fig.70　第41号住居址(SC－041)実測図

周辺部から流れ込んだものであろう。土器2点，石器，石片7点がある。

土器（Fig. 72－1）

1点を図示した。1は胴部破片，外面には楕円押型文を横走施文している。器面の保存状態が良好でなく，押型文原体の大きさ，文様単位は不明。内面は斜方向の条痕調整後，板ナデ調整を加えている。胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で，色調は黄褐色をなす。

石器（Fig. 72）

772はｏｂ－ａ製の石鏃である。二等辺三角形で，浅い抉りを持つ。先端部を欠損している。長さ19.0＋α㎜，巾12.5㎜，重さ0.5＋α ｇを測る。589はサヌカイト製の横型の石匙である。舌部を欠損している。刃部は表面からの剝離ののち，背面側から連続した剝離によって形成している。右側部に抉り状の凹みがあり，縦型の石匙を転用した可能性もある。現存で長さ60.5㎜，巾33.0㎜，厚さ10.0㎜を測る。584はｏｂ－ａ製のＵｆである。横長剝片の打面部と左側辺の一部を使用している。長さ13.0㎜，巾20.5㎜，厚さ3.0㎜を測る。

(43) 第43号住居址（ＳＣ－043）(Fig. 71)

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＧ－36，Ｈ－36，37，Ｉ－36，37グリットにわたって検出した遺構である。第42，45号竪穴住居址，第25号土壙と重複関係にあり，第45号竪穴住居址を切り，第42号竪穴住居址，第25号土壙に切られている。長径2.9m以上，短径2.1m以上の隅丸長方形プランをなすと考えられる竪穴住居址であるが，東側壁が明確でない。深さ20cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦である。南東隅に110cm×90cm，深さ20cmのピットが掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石の剝片，チップが出土している。

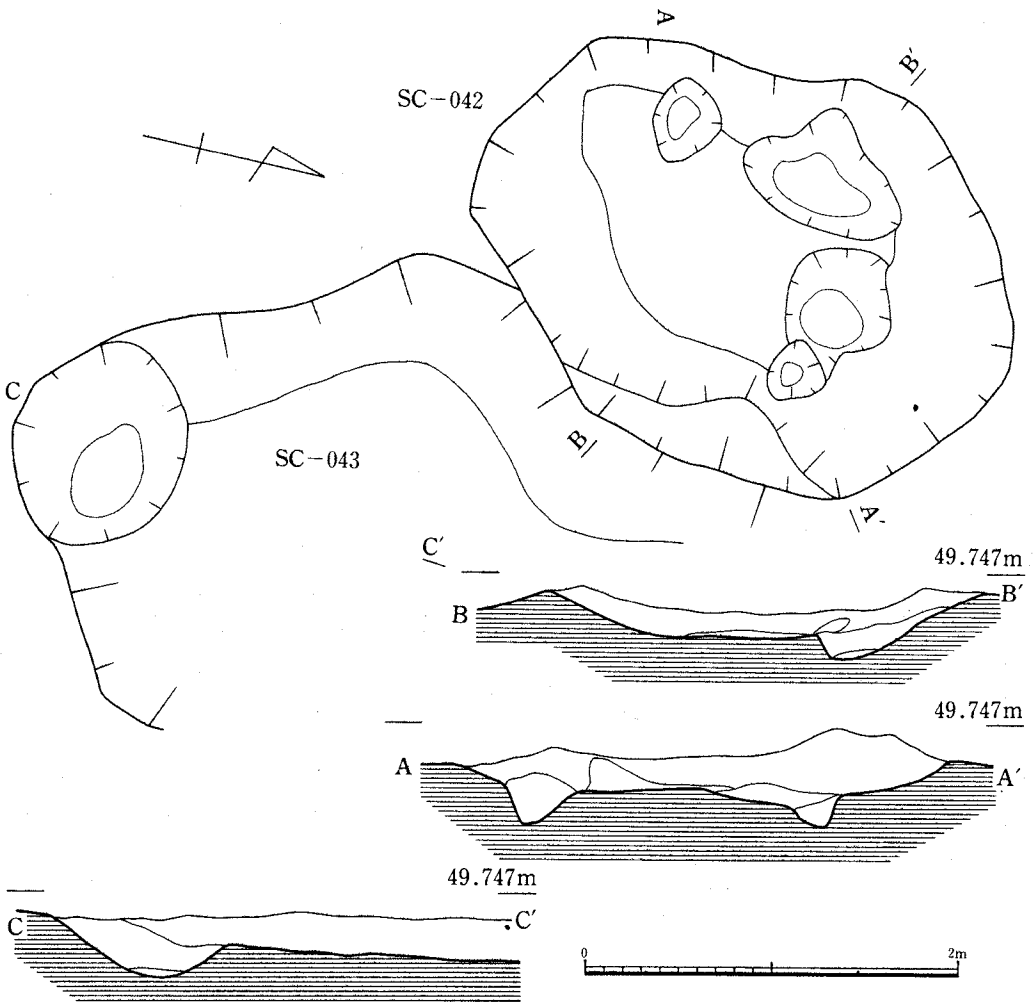


Fig.71　第42，43号住居址(SC－042，043)実測図

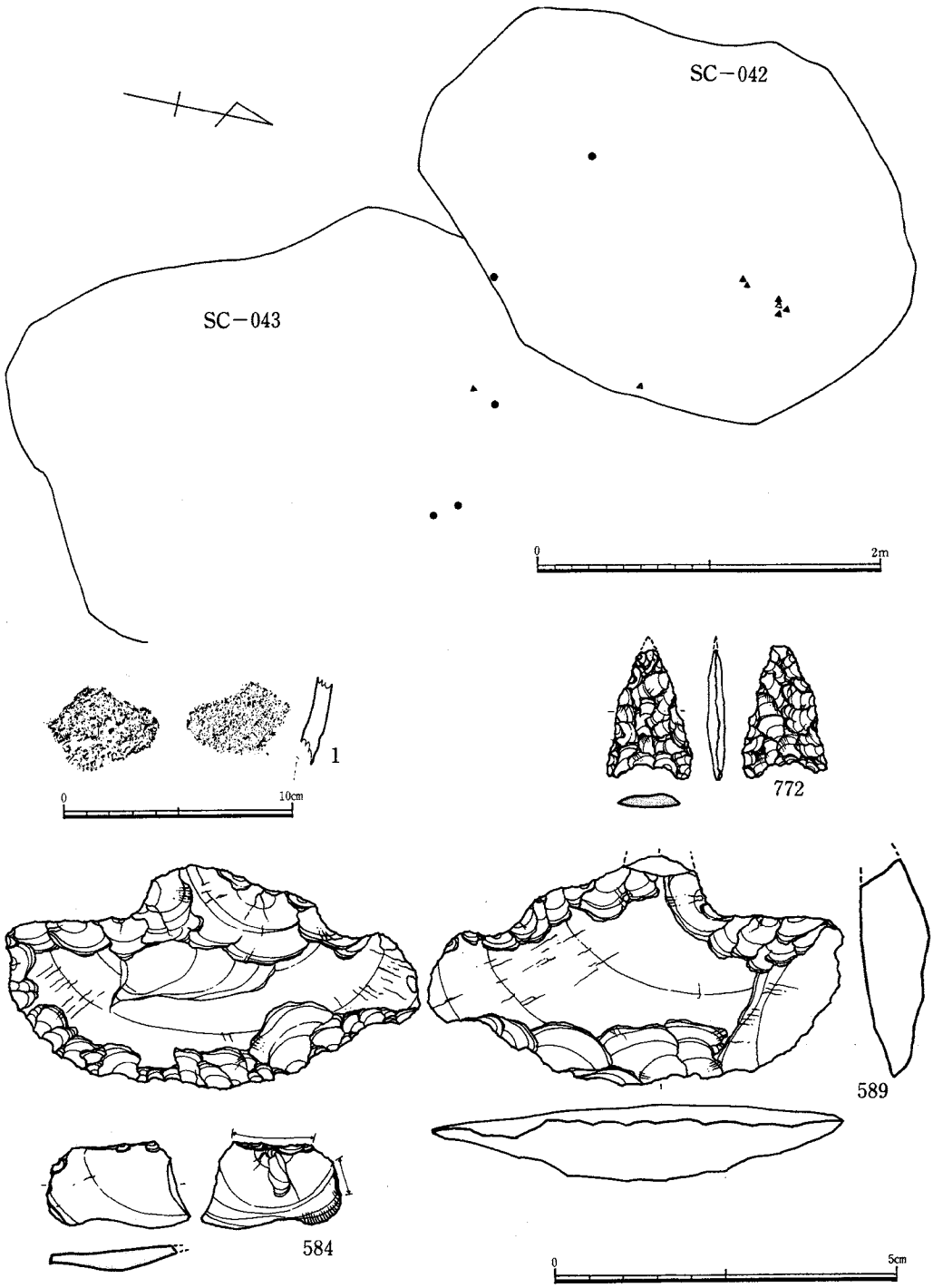


Fig.72　第42，43号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

Fig.73　第43号住居址出土遺物実測図

遺物出土状（Fig. 72）

竪穴住居址の遺存状態が不良であるために出土遺物の量は少ない。北側，第42号住居址近くに土器３点，石片１点が出土している。

土器（Fig. 73－1.2）

２点を図示した。１，２共に外面に楕円押型文を横走施文している。押型文の施文にあたって同一個所で二度重複して施文しているために押型文原体の大きさ，文様単位は明らかにし得ない。内面は丁寧なナデ調整である。器壁は0.4cm前後で非常に薄い土器である。胎土には石英，長石の砂粒が含まれるが良質である。焼成は良好で，色調は赤褐色をなす。１，２は同一個体である可能性が強い。

(44)　第44号住居址（ＳＣ－044）（Fig. 74）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面の崖の縁辺部，Ｉ－36，37，Ｊ－36，37，Ｋ－36，37グリットにわたって検出した遺構である。第47竪穴住居址，第26号土壙と重複関係にあり，第47号竪穴住居址を切り，第26号土壙に切られている。長径2.75m，短径2.4m以上の不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ25～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，壁にそった北東方向に相対する２個の柱穴がみられ，さらにその東側床面にも柱穴と平行して２個の柱穴が存在する。主柱穴は径40cm，深さ20cmで他の柱穴は径30cm，深さ25cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 74）

竪穴住居址は良好に残存しているが，遺物の出土量はきわめて少ない。遺構上半部が削平されているためであろう。竪穴の全面に分布しているようであるが北半部に集まる傾向にある。周辺部からの流れ込みであろう。土器３点，石片６点がある。

土器（Fig. 74－1）

１点を図示した。１は胴部破片。外面は丁寧に器面調整後にアナダラ貝の腹縁部を縦位，斜位に押圧して文様施文している。内面は丁寧なナデ調整，器壁は厚さ0.9cm前後。胎土に石英，

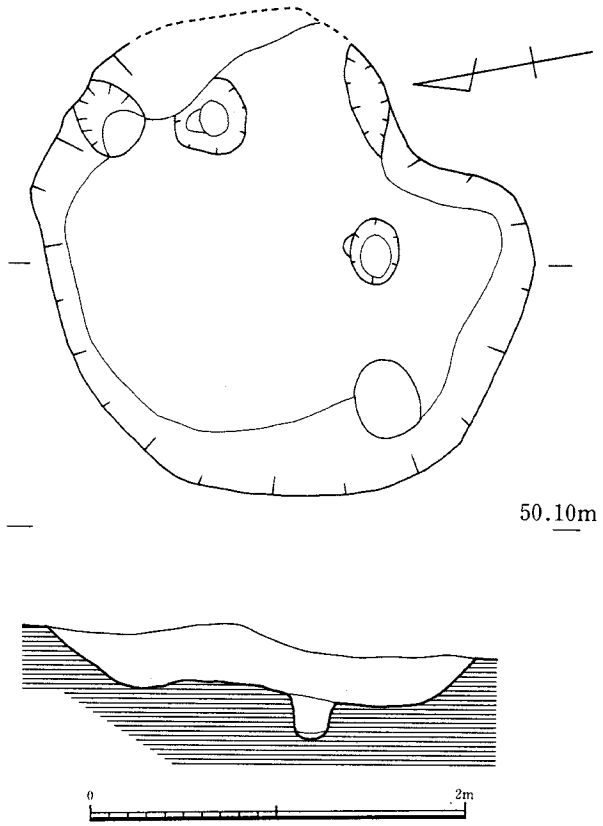


Fig.74　第44号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

長石，雲母の砂粒を混入している。焼成は良好で，色調は内外面共黒褐色をなす。鹿児島地方の吉田式，下剝峯式土器に類似している。

(45)　第45号住居址（ＳＣ－045）(Fig. 76)

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＨ－37，38，Ｉ－37，38グリットにわたって検出した遺構である。第43号，47号竪穴住居址と重複関係にあり，第43，47号竪穴住居址に切られている。長径2.75m，短径2.1mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ５～10cmと比較的浅い。壁のたちあがりはゆるやかで断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面の南，北，東の３ヶ所に柱穴状のピット各１個が存在する。ピットは径30cm前後で深さ10～55cmで他の住居址のピットと比較し深い。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

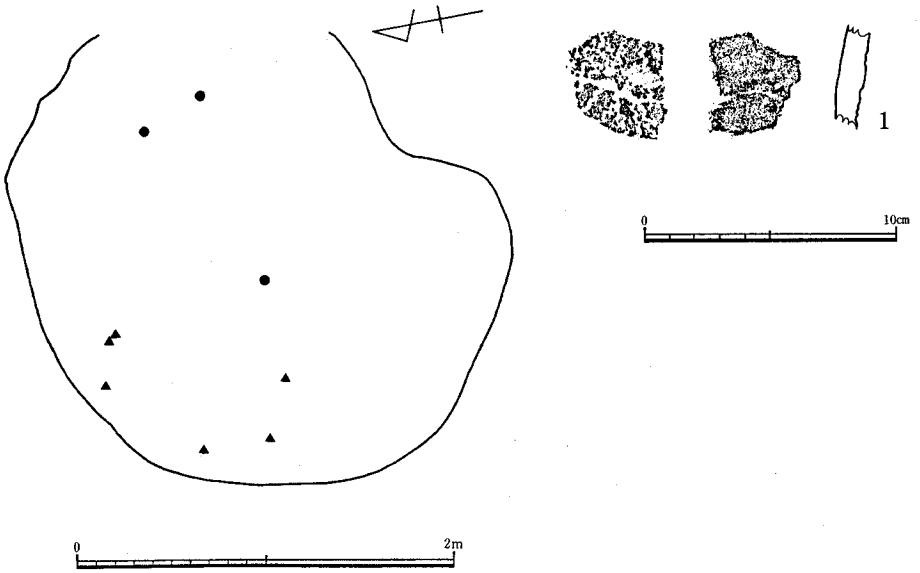


Fig.75　第44号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

(46)　第46号住居址（ＳＣ－046）(Fig. 76)

発掘調査区の南西端に近い，Ｈ－38，39，Ｉ－38，40，Ｊ－39グリットにわたって検出した遺構である。第48号竪穴住居址と重複関係にあり，第48号竪穴住居址に切られている。長径3.1ｍ以上，短径2.6ｍ以上の楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられるが，北側の壁が削平され明確でない。深さ15～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなすが，ほぼ平坦である。床面には６個のピットが存在する。ピットは径30cm～50cmで，深さ10～50cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 76）

竪穴住居址の遺存状態は良好でないが，比較的遺物の出土をみた。遺物は中央部に集中する

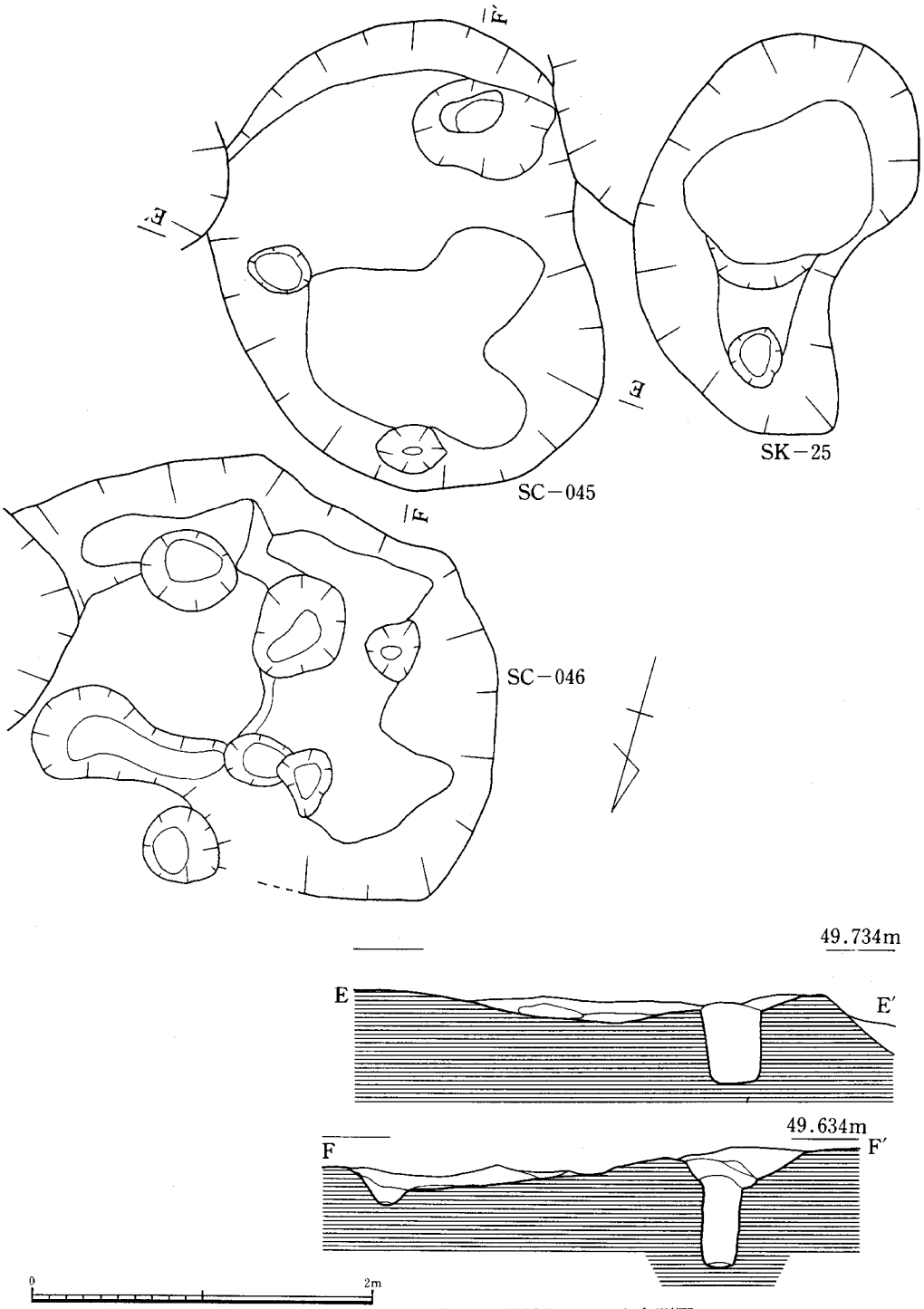


Fig.76　第45，46号住居址(SC－045，046)，第25号土壙(SK－25)実測図

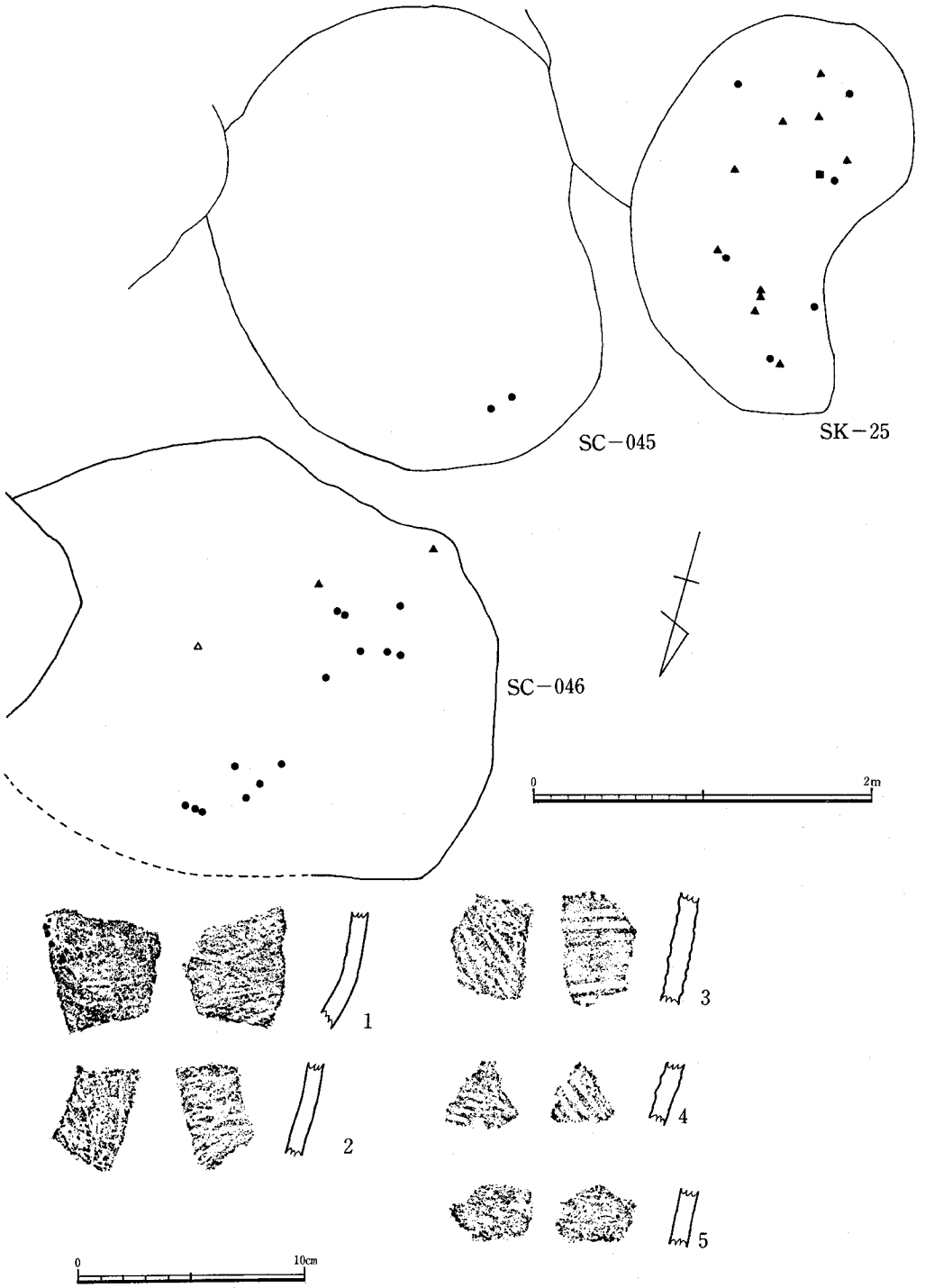


Fig.77　第45，46号住居址，第25号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

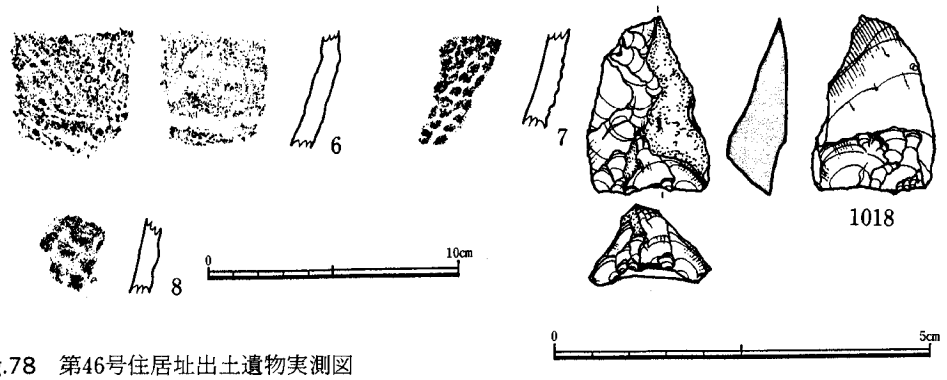


Fig.78　第46号住居址出土遺物実測図

傾向がみられる。周辺部より流れ込んだものであろう。土器14点，石片３点があり，土器の量は比較的多い。

土器（Fig. 76,77－1～8）

７点を図示した。１は胴部破片。外面は横位，斜位の貝殻条痕調整後，ヘラナデによって調整を加えている。内面も同様の調整がおこなわれているが，さらに細かい横方向の条痕が部分的に加えられている。２は外面は貝殻条痕調整後，縦方向のヘラナデ調整，内面は横方向の貝殻条痕調整後ナデ調整を加えている。３は胴部破片，外面は斜位方向に荒い貝殻条痕調整を加え，さらにナデ調整を加えている。内面は横方向の貝殻条痕調整。外面にススが付着している。４は外面が横方向，内面が斜方向の貝殻条痕調整であるが，条痕は内側が大きい。５は内外面共ナデ調整。６は胴部破片，外面に斜位の貝殻条痕を施す。７，８も胴部破片である。外面に楕円押型文を横走施文する。破片が小さいので原体の大きさ，文様単位は不明。楕円文は７が小さい。以上の土器は胎土に石英，長石の砂粒を比較的多く含んでいる。焼成は良好で，色調は１が外面灰褐色，内面黒色。２，３が外面赤褐色，内面黒褐色，他は赤褐色をなす。

石器（Fig. 78）

1018はｏｂ－ａ製のＲＦである。素材剥片の頭部側を両面から加工しており，エンドスクレイパー状の刃部を形成している。長さ23.0㎜，巾16.3㎜，厚さ8.0㎜を測る。

(47)　第47号住居址（ＳＣ－047）（Fig. 79）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＩ－38，Ｊ－37～39，Ｋ－38，39グリットにわたって検出した遺構である。第44号，45号，48号竪穴住居址，第26号土壙と重複関係にあり，第45号，48号竪穴住居址・第26号土壙を切り，第44号住居址に切られている。長径3.85m，短径2.65m

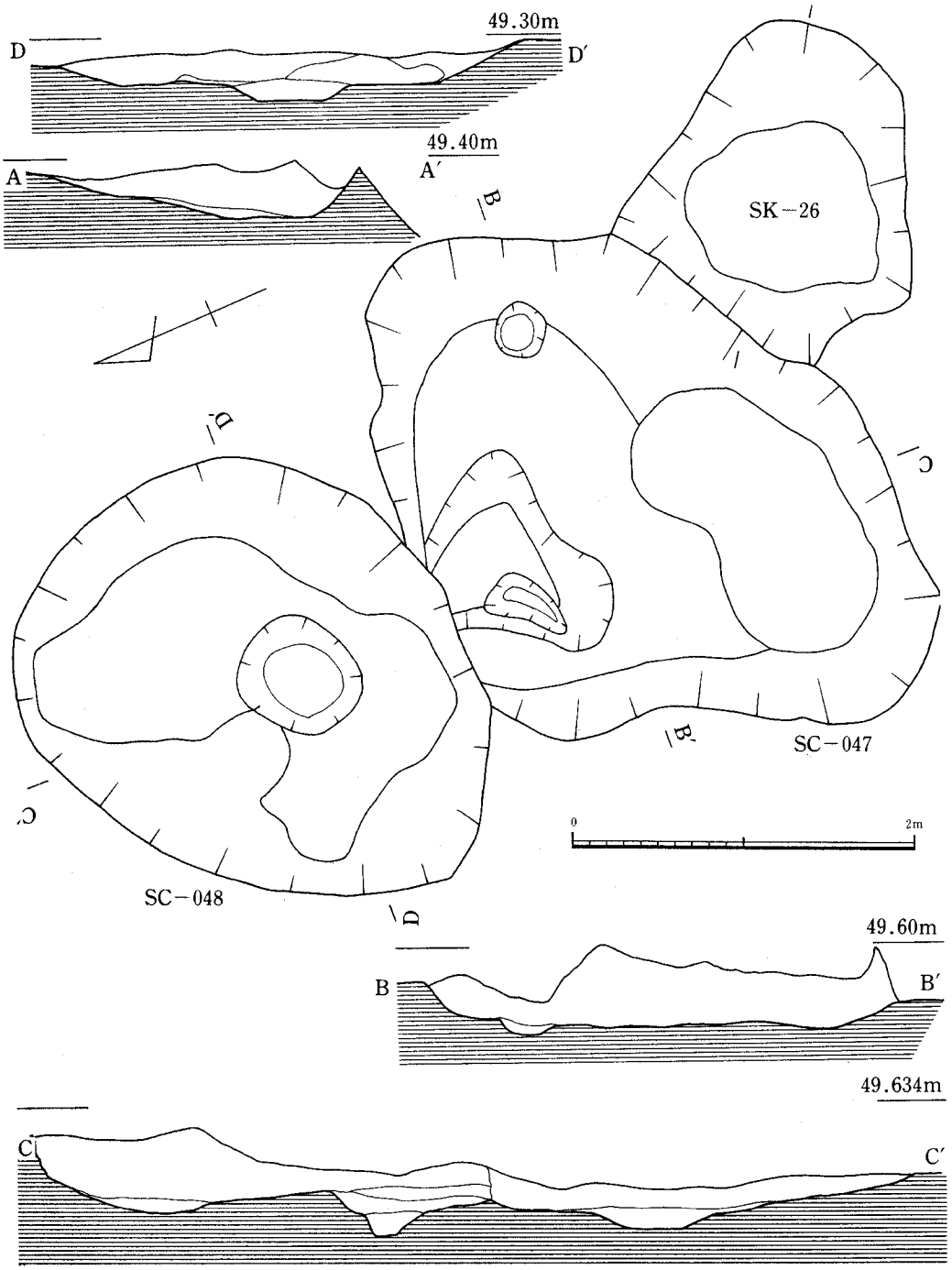


Fig.79　第47，48号住居址(SC－047，048)，第26号土壙(SK－26)実測図

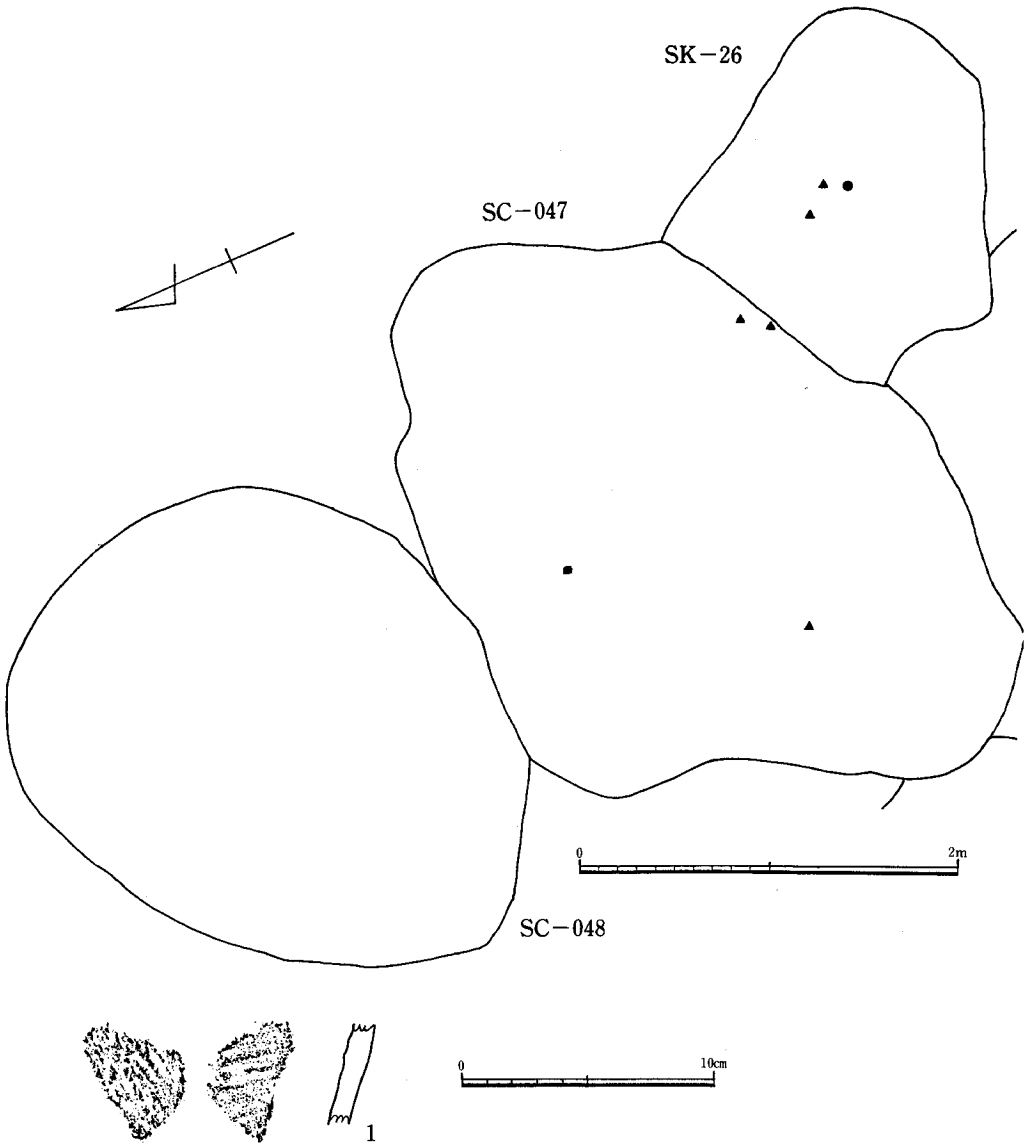


Fig.80　第47，48号住居址，第26号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

の不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～50cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。竪穴の北に片寄った東西に相対して柱穴状のピット各１個が存在する。ピットは径35cm前後で深さ10cmである。西側のピットは120cm×110cmの不整形の浅い土壙の中に存在している。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 80）

竪穴住居址の遺存状態は比較的良いが遺物の出土量はきわめて少ない。竪穴中央部と西側縁辺に出土している。いずれも周辺からの流れ込みであろう。土器１点，石片３点がある。

土器（Fig. 80－1）

１は胴部破片。外面に荒い斜方向の貝殻条痕調整が施され，内面は横方向の貝殻条痕調整である。胎土には多量の石英，長石の砂粒を混入している。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黄灰色である。外面にススの付着がみられる。

(48) 第48号住居址（ＳＣ－048）（Fig. 79）

発掘調査区の中央部・丘陵東斜面のＩ－39，Ｊ－39，40，Ｋ－39，40グリットにわたって検出した遺構である。第47号竪穴住居址と重複関係にあり，第47号竪穴住居址に切られている。長径2.9m，短径2.3mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～45cmで，壁のたちあ

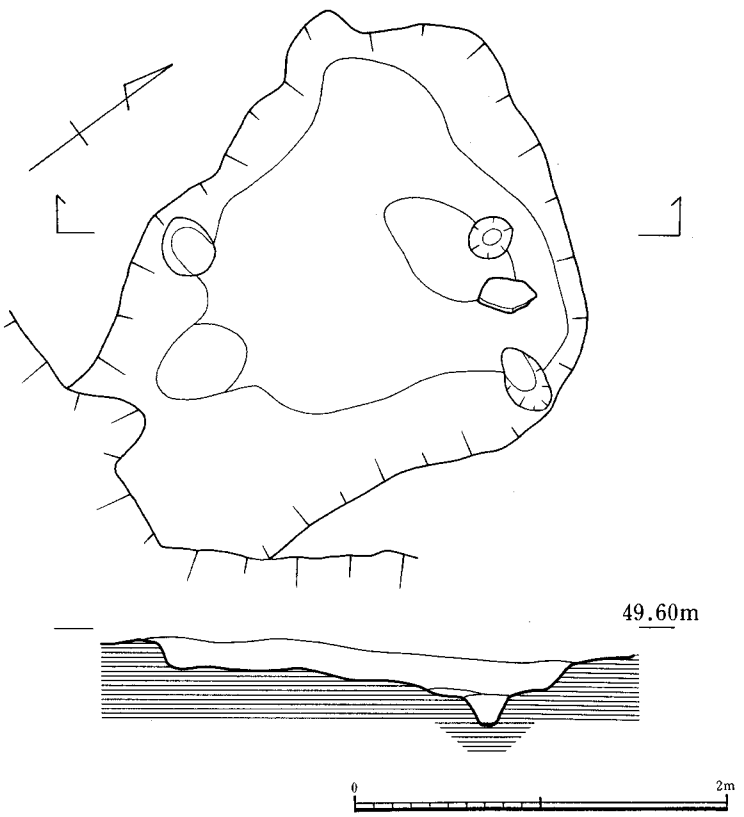


Fig.81　第49号住居址（SC－049）実測図

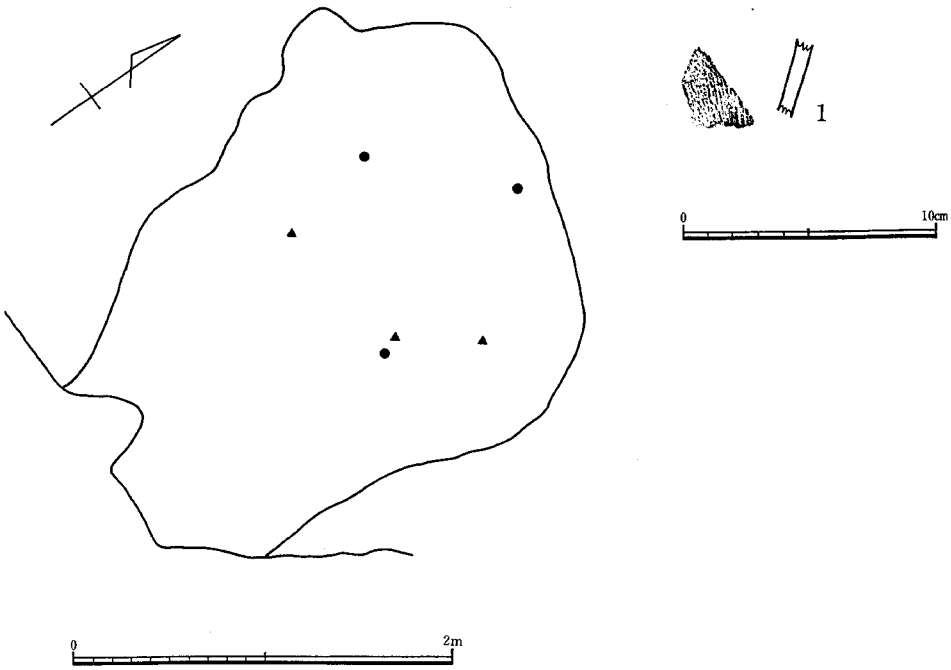


Fig.82　第49号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

がりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形のプランでほぼ平坦である。床面の中央部に70cm×60cm，深さ10cmの楕円形の掘り込みが存在する。柱穴状のピットは存在しない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(49)　第49号住居址（ＳＣ－049）(Fig. 81)

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面の崖の縁辺部のＫ－38，Ｌ－37，38グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。崖によって一部破壊されている。長径2.8m以上，短径2.5mの不整形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦で，東西の相対する床面に各２個の柱穴状の浅いピットが存在する。ピットは径20cm～50cmで，深さ５～18cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

遺物出土状況（Fig. 82）

竪穴住居址の遺存状態は比較的良いが遺物の量は少ない。遺構の上部が削平されているため

であろう。遺物の集中部はみられない。土器３点，石片３点がある。

土器（Fig. 82－1）

いずれも小破片である。１点を図示した。１は胴部破片。外面に縦方向で刷毛目調整痕がみられる。弥生式土器の胴部である。混入品とみられる。他の土器は小破片であるが縄文式土器である。

(50) 第50号住居址（ＳＣ－050）（Fig. 83）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＫ－39，40，Ｌ－39，40グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。長径2.3m，短径1.95mの楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなし，土壙状に１段深くなるが，ほぼ平坦である。床面中央よりやや西に片寄って径25cm，深さ20cmの柱穴状のピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

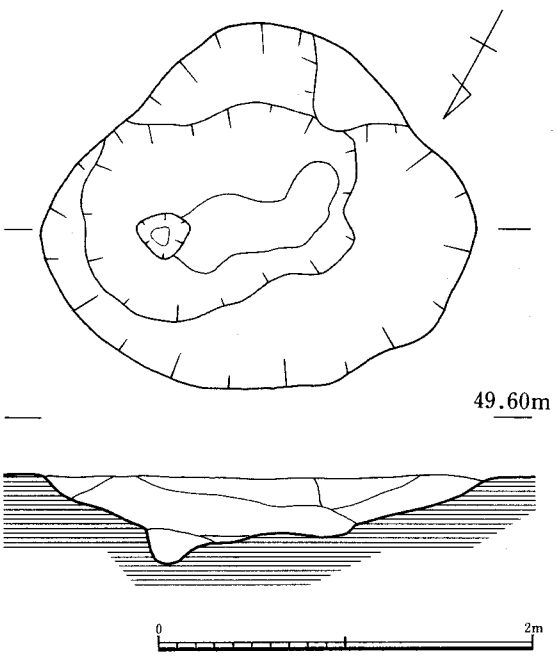


Fig.83　第50号住居址(SC－050)実測図

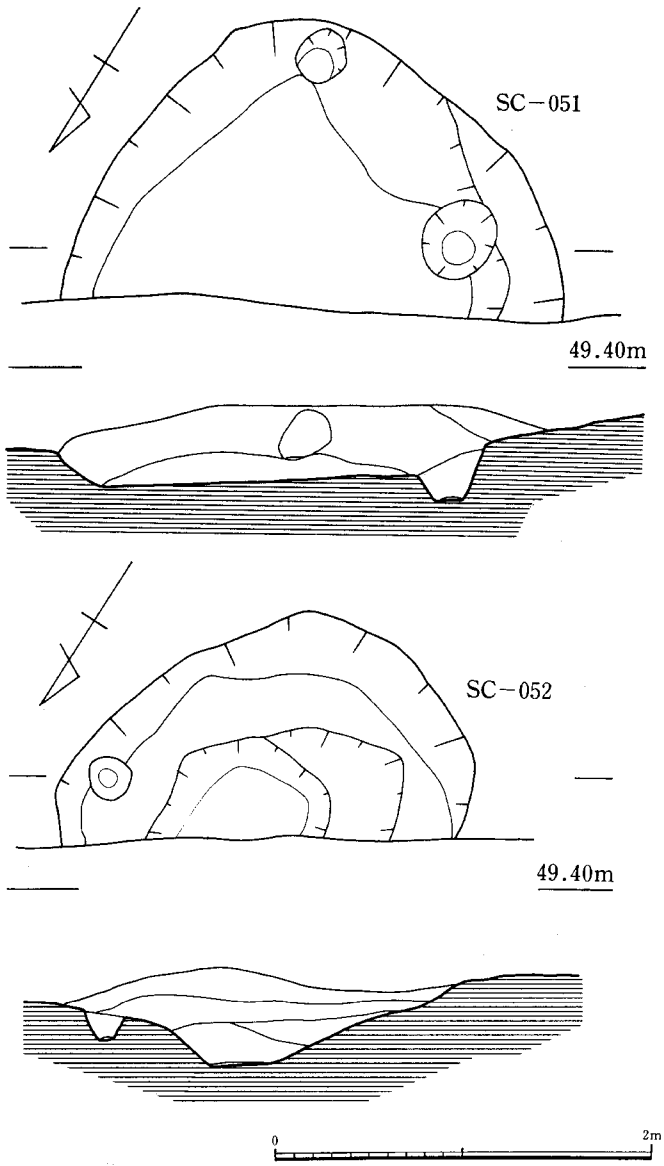


Fig.84　第51，52号住居址(SC－051，052)実測図

(51)　第51号住居址（ＳＣ－051）(Fig. 84)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，イ－39，40，Ａ－39，40グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。一部発掘区外にのびるが，

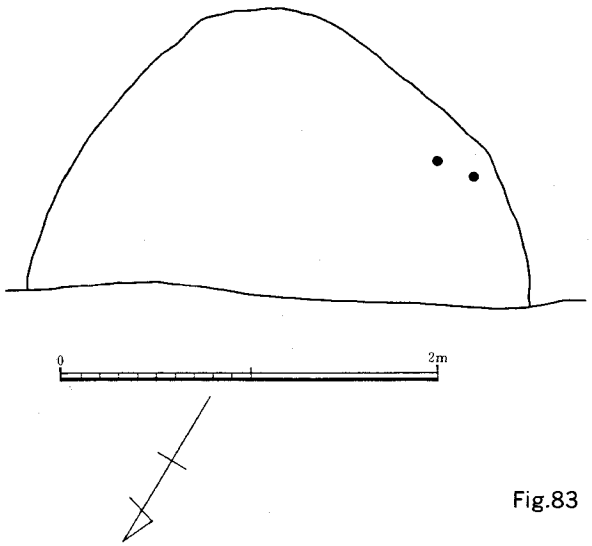


Fig.83　第51号住居址遺物出土状況

発掘区外は遺存状態がきわめて悪いと考えられ，壁付近は痕跡をとどめる程度である。長径2.7m，短径1.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ30～40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで，ほぼ平坦である。南側の壁の２ヶ所にピットが存在する。ピットは径30cm～40cmで，深さ20～30cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(52)　第52号住居址（ＳＣ－052）(Fig. 84)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｂ－40，41，Ｃ－41グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。一部発掘区外へのびるが状況は第51号竪穴住居址と同様である。長径1.9m以上，短径1.6m以上の楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ30～50cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は楕円形プランでほぼ平坦である。床面の中央に80cm×70cm以上，深さ20cmの土壙が掘り込まれている。東側の壁付近に径20cm，深さ15cmのピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(53)　第53号住居址（ＳＣ－053）(Fig. 86)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｃ－40，41，Ｄ－40，41，Ｅ－41グリットにわたって検出した遺構である。第28号土壙と重複関係にあり，第28号土壙に切られている。長径2.7m，短径2.5mの不整円形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～20cmで，壁のたちあがりは

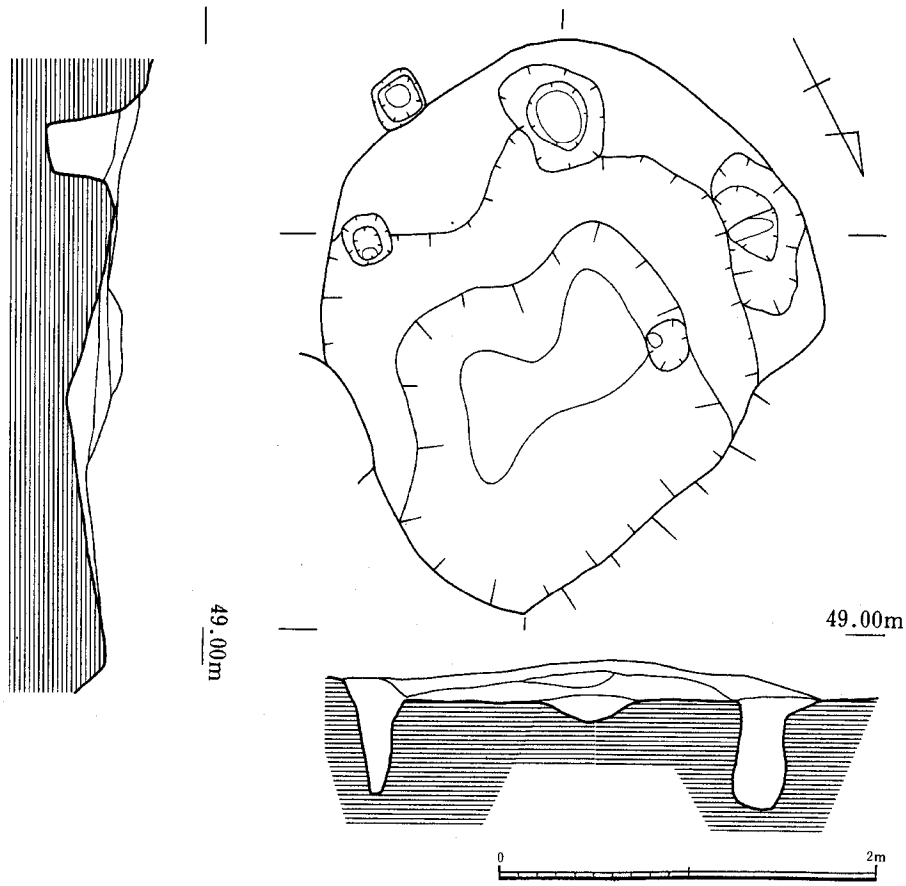


Fig.86　第53号住居址(SC－053)実測図

ゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで，ほぼ平坦であるが中央部にむかって深くなっている。床面に１ヶ所，南側の壁にそって３ヶ所柱穴状のピットが存在する。ピットは径25cm～40cmで深さ45～60cmである。また，壁の上面に１ヶ所に径30cm，深さ20cmのピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(54)　第54号住居址（ＳＣ－054）(Fig.　88)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｄ－42，Ｅ－42，43，Ｆ－42グリットにわたって検出した遺構である。第55号竪穴住居址と重複関係にあり，第55号竪穴住居址に切られている。一部発掘区外へのびるが，発掘区の壁際では痕跡が遺存している程度である。長径2.8m，短径

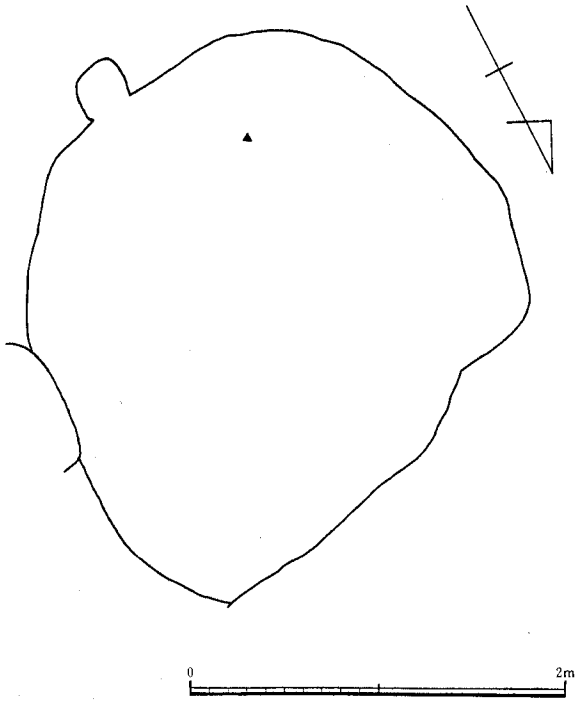


Fig.87　第53号住居址遺物出土状況

2.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ25～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は楕円形プランで，ほぼ平坦である。床面の中央に130cm以上×95cm，深さ40cmの土壙が掘り込まれている。柱穴状のピットは存在しない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より石器が出土している。

石器（Fig. 89）

1033はサヌカイト製の石鏃である。二等辺三角形でわずかに抉りがある。厚みが他に比べかなり厚い。長さ23.5mm，巾17.0mm，重さ21.5ｇを測る。

(55)　第55号住居址（ＳＣ－055）（Fig. 88）

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｅ－42，43，Ｆ－42，43グリットにわたって検出した遺構である。第54号竪穴住居址と重複関係にあり，第54号竪穴住居址を切っている。一部発掘区外へのびるが状況は第54号住居址と同じである。長径2.7m，短径2.4m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ30～40cmで，壁のたちあがりはゆるや

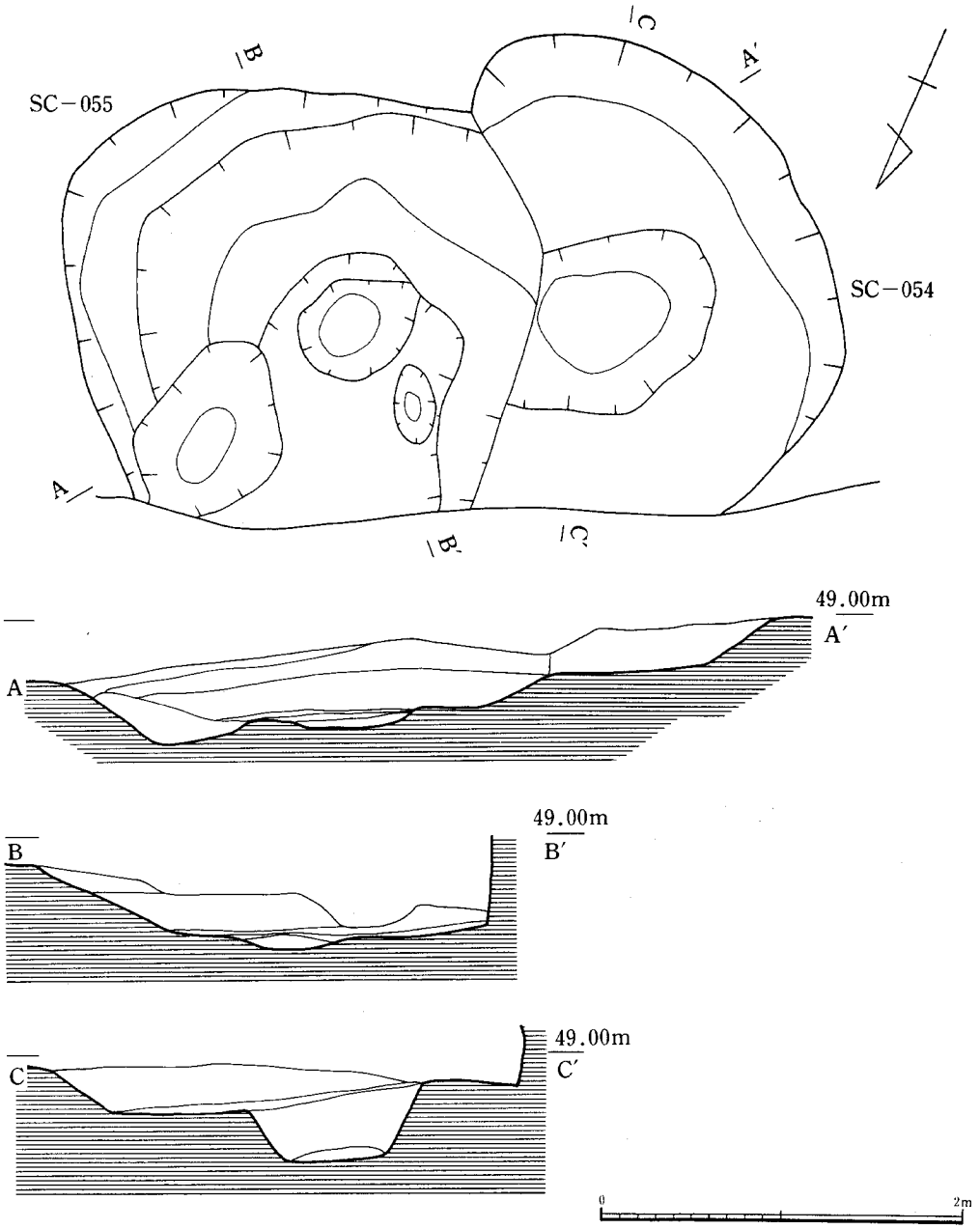


Fig.88　第54，55号住居址(SC－054，055)実測図

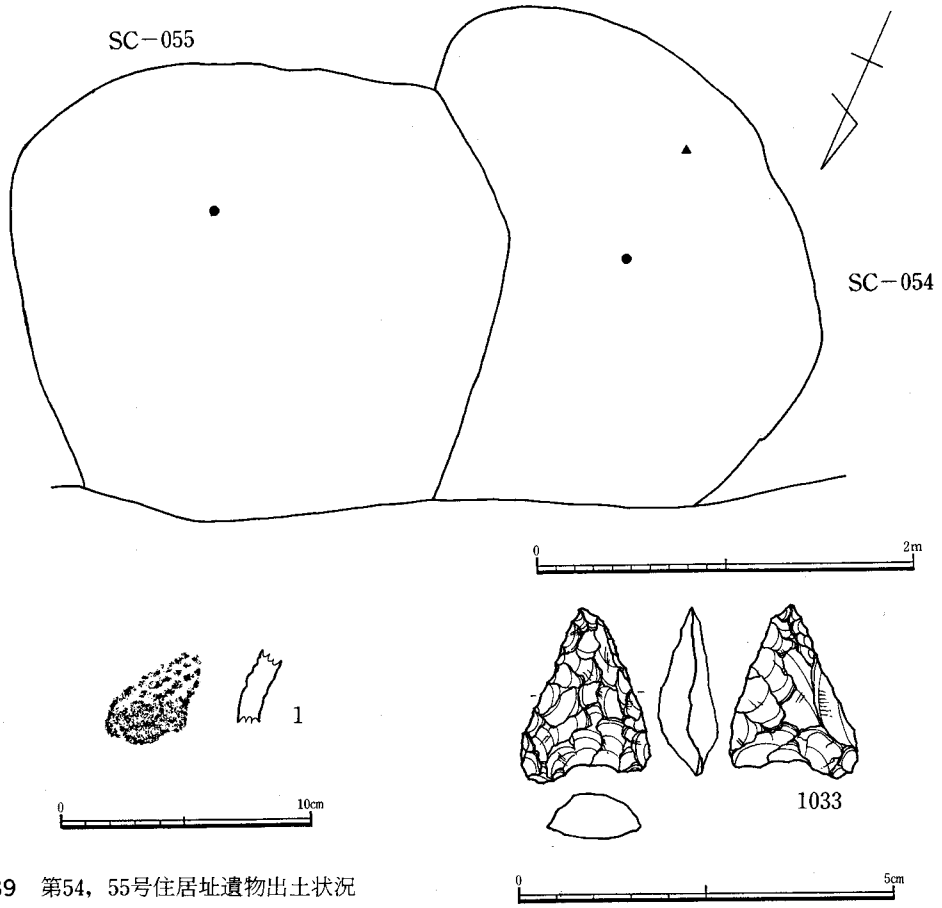


Fig.89　第54，55号住居址遺物出土状況

かで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面中央部に70cm×55cm，深さ10cmの楕円形の土壙と45cm×20cmの浅いピットが掘り込まれている。また北側の壁の部分にも100cm以上×80cm，深さ15cmの楕円形の土壙が掘り込まれている。柱穴状のピットは存在しない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

土器（Fig. 89－1）

1は口縁部付近の破片である。口縁部がやや外反すると考えられる。外面には楕円押型文が横走施文されるが，器面が荒れているために不鮮明。内面にも楕押型文が横走施文される。押型文の原体の大きさ，文様単位は明らかにしがたい。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質。焼成は良好で，色調は内外面共赤褐色をなす。

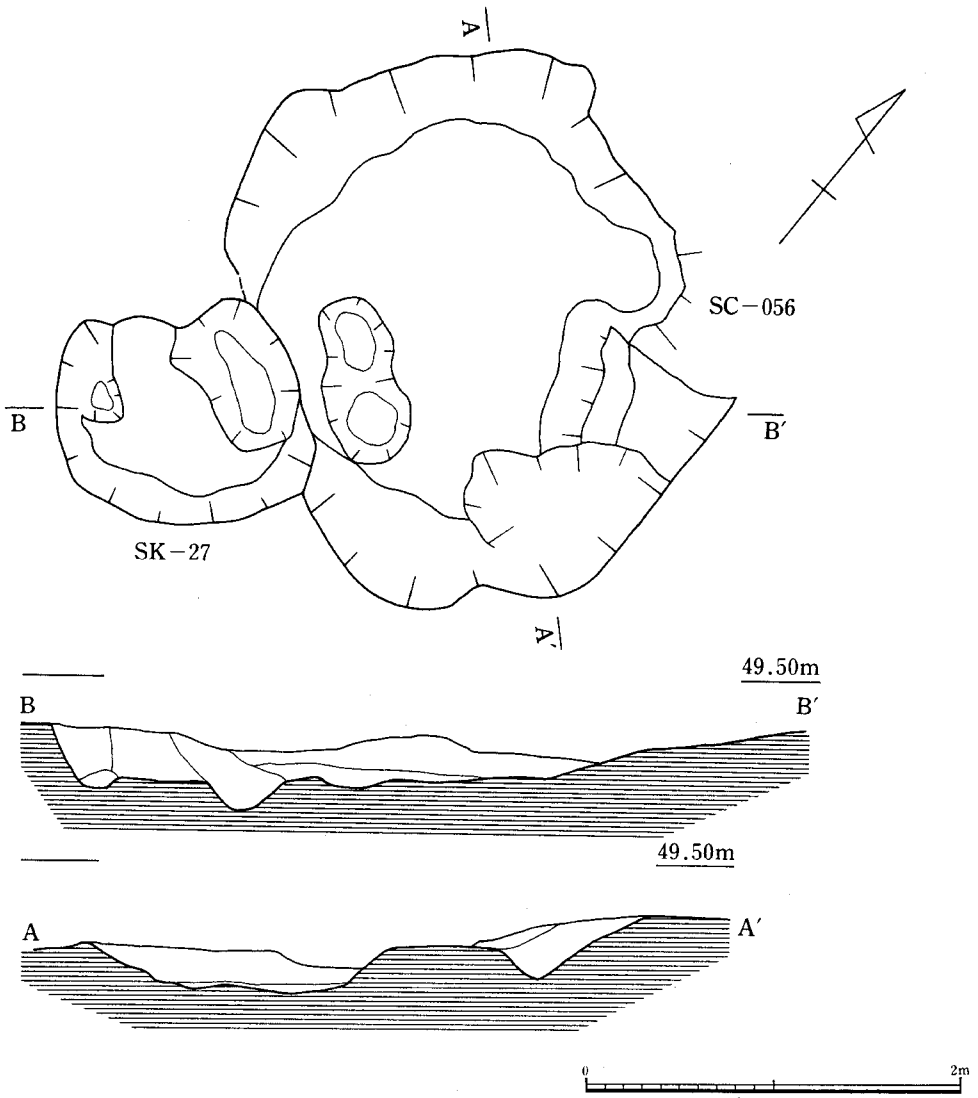


Fig.90　第56号住居址(SC－056)，第27号土壙(SK－27)実測図

(56)　第56号住居址（ＳＣ－056）(Fig. 90)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｆ－41，Ｇ－40，41グリットにわたって検出された遺構である。第27号土壙と重複関係にあり，第27号土壙に切られている。長径2.9m，短径2.3mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～20cmと浅く，かなり削平されている。壁

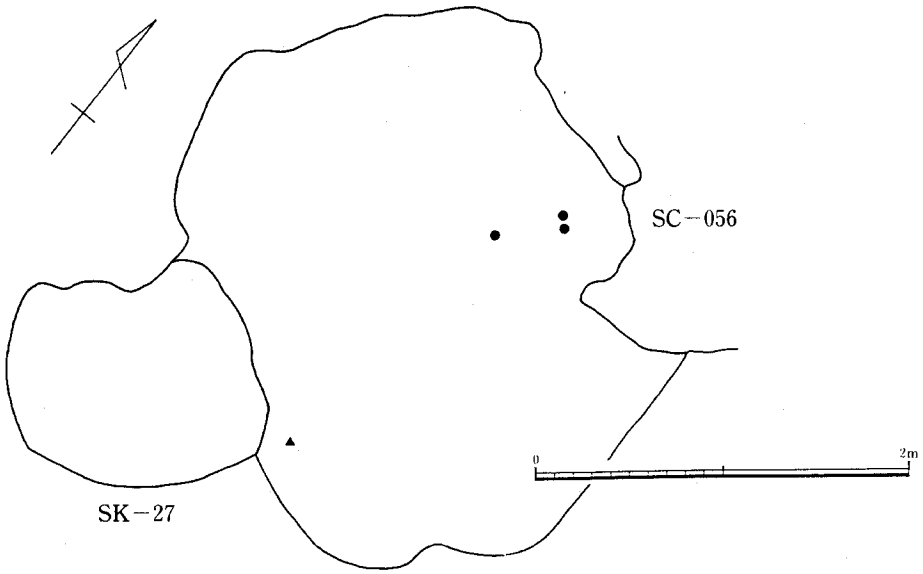


Fig.91　第56号住居址，第27号土壙遺物出土状況

のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで，ほぼ平坦である。床の南側片寄って90cm×40cm，深さ５cmの浅い楕円形の土壙が掘り込まれ，また東側壁には100cm×90cm，深さ20cmの不整形の土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

(57)　第57号住居址（ＳＣ－057）（Fig. 92）

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｈ－41，42，Ｉ－41，42グリットにわたって検出した遺構である。第58号，59号竪穴住居址と重複関係にあり，第58号竪穴住居址を切り，第59号住居址に切られている。長径1.6m以上（２m以上が考えられる），短径1.85mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで，ほぼ平坦である。壁にそった南北方向の相対する２ケ所に浅い柱穴状のピットが存在する。ピットは径20cm，深さ８～12cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

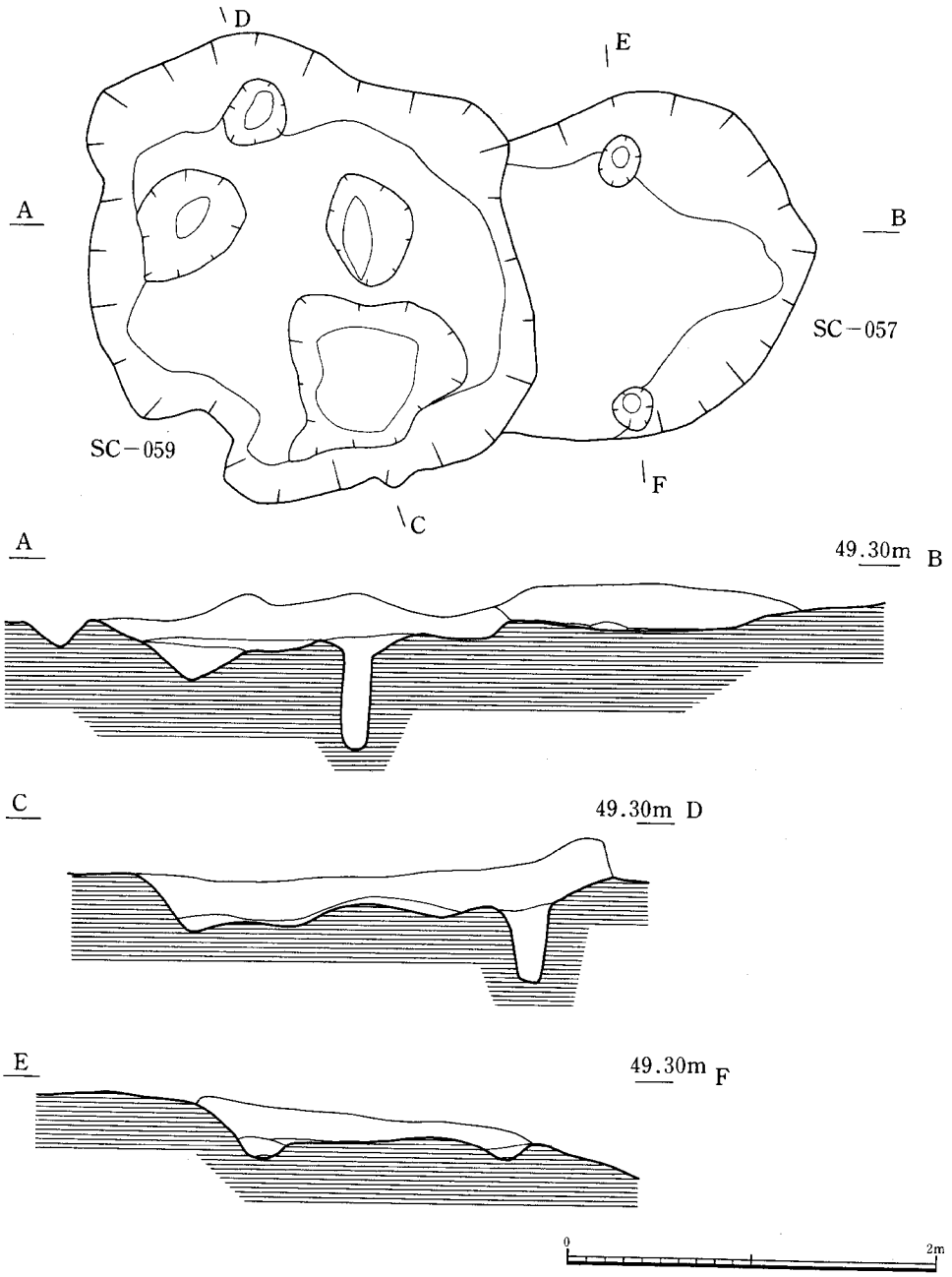
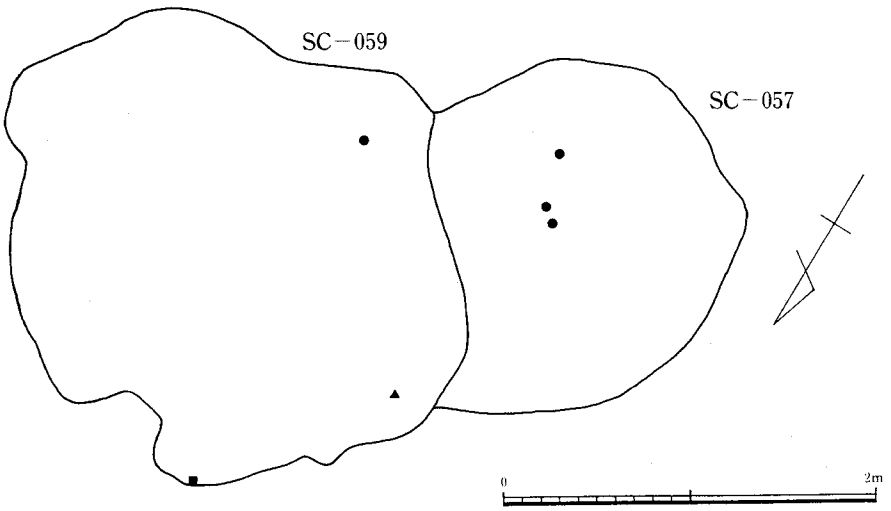


Fig.92　第57，59号住居址(SC－057，059)実測図



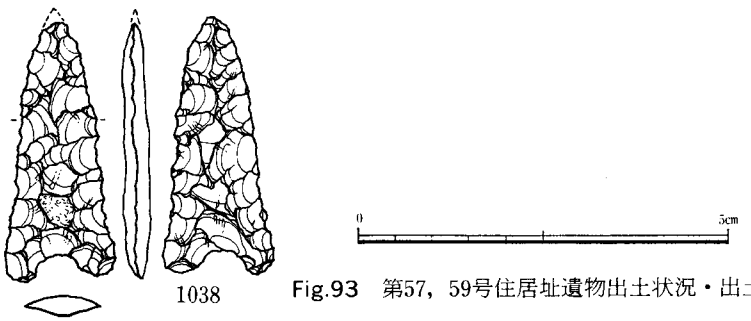


Fig.93　第57，59号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

⑸⑻　第58号住居址（ＳＣ－058）（Fig. 94）

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｇ－42，43，Ｈ－42，43，Ｉ－42，43グリットにわたって検出した遺構である。第58号，59号竪穴住居址と重複関係にあり，第58号，59号竪穴住居址に切られている。長径4.2m，短径2.4m以上の不整形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面はほぼ平坦であるが，平面プラン同様に不整形をなす。床面に１個，壁面に１個の柱穴がある。柱穴は径20cm前後で深さ25cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，石器が出土している。

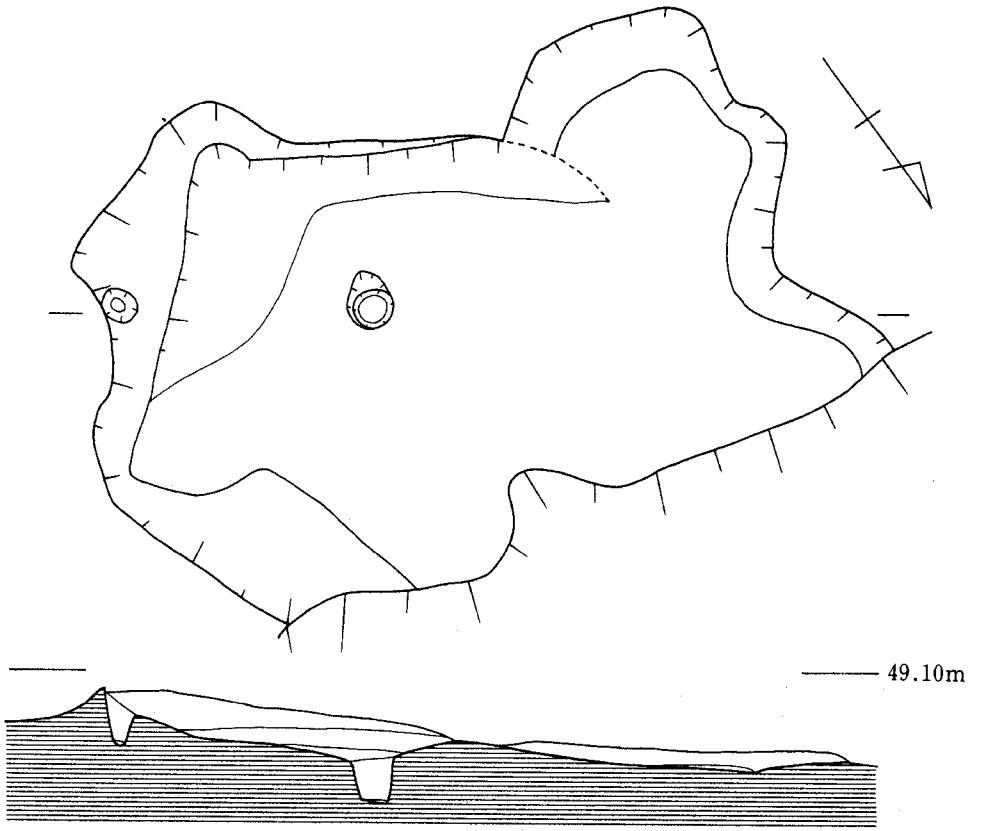


Fig.94　第58号住居址(SC－058)実測図

(59)　第59号住居址（ＳＣ－059）(Fig. 92)

発掘調査区の中央部，丘陵尾根線に近い，Ｉ－41～43，Ｊ－42グリットにわたって検出した遺構である。第57号，58号竪穴住居址と重複関係にあり，第57号，58号竪穴住居址を切っている。長径2.83m，短径2.45mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランでほぼ平坦である。床面には４ケ所に柱穴状のピット，土壙が存在する。ピットは径40～45cm，深さ40～60cmである。土壙は70cm×50cm，深さ20cm，85cm×90cm，深さ10cm前後である。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

石器（Fig. 93）

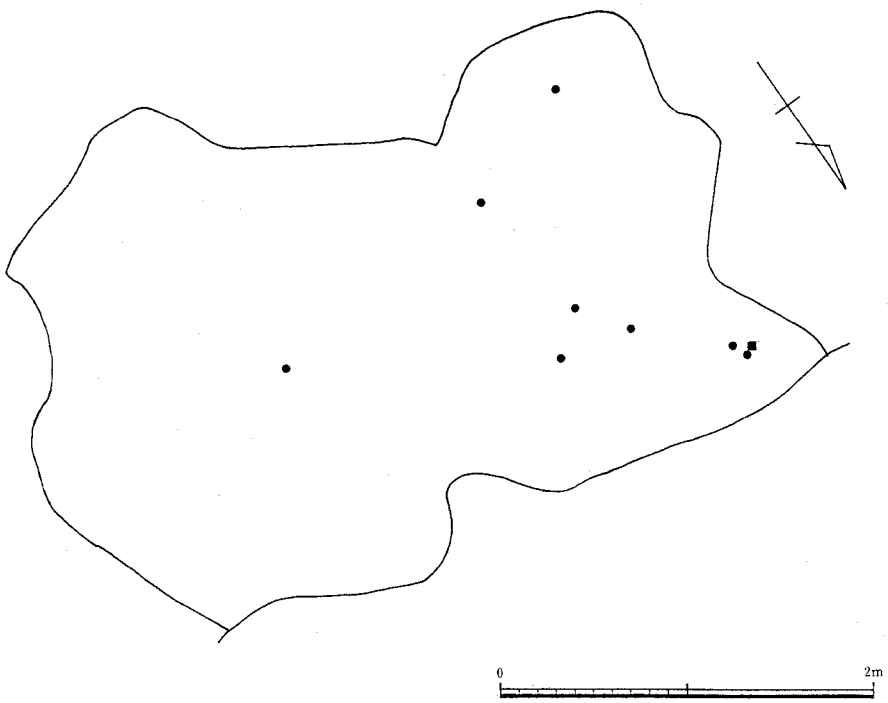


Fig.95　第58号住居址遺物出土状況

1038はサヌカイト製の長身の石鏃である。長幅比が2.40と他を凌駕している。基部にわずかに抉りをもつ。先端部を欠損している。長さ34.0＋α mm，巾15.0mm，重さ1.4＋α gである。

(60)　第60号住居址（ＳＣ－060）（Fig. 96）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面の崖の縁辺部のＯ－40，41グリットにわたって検出した遺構である。第61号竪穴住居址と重複関係にあり，第61号竪穴住居址を切っている。崖によって遺構の大部分が失われ，その遺存状態はきわめて悪い。長径2.25m以上，短径1.0m以上の円形プランないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで，ほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットは存在しない。規模，床面の構造から住居址でなく，土壙の可能性もある。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(61)　第61号住居址（ＳＣ－061）（Fig. 96）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面の崖の縁辺部のＮ－40，41，Ｏ－40，41グリットにわたって検出した遺構である。第60号竪穴住居址と重複関係にあり，第60号竪穴住居址に切られてい

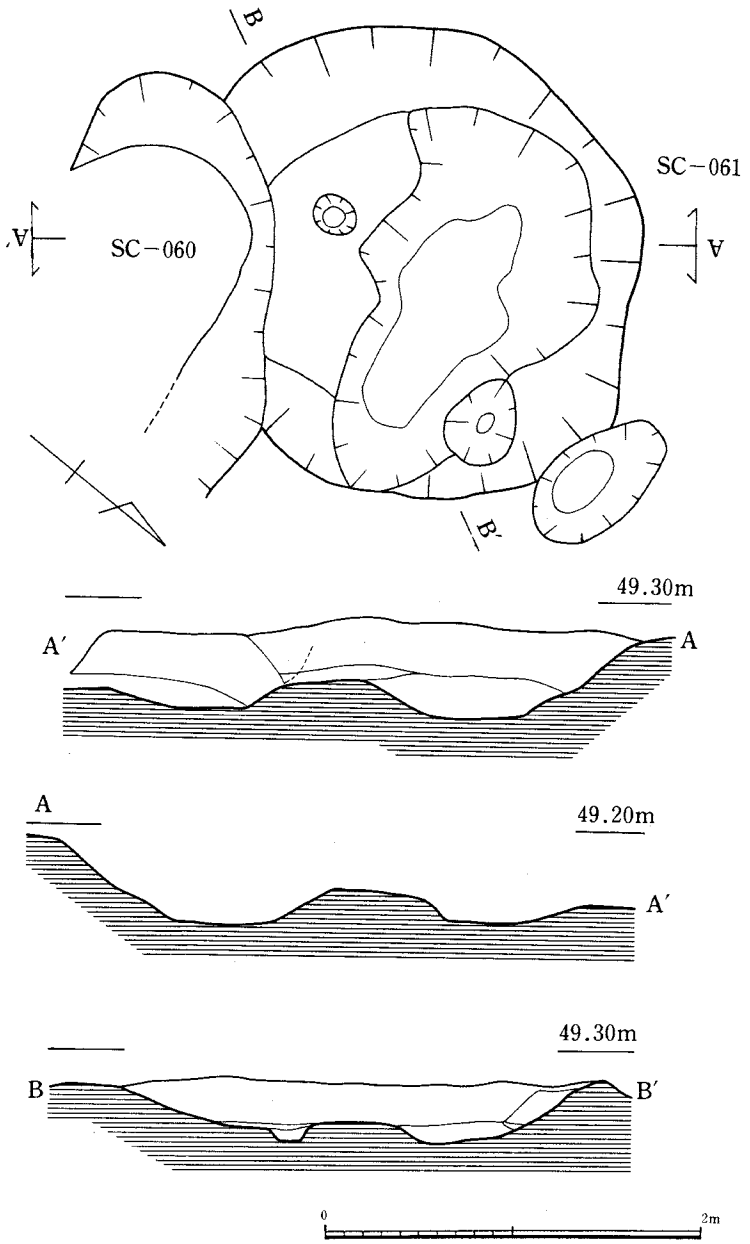


Fig.96　第60，61号住居址(SC－060，061)，第31号土壙(SK－31)実測図

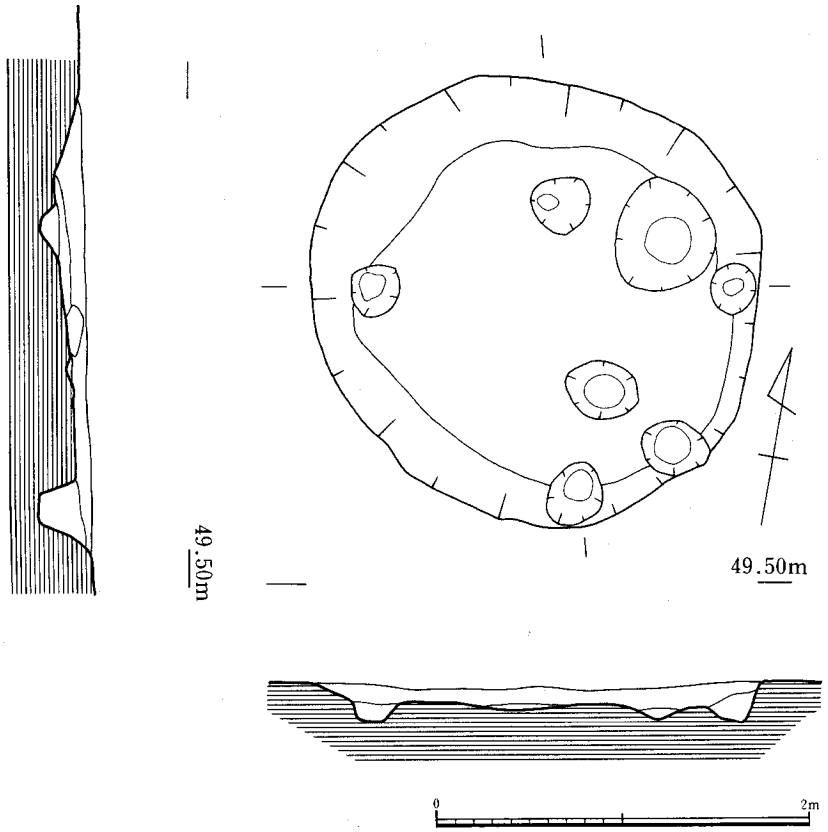


Fig.97　第62号住居址(SC－062)実測図

る。長径2.52m，短径2.2m以上の円形プランあるいは楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ30～50cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなし，ほぼ平坦であるが，中央部から西半部は土壙のため一段深くなる。土壙は215cm×115cmの不整楕円形で，深さ20cmで断面形は皿状をなす。この土壙をはさんで柱穴状ピット2個が南北に相対している。ピットは南が径20cm，深さ10cm，北が径45cm，深さ10cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(62)　第62号住居址（ＳＣ－062）(Fig. 97)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＭ－42，43，Ｎ－42，43グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。長径2.5m，短径2.3mの円形プランをなす竪穴住居址である。深さ７～15cmで，削平のため上部の遺存状態は良くない。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形プランをなしほぼ平坦であ

る。床面の北東壁に片寄って径55cmの土壙がある。柱穴状のピットは東西南北の相対する床面，壁に存在する4個と南東部に存在する2個の計6個がある。ピットは径25～30cm，深さ10～25cmで，竪穴の内側に向って傾斜している。竪穴の埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(63) 第63号住居址（ＳＣ－063）(Fig. 98)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－42，43，Ｑ－42，43グリットにわたって検出した遺構である。第64号竪穴住居址と重複関係にあり，第64号竪穴住居址に切られている。また南側壁は削平が著しいために残存状態は良好でない。長径3.1m，短径2.4mの楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ5～15cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面の中央部に200cm×130cm，深さ15cmの不整形の土壙が掘り込まれている。柱穴状のピットなどの存在はなく，住居址ではなく，土壙の可能性もある。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

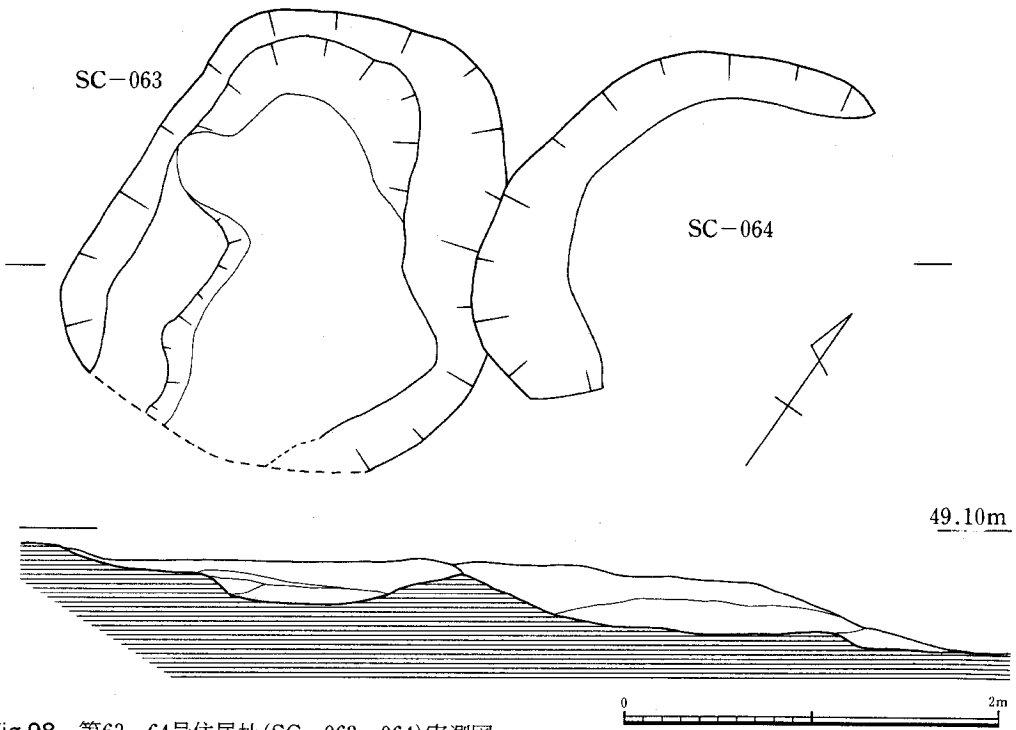


Fig.98　第63，64号住居址(SC－063，064)実測図

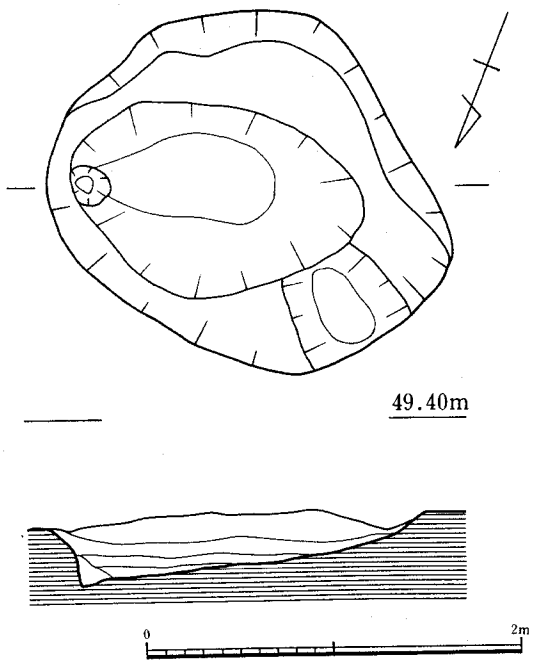


Fig.99　第65号住居址(SC－065)実測図

(64)　第64号住居址（ＳＣ－064）(Fig.　98)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面，崖の縁辺部のＱ－43，44グリットにわたって検出した遺構である。第63号竪穴住居址と重複関係にあり，第63号竪穴住居址を切っている。東半部は崖によって削りとられているために遺存状態はきわめて悪い。長径2.4m以上，短径1.2m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形あるいは楕円形プランをなすと考えられほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状ピットは存在せず住居址ではなく土壙の可能性も強い。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(65)　第65号住居址（ＳＣ－065）(Fig.　99)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＭ－44，45，Ｎ－44，45グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はない。長径2.0m，短径1.85mの楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ25～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面

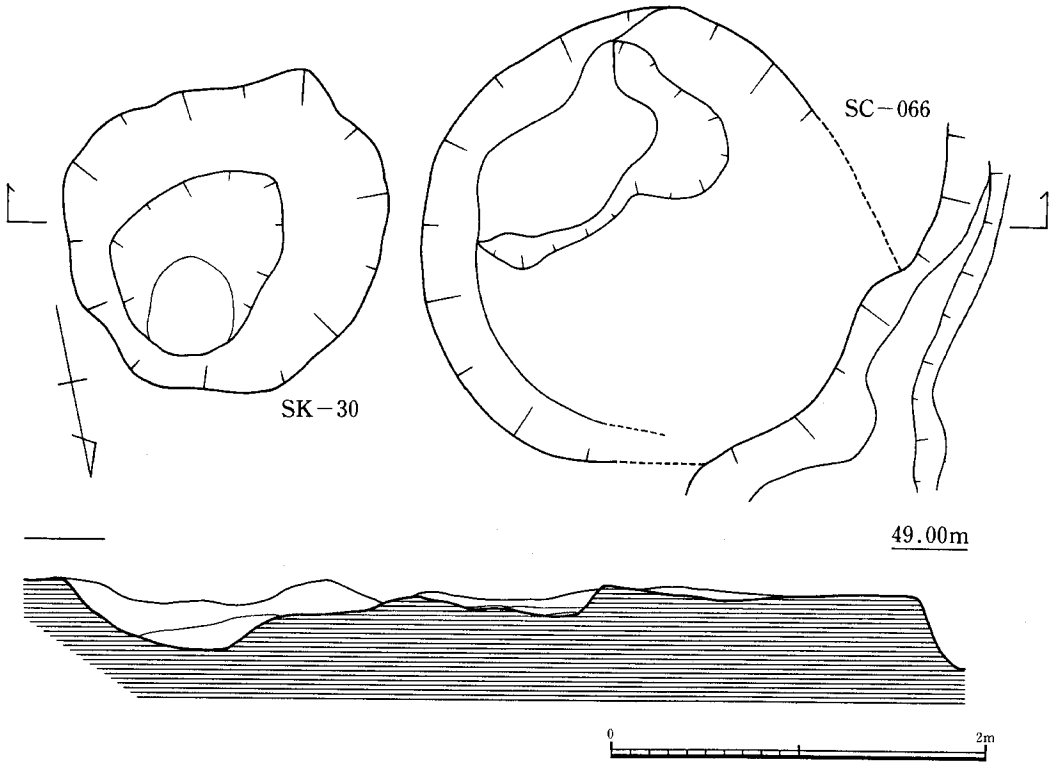


Fig.100　第66号住居址(SC－066)，第30号土壙(SK－30)実測図

形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面の北半部に155cm×105cm，深さ10cmの楕円形プランをなす土壙が掘り込まれている。土壙の東端部に径20cm，深さ15cmの柱穴状ピットが1個存在する。柱穴状ピットは竪穴内側に向って傾斜している。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(66)　第66号住居址（ＳＣ－066）(Fig. 100)

発掘調査区の北半部，丘陵の尾根線に近い，Ｊ－44，45，Ｋ－44，45グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の竪穴住居址と重複関係はないが，一部，後世の溝によって破壊されている。長径2.4m以上，短径2.4mの円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ5～10cmで削平され遺存状態は悪い。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面には南側壁に片寄って140cm×80cm，深さ10～15cmの不整形プランの土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より

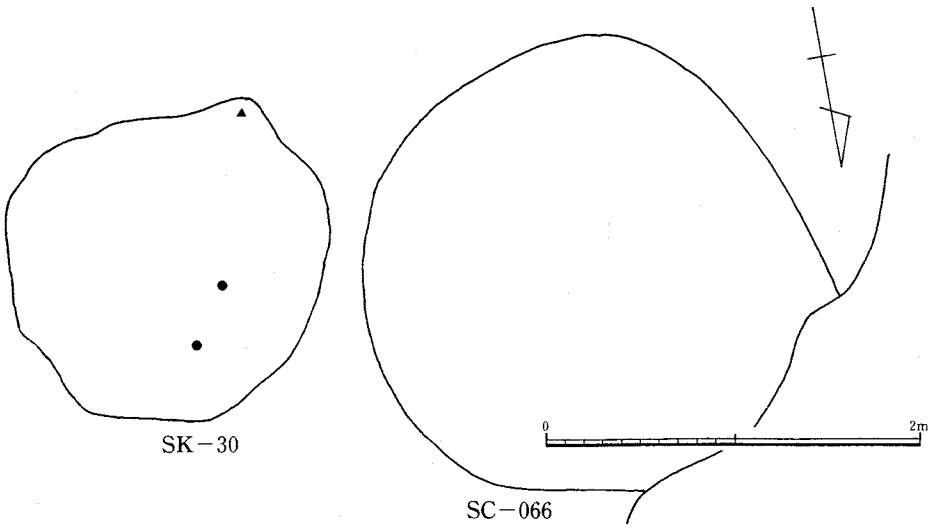


Fig.101　第66号住居址・第30号土壙遺物出土状況

遺物の出土はない。

(67)　第67号住居址（ＳＣ－067）(Fig. 102)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＯ－44，45，Ｐ－44，45グリットにわたって検出した遺構である。第68竪穴住居址と重複関係にあり，第68号竪穴住居址に切られている。長径2.8m，短径2.15mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ５～15cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで凹凸があり平坦でない。床面は溝状の落ち込みが無秩序に存在する。東壁に柱穴状のピットが存在する。ピットは径50cm，深さ28cmで２個が重複している。これに対応すると考えられるピットが竪穴外に１個存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(68)　第68号住居址（ＳＣ－068）(Fig. 103)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＯ－45，46，Ｐ－45，46グリットにわたって検出した遺構である。第67号，69号，70号竪穴住居址と重複関係にあり，第67号，70号竪穴住居址を切り，第69号住居址に切られている。遺存状態が悪く全体の半分以下が残存している。径2.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形ないしは楕円形プランでほぼ平坦であ

る。床面の南に片寄って90cm×50cm，深さ15cmの楕円形の土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より局部磨製石斧が出土している。

遺物出土状況（Fig. 104）

竪穴住居址は切り合い関係によって残存状態が悪いが，竪穴東壁に近く一点の局部磨製石斧が出土した。石斧は完形品で床面に密着しており，投棄あるいは流れ込んだものではなく，明らかに本住居址に伴うものと考えられる。共伴土器はない。

石器（Fig. 104）

1059は硬砂岩製の局部磨製の石斧である。本遺跡で唯一の石斧である。粗い剝離によって全体を整形したのち刃部を両面からと側辺を研磨している。刃部巾71.2mm，長さ174.0mm，重さｇを測る。

(69)　第69号住居址（ＳＣ－069）（Fig. 103）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＯ－46，47，Ｐ－46，47グリットにわたって検出した遺構である。第68号，70号竪穴住居址と重複関係にあり，第68号，70号竪穴住居址を切っている。

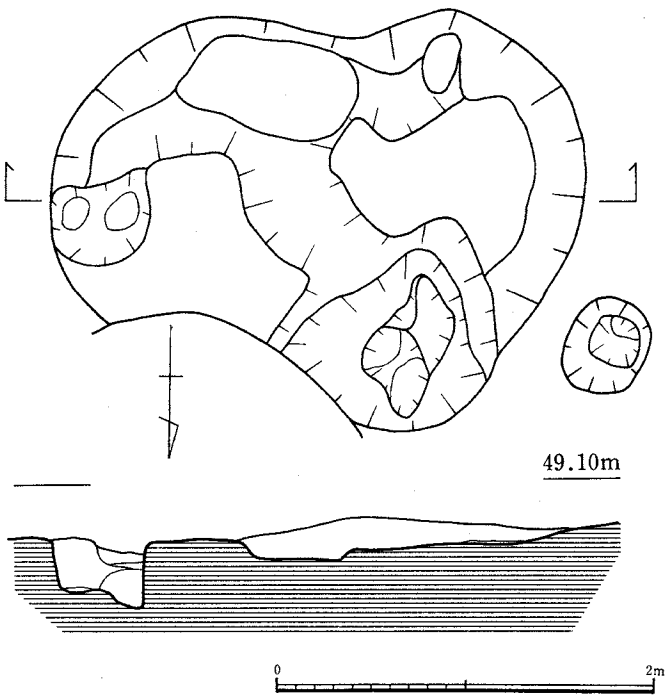


Fig.102　第67号住居址(SC－067)，第32号土壙(SK－32)実測図

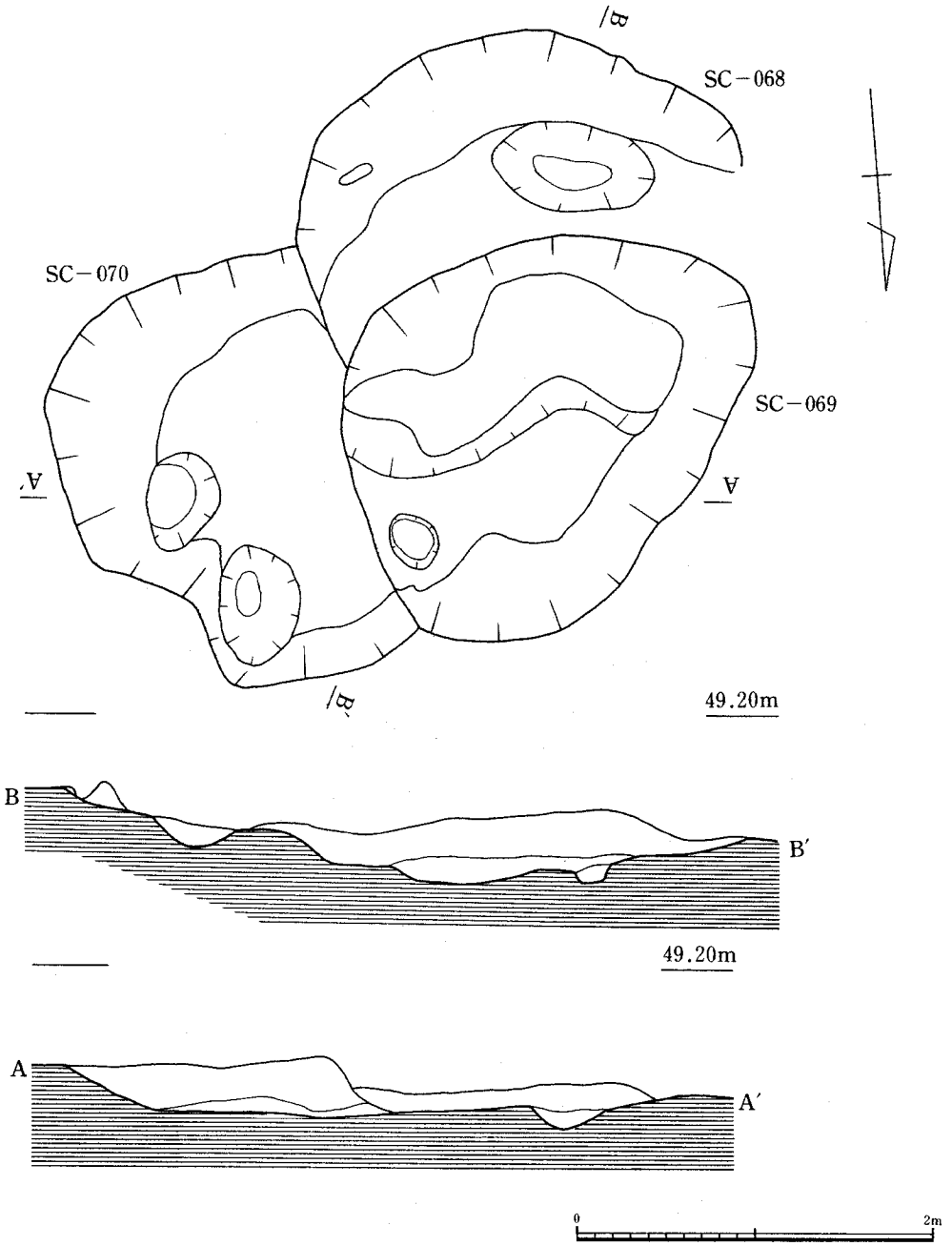


Fig.103　第68～70号住居址(SC－068～070)実測図

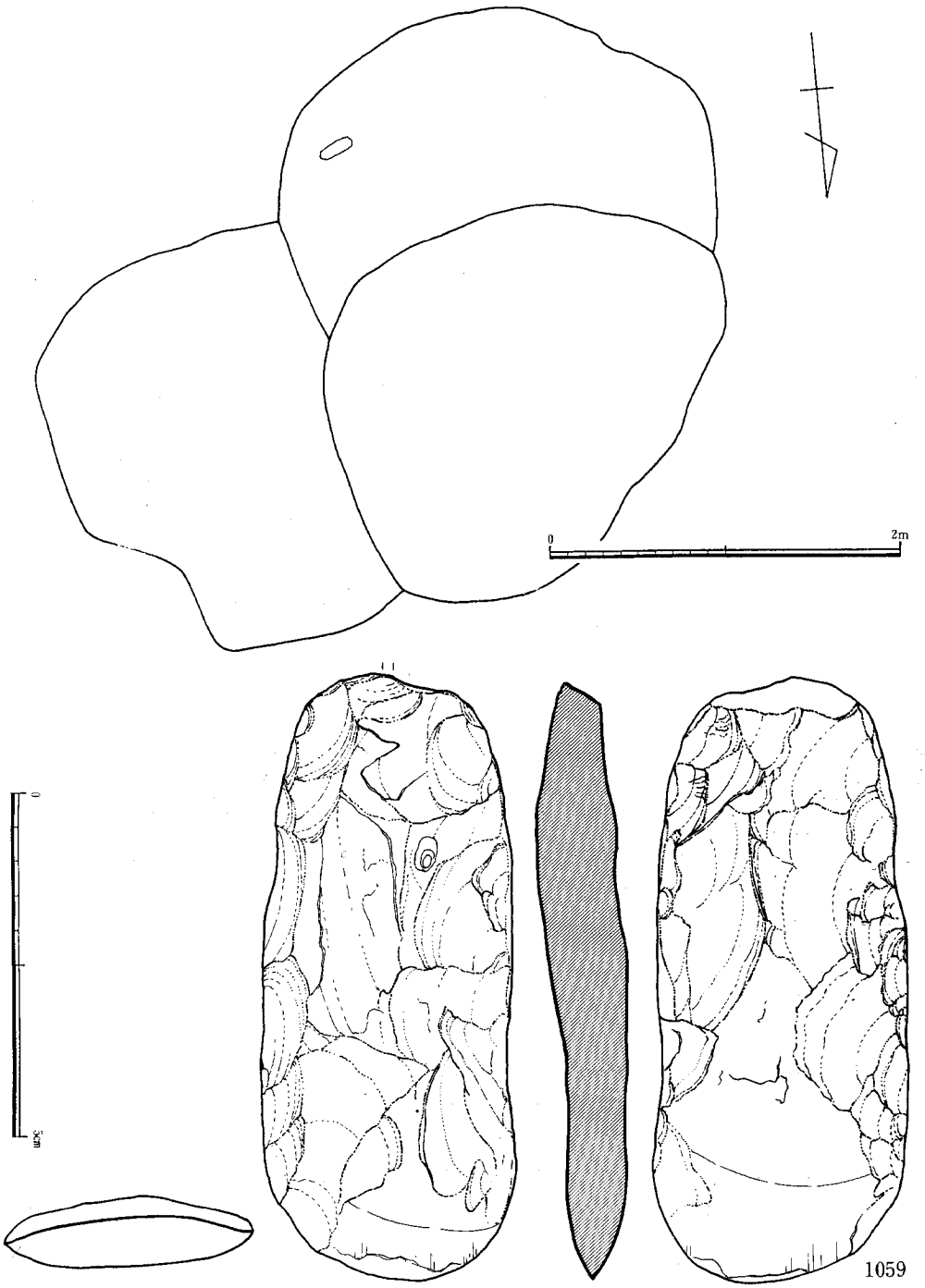


Fig.104　第68～70号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

長径2.6m，短径2.0mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整プランでほぼ平坦である。床面北側に片寄って，径25cm，深さ10cmの柱穴状のピットがある。また，南側に片寄って190cm×80cm，深さ10cm前後の不整形の土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(70) 第70号住居址（ＳＣ－070）（Fig. 103）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－46，47，Ｑ－46，47グリットにわたって検出した遺構である。第68号，69号竪穴住居址と重複関係にあり，第68号，69号竪穴住居址に切られている。遺存状態が悪く約半分が現存する。2.4×1.6m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～15cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形ないしは楕円形プランをなし，ほぼ平坦である。床面の北壁にそった部分に径40～50cm，深さ15cmの浅いピットが２個存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(71) 第71号住居址（ＳＣ－071）（Fig. 105）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線上に近いＫ－45～47，Ｌ－45，46グリットにわたって検出した遺構である。第72号竪穴住居址と重複関係にあり，第72号竪穴住居址に切られている。後世の溝によって西側壁が破壊されている。長径2.95m以上，短径2.3m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面には南西側に片寄って175cm×110cm，深さ20cmの楕円形の土壙が掘り込まれている。また東側壁には径20cm，深さ20cmの柱穴状のピット２個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(72) 第72号住居址（ＳＣ－072）（Fig. 105）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｋ－47，Ｌ－47，48，Ｍ－47グリットにわたって検出した遺構である。第71号，73号，104号竪穴住居址と重複関係にあり，第71号，73号竪穴住居址を切っている。また，後世の溝によって西側が破壊されている。長径2.6m以上，短径2.3

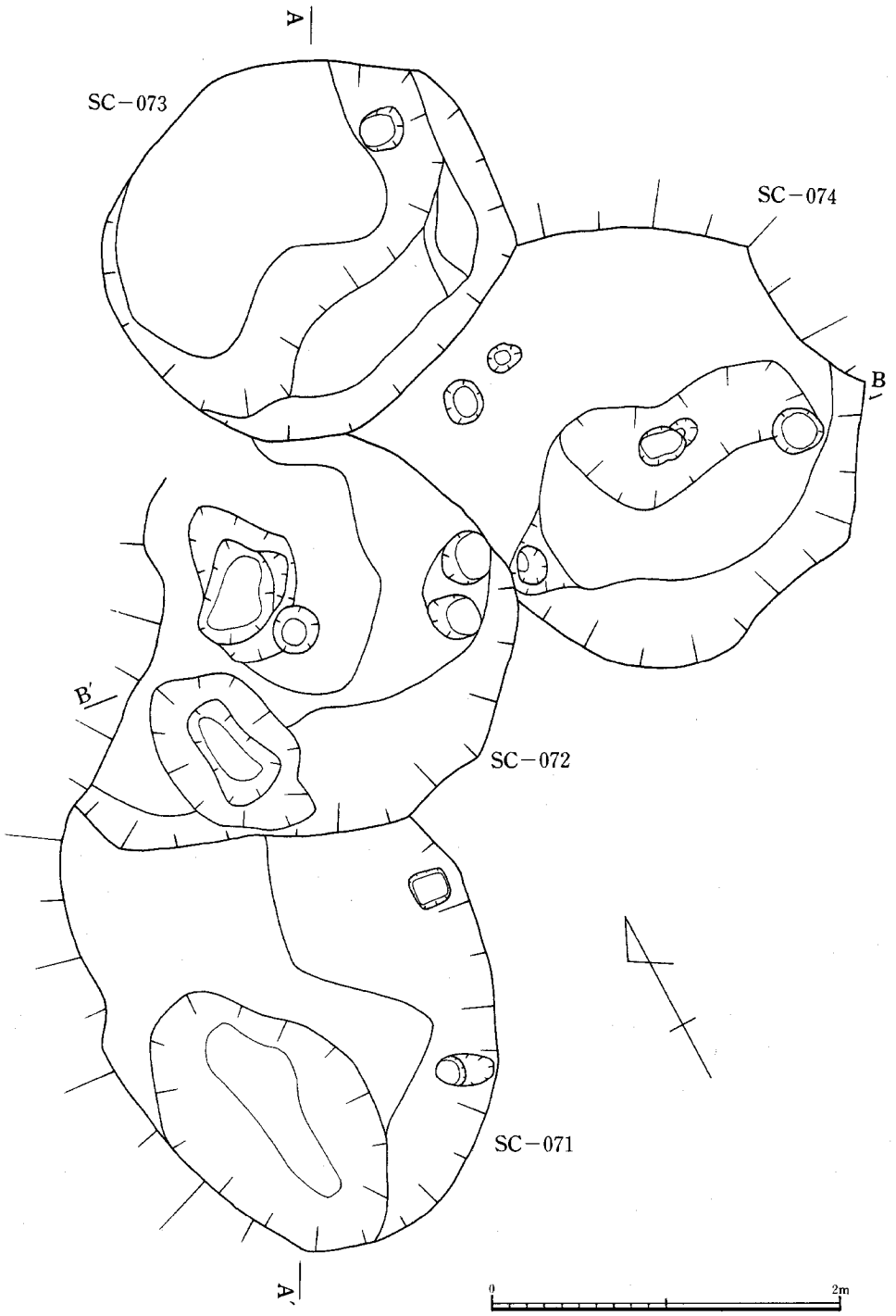


Fig.105　第71～73号，104号住居址(SC－071～074，)実測図

m以上の楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ20～60cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形であるがほぼ平坦である。床面中央部に70cm×60cm，深さ10cmの土壙，南西部に片寄って110cm×70cm，深さ20cmの土壙が掘り込まれている。また中央部と東壁に柱穴状のピット3個がある。径30cm前後，深さ7cm～15cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(73) 第73号住居址（SC－073）（Fig. 105）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，M－47，48，N－47，48グリットにわたって検出した遺構である。第72号，74号竪穴住居址，第37号土壙と重複関係にあり，第74号竪穴住居址を切り，第72号竪穴住居址，第37号土壙に切られている。長径3.0m以上，短径2.5mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ30～40cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面の中央に140cm×60cm，深さ10cmの不整楕円形の土壙が掘り込まれている。この土壙の中央には径20cm，深さ15cmの柱穴状のピットが存在する。中央部よりやや南に片寄った東西の軸線上に相対する柱穴状のピットが存在する。また，北側に2個の柱穴状のピットが存在する。ピットは径15～25cmで，深さ10～15cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

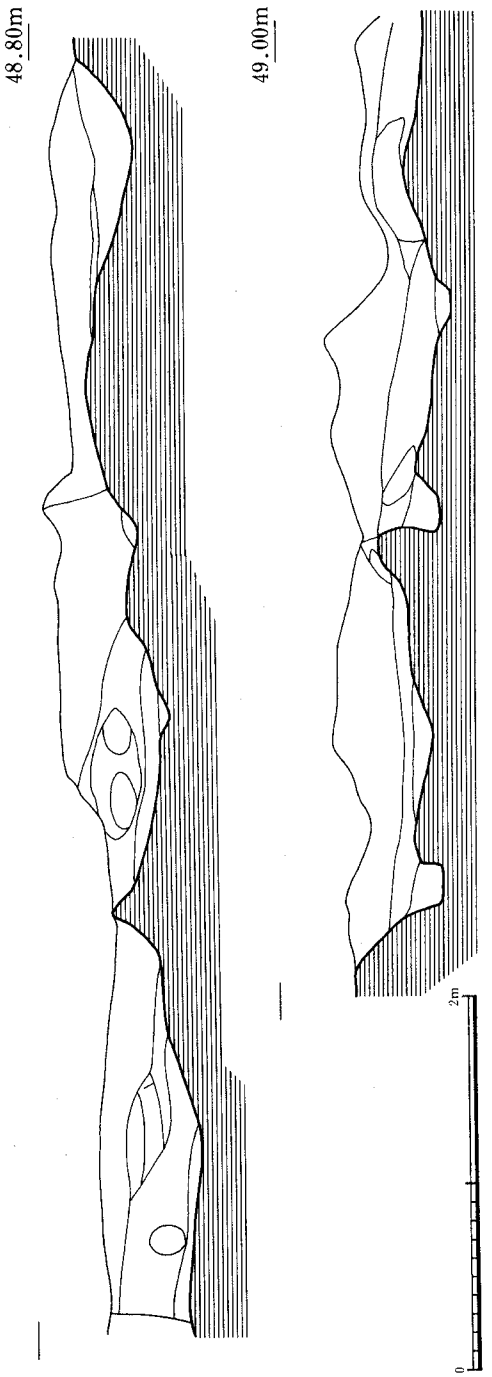


Fig.106　第71～73，104号住居址実測図II

(74) 第74号住居址（SC－074）（Fig. 105）

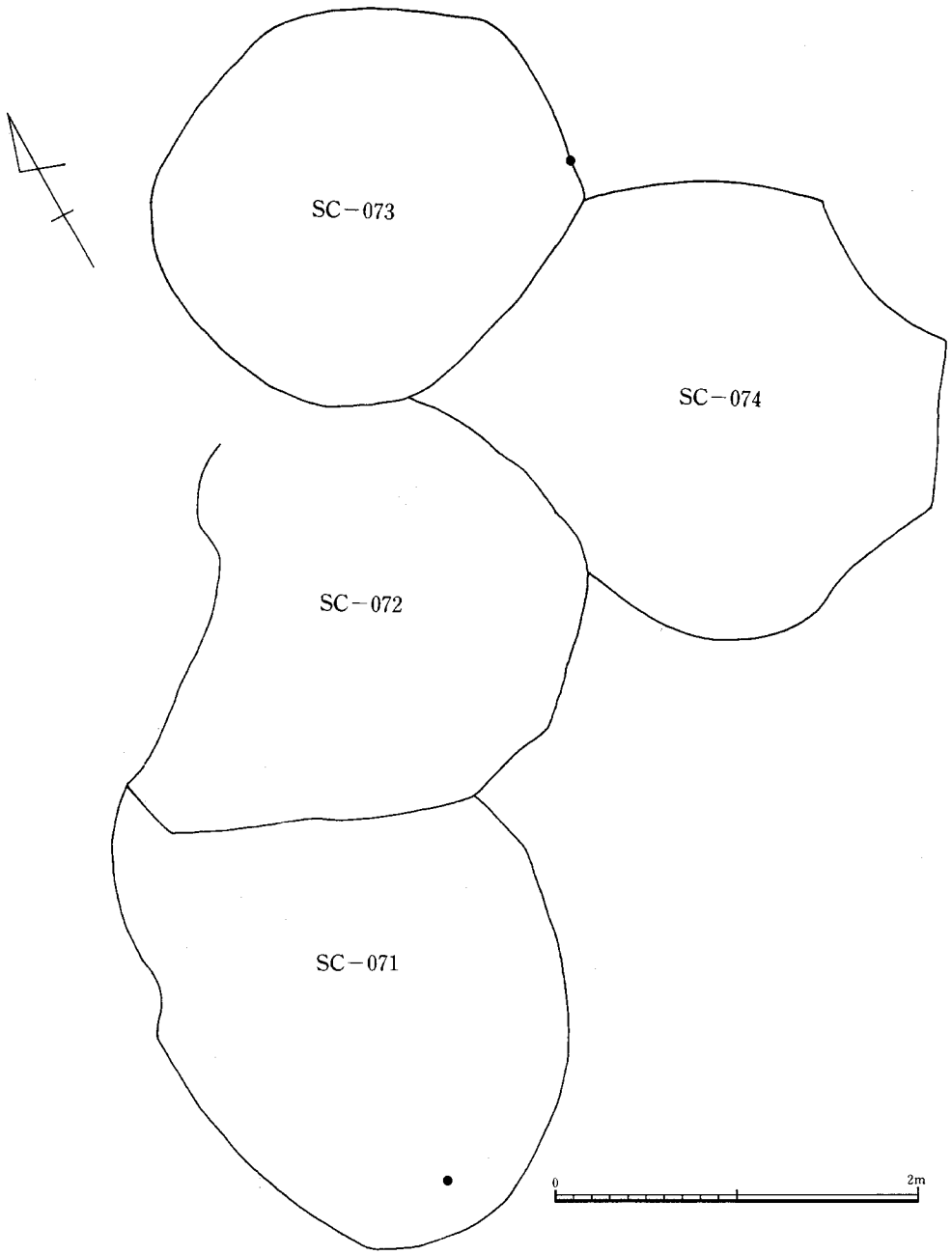


Fig.107　第71～73，104号住居址遺物出土状況

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，M－46，47，N－46，47グリットにわたって検出した遺構である。第73号，75号竪穴住居址，第37号土壙と重複関係にあり，第73号竪穴住居址，第37号土壙に切られ，第75号竪穴住居址を切っている。重複関係が著しく，遺存状態は悪く約半分が残存しているにすぎない。長径2.3m，短径1.3m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ20～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形ないしは楕円形プランをなすと考えられほぼ平坦である。床面東側の壁近くに70cm×60cm，深さ10cmの楕円形の土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(75) 第75号住居址（ＳＣ－075）(Fig. 108)

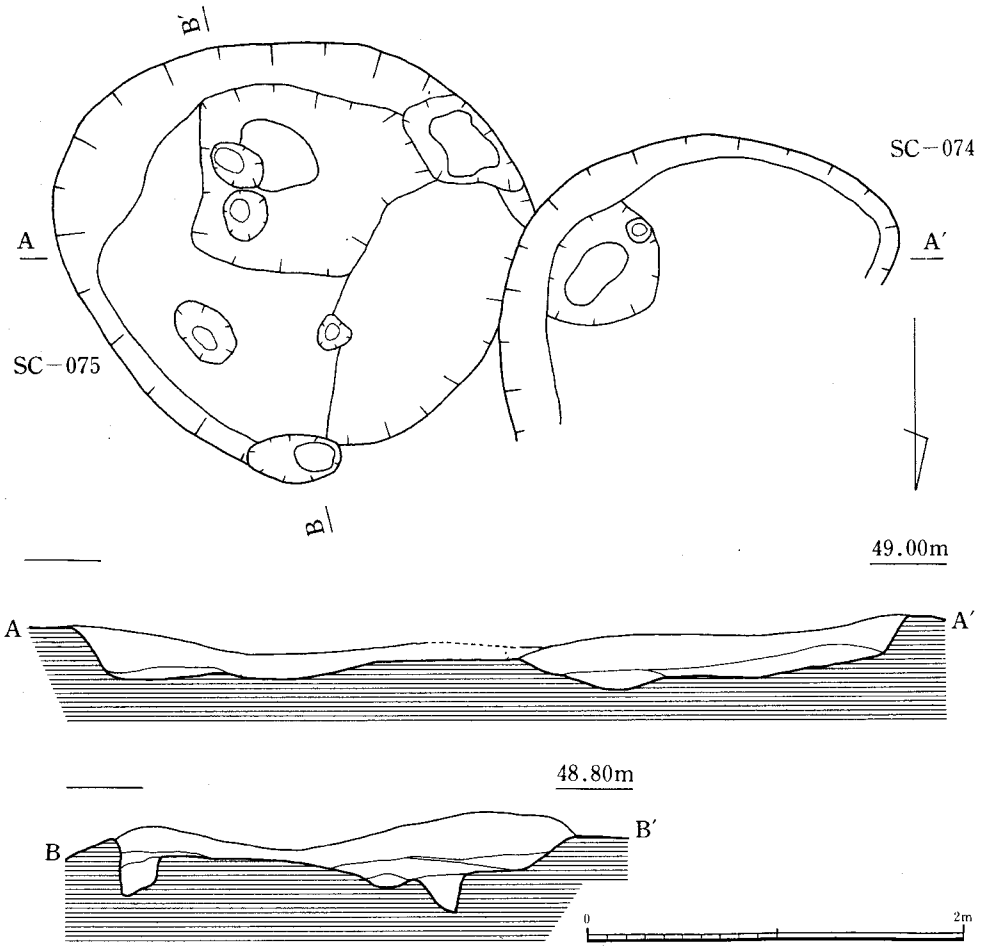


Fig.108　第74，75号住居址(SC－074，075)実測図

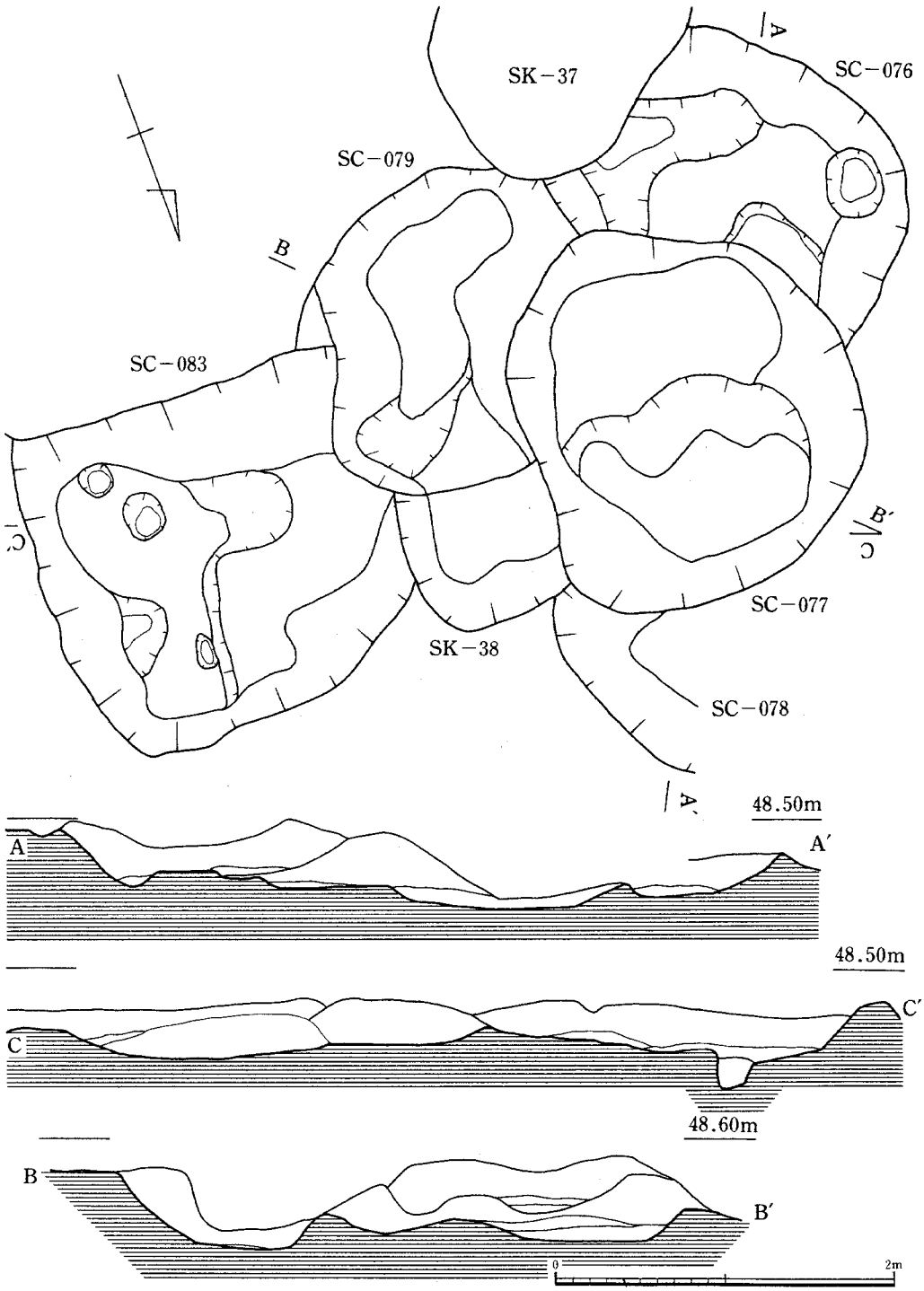


Fig.109　第76～79，83号住居址(SC－076～079，083)，第38号土壙(SK－38)実測図

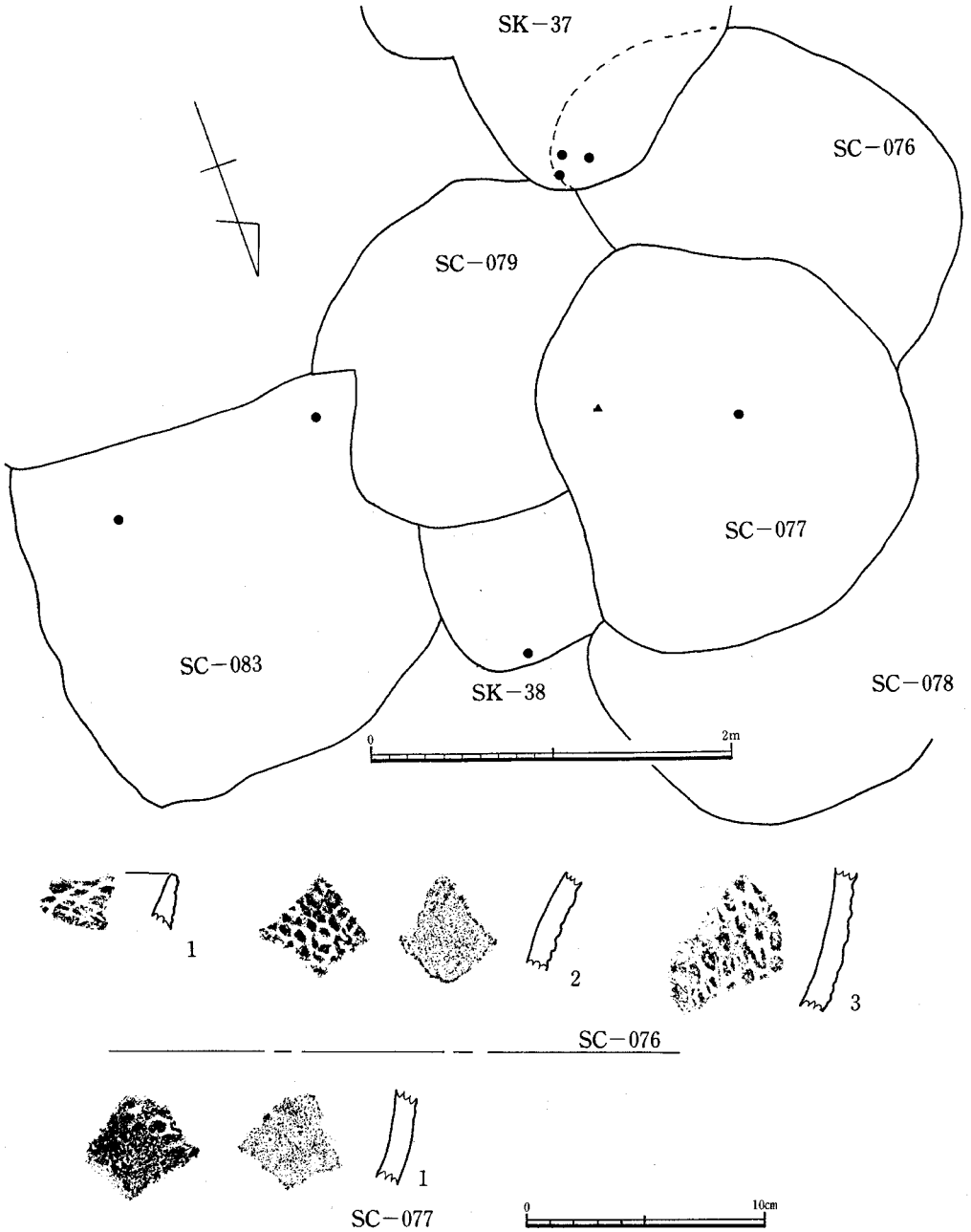


Fig.110　第76～79，83号住居址，第38号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面，Ｎ－46，47，Ｏ－46，47グリットにわたって検出した遺構である。第74号竪穴住居址と重複関係にあり，第74号址穴住居址に切られている。長径2.45ｍ，短径2.27ｍの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面南側に100cm×100cm，深さ10cmの方形プランの土壙が掘り込まれている。方形土壙の中には径25～30cm，深さ10cm，20cmの柱穴状のピットが存在し，これと相対する壁の上縁部にも径20cm，深さ30cmの柱穴状のピットが存在する。この他，床面に２個の柱穴状のピットが存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(76)　第76号住居址（ＳＣ－076）(Fig. 109)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線上に近い，Ｍ－48，49，Ｎ－48，49グリットにわたって検出した遺構である。第77号，79号竪穴住居址，第37号土壙と重複関係にあり，第79号竪穴住居址，第37号土壙を切り，第77号竪穴住居址に切られている。切り合いによって遺存状態は悪い。長径1.9ｍ以上，短径1.5ｍ以上の楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面の南壁近くに片寄って，110cm×45cm，深さ10cm，60cm×34cm以上，深さ５cmの土壙が掘り込まれている。南壁部に径34cm，深さ10cmの柱穴状のピットがある。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

遺物出土状況（Fig. 109）

竪穴住居址の遺存状態は良好でないが，竪穴の南側に集中して３点の土器片が出土した。出土地点はＳＫ－37と重複関係にあるが土器は明らかに住居址の床面に密着しており，ＳＫ－37はこれらの土器に先行することは疑いない。

土器（Fig. 109－ＳＣ－076－1～3）

１は口縁部破片。外面に楕円押型文を横走施文している。押型文原体の大きさは確定しがたいが，文様単位は２単位の可能性が強い。２は口縁部付近の破片。口縁部は外反するものと思われる。外面には楕円押型文が縦走施文される。押型文原体の大きさ，文様単位は文様の重複のため確定しがたい。内面はナデ調整。３は胴部破片，外面には，やや粒の大きい楕円押型文を縦走施文している。押型文原体の大きさ，文様単位は押型文が重複しているために確定しがたい。内面はヘラナデ調整。胎土に石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で，色調は赤褐色をなす。

(77) 第77号住居址（ＳＣ－077）(Fig. 109)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｍ－49，Ｎ－48～50グリットにわたって検出した遺構である。第76号，78号，79号竪穴住居址，第38号土壙と重複関係にあり，第76号，78号，79号竪穴住居址，第38号土壙を切っている。長径2.3m，短径1.9mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦であるが，北半部が土壙状に一段深くなる。北半部は140cm×107cm，深さ14cmの不整形プランで断面形は皿状を呈している。柱穴状のピットは存在しない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 109－ＳＣ－077－1）

１は胴部破片，外面に楕円押型文を縦走施文するが，器面の保存状態が悪いので，原体の大きさ，文様単位は不明。胎土には石英，長石の砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は外面黄褐色，内面赤褐色をなす。

(78) 第78号住居址（ＳＣ－078）(Fig. 109)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｎ－49，50グリットにわたって検出した遺構である。第77号，84号竪穴住居址，第38号土壙と重複関係にあり，第84号竪穴住居址を切り，第77号竪穴住居址，第38号土壙に切られている。長径1.7m以上，短径1.3m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址あるいは土壙と考えられる。深さ20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットはみられず，住居址と考えるには難点もある。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(79) 第79号住居址（ＳＣ－079）(Fig. 109)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｎ－48，49，Ｏ－48，49グリットにわたって検出した遺構である。第76号，77号，80号，83号竪穴住居址，第36号，37号，38号土壙と重複関係にあり，第80号，83号竪穴住居址，第38号土壙を切り，第76号，77号竪穴住居址，第36号，37号土壙に切られている。切り合い関係が著しいため残存状態はきわめて不良である。長径2.05m以上，短径1.7m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ30cmで，壁

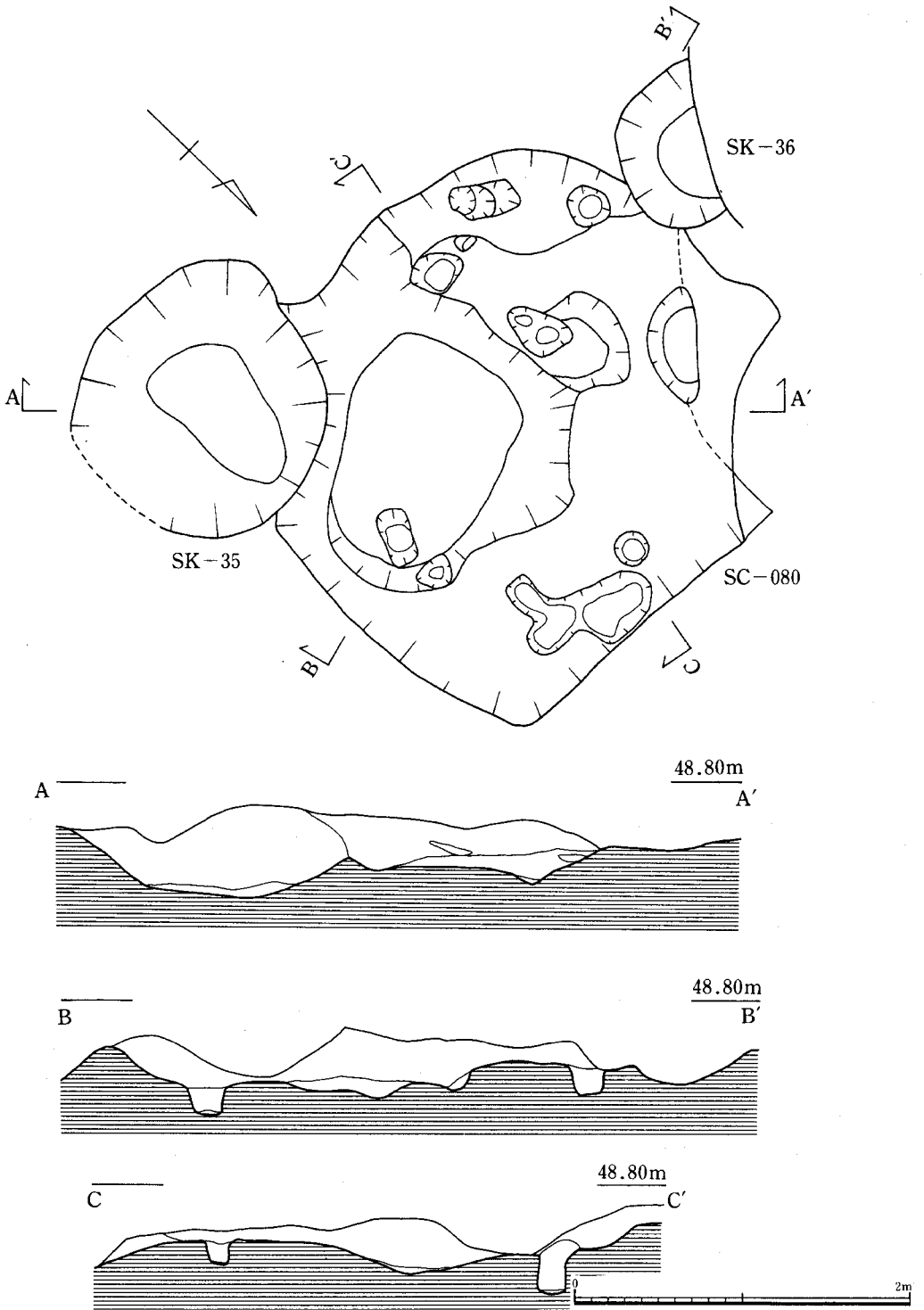


Fig.111　第80号住居址(SC－080)，第35，36号土壙(SK－35，36)実測図

のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしているがほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットがみられず，住居址とするには難点があり，土壙とした方がよいかもしれない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(80) 第80号住居址（ＳＣ－080）(Fig. 111)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＯ－47，48，Ｐ－47～49グリットにわたって検出した遺構である。第79号，81号，83号竪穴住居址，第35号，36号土壙と重複関係にあり，第81号竪穴住居址を切り，第79号，83号竪穴住居址，第35号，36号土壙に切られている。長径3.0m，短径2.85m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面南東隅に片寄って166cm×150cm，深さ18cmの楕円形の皿状の土壙が掘り込まれている。東西南北方向に相対する４個の柱穴状のピットが存在する。柱穴は径20～25cm，深さ15cmであ

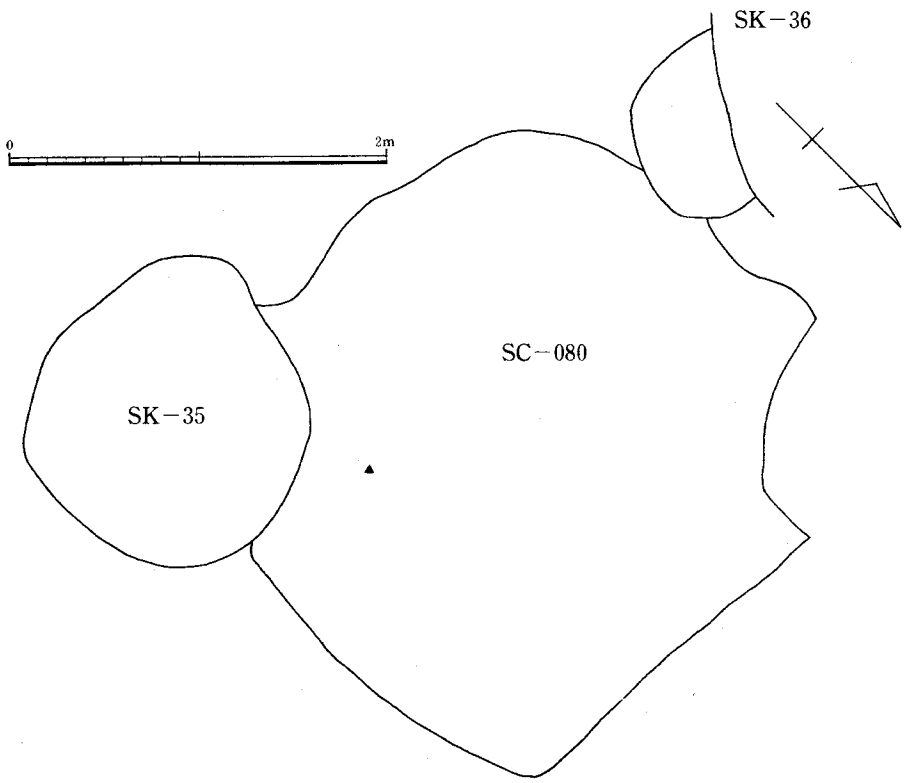


Fig.112　第80号住居址・第35，36号土壙遺物出土状況

る。その他，床面，壁に３個の柱穴状ピットが存在する。ピットは径20～30cm，深さ12～15cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(81) 第81号住居址（ＳＣ－081）(Fig. 113)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－47，48，Ｑ－47，48グリットにわたって検出した遺構である。第80号，82号竪穴住居址，第35号土壙と重複関係にあり，第35号土壙を切り，第80号，82号竪穴住居址に切られている。また，削平によって東壁が破壊されていて遺存状態は良くない。長径2.4m以上，短径2.35m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考え

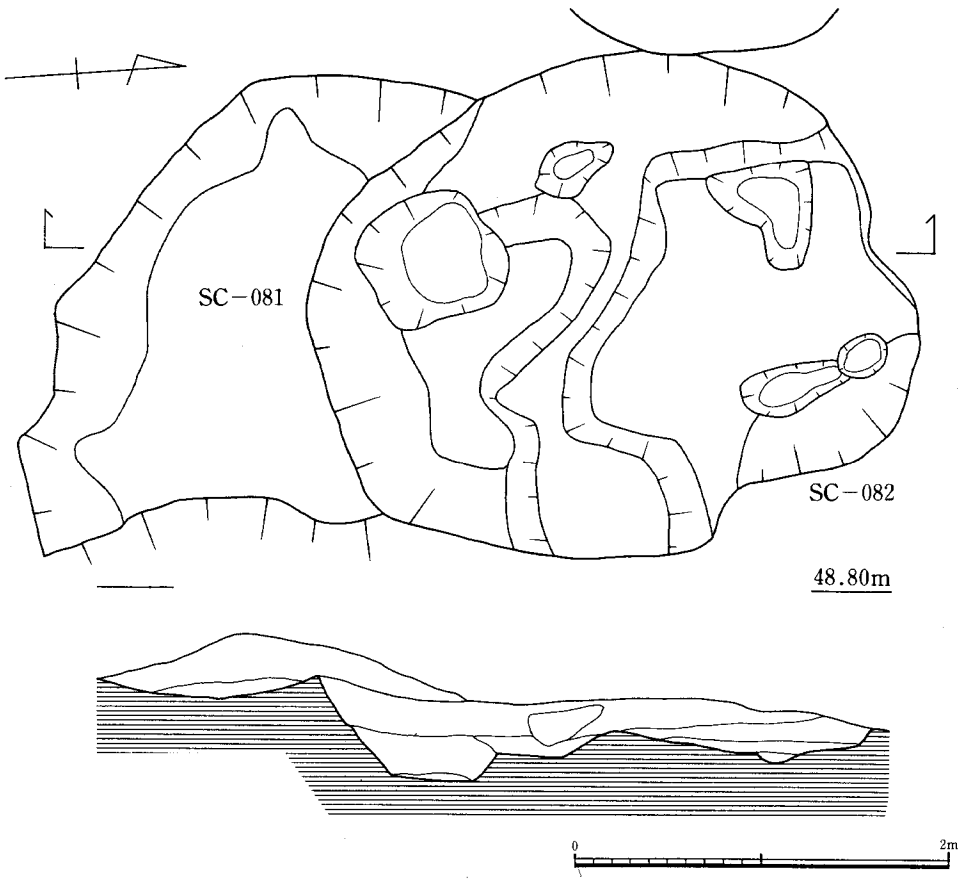


Fig.113　第81，82号住居址(SC－081，082)実測図

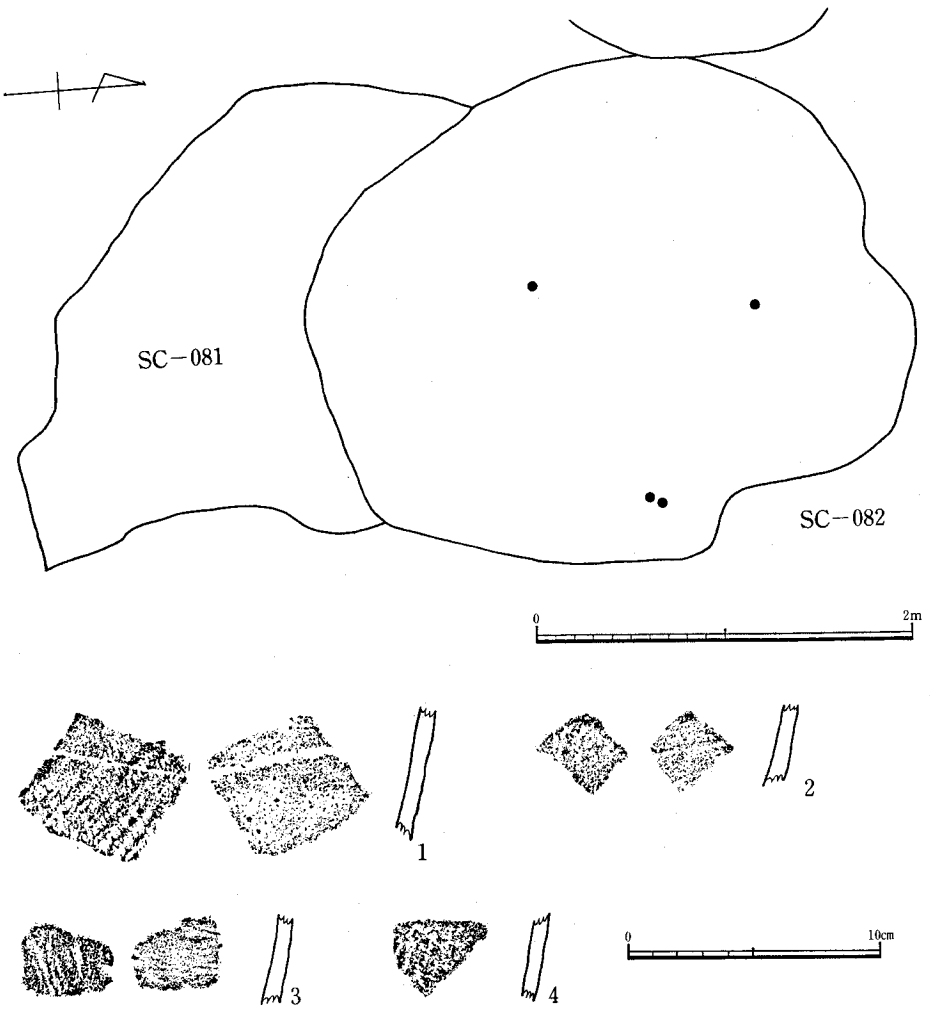


Fig.114　第81，82号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

られる。深さ10～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットは存在しない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で埋土中より遺物の出土はない。

(82)　第82号住居址（ＳＣ－082）(Fig. 113)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－48，49，Ｑ－48，49グリットにわたって検出した遺構である。第81号，83号竪穴住居址と重複関係にあり，第81号竪穴住居址を切り，第83号竪穴住居址に切られている。長径3.2m，短径2.7mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ17～26cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プラン

で，やや凹凸がみられる。床面南側に70cm×70cm，深さ22cmの方形の土壙と，150cm×60cm，深さ10cmの不整形土壙が重複して掘り込まれている。北側と西側に径25cm～30cm，深さ8cmの柱穴状のピット2個があるが，明確でない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

土器（Fig. 114－1～4）

1は胴部破片。外面全面にR<ℓの一段撚りの縄文を縦位に施文している。内面は横方向の貝殻条痕と思われるが，器面の状態が悪いので明確にはしがたい。2は内外面とも無文で調整痕は不明。3，4は外面に縦位の撚糸文を施文しているが，器面の状態が悪いので明確にしがたい。3は内面が貝殻条痕調整，4の内面調整は不明。胎土には石英，長石の砂粒を多量に含む。焼成はやや不良で，色調は1が内外面とも黒褐色，2，3が内外面とも黄褐色，4が外面黄褐色，内面黒褐色をなす。

(83)　第83号住居址（ＳＣ－083）（Fig. 109）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－49，Ｑ－48グリットにわたって検出した遺構である。第79号，82号，84号竪穴住居址，第38号土壙と重複関係にあり，第82号，84号竪穴住居址を切り，第79号竪穴住居址，第38号土壙に切られている。長径2.15m以上，短径2.0m以上の不整楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランで東半部が土壙状に一段低くなるがほぼ平坦である。東半部は160cm×60cm，深さ5cmの不整形プランをなしている。この部分に柱穴状のピット4個が存在する。ピットは径20～45cm，深さ20cm前後である。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(84)　第84号住居址（ＳＣ－084）（Fig. 115）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｏ－50，Ｐ－49～51グリットにわたって検出した遺構である。第78号，83号，85号竪穴住居址，第38号土壙と重複関係にあり，第78号，83号，85号竪穴住居址，第38号土壙に切られている。重複関係が著しく，遺存状態は良くない。長径2.65m以上，短径2.5m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ15cm前後で削平が著しい。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなし，ほぼ平坦である。床面および壁に6個の柱穴状のピットが存在する。ピットの配列は北東から南西方向で相対する各2個と東西方向に相対する各1個である。ピットは径15～36cm，深さ15～25cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

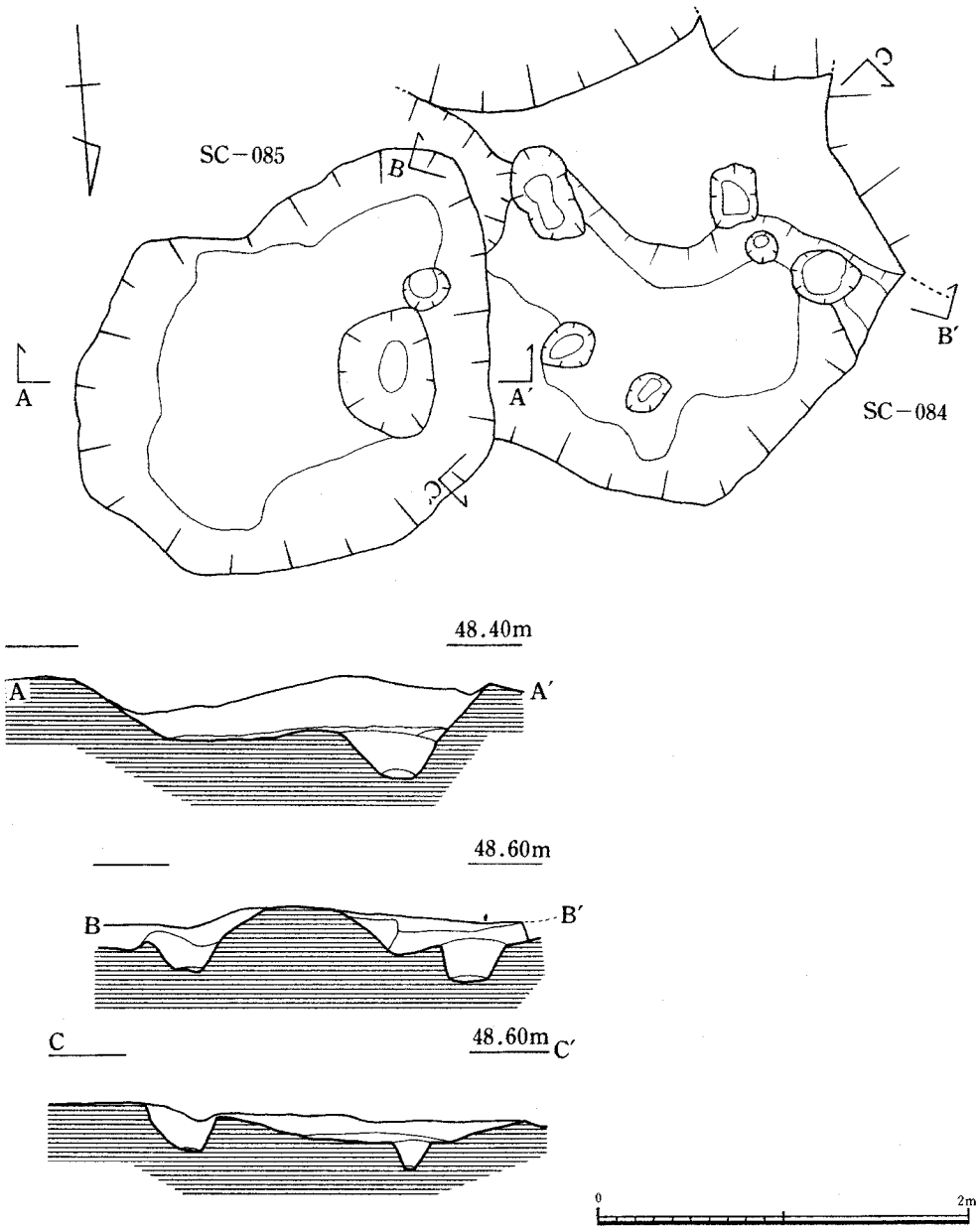


Fig.115　第84，85号住居址(SC－084，085)実測図

(85)　第85号住居址（ＳＣ－085）(Fig. 115)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＯ－50，51，Ｐ－50，51グリットにわたって検出した遺構である。第84号，92号竪穴住居址と重複関係にあり，第84号，92号竪穴住居址を切っている。長径2.6m，短径2.1mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面の西側に片寄って２個の柱穴状のピットが存在する。ピットは径20cm，深さ10cmと，50cm×70cm，深さ25cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

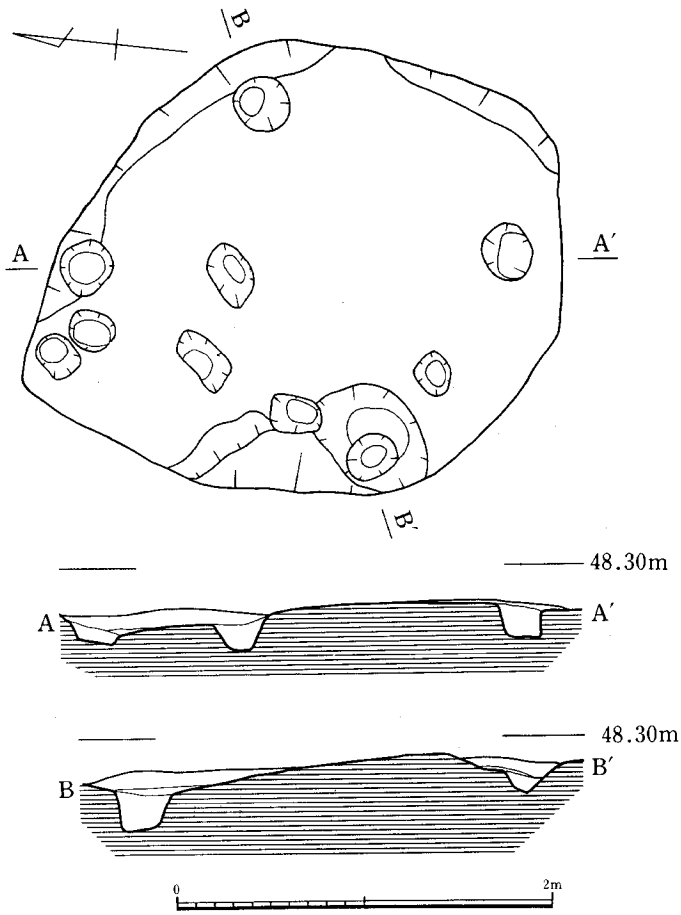


Fig.116　第86号住居址(SC－086)実測図

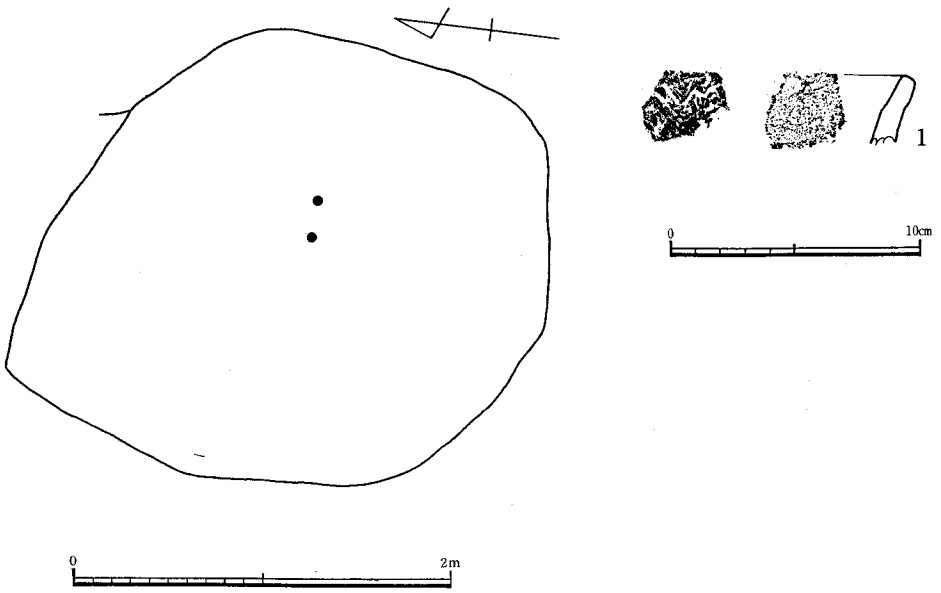


Fig.117　第86号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

(86)　第86号住居址（ＳＣ－086）(Fig. 116)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＱ－49～51，Ｒ－49，50グリットにわたって検出した遺構である。第90号，92号竪穴住居址と重複関係にあり，第90号，92号竪穴住居址を切っている。長径3.05m，短径2.5mの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ10cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしているが，ほとんど削平されている。床面は不整形プランであるがほぼ平坦である。床面には壁にそってとり囲むように10個の柱穴状のピットが存在する。ピットは径25～30cm，深さ10～20cmである。また西側壁近くに片寄って柱穴状ピットと重複して60cm×50cm，深さ10cmの楕円形プランで断面皿状の土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

土器（Fig. 117－1）

１点を図示した。口縁部破片。口縁部がわずかに外反する。外面に山形押型文を横走施文している。原体の大きさ，文様単位は小破片のため不明。口唇部に刻み目がみられる。内面は丁寧なナデ調整。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含む。焼成は良好，色調は内外面共赤褐色をなす。

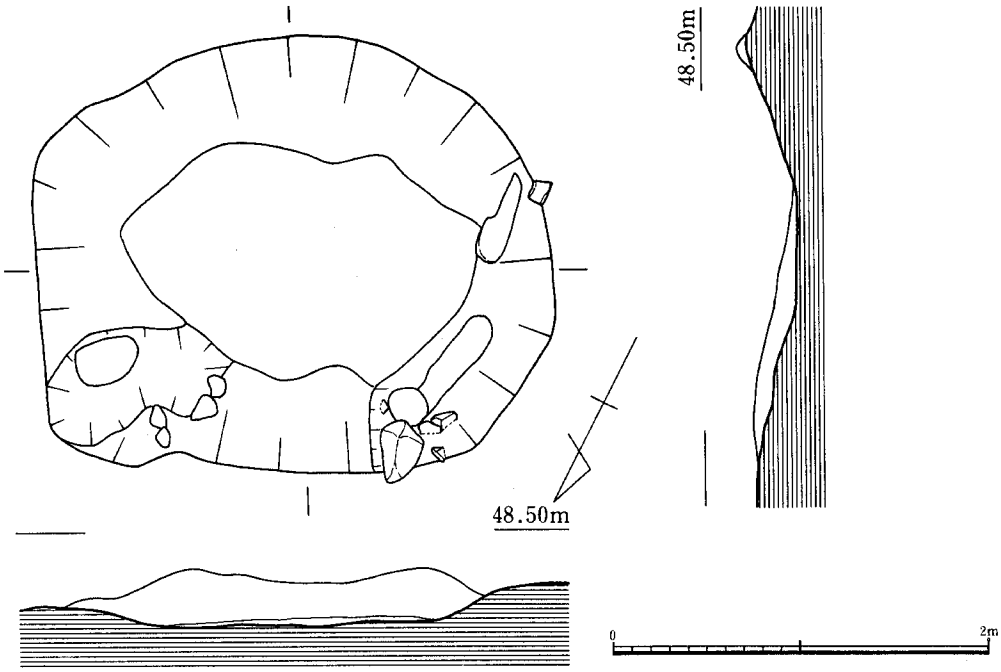


Fig.118　第87号住居址(SC－087)実測図

(87)　第87号住居址（ＳＣ－087）(Fig. 118)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＲ－48，49，Ｓ－48，49，Ｔ－48，49グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，竪穴住居址と重複関係はない。長径2.7m，短径2.3mの楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ20～30cmであるが，北側は削平され遺存状態は良くない。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットは存在せず，住居址でなく，土壙の可能性もある。竪穴内には10数個の角礫が投げ込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(88)　第88号住居址（ＳＣ－088）(Fig. 119)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＳ－49～51，Ｔ－49～51グリットにわたって検出した遺構である。第89号竪穴住居址と重複関係にあり，第89号竪穴住居址に切られている。また，東側壁は削平のために明確にできない。長径2.95m，短径2.15m以上の円形ないしは楕円形プラ

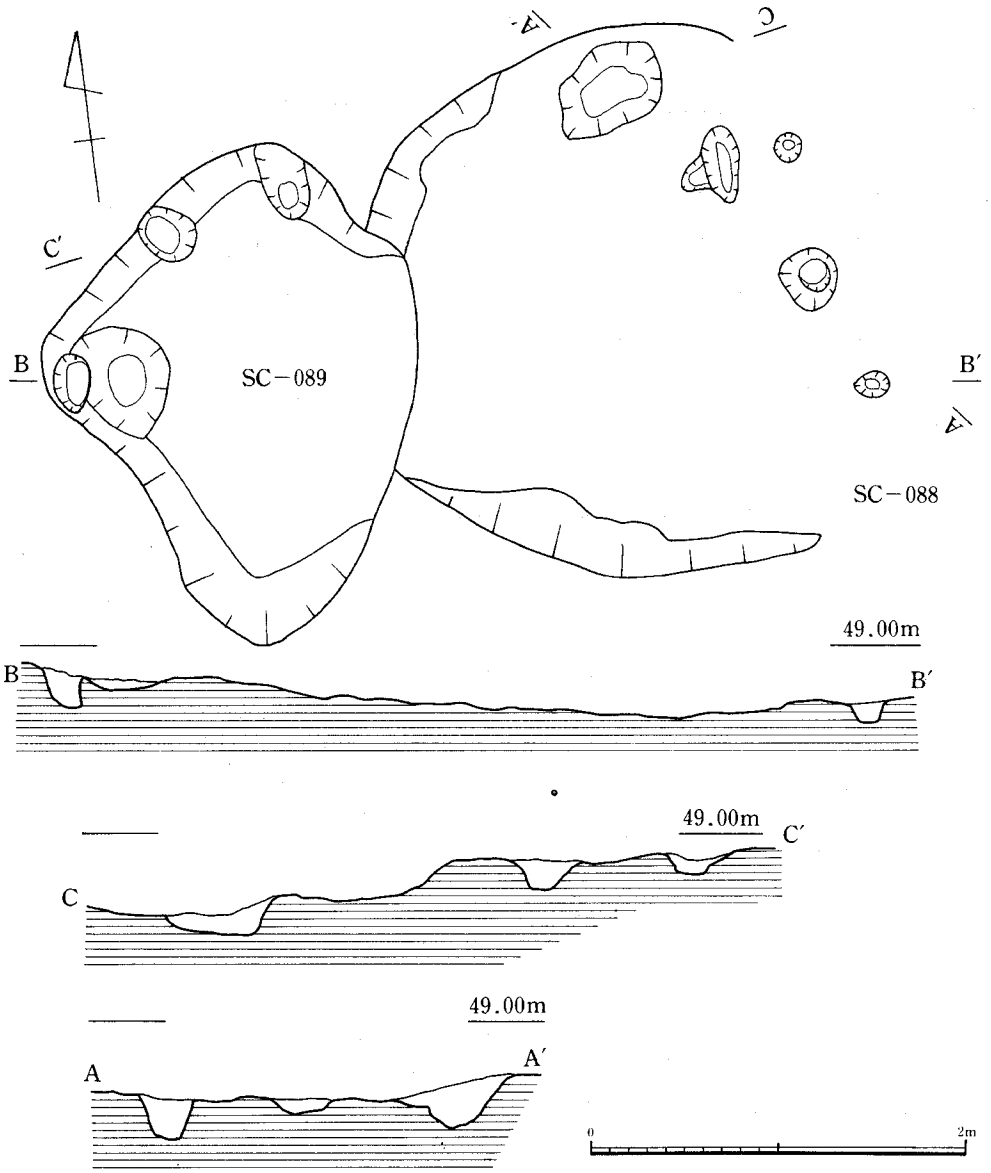


Fig.119　第88，89号住居址(SC－088，089)実測図

ンをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面の東側に片寄ってほぼ一線上に並んで6個の柱穴状のピットが存在する。ピットは径15～35cmで，深さは10～23cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(89)　第89号住居址（ＳＣ－089）(Fig. 119)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＲ－49，50，Ｓ－49，50グリットにわたって検出した遺構である。第88号，90号竪穴住居址と重複関係にあり，第88号，90号竪穴住居址を切っている。長径2.15m，短径2.0mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。削平が顕著で壁の残存状態は悪く深さ５cm前後である。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなし，ほぼ平坦である。床面北側の壁に接して65cm×50cm，深さ６cmの浅い土壙が掘り込まれている。柱穴状のピットは土壙に接して存在するものから東に向って３個が壁に掘り込まれている。ピットは径25cm前後で，深さは10～15cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(90)　第90号住居址（ＳＣ－090）(Fig. 122)

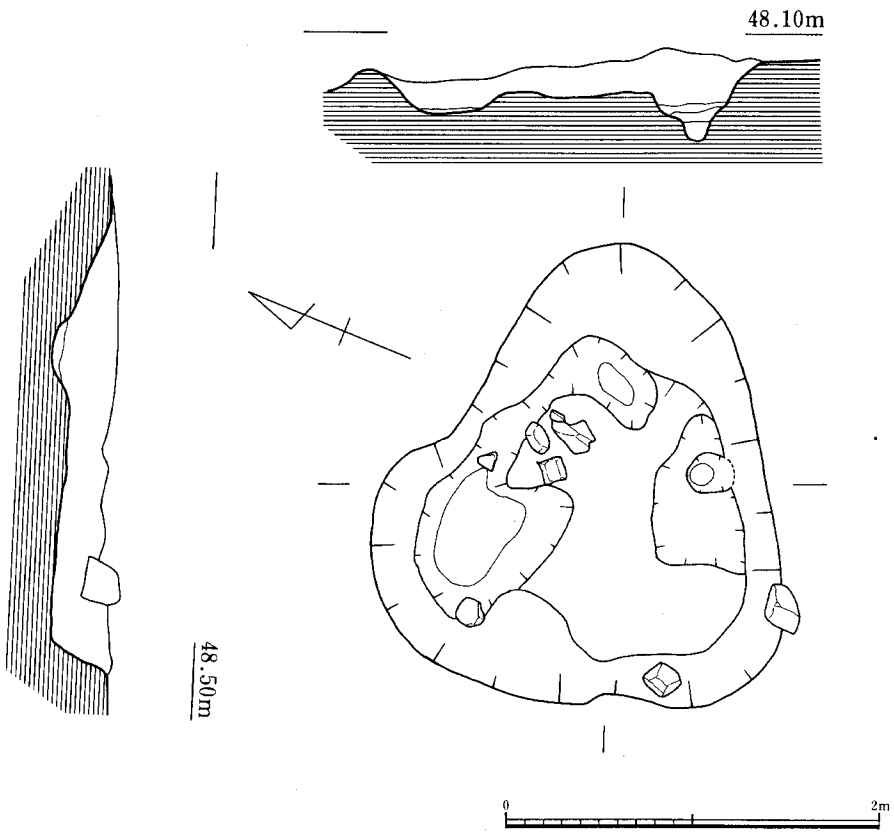


Fig.120　第91号住居址(SC－091)実測図

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のQ－51，R－50，51グリットにわたって検出した遺構である。第86号，89号，92号竪穴住居址，第39号土壙と重複関係にあり，第92号竪穴住居址を切り，第86号，87号竪穴住居址，第39号土壙に切られている。長径2.0m以上，短径1.9mの円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ5～10cmで，削平されていて遺存状態は良くない。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は楕円形プランで，ほぼ平坦である。床面には，西側に片寄って1個，東側に片寄って3個の柱穴状のピットが存在する。ピットは径35cm～45cm，深さ10cm～55cmである。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(91) 第91号住居址（SC－090）（Fig. 120）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のR－51，52，S－51，52グリットにわたって検出した遺構である。第39号土壙と重複関係にあり，第39号土壙を切っている。長径2.45m，短径2.15mの不整楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ13～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面の南・北・東に土壙ないしは柱穴状ピットが各1個存在する。柱穴状のピットと考えられるのは南側にあり，80cm×45cm，深さ10cmの不整形の土壙中に掘り込まれ径20cm，深さ15cmである。北側には80cm×

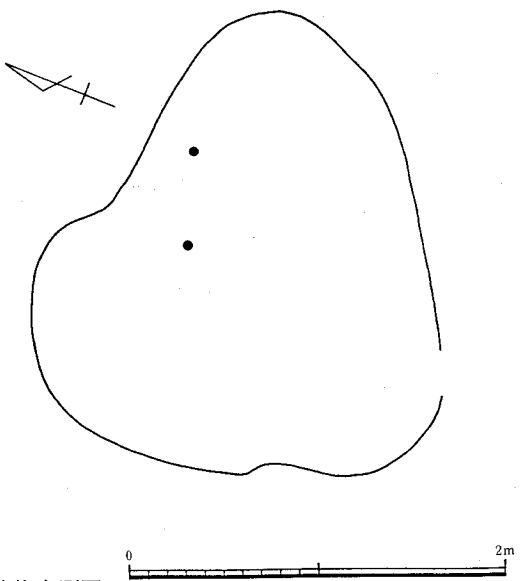


Fig.121　第91号住居址遺物出土状況・出土遺物実測図

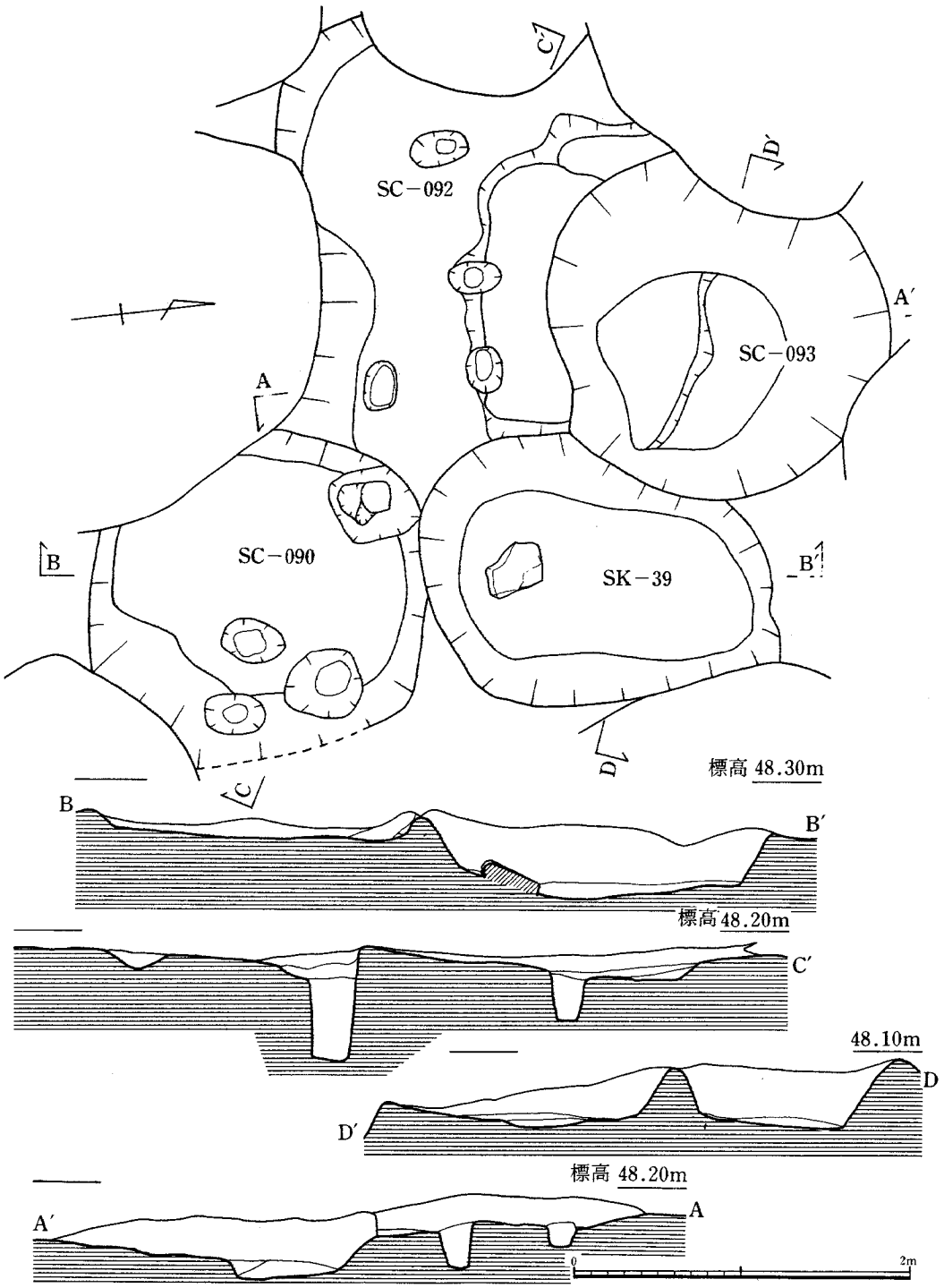


Fig.122　第90，92，93号住居址(SC－090，092，093)，第39号土壙(SK－39)実測図

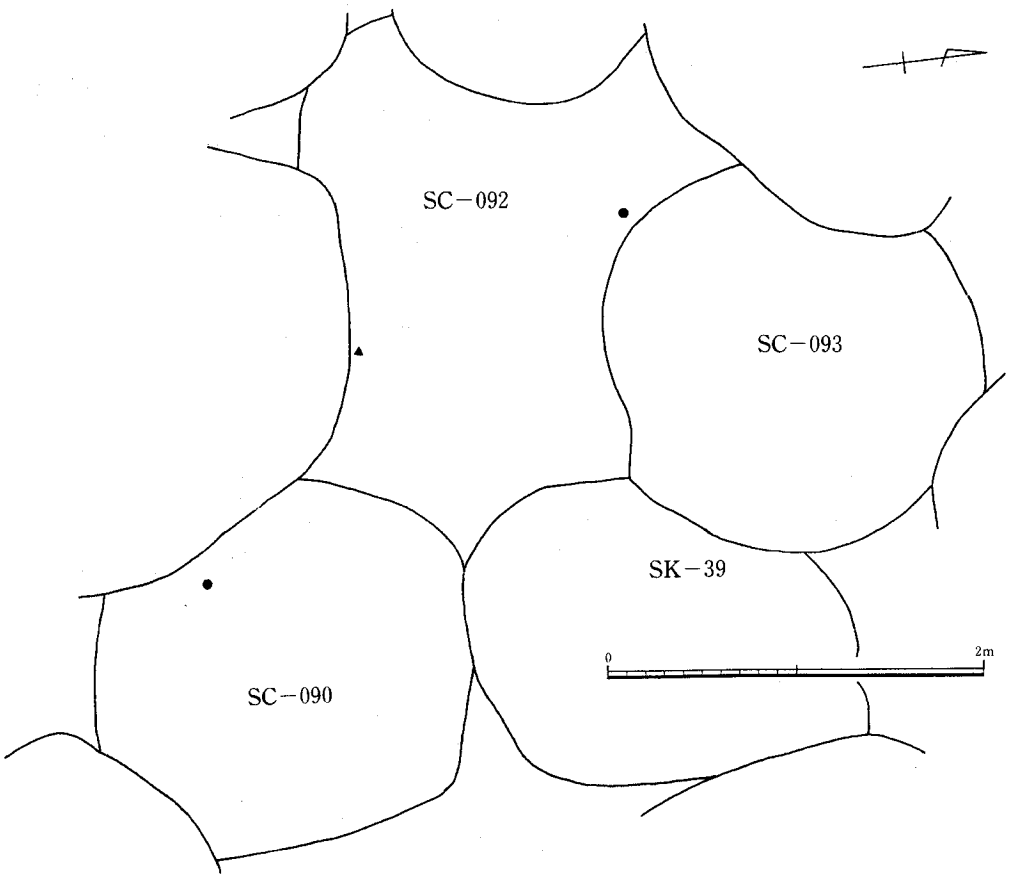
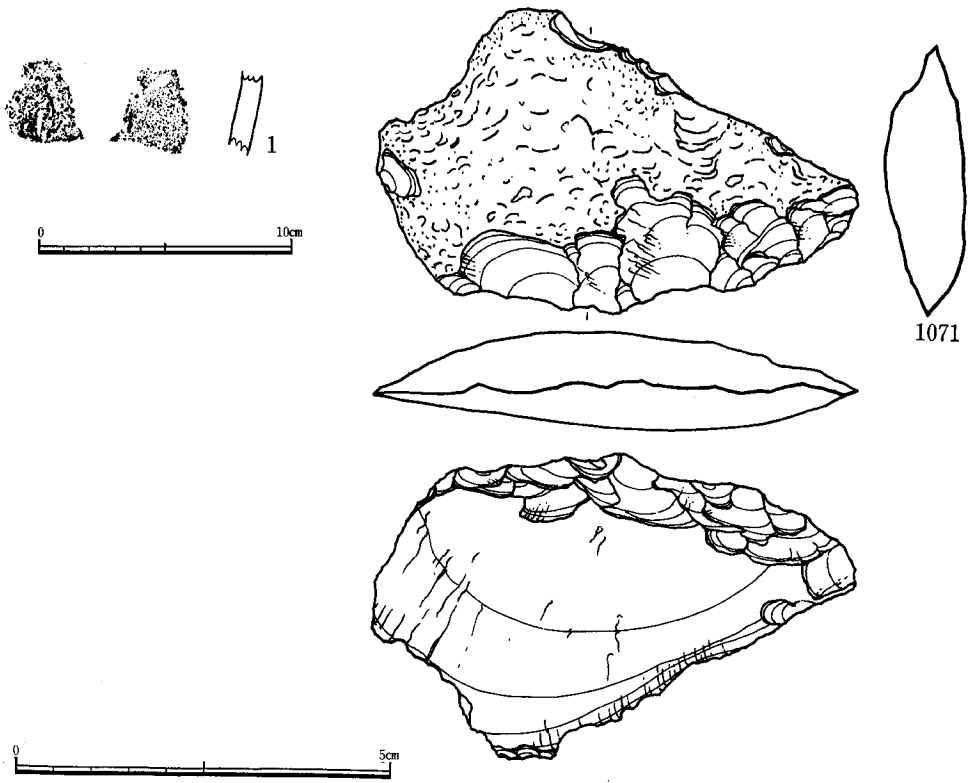


Fig.123　第90，92，93号住居址・第39号土壙遺物出土状況

70cm，深さ10cmの楕円形プランで断面皿状をなす土壙が掘り込まれる。東側には30cm×55cm，深さ10cmのピットがある。住居址内に８個の角礫が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(92)　第92号住居址（ＳＣ－092）（Fig.　122）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－51，52，Ｒ－51グリットにわたって検出した遺構である。第85号，86号，90号，93号，94号，95号竪穴住居址，第39号土壙と重複関係にあり，第85号，86号，90号，93号，94号，95号竪穴住居址，第39号土壙に切られている。重複関係が著しいために遺存状態はきわめて悪い。長径2.9m以上，短径2.35m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ５～20cmで，かなり削平されている。壁のたちあが



りはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなすとみられ，ほぼ平坦である。床面の中央部に158cm×100cm以上，深さ10cmの方形プランをなすと考えられる土壙が掘り込まれている。この土壙の掘り込み部の南の一辺には二個の柱穴状のピットがある。ピットは径20cm，深さ25cm，15cmである。また床面の南西部と南東部に各1個の柱穴状のピットが存在する。径20cm～40cmで深さ25cmをはかる。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器，黒曜石チップが出土している。

土器 (Fig. 124－1)

胴部破片，外面の調整は器面が荒れているため明確でないが，貝殻条痕調整の可能性がある。内面はナデ調整，胎土には石英，長石，黒雲母の砂粒を含むが良質，焼成は良好で色調は黄褐色～褐色をなす。

石器 (Fig. 124)

1071はサヌカイト製の横長剝片を素材としたサイドスクレイパーである。刃部は両面からの剝離によって形成している。背面に自然面を大きく残し，円礫状の原石であったことがわかる。長さ64.0mm，巾40.0mm，厚さ10.5mmを測る。

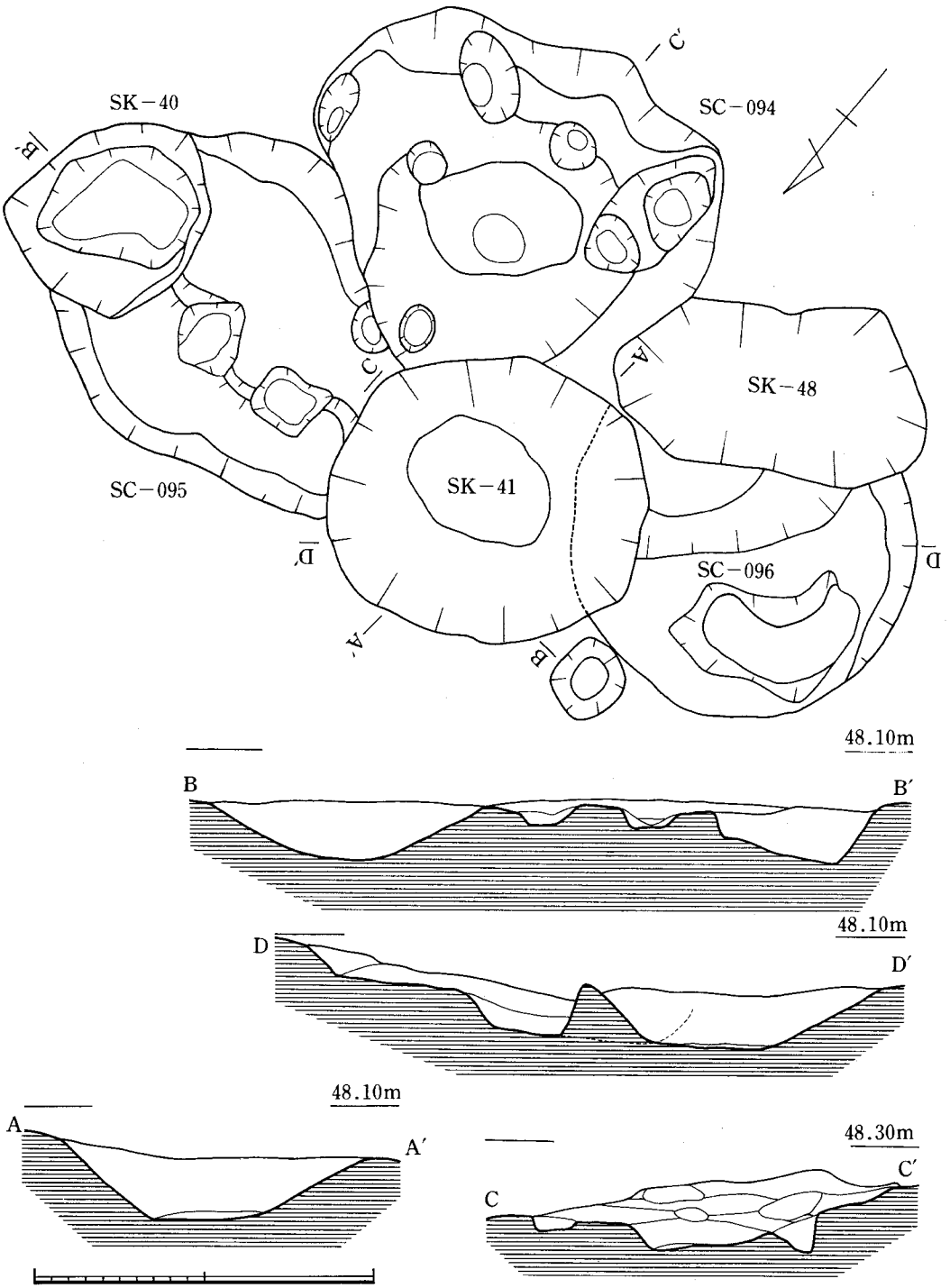


Fig.125　第94～96号住居址(SC－094～096)，第41，48号土壙(SK－41，48)実測図

(93)　第93号住居址（ＳＣ－093）(Fig. 122)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＱ－51，52，Ｒ－52グリットにわたって検出した遺構である。第92号，101号竪穴住居址，第39号，40号土壙と重複関係にあり，第92号竪穴住居址，第39号土壙を切り，第101号竪穴住居址，第40号土壙に切られている。長径2.0m，短径2.05mの円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ20～30cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形プランをなし，ほぼ平坦である。床面は南半部が土壙状に一段深くなる。柱穴状のピット等は存在しない。規模からみて，住居址とみるより土壙とした方がよいかも知れない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(94)　第94号住居址（ＳＣ－094）(Fig. 125)

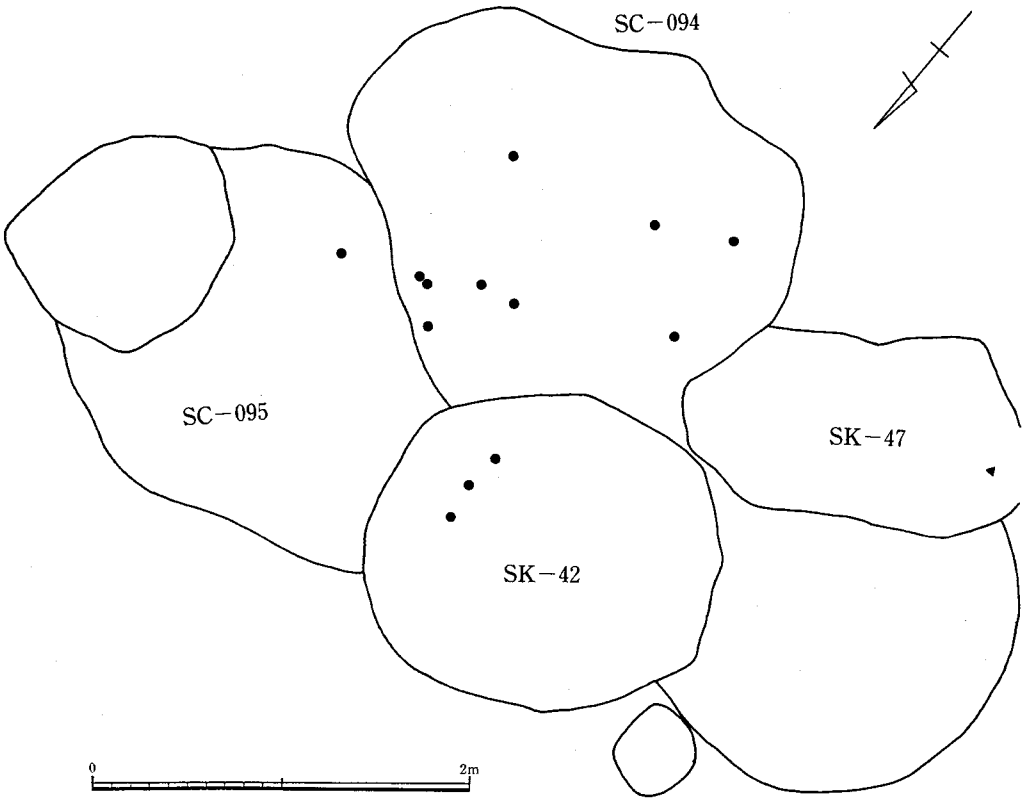
発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｏ－51，52，Ｐ－51，52グリットにわたって検出した遺構である。第92号，95号竪穴住居址，第41号，42号土壙と重複関係にあり，第92号，95号竪穴住居址を切り，第41号，42号土壙に切られている。長径2.35m以上，短径2.1m以上の円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～35cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面の中央部に90cm×65cm，深さ15cmの楕円形の土壙が掘り込まれている。壁際の東西南北に径20～30cm，深さ８～20cmの柱穴状のピットが存在する。また，壁の上縁近くの東西に各２個の柱穴状ピットが存在する。ピットは径30～40cmで深さ10cm前後である。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

遺物出土状況（Fig. 126）

本竪穴住居址内には周辺の他の住居址に比較して遺物がやや多く出土している。竪穴の全面に散布し，１ヶ所に集中していない。出土遺物は土器のみで，９点が出土している。

土器（Fig. 126－1～3）

大きな破片で特徴的な３点を図示した。１は胴部破片。外面に楕円押型文を横走施文しているが，原体を数回にわたって重複施文しているのと，器面の保存状態が悪いので，原体の大きさ，文様単位は明らかにできない。２も１同様，外面に楕円押型文を横走施文した土器であるが，押型文様の重複，器面の荒れで原体の大きさ，文様単位は明らかにできない。内面は丁寧なナデ調整を加えている。３は器面が荒れていて文様は不明。土器の特徴等からすれば，１，２と同様の楕円押型文土器の可能性が強い。胎土に石英，長石，雲母の砂粒を含んでいるが良質，焼成はやや不良である。色調は黄褐色をなすが，一部黒斑がみられる。



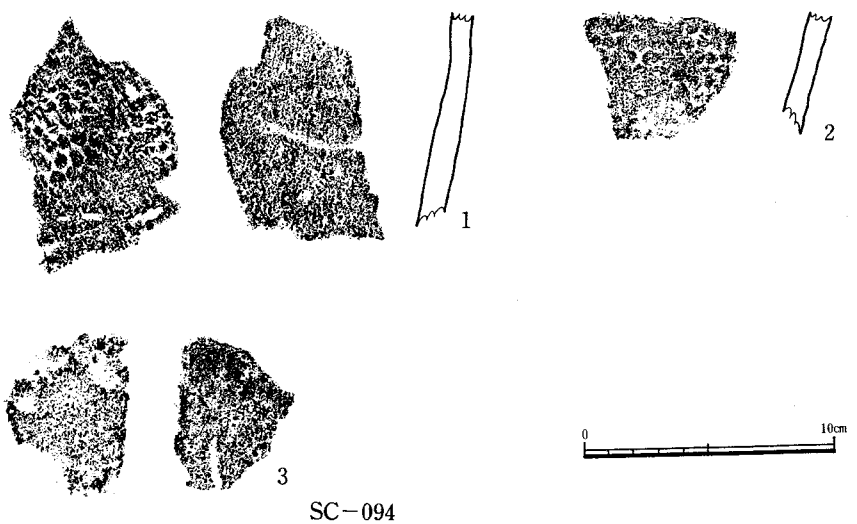


Fig.126　第94～96号住居址，第41，48号土壙遺物出土状況・出土遺物実測図

(95)　第95号住居址（ＳＣ－095）(Fig. 125)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｐ－52，53，Ｑ－52グリットにわたって検出した遺構である。第94号竪穴住居址，第40号，41号土壙と重複関係にあり，第94号竪穴住居址，第40号，41号土壙に切られている。重複関係が著しいためにその遺存状態は良くない。長径2.1m以上，短径2.0mの楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ８cm前後で，削平が著しい。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は楕円形プランをなし，ほぼ平坦であるが，北半部が一段深くなり，土壙状をなしている。この落ち際に一辺35cm，深さ12cmの方形の柱穴状のピットが２個横に並列している。また，南壁に径25cm，深さ10cmの柱穴状のピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

(96)　第96号住居址（ＳＣ－096）(Fig. 125)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｎ－51，52，Ｏ－51，52グリットにわたって検出した遺構である。第41号，42号土壙と重複関係にあり，第41号，42号土壙に切られている。重複関係が著しいために遺存状態が良くない。長径2.1m，短径1.95mの円形ないしは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～15cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形ないしは楕円プランをなすと考えられ，ほぼ平坦であるが，東半部が土壙状に深く掘り込まれている。深さ15cm。柱穴状のピット等は存在しない。住居址ではなく土壙とした方が良いかもしれない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(97)　第97号住居址（ＳＣ－097）(Fig. 127)

発掘調査区の北端に近い丘陵尾根線上のＭ－53，Ｍ－52，53グリットにわたって検出した遺構である。単独で存在し，他の住居址と重複関係はない。一部，発掘外へのびるが，壁付近では痕跡程度で遺存状態は悪い。長径2.3m，短径1.2m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ12～17cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面の南壁に接して径30cm，深さ20cmの柱穴状のピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

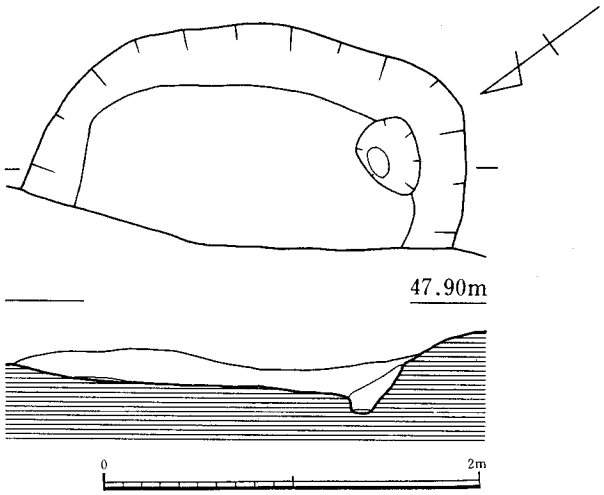


Fig.127　第97号住居址(SC－097)実測図

(98)　第98号住居址（ＳＣ－098）(Fig. 128)

発掘調査区の北端に近い丘陵尾根線のＮ－53，Ｏ－53グリットにわたって検出した遺構である。第99号竪穴住居址と重複関係にあり，第99号竪穴住居址に切られている。また，北西部の一部は発掘区外へのびている。そのため遺存する遺構は全体の¼程度である。長径1.8m以上，短径1.2m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～20cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は円形ないしは楕円形プランをなすと考えられ，ほぼ平坦である。床面には現存部では土壙，柱穴状ピットの存在はない。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(99)　第99号住居址（ＳＣ－099）(Fig. 128)

発掘調査区の北端に近い丘陵尾根線上のＯ－53，54，Ｐ－53，54グリットにわたって検出した遺構である。第98号，100号竪穴住居址と重複関係にあり，第98号竪穴住居址を切り，第100号竪穴住居址に切られている。長径2.4m以上，短径2.2m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～15cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状

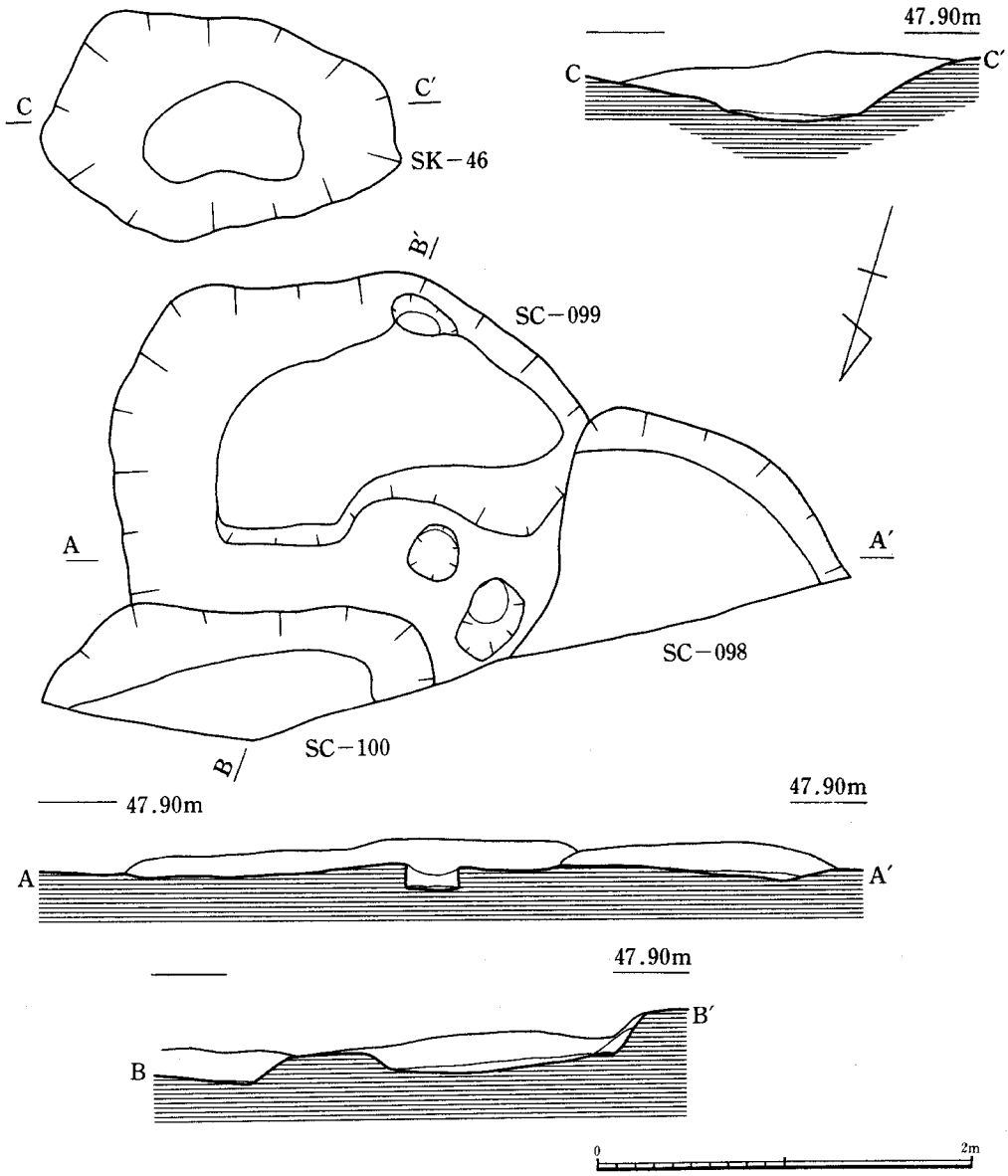


Fig.128　第98～100号住居址(SC－098～100)，第46号土壙(SK－46)実測図

をなしている。床面は円形あるいは楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面の南に片寄って180cm×100cm，深さ20cmの不整楕円形の土壙が掘り込まれている。また床面西側に径25cm，深さ12cmの柱穴状のピット2個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

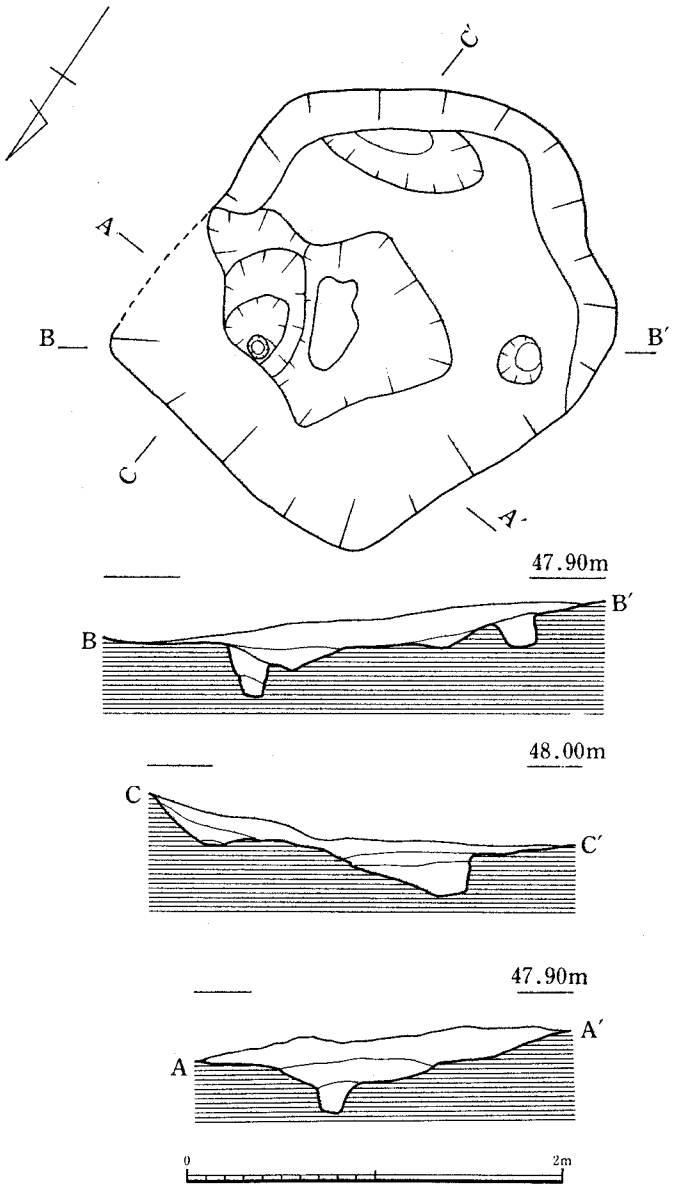


Fig.129　第101号住居址(SC－101)実測図

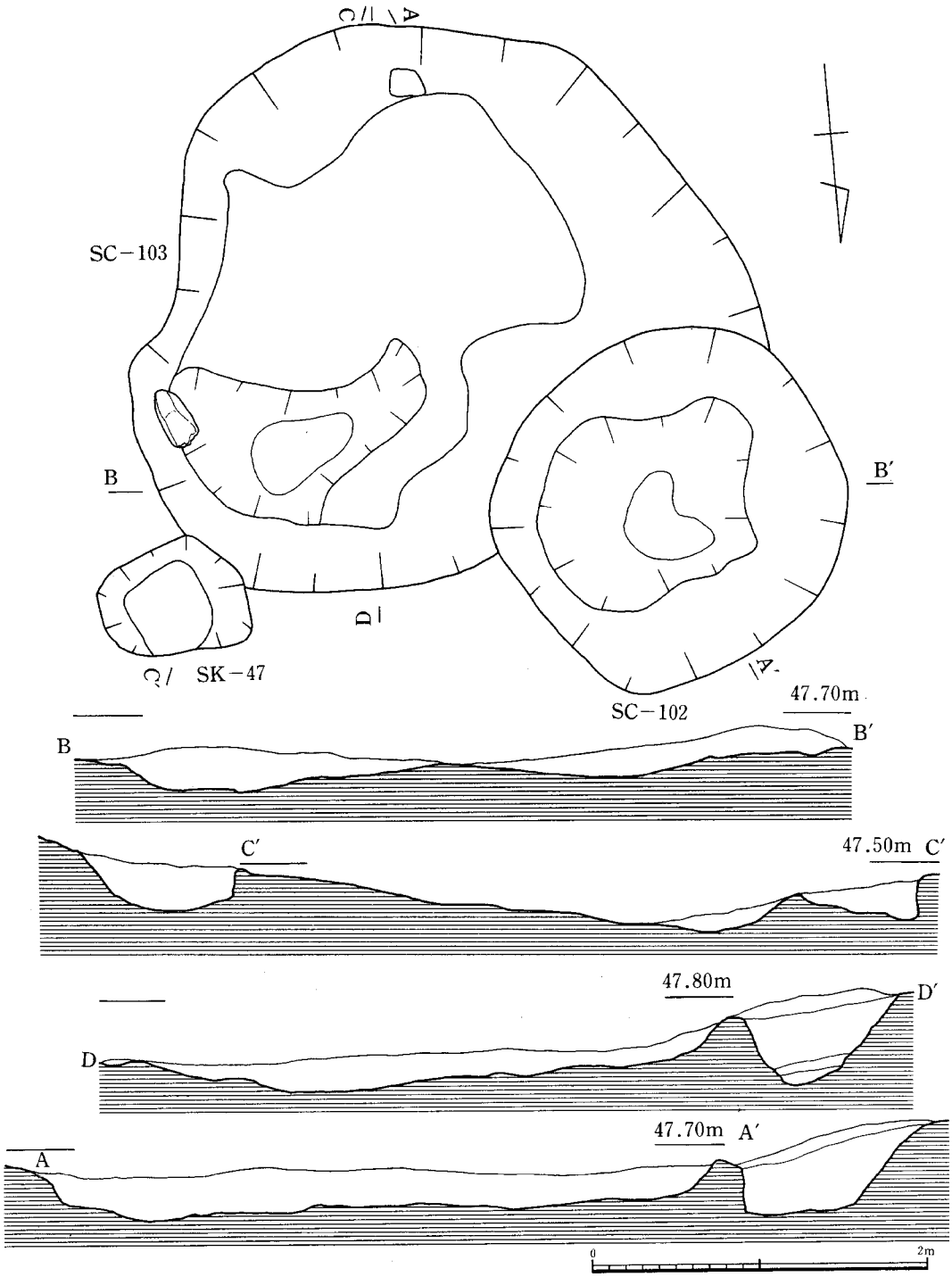


Fig.130　第102，103号住居址(SC－102，103)，第47号土壙(SK－47)実測図

(100)　第100号住居址（ＳＣ－100）(Fig. 128)

発掘調査区の北端部，丘陵尾根線上のＯ－54，Ｐ－54，55グリットにわたって検出した遺構である。第99号竪穴住居址と重複関係にあり，第99号竪穴住居址を切っている。大部分が発掘区外へのびており，現存部は全体の⅓程度と思われる。長径2.05m以上，短径0.65m以上の円形あるいは楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15cm前後で，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなすと考えられほぼ平坦である。床面の現存部には土壙，柱穴状のピット等は認められない。住居址ではなく，土壙の可能性も強い。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(101)　第101号住居址（ＳＣ－101）(Fig. 129)

発掘調査区の北端部に近い，Ｑ－52～54，Ｒ－52～54グリットにわたって検出した遺構である。第93号竪穴住居址と重複関係にあり，第93号竪穴住居址を切っている。長径2.45m，短径2.2mの隅丸の五角形プランをなす竪穴住居址である。深さ15～20cmであるが，北側は削平のため遺存状態が悪い。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなしほぼ平坦である。床面の中央部に150cm×110cmの不整形プランの土壙が掘り込まれている。深さ10cm。土壙の東北部端に径15cm，深さ16cmの柱穴状ピットがあり，それに相対する南西床面に径25cm，深さ15cmの柱穴状のピットが存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(102)　第102号住居址（ＳＣ－102）(Fig. 130)

発掘調査区の北端部，Ｒ－54，55，Ｓ－54，55グリットにわたって検出した遺構である。第103号竪穴住居址と重複関係にあり，第103号竪穴住居址を切っている。長径2.2m，短径2.05mの円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ15～25cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面には土壙，柱穴状のピットは存在しない。住居址とするより，土壙の可能性が強い。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(103)　第103号住居址（ＳＣ－103）(Fig. 130)

発掘調査区の北端部，Ｒ－53，54，Ｓ－53～55，Ｔ－53～55グリットにわたって検出した遺構である。第102号竪穴住居址と重複関係にあり，第102号竪穴住居址に切られている。長径3.8ｍ以上，短径3.3ｍの不整楕円形プランをなす竪穴住居址と考えられる。深さ10～20cmで，削平のため竪穴上部の遺存状態は悪い。壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランをなし，ほぼ平坦である。床面の北東側に片寄って150cm×90cm，深さ５cmの不整形土壙が掘り込まれている。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より遺物の出土はない。

(104)　第104号住居址（ＳＣ－104）(Fig. 107)

発掘調査区の北半部，丘陵尾根線に近い，Ｌ－48，49，Ｍ－48，49グリットにわたって検出した遺構である。第72号，73号竪穴住居址と重複関係にあり，第72号，73号竪穴住居址を切っている。長径2.3ｍ，短径2.1ｍの楕円形プランをなす竪穴住居址である。深さ30～55cmで，壁のたちあがりはゆるやかで，断面形は皿状をなしている。床面は不整形プランでほぼ平坦であるが，南半部が一段高く掘り残されて階段状をなしている。東壁に径24cm，深さ10cmの柱穴状のピット１個が存在する。竪穴埋土は黄褐色砂質土で，埋土中より土器が出土している。

６．土壙と出土遺物

(1)　第１号土壙（ＳＫ－01）(Fig. 131)

発掘調査区の南半部丘陵東斜面に近いＥ－13，14，　，Ｆ－13，14グリットに検出した土壙である。第７号竪穴住居址の南に位置する。長軸長155cm，短軸長115cm，深さ55～62cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長軸長117cm，南壁幅（最大幅）90cm，北壁幅（最小幅）70cmの現規を示し平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。床面東側壁に接して角礫２個がある。土壙内は包含層あるいは竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 132－1～4）

４点を図示した。１～４はすべて胴部破片である。１は内外面とも丁寧なナデ調整である。

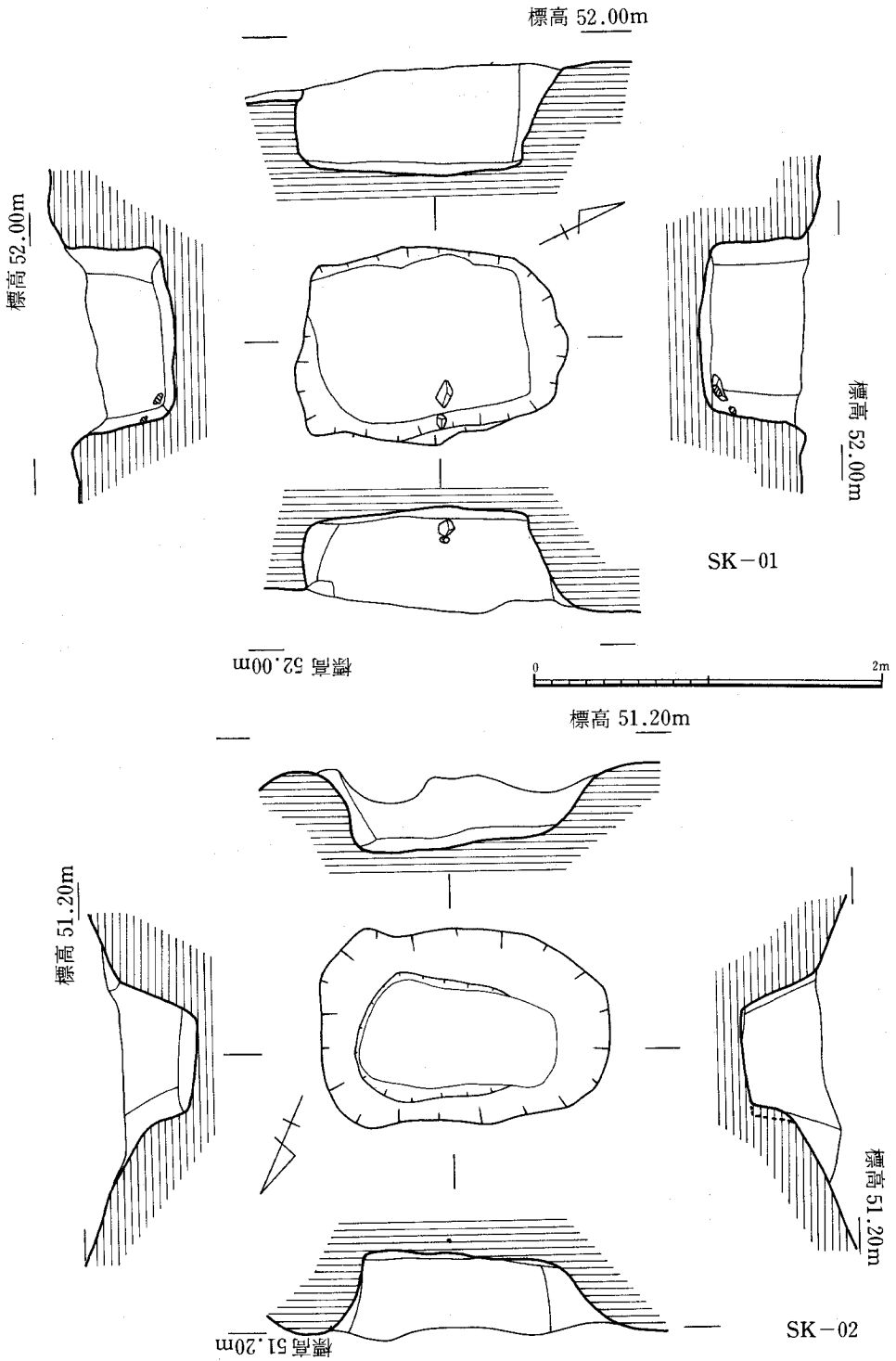


Fig.131　第1，2号土壙(SK－01，02)実測図

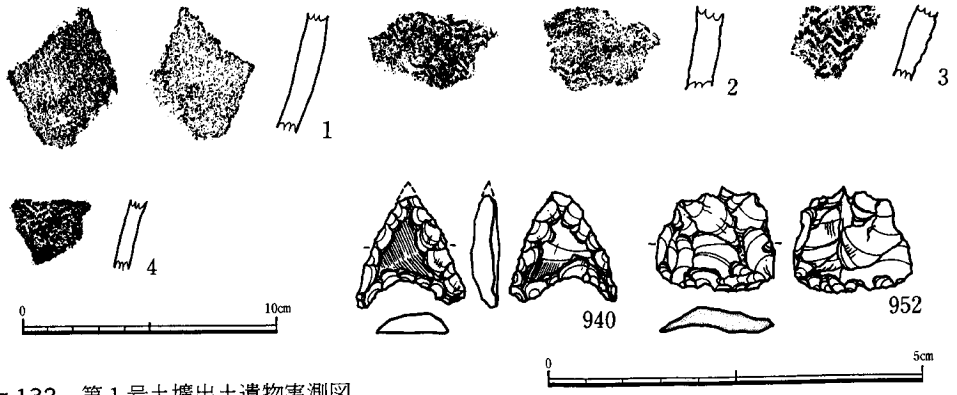


Fig.132　第１号土壙出土遺物実測図

２は口縁部に近い破片である。指ナデの調整後，山形押型文を横走施文している。山形文の山は低い。土器面の凹凸のためか，押型文は部分的な施文で，一見，ベルト施文を思わせる。原体の大きさ，文様単位については不明確。内面は上部に同様の山形押型文が横走施文されるが，器面が荒れているために不鮮明。器面に凹凸がみられる。３は外面に山形押型文を横走施文している。破片が小さいために押型文原体の大きさ，文様単位については不明。内面はナデによる調整。４は他の土器に比較して薄手の土器で，器壁は厚さ0.4cm前後である。外面には山形押型文が横走施文されている。内面は器面の保存状態が悪く不明。胎土はそれぞれ微妙に異なるが，いずれも石英，長石との砂粒を混入したものである。焼成は１がやや不良であるが，他は良好である。色調は１が外面赤褐色，内面黒褐色，２が内外面共黒褐色，３，４は内外面共黄褐色をなす。

石器（Fig. 132）

940はサヌカイト製の局部磨製石鏃である。先端部を欠損している。両面を研磨しているが，腹面側は素材剥片の主要剥離面を留めている。長さ15.0＋α mm，巾14.5mm，重さ0.6＋α gを測る。952はｏｂ－ａ製のＲｆである。両面加工品であるが，石鏃の製作を意図したものか不明である。長さ14.0mm，巾15.7mm，厚さ2.6mmを測る。

(2)　第２号土壙（ＳＫ－02）（Fig. 131）

発掘調査区の南半部丘陵東斜面のＨ－18，Ｉ－18，19グリットに検出した土壙である。第12

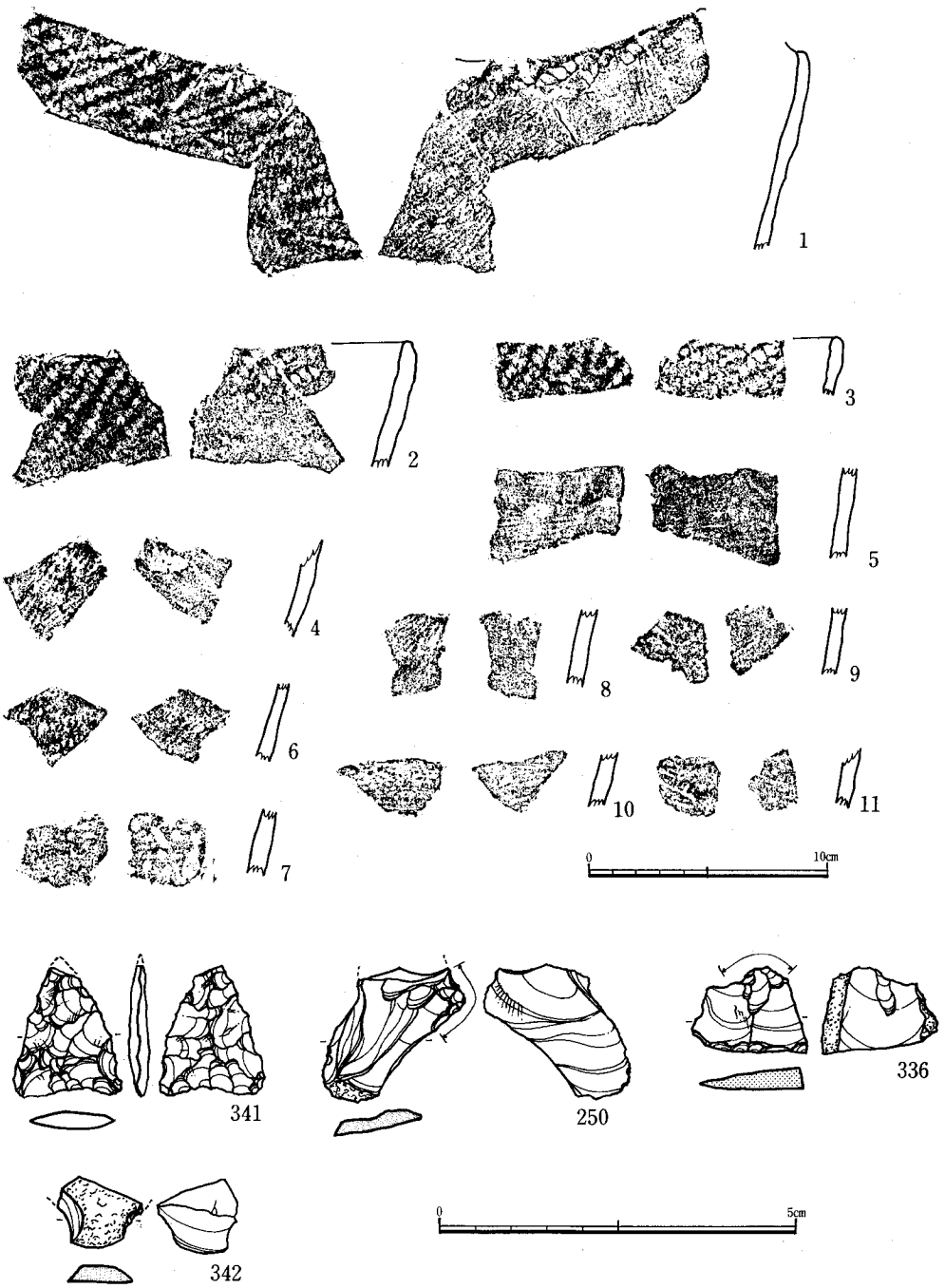


Fig.133　第２号土坑出土遺物実測図

号，17号竪穴住居址と重複関係にあり，第12号，17号竪穴住居址を切っている。長軸長162cm，短軸長112cm，深さ43cm～52cmの隅丸長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ110cm，最大幅（東側）59cm，最小幅46cmの隅丸長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 133－1～11）

11点を図示した。1は口縁部破片である。口縁端部は指ナデされ，平坦面を有する。波状口縁をなすと考えられる。口縁部はわずかに内傾する。外面には目の太い縄文，R＜ℓ一段撚の斜方向に施文されるが下半部にはおよんでいない可能性が強い。内面は横方向の貝殻条痕調整後，ヘラ研磨調整を加えている。口縁部には幅2cm程度の範囲に外面と同様，太目の縄文を斜方向に施文している。外面にはススの付着が顕著である。内面には粘土帯の接合痕が部分的に残存している。それからみると粘土帯の幅は1cm前後で，内傾接合である。2も口縁部破片で特徴，文様施文は1と同様である。内面は貝殻条痕調整の痕跡はみられない。外面にススの付着が顕著である。3も口縁部破片である。前二者と比較し，やや焼成があまい。外面と口縁部内面に太目の縄文が斜方向に施文されているのは同じである。ススの付着もみられず別個体の可能性もある。4は胴部破片で，外面は斜方向の貝殻条痕調整後，ヘラナデ調整を加えている。内面は斜方向の貝殻条痕調整後，ヘラ研磨を加え条痕を消している。5は胴部破片，指頭で整形後，貝殻条痕調整を加えているが，壁は凹凸が著しい。内面は貝殻条痕調整後，ヘラナデ調整を加えている。外面にススが付着する。6は胴部破片。外面はヘラ研磨されているが凹凸がある。内面は貝殻条痕調整後，ヘラ研磨調整。7は器面がやや荒れており不鮮明であるがヘラナデ調整と思われる。8は斜方向の細かい条痕調整後，ヘラナデ調整。内面はヘラナデ調整。9は外面はヘラナデ調整，内面は細かい条痕調整が残る。10は内外面共横方向の貝殻条痕調整後，ヘラ研磨を加えている。11は9と同一個体と思われる。以上の土器の胎土は石英，長石等の砂粒を若干含むが良質である。焼成は良好で堅緻。色調は1～3，5，6，10が外面灰褐色，内面黄褐色，9，11が外面黒色，内面黄褐色，他は内外面共黄褐色をなす。

石器（Fig. 133）

341はサヌカイト製の二等辺三角形の石鏃である。基部にわずかにゆるやかな抉りがある。頭部は欠損している。長さ18.0＋α mm，巾15.0mm，重さ0.7＋α gを測る。336はｏｂ－ｂ製の剝片を利用したＵｆである。長さ12.0mm，巾16.0mm，厚さ2.9mmを測る。250はｏｂ－ａ製のやや縦長の剝片を利用したＵｆである。長さ17.5mm，巾15.0mm，厚さ2.4mm。342はｏｂ－ａ製のＵｆである。大半を欠損している。長さ10.0mm，巾11.8mm，厚さ2.4mmを測る。

(3) 第３号土壙（ＳＫ－03）

発掘調査区の南半部丘陵東斜面のＨ－20グリットに検出した土壙である。第18号，19号竪穴住居址と重複関係にあり，第18号，19号竪穴住居址に切られている。両端部を切られているので遺存状態はきわめて悪い。長軸長90cm以上，短軸長90cm，深さ60cmの長方形プランをなすと考えられる土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ80cm，幅60cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 134－1～7）

７点を図示した。１は口縁部破片である。直口縁で口縁部が指で押えられ，わずかに外反する。外面は横方向の荒い貝殻条痕調整，内面は口縁部が横方向の貝殻条痕調整で，下半部は斜方向の貝殻条痕調整。２は胴部破片。外面は斜方向の貝殻条痕調整後，ヘラ研磨を加えている。

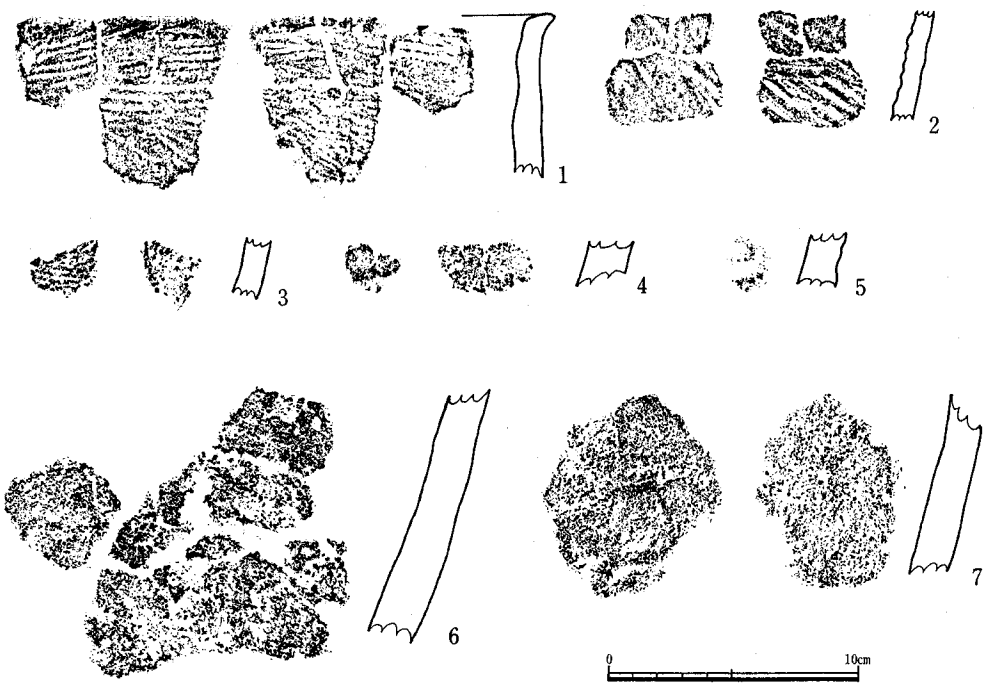


Fig.134　第３号土壙出土遺物実測図

内面は荒い斜方向の貝殻条痕調整。外面にはススが付着する。3は底部に近い胴部破片。外面の文様，調整は不鮮明で明らかにしがたい。内面は剝離している。4は器壁が厚く1.5cmの厚さを有する胴部破片，内外面共ナデ調整である。5は胴部破片，6は底部に近い胴部破片である。外面はヘラ研磨調整であるが，器面の保存状態が悪い。内面はヘラ工具による面とりがみられる。器壁は1.2～1.7cmの厚さで非常に厚手の土器である。下端部に粘土帯の接合部が存在する。内傾接合である。7は胴部破片。内外面はヘラ研磨調整と考えられるが，器面の保存状態が悪いので明確にはしがたい。以上の土器は胎土に石英，長石，花崗岩の粗い砂粒を含み良質ではない。焼成はやや不良である。色調は1，3が内外面共黄褐色，2は内外面共赤褐色，4，6は外面赤褐色で内面は灰褐色である。5，7は外面褐色，内面黄褐色である。図示していないが口縁部破片1点がある。直口縁で端部を丸くおさめる。外面にO段ℓ撚りの撚糸文を斜方向に施文する。内面は丁寧なヘラ研磨調整。

(4)　第4号土壙（SK－04）(Fig. 50)

発掘調査区の南半部丘陵斜面のJ－21，22グリットに検出した土壙である。第23号，26号竪穴住居址と重複関係にあり，第23号，26号竪穴住居址を切っている。二段に掘り込まれている。一段目掘り方は長軸長150cm以上，短軸長150cm，深さ25cmの楕円形プランをなす。二段目掘り方は長軸長90cm，短軸長50cm，深さ50cmの不整楕円形をなす。断面形は箱形をなす。床面はほぼ平坦で，壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 136－SK－04－1）

1点を図示した。胴下半部の破片である。外面は丁寧ヘラ研磨調整を加えた後，ヘラ状の工具で面とりがおこなわれている。内面は荒い貝殻条痕調整後，ヘラナデ調整を加えている。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面は黒褐色をなす。

(5)　第5号土壙（SK－05）(Fig. 135)

発掘調査区の南半部丘陵東斜面のI－22，23，J－22，23グリットに検出した土壙である。第26号，27号竪穴住居址と重複関係にあり，第26号，27号竪穴住居址を切っている。長軸長163

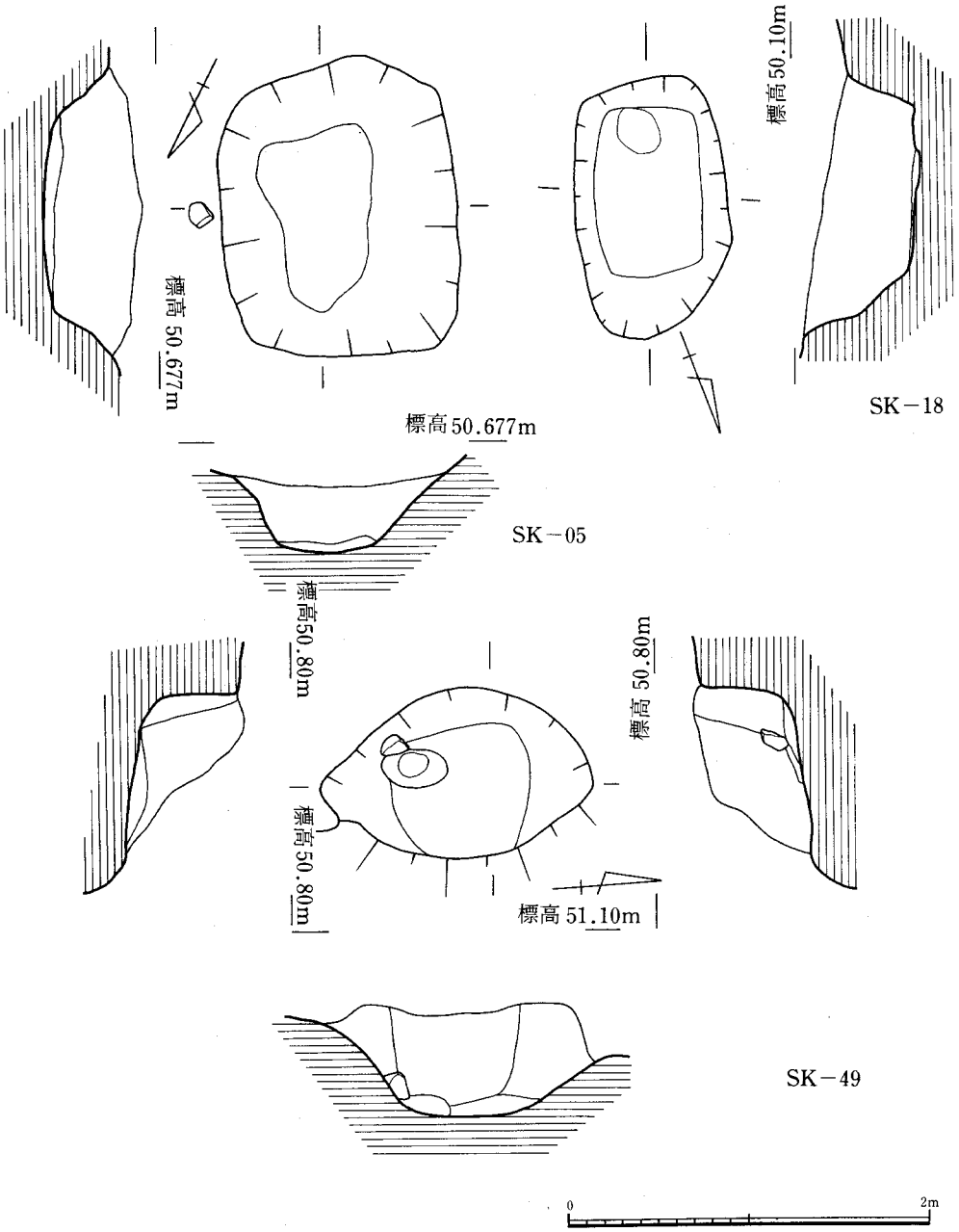


Fig.135　第5，18，49号土壙(SK－05，18，49)実測図

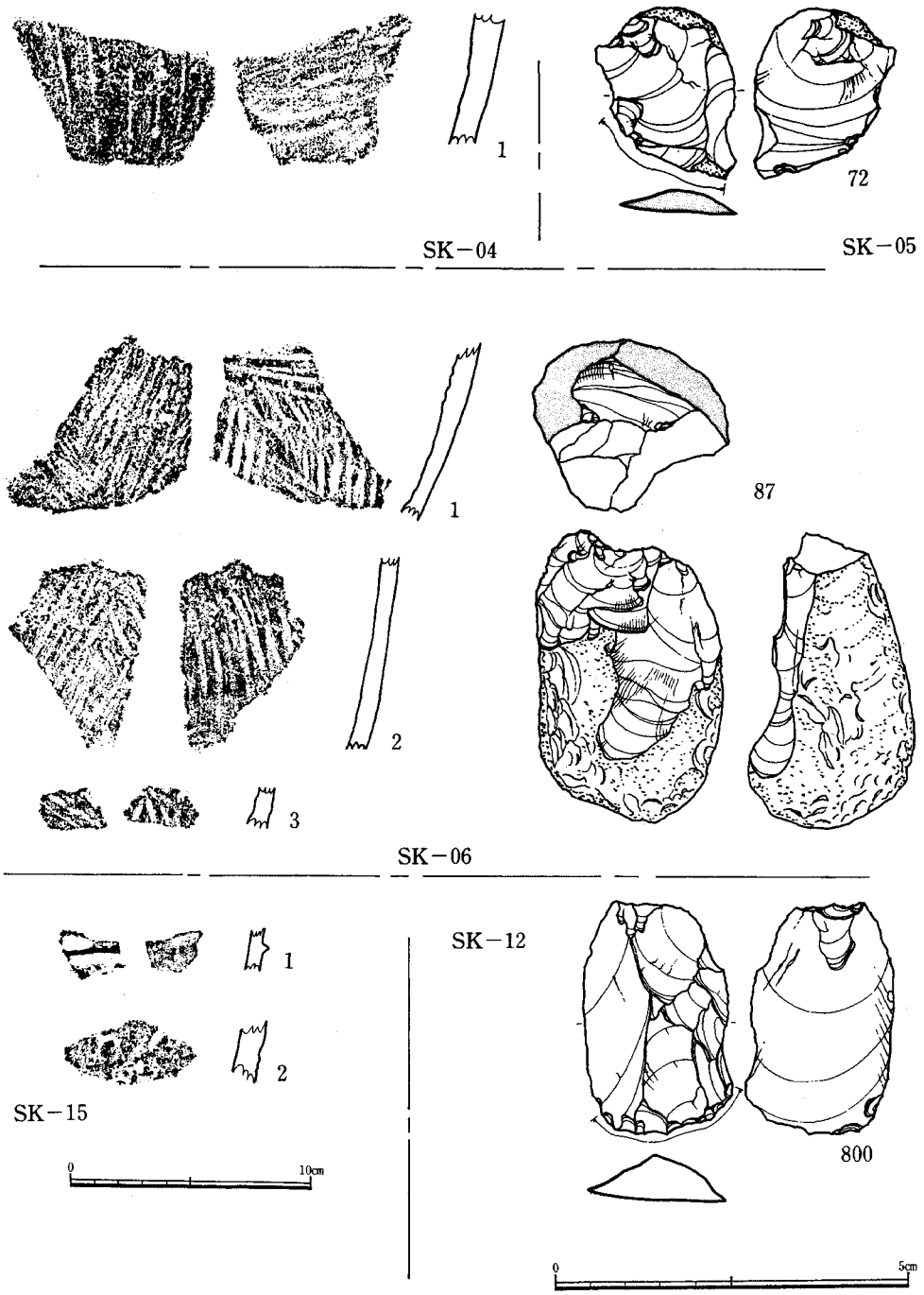


Fig.136　第4，5，6，12，15号土壙出土遺物実測図

cm，短軸長130cm，深さ52cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ95cm，最大幅（南側）65cm，最小幅（北側）42cmの不整長方形でほぼ平坦である。壁は若干傾斜をもっているが住居址に比べて急なたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

石器（Fig. 136）

72はｏｂ－ａ製の不定形な縦長の剝片を利用したＵｆである。打面は自然面である。長さ24.5mm，巾19.5mm，厚さ3.1mmを測る。

(6) 第６号土壙（ＳＫ－06）（Fig. 56）

発掘調査区の南半部丘陵東斜面のＦ－24，Ｇ－24，25グリットに検出した土壙である。第29号竪穴住居址と重複関係にあり，第29号竪穴住居址を切っている。長軸長140cm，短軸長132cm，深さ44cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面はほぼ平坦で，壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色砂質土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器が出土している。

土器（Fig. 136－ＳＫ－06－１～３）

３点を図示した。１～３はいずれも胴部破片である。１は外面に相対する斜方向の貝殻条痕調整を加えている。条痕はやや荒い。内面は上部が横方向，下半部が斜，縦方向の荒い貝殻条痕調整である。外面にススの付着が顕著である。２は外面に縦，斜方向の貝殻条痕調整がやや荒く加えられている。内面は縦方向の貝殻条痕調整を加えた後，ナデ調整を加えている。３は内外面共に斜方向の貝殻条痕調整を加えている。内面にススの付着がある。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は１が外面褐色，内面赤褐色，２が外面赤褐色，内面が褐色，３が内外面とも赤褐色をなす。

石器（Fig. 136－ＳＫ－06）

87はｏｂ－ａ製の円礫を素材とした石核である。帽子状の剝出し，打面を形成した後，片面から後退するように剝片剝離を行っている。打面調整は認められない。90はｏｂ－ａ製のＲｆである。頭部を欠損する。剝片の端部に両面より加工を施している。長さ26.5mm，巾19.0mm，厚さ7.0mmを測る。

(7)　第７号土壙（ＳＫ－07）（Fig. 56）

発掘調査区の南半部丘陵東斜面のＨ－24，25，Ｉ－24，25グリットに検出した土壙である。第29号竪穴住居址と重複関係にあり，第29号竪穴住居址を切っている。長軸長75cm以上（150cm以上が考えられる），短軸長130cm，深さ20cmの不整楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は35cm以上×45cmの楕円形プランをなすと考えられ，ほぼ平坦で，壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(8)　第８号土壙（ＳＫ－08）

発掘調査区の中央部丘陵斜面のＨ－28，Ｉ－28，29グリットに土出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。長軸長126cm，短軸長113cm，深さ56～66cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ63cm，最大幅（西側）48cm，最小幅（東側）33cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。

(9)　第９号土壙（ＳＫ－09）（Fig. 58）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＩ－30，Ｊ－29，30グリットに検出した土壙である。第30号竪穴住居址と重複関係にあり，第30号竪穴住居址に切られている。長軸長100cm以上，短軸長111cm，深さ33cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は46cm×38cmの楕円形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から遺物の出土はない。

(10)　第10号土壙（ＳＫ－10）（Fig. 65）

発掘調査区の中央部丘陵尾根に近いＤ－30，31グリットに検出した土壙である。第37号，38号竪穴住居址のすじ南側に位置している。他の遺構との重複関係はない。長軸長131cm，短軸長103cm，深さ52cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は船底形をなす。床面は90cm×65cmの不整楕円形プランをなしほぼ平坦であるが床の西半部は60cm×45cm，深さ20cmの不整方形プラン

の土壙が掘り込まれ，さらに北側壁に35cm×45cm，深さ35cmの柱穴状のピットが掘り込まれている。壁は垂直に近いたちあがりをみせる部分とゆるやかなたちあがりの部分がある。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(11) 第11号土壙（ＳＫ－11）(Fig. 62)

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＩ－31，32，Ｊ－31，32グリットに検出した土壙である。第12号土壙と重複関係にあり，第12号土壙を切っている。長軸長125cm，短軸長95cm，深さ33cmの不整楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は長さ67cm，幅34cmの楕円形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

(12) 第12号土壙（ＳＫ－12）(Fig. 62)

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＩ－32，33，Ｊ－32，33グリットに検出した土壙である。第11号，13号土壙と重複関係にあり，第11号，13号土壙に切られている。長軸長170cm以上，短軸長135cm，深さ25cm～30cmの不整楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は長さ120cm，幅58cmの不整形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

石器 (Fig. 136－ＳＫ－12)

800はサヌカイト製の縦長剝片を利用したＵｆである。長さ32.5mm，巾20.1mm，厚さ6.4mm，を測る。

(13) 第13号土壙（ＳＫ－13）(Fig. 62)

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＩ－32，33グリットに検出した土壙である。第35号竪穴住居址，第12号土壙と重複関係にあり，第12号土壙を切り，第35号竪穴住居址に切られている。長軸長40cm以上(100cm以上が考えられる)，短軸長100cm，深さ25cmの長方形プランをなすと考えられる土壙で，断面形は皿状をなす。床面は長さ43cm以上，幅33cmの長方形プランをなすと考えられ，ほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋め

ている黄褐色土層と同様である。埋土中から黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

⒁　第14号土壙（ＳＫ－14）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＧ－33，Ｈ－33グリットに検出した土壙である。他の遺跡と重複関係はなく第35号竪穴住居址のすじ西に位置している。径53cm，深さ30cmの円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は丸くなり，平坦面はない。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から遺物の出土はない。

⒂　第15号土壙（ＳＫ－15）（Fig. 137）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＦ－33グリットに検出した土壙である。第16号土壙と重複関係にあり，第16号土壙を切っている。長軸長135cm，短軸長95cm，深さ70cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ93cm，幅64cmの不整長方形をなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器が出土している。

土器（Fig. 136－ＳＫ－15－１，２）

２点を図示した。２点とも胴部の小破片である。１は内外面共丁寧なヘラ研磨調整で，外面に断面三角形の微隆起粘土紐をはりつける。外面にススの付着がみられる。２は外面に楕円押型文を縦走施文する。楕円文はやや大きい。押型文原体の大きさ，文様単位は小破片のため不明。内面はナデ調整である。胎土は１が石英，長石の砂粒を含むが良質である。２はやや砂粒の量が多い。焼成は１が良好で堅緻，２はやや不良である。色調は１が内外面共黒灰色，２が外面赤褐色，内面黒褐色である。

⒃　第16号土壙（ＳＫ－16）（Fig. 137）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＦ－33，34グリットに検出した土壙である。第15号，17号土壙と重複関係にあり，第15号，17号土壙に切られている。長軸長165cm，短軸長100cm，深さ73～55cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ103cm，最大幅（南側）

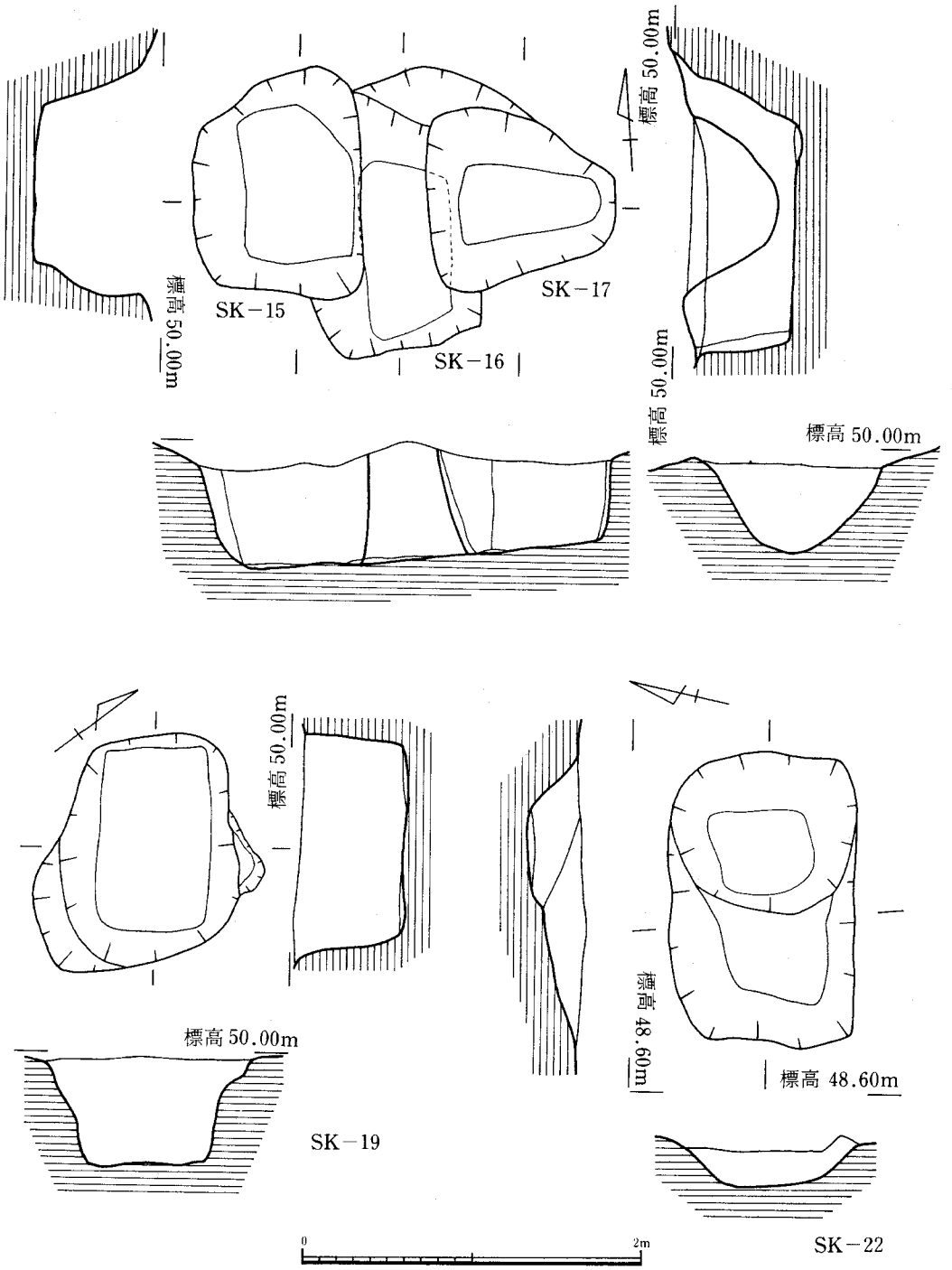


Fig.137　第15，17，19，22号土壙(SK－15，17，19，22)実測図

51cm，最小幅（北側）48cmの不整長方形をなしほぼ平坦である。床には紫色の粘土が敷かれている。壁は垂直に近いたちあがりをみせている。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 138－ＳＫ－16）

１点を図示した。胴部破片で内外面に斜方向の細かい丁寧な貝殻条痕調整が施されている。器壁は0.4cmの厚さできわめて薄い。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質。焼成は良好で堅緻。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。

(17) 第17号土壙（ＳＫ－17）（Fig. 137）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＥ－33，Ｆ－33グリットに検出した土壙である。第16号土壙と重複関係にあり，第16号土壙に切られている。長軸長110cm，短軸長106cm，深さ56cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ82cm，最大幅（東側）47cm，最小幅（西側）25cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 138－ＳＫ－17）

１点を図示した。胴部破片で，外面に楕円押型文を縦走施文する。楕円文はやや大きい。押型文の原体の大きさ，文様単位は小破片のため不明。胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。

(18) 第18号土壙（ＳＫ－18）（Fig. 135）

発掘調査区の中央部丘陵尾根に近いＢ－33，34，Ｃ－33，34グリットに検出した土壙である。他の遺構との重複関係はない。第39号竪穴住居址の北西３ｍのところに位置する。すぐ北に第19号土壙が存在する。長軸長142cm，短軸長85cm，深さ45～52cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ93cm，最大幅（中央部）59cm，両端部52cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。床面南側に枕状に粘土が敷かれている。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人

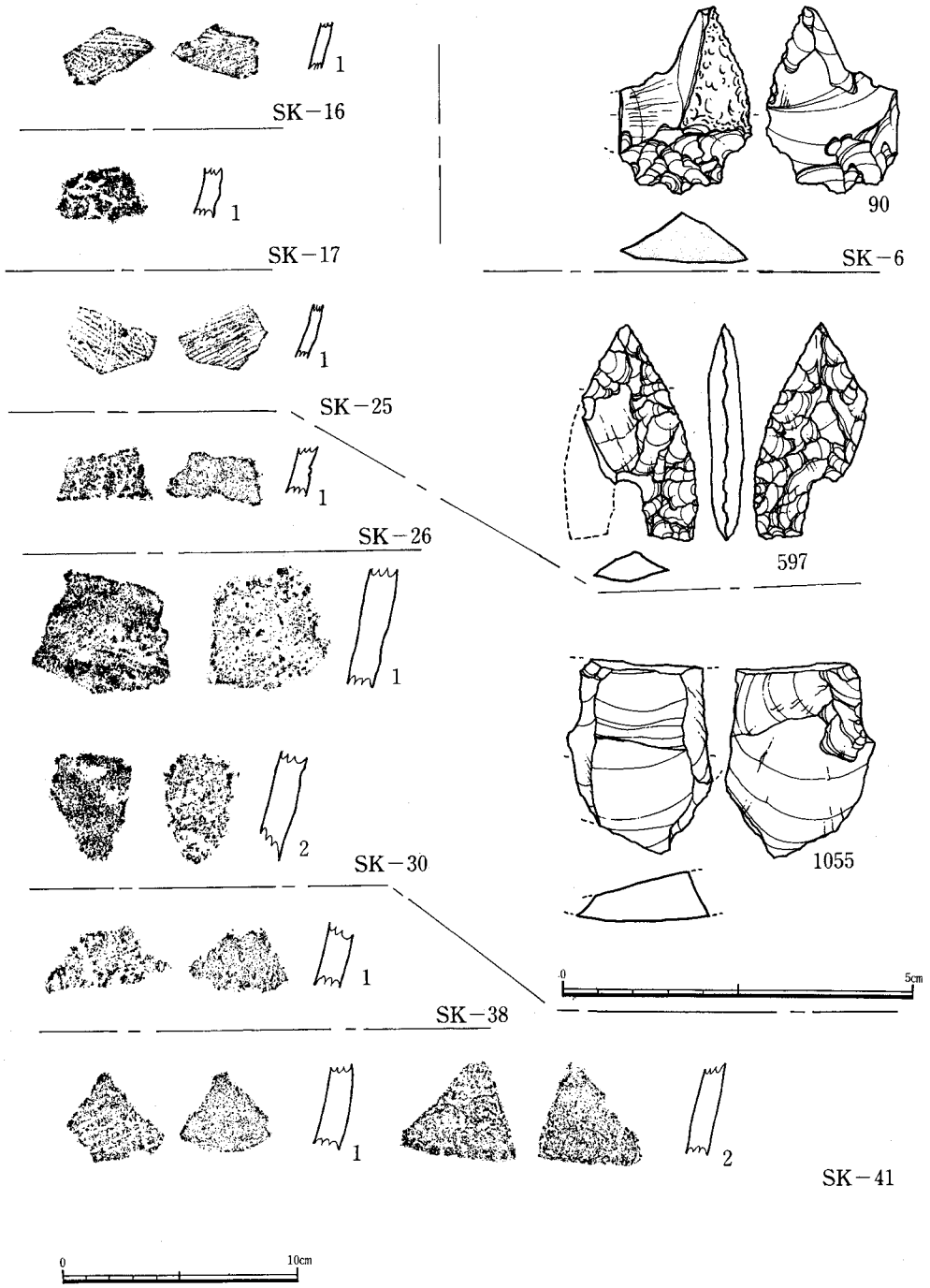


Fig.138　第b，16，17，25，26，30，38，41号土壙出土遺物実測図

為的に埋めたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。

⒆　第19号土壙（ＳＫ－19）（Fig.137）

発掘調査区の中央部丘陵尾根に近いＢ－35，Ｃ－35グリットに検出した土壙である。他の遺構と重複関係はなく，第18号土壙のすぐ北側に位置している。長軸長132cm，短軸長100cm，深さ60～65cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ108cm，最大幅（東側）64cm，最小幅（西側）59cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

⒇　第20号土壙（ＳＫ－20）

発掘調査区の中央部丘陵東斜面のＤ－35グリットに検出した土壙である。他の遺構と重複関係はない。第40号竪穴住居址の南西１ｍ，第19号土壙の東２ｍのところに位置する。長軸長110cm，短軸長95cm，深さ15cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は75cm×62cmの楕円形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

㉑　第21号土壙（ＳＫ－21）（Fig.　139）

発掘調査区の中央部丘陵尾根に近いＤ－39グリットに検出した土壙である。他の遺構との重複関係はない。第51号竪穴住居址の西２ｍのところに位置している。長軸長148cm，短軸長132cm，深さ54cmの不整形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ94cm，最大幅（西側）70cm，最小幅（東側）52cmの不整長方形プランをなし，ほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

㉒　第22号土壙（ＳＫ－22）（Fig.　137）

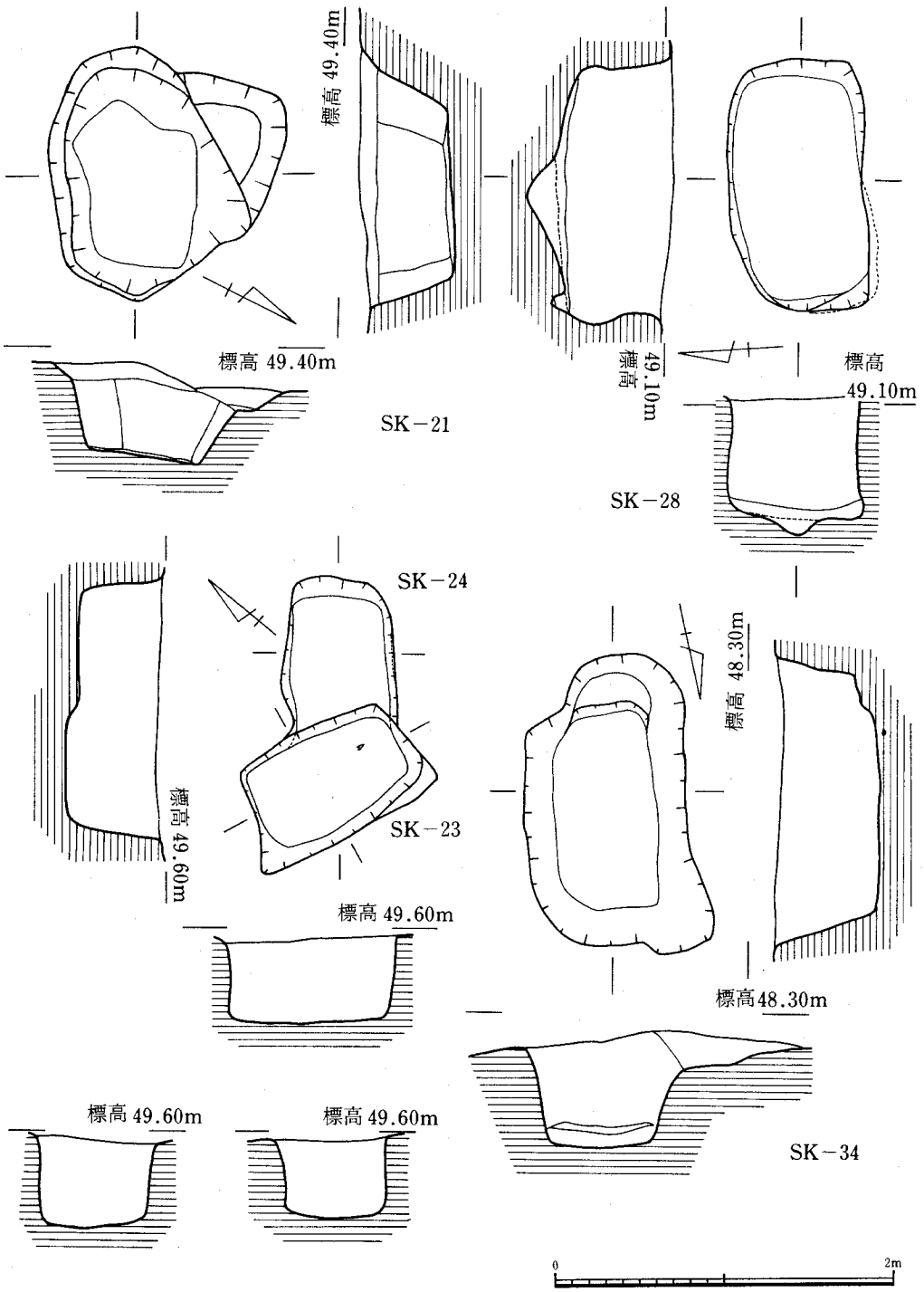


Fig.139　第21，23，24，28，34号土壙(SK－21，23，24，28，34)実測図

発掘調査区の中央部丘陵尾根に近いＡ－38，39グリットに検出した土壙である。他の遺構との重複関係はない。第51号竪穴住居址の南２ｍのところに位置している。長軸長168cm，短軸長108cm，深さ24cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は48cm×62cmの不整方形プランをなしほぼ平坦である。東半部は一段深く70cm×100cm，深さ10cmの円形の土壙が掘り込まれている。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(23)　第23号土壙（ＳＫ－23）（Fig. 139）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＦ－38，Ｇ－38グリットに検出した土壙である。第41号竪穴住居址，第24号土壙と重複関係にあり，第41号竪穴住居址，第24号土壙を切っている。長軸長100cm，短軸長68cm，深さ48cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ91cm，最大幅（西側）50cm，最小幅（東側）38cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状・あり方から土壙墓としての可能性が強い。床面の南東コーナー近くに大形の石鏃１点が副葬されたような状態で出土した。

(24)　第24号土壙（ＳＫ－24）（Fig. 139）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＧ－38グリットに検出した土壙である。第23号土壙と重複関係にあり，第23号土壙に切られている。長軸長90cm以上，短軸長66cm，深さ47cmの長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ85cm以上，最大幅（南側）53cm，最小幅51cmの長方形プランをなし，ほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。

(25)　第25号土壙（ＳＫ－25）（Fig. 76）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面に近いＨ－37，38グリットに検出した土壙である。第43号竪穴住居址と重複関係にあり，第43号竪穴住居址を切っている。長軸長234cm，短軸長145cm，深さ70～80cmの不整楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は175cm×108cmの

不整楕円形プランをなし南半部には120cm×108cm，深さ10cmの楕円形プランの土壙が掘り込まれていて一段深くなる。また，床北側には径30cm，深さ20cmの住穴状のピットがある。埋土中から土器，石器，黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

土器（Fig. 138－ＳＫ－25）

１点を図示した。胴部破片で，内外面を斜方向の細かい刷毛目状の貝殻条痕調整を施す。胎土はわずかに石英・長石の砂粒を含むが，精良である。焼成は良好で堅緻。色調は内外面共に赤褐色をなす。外面にススの付着がみられる。

石器（Fig. 138－ＳＫ－25）

597はサヌカイト製の鍬形鏃である。片脚を欠損している。長さ30.5mm，幅17.0＋α mm，重さ1.95＋α gを測る。

(26) 第26号土壙（ＳＫ－26）（Fig. 79）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面に近いＫ－37，38グリットに検出した土壙である。第44号，47号竪穴住居址と重複関係にあり，第44号竪穴住居址を切り，第47号竪穴住居址に切られている。長軸長170cm以上，短軸長163cm，深さ30cmの不整楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は107cm×93cmの楕円形プランをなしほぼ平坦で，壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より土器が出土している。

土器（Fig. 138－ＳＫ－26）

１点を図示した。胴部破片である。内外面ともヘラ研磨調整をおこなっている。外面にはアナダラ貝の腹縁を縦位に押圧した文様が施文されている。ＳＣ－44土の出土器と同一個体と思われる。胎土は石英，長石，金雲母の砂粒を含むが良質。焼成は良好で堅緻である。色調は内外面共黒褐色をなす。

(27) 第27号土壙（ＳＫ－27）（Fig. 90）

発掘調査区の中央部，丘陵東尾根に近いＦ－40，Ｇ－40グリットに検出した土壙である。第56号竪穴住居址と重複関係にあり，第56号竪穴住居址を切っている。長軸長130cm以上，短軸長105cm，深さ25cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は115cm×95cmの楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面の東側に82cm×48cm，深さ15cmの楕円形の土壙が掘り込まれ，西側に径25cm，深さ８cmの柱穴状のピットがある。壁はゆるやかなたちあがりをみせ

る。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

⑵⑻　第28号土壙（ＳＫ－28）（Fig. 139）

発掘調査区の中央部，丘陵尾根に近いＥ－41グリットに検出した土壙である。第53号竪穴住居址と重複関係にあり，第53号竪穴住居址を切っている。長軸長146cm，短軸長79cm，深さ66～72cmの隅丸長方形プランをなす土壙で，断面形は袋状になる部分があるが全体に箱形をなす。床面は長さ137cm，最大幅（西側）72cm，最小幅（東側）65cmの隅丸長方形をなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から黒曜石，古銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

⑵⑼　第29号土壙（ＳＫ－29）（Fig.140）

発掘調査区の中央部，丘陵東斜面のＭ－39，40，Ｎ－39，40グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第50号竪穴住居址の東１ｍのところに位置する。長軸長240cm，短軸長225cm，深さ180cmの不整隅丸方形プランをなす土壙である。規模，深さにおいて他と大きく異なる。深さ130cmのところで一度平坦面をつくる。平坦面は175cm×130cmの不整楕円形プランをなし，その面に長さ130cm，幅97cmの楕円形プランの土壙の掘り込みがある。土壙の床面は長さ107cm，最大幅（南側）50cm，最小幅（北側）40cmの長方形プランをなしている。土壙は深さ60cmで断面は箱形をなす。土壙内の堆積土は黄褐色砂質土層であるが，上部は自然の流れ込みの状態を示している。土壙の形状等は土壙墓の可能性が強く，土層の堆積は棺蓋の消失に伴う陥没を示している可能性が強い。似た状況は，第37号土壙にもみられる。埋土中から黒曜石，石銅輝石安山岩の剝片，チップが出土している。

⑶⓪　第30号土壙（ＳＫ－30）（Fig. 138）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根に近いＫ－44，45，Ｌ－44，45グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第66号竪穴住居址のすぐ東に位置する。長軸長185cm，短軸長170cm，深さ35cmの不整円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は長さ105cm，幅80cmの楕円形プランをなしほぼ平坦である。床面には北側に片寄って55cm×45cm，深さ20cmの楕円形の土壙が掘り込まれている。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土

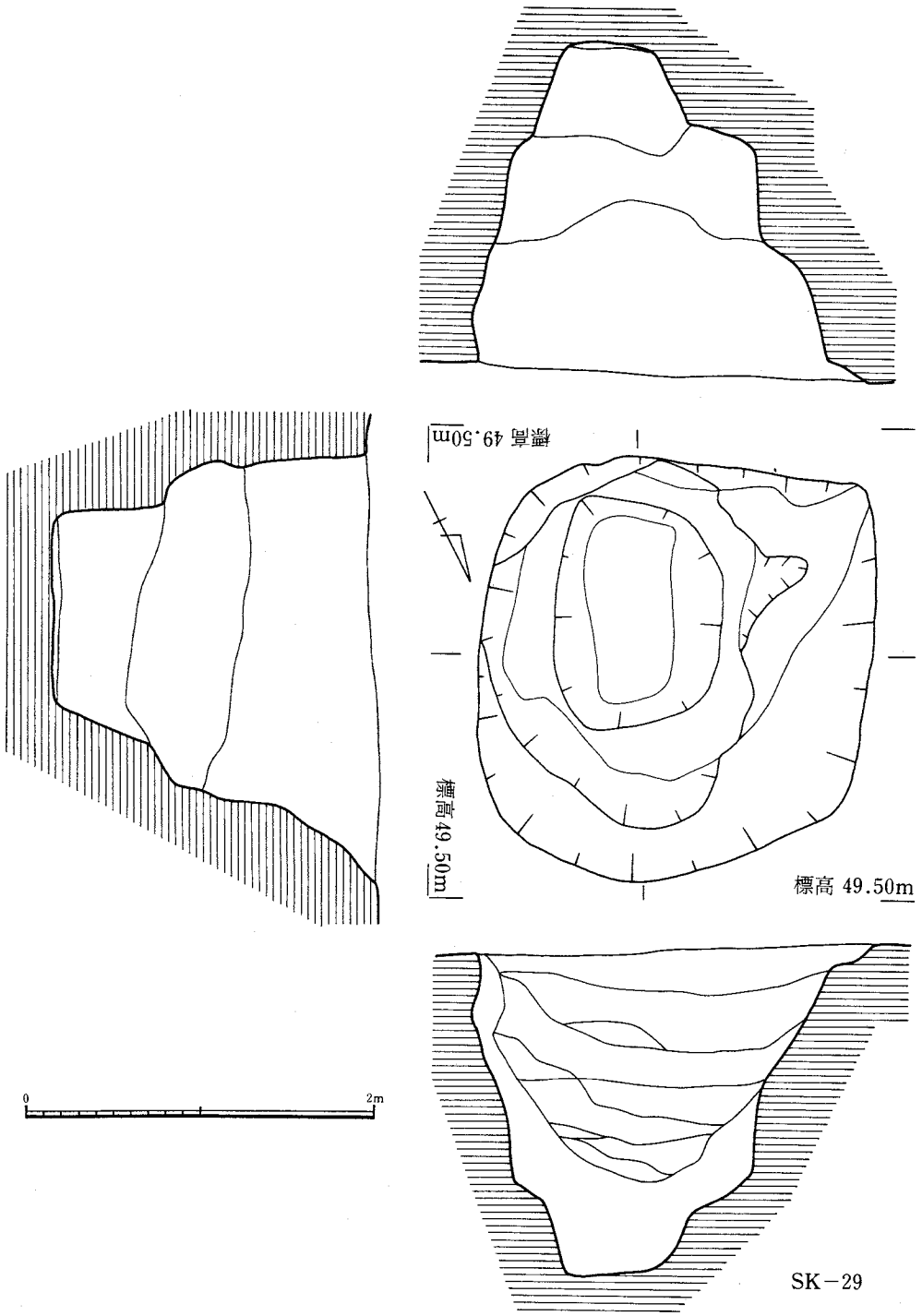


Fig.140　第29号土壙(SK－29)実測図

壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より土器が出土している。

土器（Fig. 138－ＳＫ－30－1.2）

２点を図示した。１，２共に胴部破片である。１，２共に外面は指によるナデ調整で，器面の凹凸が著しい。内面は保存状態が不良で調整痕は不明。胎土には花崗岩の粗砂粒を多量に含み良好でない。焼成はやや不良で色調は１，２共に黄褐色をなす。

石器（Fig. 138）

1055はサヌカイト製の縦長剝片を利用したRfである。主要剝離面側に一方向より剝離を施している。打面，両側辺とも分割面である。長さ27.3㎜，幅20.5㎜，厚さ6.8㎜を測る。

(31)　第31号土壙（ＳＫ－31）（Fig. 96）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面に近いＯ－41グリットに検出した土壙である。第61号竪穴住居址と重複関係にあり，第61号竪穴住居址を切っている。長軸長83cm，短軸長46cm，深さ30cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は50cm×32cmの楕円形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(32)　第32号土壙（ＳＫ－32）（Fig. 102）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＮ－45，46，Ｏ－45，46グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第67号竪穴住居址のすぐ西に位置する。長軸長52cm，短軸長44cm，深さ20cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面はほぼ平坦で，壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土から遺物の出土はない。

(33)　第33号土壙（ＳＫ－33）（Fig. 142）

発掘調査の北半部，丘陵東斜面のＴ－45，Ｕ－45グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第68号竪穴住居址の東９ｍのところに位置する。丘陵崖によって破壊されている。長軸長50cm以上（100cm以上が考えられる），短軸長66cm，深さ40cmの隅丸長方形プランをなすと考えられる土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ35cm以上，幅50cmの隅丸長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙

内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から遺物の出土はない。

(34) 第34号土壙（ＳＫ－34）(Fig. 139)

発掘調査の北半部，丘陵東斜面のＴ－46グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第70号竪穴住居址の東約５ｍのところに位置する。長軸長174cm，短軸長93cm，深さ60cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ135cm，最大幅（中央部）60cm，最小幅（南側）52cmの不整長方形プランをなし，ほぼ平坦である。床面の南端部には紫色の粘土を敷き１段高くして，枕状にしている。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層，竪穴住居址を埋めている黄褐色土層はよりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から遺物の出土はない。

(35) 第35号土壙（ＳＫ－35）(Fig. 111)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－47グリットに検出した土壙である。第80号竪穴住居址と重複関係にあり，第80号竪穴住居址を切っている。長軸長148cm，短軸長147cm，深さ38cmの不整円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は95cm×58cmの不整楕円形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(36) 第36号土壙（ＳＫ－36）(Fig. 111)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＮ－47，48，Ｏ－47，48グリットに検出した土壙である。第79号，80号竪穴住居址，第37号土壙と重複関係にあり，第79号，80号竪穴住居址を切り，第37号土壙に切られている。長軸長70cm以上（120cm前後になる），短軸長86cm，深さ20cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は55cm×30cm以上の円形あるいは楕円形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

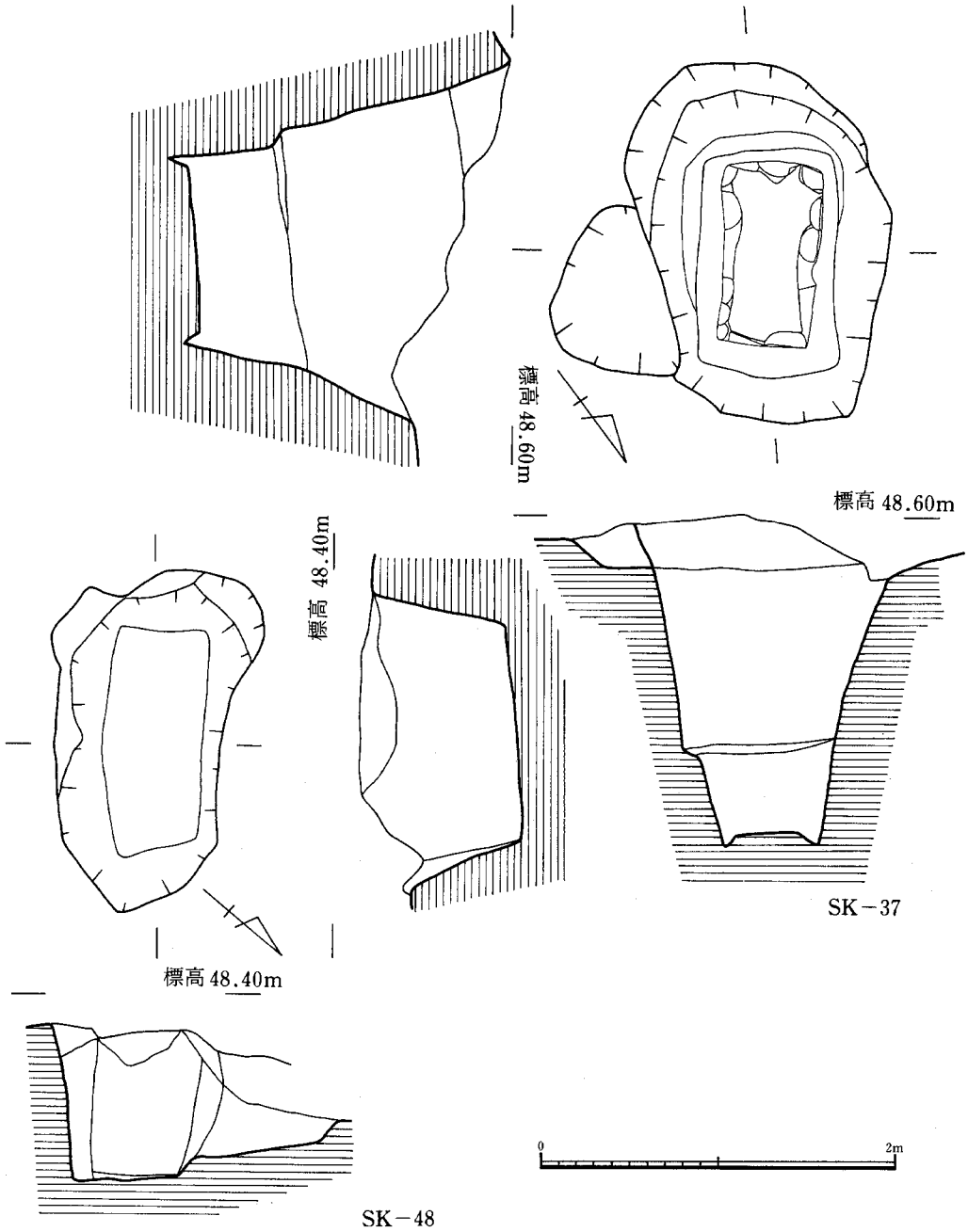


Fig.141　第37，48号土壙(SK－37，38)実測図

(37) 第37号土壙（ＳＫ－37）(Fig. 141)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＮ－47，48グリットに検出した土壙である。第73号，74号，76号，79号竪穴住居址，第36号土壙と重複関係にあり，第73号，74号，79号竪穴住居址，第36号土壙を切り，第76号竪穴住居址に切られている。長軸長202cm，短軸長140cm，深さ175cm～180cmの不整楕円形プランをなす土壙である。粘土層まで達していて遺存状態は良好である。深さ130cmのところで掘り方の変換点が存在し，わずかな平坦部がつくられる。この部分の平面プランは長さ138cm，最大幅（南側）88cm，最小幅（北側）78cmの長方形で，この面よりさらに土壙が掘り込まれる。床面は最大幅（南側）55cm，最小幅（北側）50cmの長方形プランをなし，深さ50cm～55cmで断面箱形をしている。壁にそって溝が存在し，この土壙内に木槨（木棺）がつくられていたことを明瞭に示している。溝は棺内側にむかう部分に凹凸があり，この木棺は丸太材を半截したものをたてていたことが推測できる。内部は黄褐色土によって埋まっている。埋土中より遺物の出土はない。この土壙の上に存在する住居址，ＳＣ－076からは押型文土器が出土している。

(38) 第38号土壙（ＳＫ－38）(Fig. 141)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＮ－49，Ｏ－49グリットに検出した土壙である。第77号，78号，79号，83号，84号竪穴住居址と重複関係にあり，第78号，83号，84号竪穴住居址を切り，第77号，79号竪穴住居址に切られている。遺存状態は悪く全体の1/4程度を残すのみである。長軸長108cm以上（150cm以上になると考えられる），短軸長115cm以上，深さ25cmの楕円形ないしは円形プランをなすと考えられる土壙で，断面形は皿状をなす。床面はほぼ平坦で，壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から遺物の出土はない。

土器（Fig. 138－ＳＫ－38－１）

胴部破片である。内外面共に器面の状態が悪いので，調整痕については明らかにできない。胎土には多量の石英，長石，金雲母の砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面褐色，内面黄褐色をなす。器壁はやや厚く1.1cm前後である。

(39) 第39号土壙（ＳＫ－39）(Fig. 122)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＱ－51，52，Ｒ－51，52グリットに検出した土壙である。

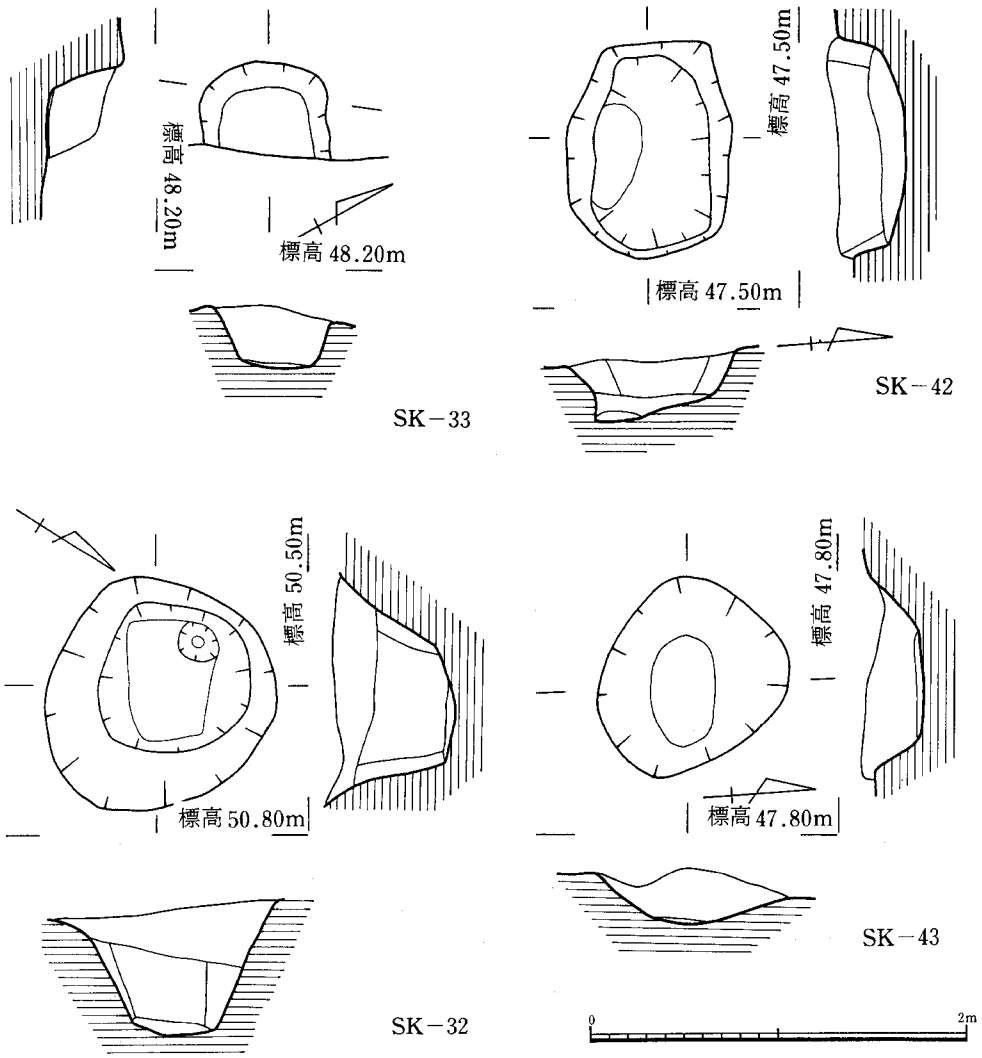


Fig.142　第32，33，42，43号土壙(SK－32，33，42，43)実測図

第90号～93号竪穴住居址と重複関係にあり，第90号，91号，93号竪穴住居址に切られ，第92号竪穴住居址を切っている。長軸長210cm，短軸長155cm，深さ40cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ175cm，最大幅（南側）98cm，最小幅（北側）70cmの隅丸長方形プランをなしほぼ平坦である。床面南側に片寄って35cm×27cm，厚さ10cmの扁平な板が置かれている。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から遺物の出土はない。

(40) 第40号土壙（ＳＫ－40）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＰ－52，Ｑ－52グリットに検出した土壙である。第93号，95号竪穴住居址と重複関係にあり，第93号，95号竪穴住居址を切っている。長軸長122cm，短軸長102cm，深さ20～30cmの不整円形プランをなす土壙で，断面形は逆台形をなす。床面は長さ57cm，最大幅57cm，最小幅30cmの不整形プランをなしほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(41) 第41号土壙（ＳＫ－41）（Fig. 125）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根に近いＯ－52，Ｐ－52グリットに検出した土壙である。第94号，95号，96号竪穴住居址と重複関係にあり，第94号，95号，96号竪穴住居址を切っている。長軸長188cm，短軸長167cm，深さ33cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は90cm×65cmの楕円形プランをなし，ほぼ平坦である。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から土器の出土がある。

土器（Fig. 138－ＳＫ－41）

２点を図示した。１，２は共に胴部破片である。１は外面はヘラ研磨調整後，棒状工具の条線が縦位にみられる。内面は丁寧なナデ調整。２は内外面共丁寧なナデ調整，胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成はやや不良である。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色である。

(42) 第42号土壙（ＳＫ－42）（Fig. 142）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＷ－51グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第88号竪穴住居址の東５ｍのところに位置する。長軸長116cm，短軸長87cm，深さ35cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ104cm，最大幅（東側）63cm，最小幅（西側）44cmの不整長方形プランをなしほぼ平坦である。床面の南壁に接して55cm×25cm，深さ５cmの楕円形プランの掘り込みがある。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層，竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から遺物の出土はない。

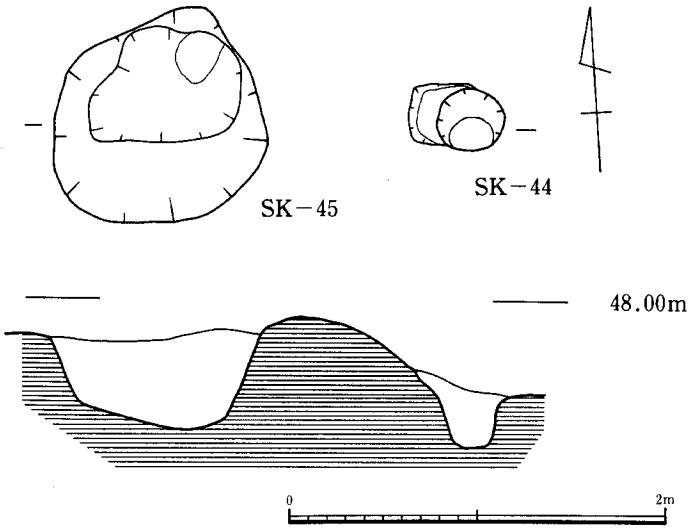


Fig.143　第44，45号土壙(SK－44，45)実測図

(43)　第43号土壙（ＳＫ－43）(Fig. 142)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＴ－53，Ｕ－53グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第91号竪穴住居址の東２ｍのところに位置する。長軸長104cm，短軸長90cm，深さ30cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は58cm×35cmの楕円形プランをなしほぼ平坦で，壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中より遺物の出土はない。

(44)　第44号土壙（ＳＫ－44）(Fig. 143)

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＴ－53グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第91号竪穴住居址の北東２ｍのところに位置する。長軸長50cm，短軸長35cm，深さ10～30cmの長方形プランをなす土壙である。床面はほぼ平坦であるが，床に径35cm，深さ30cmの柱穴状のピットがある。第45号土壙と組み合わせた遺構，あるいは住居址が削平されて土壙，柱穴状のピットのみが残存している可能性もある。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土内から遺物の出土はない。

(45) 第45号土壙（ＳＫ－45）（Fig. 143）

発掘調査区の北半部，丘陵東斜面のＳ－53グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第103号竪穴住居址のすぐ南に位置している。長軸長115cm，短軸長105cm，深さ50cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は80cm×60cmの不整楕円形でほぼ平坦である。壁は東側で垂直に近いたちあがりをみせ，南側ではゆるやかにたちあがる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土から遺物の出土はない。第44号土壙と組み合う使用が考えられる。住居址の削平により土壙と柱穴状ピットが遺存した可能性もある。

(46) 第46号土壙（ＳＫ－46）（Fig. 128）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根に近いＰ－53，Ｑ－53グリットに検出した土壙である。単独で存在し，他の遺構との重複関係はない。第99号竪穴住居址のすぐ西に位置している。長軸長185cm，短軸長124cm，深さ30cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は長さ84cm，幅50cmの不整楕円形プランをなし，ゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土内より遺物の出土はない。

(47) 第47号土壙（ＳＫ－47）（Fig. 130）

発掘調査区の北端部，丘陵東斜面のＳ－55，Ｔ－55グリットに検出した土壙である。第103号竪穴住居址と重複関係にあり，第103号竪穴住居址を切っている。長軸長88cm，短軸長63cm，深さ10cm～23cmの楕円形プランをなす土壙で，断面形は皿状をなす。床面は凹凸がある。壁はゆるやかなたちあがりをみせる。土壙内は竪穴住居址を埋めている黄褐色土層と同様である。埋土中から遺物の出土はない。

(48) 第48号土壙（ＳＫ－48）（Fig. 141）

発掘調査区の北半部，丘陵尾根に近いＯ－52，Ｐ－52グリットに検出した土壙である。第94号，96号竪穴住居址と重複関係にあり，第94号，96号竪穴住居址を切っている。長軸長196cm，短軸長95cm，深さ88cmの不整長方形プランをなす土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ122cm，最大幅（南側）50cm，最小幅（北側）46cmの長方形プランをなしほぼ平坦である。壁は垂

直に近いたちあがりをみせる。土壙内は包含層・竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。

(49)　第49号土壙（ＳＫ－49）（Fig. 54）

発掘調査の北半部，丘陵東斜面のＪ－23，24グリットに検出した土壙である。第28号竪穴住居址と重複関係にあり，第28号竪穴住居址を切っている。主軸長95cm以上(150cm前後になると考えられる)，短軸長147cm，深さ55cmの楕円形プランをなすと考えられる土壙で，断面形は箱形をなす。床面は長さ73cm以上，幅76cmの長方形プランをなすと考えられ，ほぼ平坦である。壁は垂直に近いたちあがりをみせる。土壙の南西隅に径35cmのピットと一個の礫がある。土壙内は包含層，竪穴住居址を埋めている黄褐色土層よりやや明るい黄褐色で人為的に埋められたと考えられる。土壙の形状，あり方から土壙墓としての可能性が強い。埋土中から遺物の出土はない。

7．包含層出土の遺物

包含層出土遺物には土器と石器がある。包含層は主に遺物南側，丘陵に近い段丘基部のものであるが，一部北半部のものも含まれる。遺構出土の土器との接合関係もみられるので，今後の厳密な検討によって，遺構出土遺物と包含層出土遺物における性格，投棄時の状態などの復原が可能となろう。以下，包含層出土遺物について詳述する。

(1)　土器（Fig. 144～147）

１は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部はわずかに外反し，波状口縁になる可能性がある。口縁直下に刺突文を並列施文している。刺突文の間隔は0.7～1.4cmである。刺突文は器壁に対して横から刺突したものと，下位から刺突したものと二種類がある。刺突のすぐ下位（約１cm）には刺突文と豆粒状の粘土ハリ付け文を並列施文する。粘土ハリ付け文の間隔は約２cmで，その中に２個の刺突文を配している。外面は横方向の貝殻条痕調整であるが丁寧でない。内面は貝殻条痕調整後，ナデ調整によって消しているが，器面が動物の咬み跡(ネズミ)等によって状態が不良で明確にはしがたい。外面の全面にススが付着する。内面には小さな黒

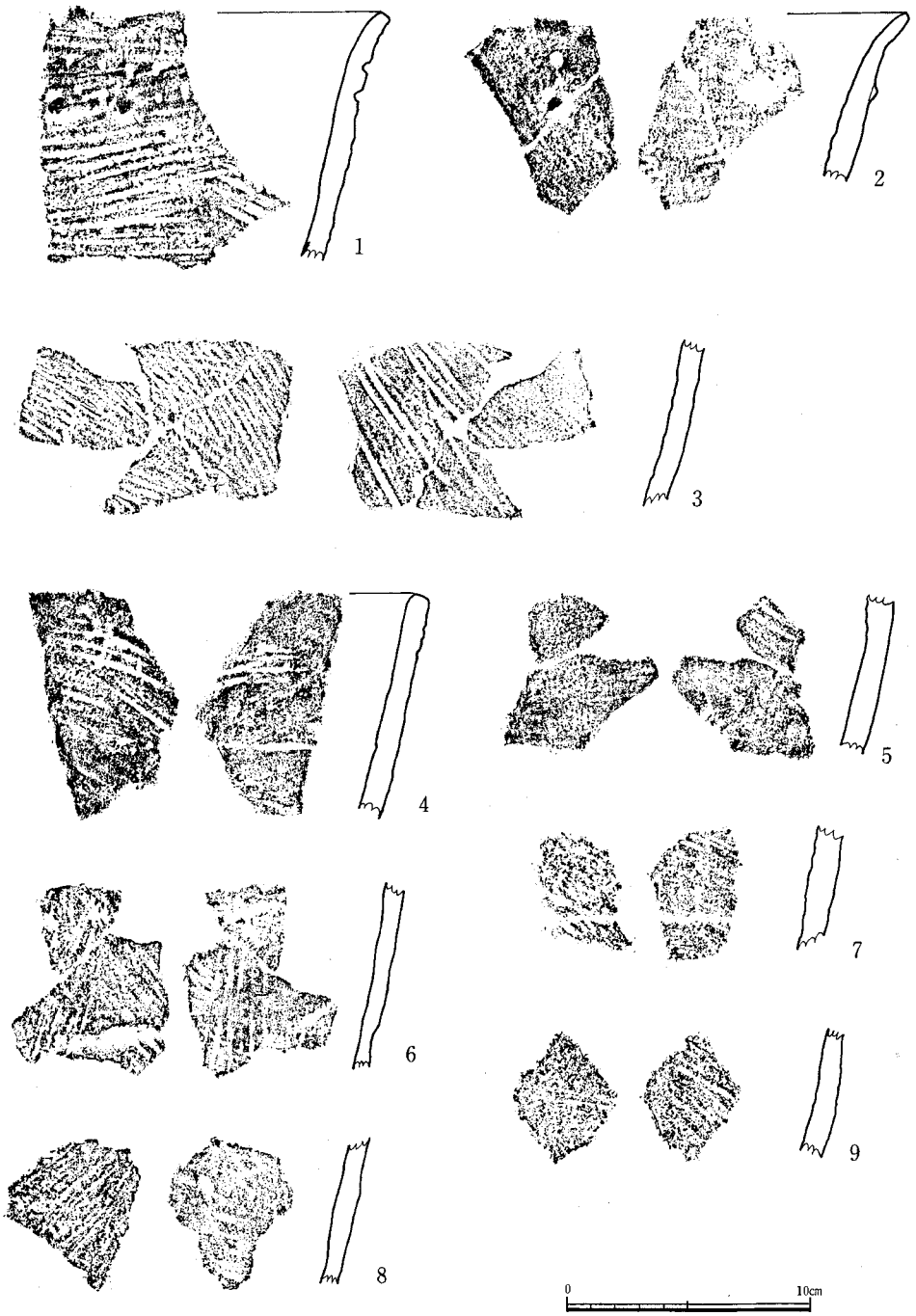


Fig.144　包含層出土土器実測図Ⅰ

色の有機質が付着している。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を多く含み良質ではない。焼成は良好である。色調は外面が黒褐色，内面は黄褐色～黒褐色をなす。F－18グリットの出土である。2は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は丸くおさめている。口縁直下に竹管による刺突文が並列施文されるが，その間隔は粗で3cm以上である。刺突文の下位には豆粒状の粘土ハリ付け文が並列施文されると思われる。間隔は2cm以上である。外面は縦，斜方向の貝殻条痕調整，内面は横，斜方向の貝殻条痕調整で口縁部はナデ消される。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質。焼成はやや不良。色調は外面が赤褐色～黒褐色，内面が赤褐色～黄褐色をなす。I－17グリット出土である。3は胴部破片。外面は横，斜方向の貝殻条痕調整。左上から右下への条痕である。内面も外面と同様の貝殻条痕調整であるが，部分的にナデ調整を加えて消している。破片の上下端は粘土帯接合部で，部分的に擬口縁状をなしている。内傾接合である。器壁は1cm前後の厚さである。胎土には石英，長石の砂粒を含み，焼成は良好。色調は外面が黄褐色～赤褐色，内面が黒褐色をなす。H－16グリット出土である。4は口縁から胴部にかけての破片である。直口縁で端部は丸くおさめる。外面は横，斜方向の荒い貝殻条痕調整，内面は横，斜方向の貝殻条痕調整後，口縁部は丁寧なナデ調整で条痕を消している。また胴部は板ナデ調整によって条痕を消しているが，完全でない。内面には炭化物が付着している。胎土に石英，長石の砂粒を若干含むが，良質である。焼成はやや不良で，色調は外面が黄褐色，内面黄褐色～黒褐色をなす。F－20グリット出である。5は胴部破片である。外面は器面の保存状態が悪いので，判然としないが，横方向の貝殻条痕調整。内面は横方向の貝殻条痕調整後，板ナデによって消している。胎土には石英，長石の砂粒を多く含んでいる。焼成はやや不良で，色調は外面が褐色，内面が黄褐色から赤褐色をなす。I－17グリット出土である。6は胴部破片，外面に縦，斜方向の貝殻条痕調整。上端部はさらに板ナデ（ケズリ状になる）を加えて条痕を消している。下端部には粘土帯の接合部があり，擬口縁状をなしている。貝殻条痕調整は，粘土帯の積みあげごとに行われており，粘土接合部の面にもみられる。接合は外傾接合を示している。内面は縦，斜方向の貝殻条痕調整，上端部は板ナデ（ケズリ状）を施し，貝殻条痕を消している。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が赤褐色～黒褐色をなす。G－29グリット出土である。7は胴部破片である。外面は斜方向の貝殻条痕調整後，ヘラ研磨を加えて下方の条痕を消している。内面は横，斜方向の貝殻条痕調整で，上方はさらにナデ調整を加え，条痕を消している。胎土には石英，長石の砂粒および花崗岩の粗砂を含んでいる。焼成はやや不良。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。G－19グリット出土である。8は胴部破片である。斜方向の貝殻条痕調整後，板ナデ調整を加えている。内面は斜方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えて，条痕を消している。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含み，焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が褐色をなす。G－19グリット出土である。9は胴部破片である。外

面は横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えて条痕を一部消している。内面は斜方向の貝殻条痕調整で，その上にナデ調整を加える。外面にススが付着している。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含んでいる。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色をなす。G－19グリットの出土である。10は胴部破片である。外面は横，斜方向のやや小さい貝殻条痕調整を加え，一部ナデ調整で消している。内面は横方向の貝殻条痕調整を加えた後，ナデ調整を加えて条痕を消している。外面にススの付着がみられる。器壁は0.4～0.5cmの厚さで薄手の土器である。破片から復原すると小型の土器と思われる。胎土に石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で，色調は外面が黒褐色，内面が黄褐色をなす。E－38グリット出土である。11は胴部破片である。外面には斜方向の貝殻条痕調整を加えている。内面は縦方向の板条痕調整，胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で，色調は外面が黒色，内面が褐色をなす。A－35グリット出土である。12は口縁部から胴部にかけての破片である。直口縁で端部は丸くおさめる。外面口縁部下に微隆起線文（粘土帯ハリ付け）をめぐらし，口縁部と隆起部に，ハの字形に短沈線を入れる。胴部には縦位，斜位の貝殻条痕調整を施す。内面上半部は指頭による押圧の調整で，下半部は板ケズリ状の調整である。外面にススが付着する。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で，色調は内外面共赤褐色をなす。G－24グリット出土である。13は口縁部破片。直口縁で端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁直下に短沈線状の刺突文を並列施文する。刺突文は下方から上方へ刺突したもので，押引き状をなしている。胴部は横方向の条痕に斜方向の条痕を重複させて，菱形状の文様をつくり出している。内面は指ナデ調整で凹凸がある。内面に炭火物の付着がみられる。胎土は石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で，色調は外面が黒褐色，内面が黒色である。S－45グリット出土である。14は口縁部破片である。直口縁で端部は丸くおさめる。内外面共丁寧なヘラ研磨調整である。外面の口縁直下には小さい刺突文を連続的に並列施文し，さらにその下位に櫛歯文（三列を一単位とする）を縦位にベルト状に施文している。現存する土器片では右側は一単位の縦列施文，中央部が二単位の縦列施文，左側が一単位の縦列施文である。器壁はやや厚く，1.2cm前後の厚さである。胎土にはわずかに石英，長石の砂粒を含むが良質で，胎土の中に繊維を入れている。焼成は良好で，色調は内外面共黄赤褐色をなす。I－7グリット出土である。15は胴部の小破片である。外面は斜方向の貝殻条痕調整を施すがやや雑である。内面は斜，横方向に貝殻条痕調整を加えている。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が黄褐色，内面が黒褐色をなす。G－19グリット出土である。16は胴部の小破片である。外面は器面の保存状態が良好でないので明確ではないが，楕円押型文が斜位に施文されている。内面はナデ調整。胎土には石英，長石の砂粒を多量に含む。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が褐色から黒褐色をなす。D－36グリット出土である。17は胴部小破片である。内外面共斜方向の貝殻条痕調整である。胎土には石英，長石の砂粒を含

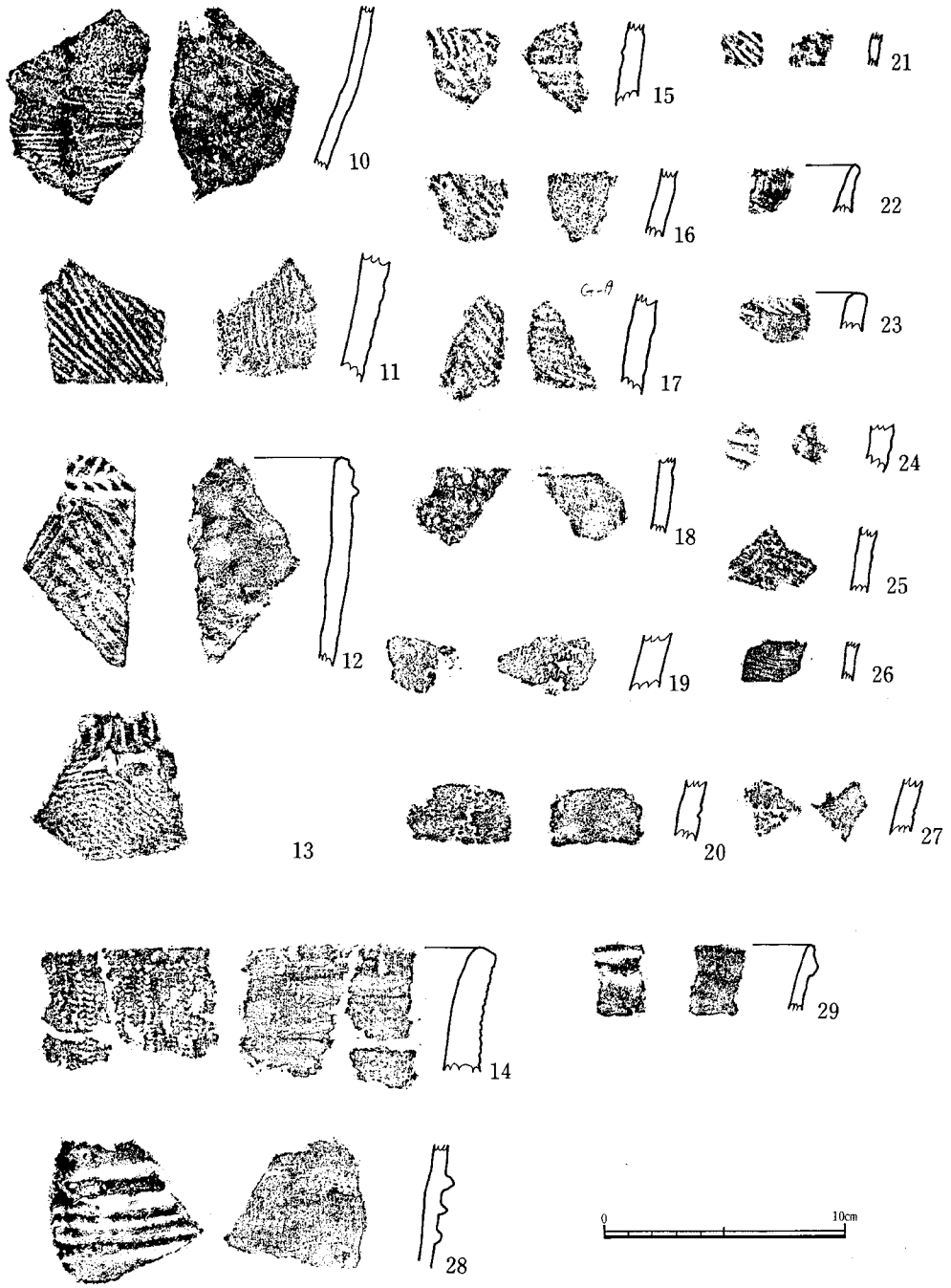


Fig.145　包含層出土土器実測図II

む。焼成はやや不良。色調は外面が赤褐色，内面が褐色である。G－19グリット出土である。18，19は胴部小破片である。内外面ともナデ調整，胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好，色調は内外面共黄褐色をなす。18はA－39グリット，19はA－38グリット出土である。20は胴部小破片である。内外面はヘラナデ調整，外面にアナダラガイ科の貝殻腹縁を縦，斜位に押圧施文した文様を入れる。胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。色調は内外面共に灰褐色をなす。J－37グリット出土である。21は胴部小破片である。外面に一段撚りR＜ℓℓの撚糸文を斜位に施文している。内面は剝離して調整は不明。胎土に石英，長石の砂粒を含んでいるが良質。焼成は良好，色調は赤褐色をなす。F－31グリット出土である。22は口縁部小破片である。口縁部がわずかに外反している。端部は丸くおさめる。外面には綾杉状に貝殻条痕調整を施している。内面はナデ調整。胎土には石英，長石の砂粒を含んでいるが良質。焼成は良好，色調は内外面共褐色をなす。内面に炭火物の付着がある。F－34グリット出土である。23は口縁部の小破片である。内外面共ナデ調整。口縁部内側にヘラ刻みの文様を入れている。胎土には石英，長石の砂粒を含んでいる。焼成は良好，色調は外面が褐色，内面が赤褐色をなす。G－13グリット出土である。24は胴部小破片。外面は斜方向の貝殻条痕調整，ススの付着がみられる。胎土に石英，長石の砂粒を含むが良質，焼成は良好，色調は内外面共赤褐色をなす。25は口縁部に近い胴部破片である。外面に楕円押型文を横走施文しているが，文様が重複し，不鮮明であるので，原体の大きさ，文様単位は明らかにできない。内面の上半部にも同様の原体によって楕円押型文が横走施文される。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質。焼成は良好で堅緻，色調は外面が黄灰褐色，内面が黒色をなす。H－28グリットの出土である。27は胴部小破片である。内外面ともナデ調整を加え器面を平滑にした後，アナダラガイ科の貝殻腹縁を横位に押圧施文して文様としている。胎土には石英，長石，雲母を混入している。焼成は良好で堅緻。色調は内外面共灰褐色をなす。J－37グリットの出土である。28は胴部破片である。内外面共に横方向の貝殻条痕を加えた後，ヘラ研磨調整を加えて丁寧に仕上げている。外面には粘土紐をハリ付けた隆起線文三条がめぐらされている。上がやや大きく断面三角形をなしている。外面にススの付着がみられる。胎土には石英，長石，金雲母の砂粒を含んでいる。焼成は良好。色調は外面が黄褐色，内面は黒褐色をなす。A－36グリット出土である。29は口縁部小破片である。直口縁で端部は丸くおさめている。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整で仕上げている。口縁直下に断面カマボコ状の粘土紐一条をハリ付けている。胎土には石英，長石の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で堅緻。色調は内外面共黒褐色をなす。器壁は薄く0.4cm前後である。A－39グリット出土である。30，31は口縁部破片で，同一個体で接合する。器形は口縁が直口する小型の深鉢形土器。復原口径19cm前後。器壁は薄く0.6cm前後である。胎土は石英，長石の砂粒を含むが上質で焼成は良い。色調は外面が黄褐色，内面が暗黄褐色をなす。外面は全面に楕円文を横走施文し，内には口縁部に上方から刺突した刺突

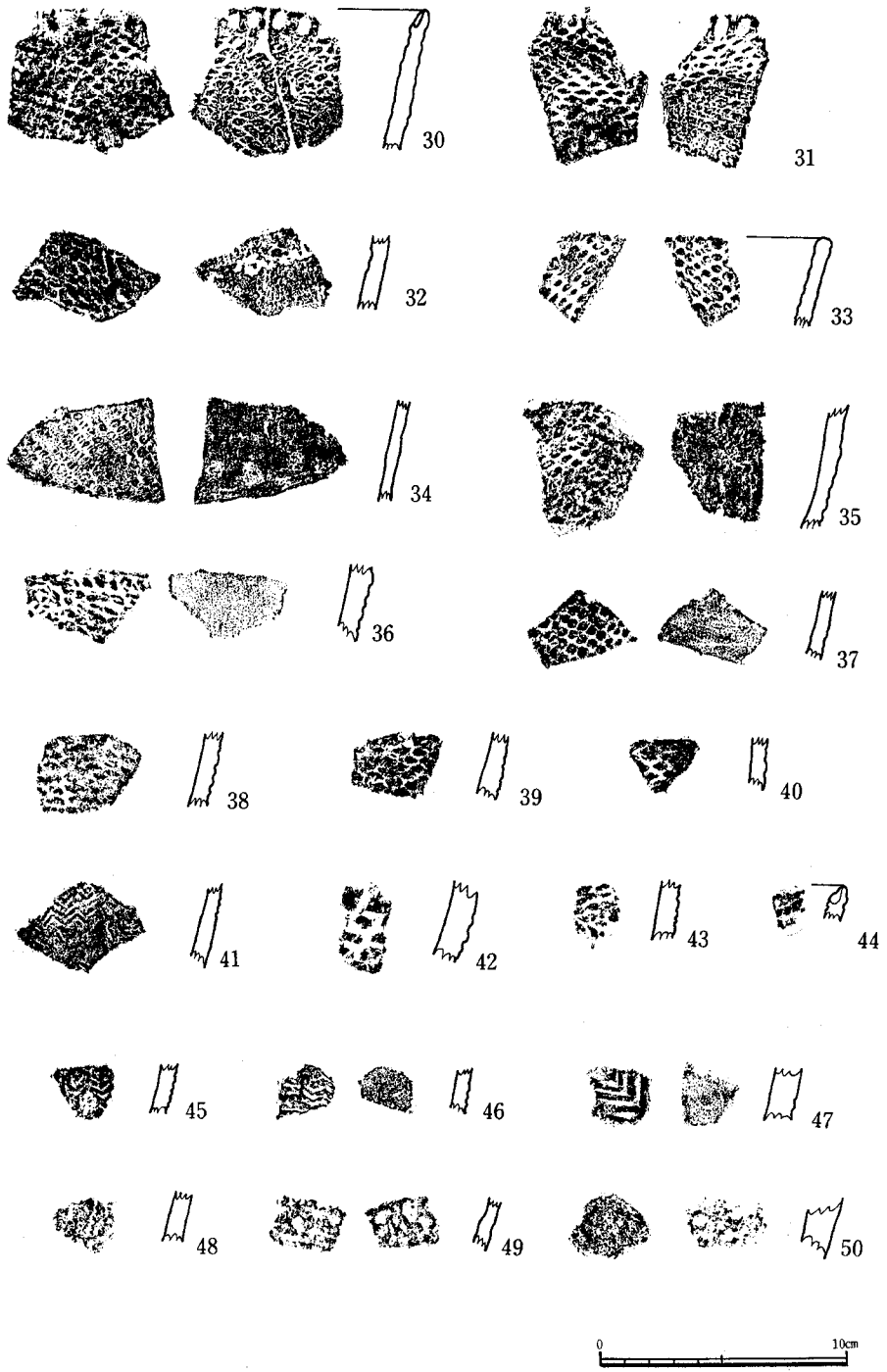


Fig.146　包含層出土土器実測図Ⅲ

文と帯状に楕円文を横走施文する。外面の施文はやや不鮮明な部分があり判然としないが，横方向に2段，縦方向に2ケ所の施文重複部がある。横方向の重複部は口縁から2cmの部分と3.6cmのところにある。比較的残存状態の良い部分で原体長をみると3.2cm以上と3.6cm以上がある。縦の重複は2ケ所にみられ左の重複部は原体回転の始点である。重複部の前後関係は，横方向では左上段部で，下段の施文が上段を切っていて，右下段部では上段の施文が下段を切っている。文様の反復例は2単位を一周として1.6cmごとにみられる。なお，口縁部には，内面の刺突によって，わずかにコブ状の張り出しがみられる。施文文様はこの張り出しによって変形している。内面の帯状文様帯の施文は，不鮮明かつ重複関係が著しく詳細は明らかにできない。刺突は施文文様との関係により，内面施文後であることは明らかである。刺突文は直径0.5cm前後，先端は片側より削られ片刃状をなす。以上からこの土器に使用された施文原体を復原すると，原体直径は2単位1.6cmの一周分の軌跡から0.51cm前後が求められ，これは刺突文原体と同一であり，刺突文の形状からも両者が同一原体を使用していることがわかる。原体長については両端部を残す部分がないため正確にはわからないが，施文幅の最長3.6cmよりも長いことはいうまでもあるまい。よって，この原体は端部が斜に削られた直径0.51cm前後，長さ3.6cm以上。13条以上2単位のものと推定できる。施文法については，口縁部の諸関係よりある程度判断可能である。先ず外面に楕円文が横走施文されるが，規則的な順序があるか否かについては明らかにしがたい。施文の前後関係に規則性のないことや施文重複部の複雑さからみて，外面の施文順序についてはかなりの乱れが生じていると思われる。しかし，これについては破片のみの観察であるので，今後の完形品の観察にまちたい。外面施文の次は，内面文様帯の施文，口縁部刺突文へと続く。30はＩ－31グリット，31はＨ－31グリット出土である。32は口縁に近い胴部破片である。外面には全面に楕円押型文が横走施文される。内面は上半部に外面と同様の原体によって楕円押型文が横走施文される。文様の下端部には原体の端が観察できる。無文部はナデ調整である。原体の長さは不明であるが，文様の反復は2単位で長さ1.6cm，原体直径は0.5cmである。破片の下端部に粘土帯の接合部が擬口縁状に残っている。接合は内傾接合である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質，焼成は良好で堅緻である。色調は外面が黄褐色，内面が暗黄灰色をなす。Ｉ－31グリット出土である。33は口縁部の破片である。外面は全面に斜方向に楕円押型文を施文する。内面は口縁部に帯状に楕円押型文を横走施文している。文様の下端には原体の端部が観察できる。押型文原体は長さ2.7cm以上，径は0.57cm，文様は3単位である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質，焼成は良好で色調は内外面共赤褐色をなす。Ｇ－36グリット出土である。34は胴部破片である。外面には全面に，斜方向に楕円押型文を施文している。押型文は重複施文しているため原体の大きさ，文様単位は明らかにできない。外面にはススの付着が顕著である。内面は横方向の貝殻条痕調整後ナデ調整を加え，条痕を消している。横方向に指頭押圧痕が並列していて凹凸が著しい。胎土には石英，長石，赤色鉱物を

含むが良質，焼成は良好で色調は外面が赤褐色，内面は黄褐色をなす。器壁は薄く0.5cm前後である。G－36グリット出土である。35は胴部破片であるが，底部に近い破片である。外面には全面に楕円押型文が横走施文される。器面に凹凸があり，押型文の施文が不鮮明な部分がある。また，文様の重複があり，文様単位，押型文原体の大きさは明らかにしがたい。内面は縦位の板ナデ調整である。破片の上端部は粘土帯の接合部で，擬口縁状をなしている。接合は内傾接合である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質，焼成は良好で堅緻である。色調は外面が赤黄褐色，内面が黄灰褐色である。I－30グリット出土である。36は胴部破片である。外面には全面に楕円押型文が横走，斜走施文される。重複施文が著しく文様にみだれがある。ただし，部分的に良好な部分があり，それからみると文様は3単位の反復を示している。原体は径0.5cmである。内面は丁寧なナデ調整である。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含むが良質，焼成は良好で色調は内外面共赤褐色をなす。F－32グリットの出土である。37は胴部破片である。外面には全面に楕円押型文が横走施文される。原体の長さは不明であるが，文様が2単位(1.7cm)で反復する。原体直径は5.4cmである。内面は横方向の貝殻条痕調整後，ナデ調整を加えて条痕を消している。胎土には石英，長石の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色をなす。G－37グリット出土である。38は胴部破片である。外面には全面に楕円押型文が横走施文される。縦方向に2ケ所，文様の重複部がある。横方向に1ケ所の重複部がある。これからみると施文は一回転ごとに行っていることがわかる。原体の長さは1.5cm以上で，文様は2単位（1.6cm）で反復しており，原体直径は0.5cmである。内面は縦方向の板ナデ調整である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質。焼成は良好で堅緻である。色調は外面が黄褐色，内面が暗灰褐色である。I－31グリット出土である。39は38と同一個体と考えられる。外面には全面に楕円押型文が横走施文される。内面は縦方向の板ナデ調整である。胎土，焼成，色調は38と同様である。I－31グリット出土である。40は胴部の小破片である。外面には全面に楕円押型文が横走施文される。内面はナデ調整。原体の大きさ，文様単位は小破片のため不明。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含むが良質である。焼成はやや不良で，色調は内外面共に黄褐色をなす。G－41グリット出土である。41は胴部破片である。外面には全面に山形押型文が横走施文されている。器面に凹凸があり，部分的に文様が鮮明である。文様は2単位（1.8cm）で反復がみられ，原体直径は0.57cmである。原体長は2.7cm以上である。内面はナデ調整，胎土には多量の石英，長石の砂粒を含んでいる。焼成はやや不良で，色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色～黒褐色をなす。器壁は薄く0.5cm前後である。F－13グリット出土である。42は胴部破片である。外面には楕円押型文が横走施文される。楕円文の粒はやや大きい。原体の大きさ，文様単位は破片が小さいために不明。内面は，ナデ調整である。器壁は厚く1cm前後である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で，色調は内外面共赤褐色をなす。I－31グリット出土である。43は胴部の小破片である。外面全面に楕

円押型文を横走，斜走施文する。原体の大きさ，文様単位は破片が小さいため不明。内面は板ナデ調整である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で堅緻である。色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色である。H－28グリット出土である。44は口縁部の小破片である。外面は楕円押型文が横走施文される。口縁部内側には原体（？）で上方から刺突された施文を施し，その下位に楕円押型文が横走施文される。押型文原体の大きさ，文様単位は小破片のため不明。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で堅緻，色調は内外面共黒褐色である。I－30グリット出土である。45は胴部の小破片である。外面は全面に山形押型文を横走施文する。山形文の重複が著しく，かつ小破片であるために原体の大きさ，文様単位は不明である。内面は丁寧なナデ調整。器壁は薄く0.5cm前後である。胎土には石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で堅緻，色調は外面が黄褐色，内面が黄赤褐色をなす。F－13グリット出土である。46は胴部の小破片である。外面は全面に山形押型文が横走施文される。山形文の山は低く鈍角をなしている。重複があり，かつ小破片であるために原体の大きさ，文様単位は不明である。内面は丁寧なナデ調整である。胎土にはわずかに石英，長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で堅緻，色調は外面が褐色，内面が黒褐色をなす。器壁は薄く0.5cm前後である。外面にススの付着がみられる。イ－31グリット出土である。47は胴部の小破片である。外面には大きな山形押型文を斜走施文している。原体の大きさ，文様単位は小破片のため不明。内面はナデ調整を加えているが凹凸がある。胎土に石英，長石の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で，色調は内外面共に黒褐色をなす。外面にススの付着がみられる。器壁はやや厚く0.9cm前後である。イ－39グリット出土である。48は胴部の小破片である。外面はナデ調整，内面は剝離しているために調整等は不明。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で内外面共黒褐色をなす。E－12グリット出土である。49はやや磨滅している。胴部の小破片である。外面は横方向の貝殻条痕調整，内面はナデ調整である。アバタ状の剝離痕がある。胎土には石英，長石の砂粒が多く含まれる。焼成は良好で，色調は外面が黄褐色，内面が灰褐色をなす。I－30グリット出土である。50は胴部の小破片である。内外面共にナデ調整である。内面はアバタ状に剝離している。胎土には石英，長石の砂粒を含む。焼成は良好で，色調は内外面共に赤褐色をなす。51は胴部破片である。大型の土器で器壁は厚く1.1cm前後である。内外面共ナデ調整であるが，凹凸が顕著である。胎土には石英，長石，金雲母，花崗岩の粗砂を多量に含んでいて良質ではない。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色をなす。K－42グリット出土である。52は胴部破片である。大型の土器で器壁は厚く1.1cm前後である。内外面共ナデ調整であるが，外面がより丁寧である。外面にススが付着する。胎土には花崗岩の粗砂粒を多量に含んでいて不良。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色をなす。K－41グリット出土である。53は口縁部破片である。直口縁で端部は丸くおさめる。内外面共ナデ調整であるが，器面にはやや凹凸がある。器壁は厚

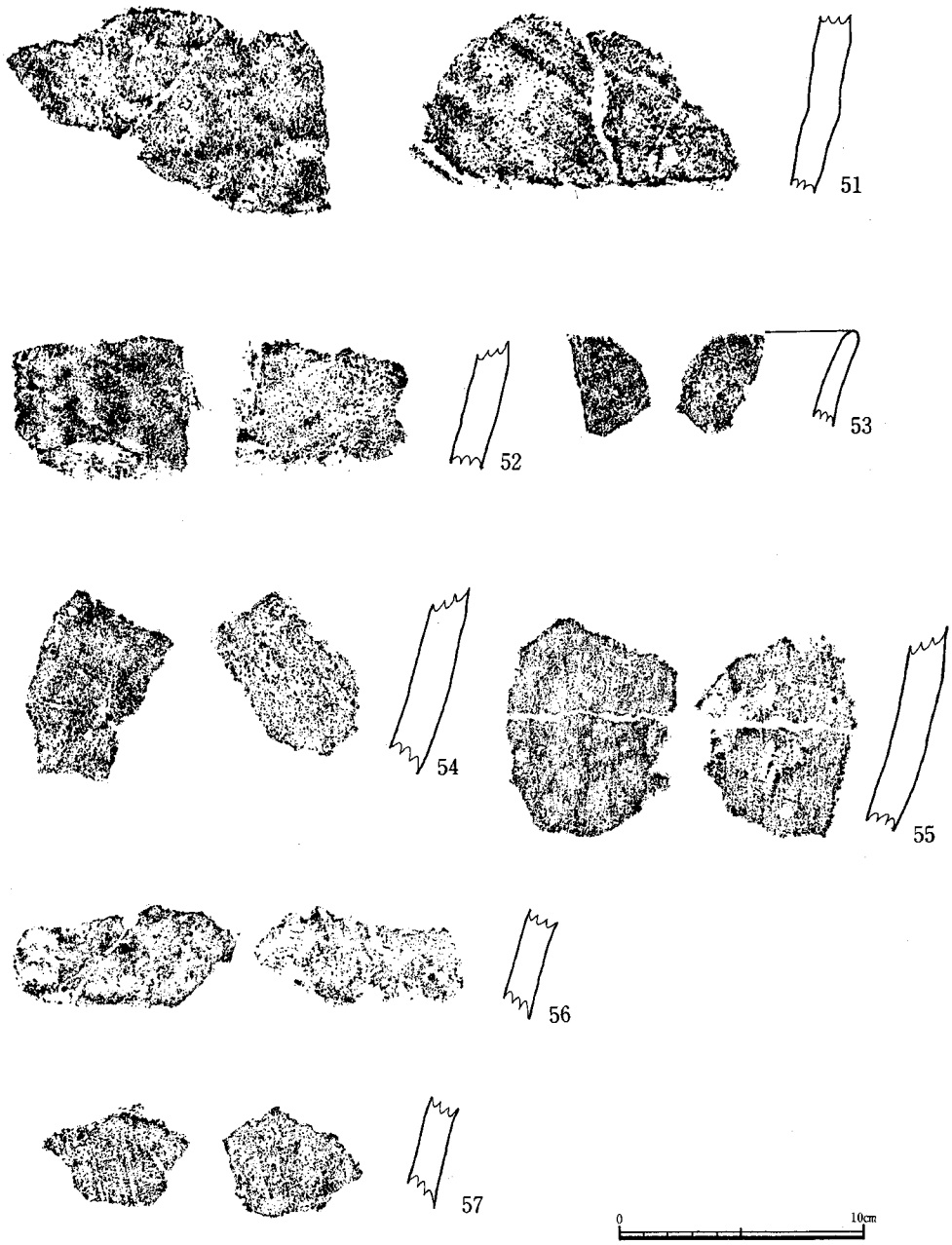


Fig.147　包含層出土土器実測図Ⅳ

さ0.7cm前後である。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含んでいるが良質である。焼成は良好で堅緻，色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色～黒褐色である。G－19グリット出土である。54は胴部破片である。大型の土器で器壁は厚く1.4cm前後である。外面は縦位の条痕調整後ナデ調整を加えて条痕を消している。やや凹凸がある。内面は板条痕調整である。外面にはススが付着する。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含んでいるが良質である。焼成は良好，色調は外面が赤褐色，内面が灰褐色である。I－16グリット出土である。55は胴部破片である。大型の土器で器壁は1.3cm前後と厚い。外面は縦方向のヘラ研磨調整，内面は板ナデ調整である。外面の調整がより丁寧である。胎土には石英，長石，雲母の砂粒を含んでいるが良質。焼成は良好で，色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色をなす。H－16グリット出土である。56は胴部破片である。内外面共ナデ調整であるが，粗雑で丁寧でない。胎土には多量の花崗岩の粗砂粒を含み不良である。焼成は良好で外面が赤褐色，内面が暗黄褐色である。K－41グリット出土である。57は胴部破片である。外面は縦方向の貝殻条痕調整，内面は板ナデ調整である。器壁は厚さ1.1cm前後である。胎土には石英，長石の砂粒を含んでいる。焼成は良好で，色調は内外面共赤褐色をなす。K－41グリット出土である。

(2) 石器（Fig. 148～153）

遺構外からは石鏃24点，石槍1点，スクレイパー4点，石匙1点，Uf10点，Rf6点，楔形石器4点，石核6点，磨石1点，砥石2点が出土している。これには古墳（E－1号墳）調査時に検出したものも含まれる。

石鏃（Fig. 148, 149）

884はob－a製の大形の石鏃である。基本形は正三角形に近く，浅い抉りがある。片脚を欠損している。長さ27.0mm，巾21.0＋α mm，重さ1.45＋α gを測る。E－11区出土。888はob－a製の石鏃である。二等辺三角形で浅い抉りが入る。先端部を欠損している。長さ15.0＋α mm，巾15.0mm，重さ0.5＋α g。F－13区出土。1080はob－a製の石鏃で，やや青味を帯びたパティナで覆われている。基部の抉りは深い。裏面に素材剥片の主要剥離面を残している。長さ19.5mm，巾15.0mm，重さ0.55g。G－12区出土。837はob－a製の正三角形に近い石鏃である。整形加工は粗雑で裏面には素材剥片の主要剥離面を大きく残している。長さ15.0mm，巾14.5mm，重さ0.7g。H－16区出土。911はob－a製の局部磨製石鏃である。表裏面とも研磨している。片脚を欠損する。二等辺三角形に深い抉りが入る。長さ18.0mm，巾12.0＋α mm，重さ0.35＋α g。H－17区出土。9はob－a製の石鏃である。911に似た形態を持つ。尖端部及び片脚を欠損している。長さ17.0＋α mm，巾11.0＋α mm，重さ0.2＋α g。I－16区出土。470はob－a製の石鏃である。素材剥片の周辺を整形したのみで，剥片の面を大きく残したままである。

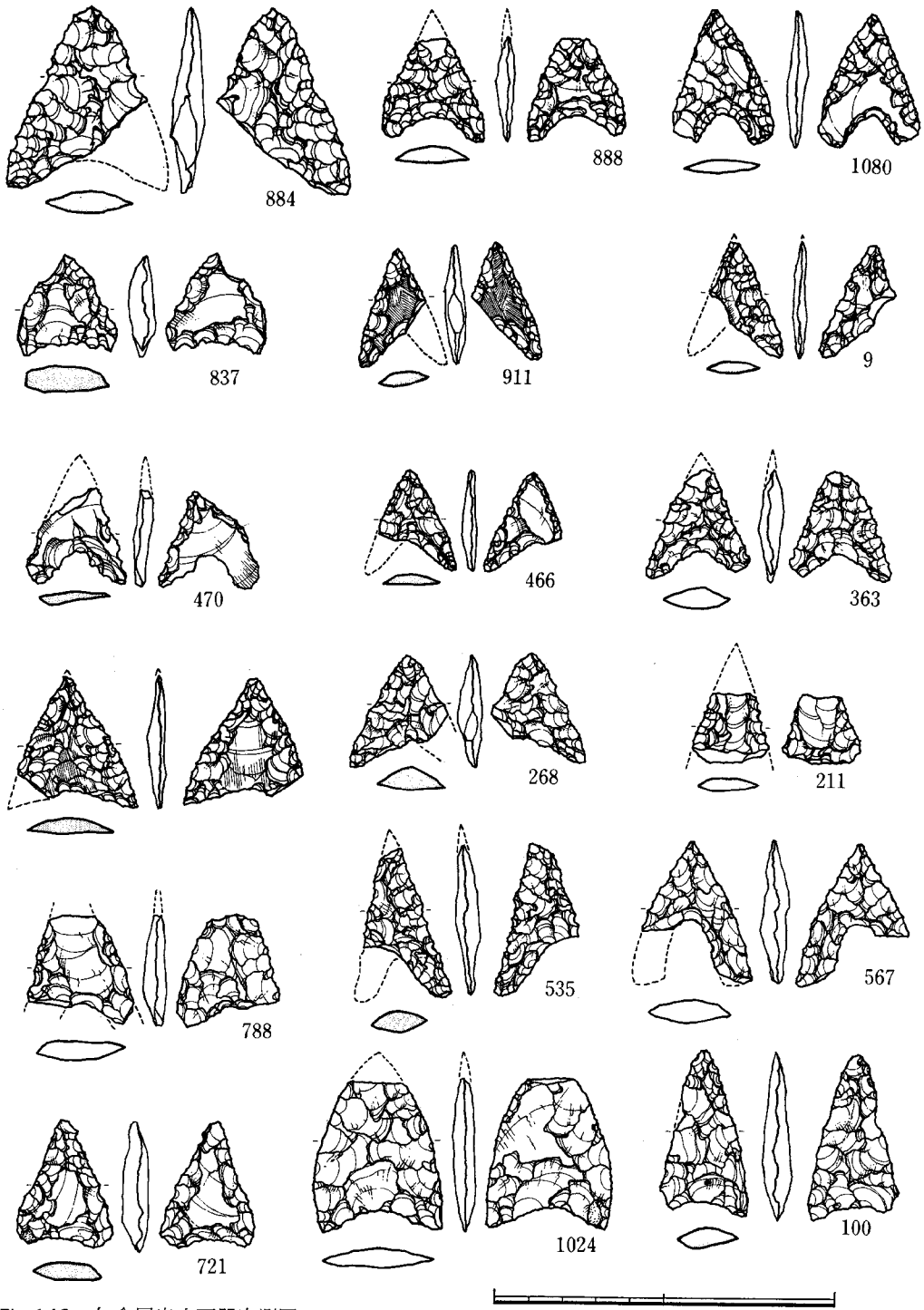


Fig.148　包含層出土石器実測図Ⅰ

先端部を大きく欠損している。長さ15.0＋α mm，巾15.0mm，重さ0.3＋α g。C－19区出土。466はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。裏面は素材剝片の主要剝離面を残している。片脚を欠損する。長さ15.0mm，巾12.0＋α mm，重さ0.25＋α g。E－21区出土。363はサヌカイト製の石鏃である。先端部と片脚の一部を欠損している。長さ16.0＋α mm，巾15.0＋α mm，重さ0.5＋α g。F－20区出土。239はｏｂ－ａ製の局部磨製石鏃である。研磨はさほど顕著でなく剝離面をとどめている。形態は三角形に近く，浅い抉りが入る。片脚を欠損している。長さ18.5mm，巾17.0＋α mm，重さ0.6＋α g。F－20区出土。268はｏｂ－ａ製の石鏃である。基本形は正三角形に近く，浅い抉りが入る。片脚を欠損している。長さ16.0mm，巾14.0＋α mm，重さ0.5＋α g。I－21区出土。214はｏｂ－ａ製の石鏃の胴部である。先端部及び両脚を欠損している。現存で重さ0.3ｇを測る。J－21区出土。788はサヌカイト製石鏃の胴部である。同じく，先端部及び両脚を欠損している。現存で重さ0.8ｇを測る。535はｏｂ－ａ製の抉りの深い長脚の石鏃である。先端部及び片脚を欠損している。長さ22.0＋α mm，巾12.5＋α mm，重さ0.5＋α g。D－34区出土。567はサヌカイト製の鍬形鏃である。片脚を欠損するが，抉りは全長の半分くらいまで入る。長さ21.0＋α mm，巾16.0＋α mm，重さ0.7＋α g。F－35区出土。721はｏｂ－ａ製の二等辺三角形を呈する石鏃である。基部は平基でなくわずかに浅い抉りが入る。表裏面に素材剝片の面を留めている。長さ19.0mm，巾14.0mm，重さ0.8ｇ。B－36区出土。1024はサヌカイト製の石鏃である。側辺がゆるく内弯し，基部には浅い抉りが入る。裏面に素材剝片の主要剝離面を残している。先端部を欠損する。長さ22.0＋α mm，巾19.0mm，重さ1.4＋α g。I－37区出土。1005はｏｂ－ａ製の長二等辺三角形を呈する石鏃である。基部にゆるく浅い抉りが入る。長さ24.0mm，巾13.0mm，重さ0.8＋α g。G－38区出土。1062はｏｂ－ａ製の正三角形を呈する石鏃である。表裏面に素材剝片の面を大きく残している。先端部を欠損する。長さ11.0＋α mm，巾15.0mm，重さ0.55＋α g。G－43区出土。2001はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。基部に抉りが入る。表裏面に素材剝片の面を留めている。片脚の一部を欠損している。長さ12.5mm，巾10.0＋α mm，重さ0.2＋α g。E－1号墳調査時出土。2002はｏｂ－ａ製の片脚に近い偏脚の小形石鏃である。左側の脚が右脚に比べて短い。長さ14.0mm，巾10.0mm，重さ0.2ｇ。出土地不明。2003はｏｂ－ａ製の石鏃である。整形加工が素材剝片の周辺に限られ，旧面を大きく残したままである。片脚を欠損している。長さ15.5mm，巾9.0＋α mm，重さ0.25＋α g。E－1号墳調査時出土。2004はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。基本形は正三角形に近く，浅い抉りが入る。長さ14.5mm，巾13.0＋α mm，重さ0.4＋α g。E－1号墳調査時出土。2005はｏｂ－ａ製の小形石鏃である。素材剝片の背面及び主要剝離面を大きく残している。長さ14.0mm，巾10.0mm，重さ0.2ｇ。E－1号墳調査時出土。

石槍〔Fig. 149～761〕

761はサヌカイト製の局部磨製の石槍である。その大半を欠損している。断面形は部厚いレン

ズ状をなす。研磨は裏面側は面をなすほど施されているが，表面側はさほど顕著でない。現存部で長さ15.5mm，巾5.5mm，厚さ7.7mmを測る。

スクレイパー〔Fig. 149－889，784，2006，Fig. 152－1056〕

889はサヌカイト製の両面加工のスクレイパーである。全周辺に刃部を形成している。長さ28.5mm，巾33.1mm，厚さ8.8mmを測る。F－13区出土。1056はサヌカイト製のサイドスクレイパーである。石核からの転用の可能性もある。長さ26.5mm，巾32.5mm，厚さ10.2mm。L－45区出土。784はサヌカイト製の不定形な剥片を利用したサイドスクレイパーである。両側に刃部を持つ。長さ32.6mm，巾38.0mm，厚さ9.0mm。I－30区出土。2006はサヌカイト製の大形剥片を利用したスクレイパーである。顕著な刃部加工を施しておらず，石器としての認定に疑問が残る。剥片端部に片面よりの剥離を施している。長さ66.6mm，巾69.0mm，厚さ20.0mm，E－1号墳調査時出土。

石匙〔Fig. 149，548〕

548はサヌカイト製の横長剥片を利用した縦型の石匙である。素材の剥片は，背面に大きく自然面をもつ板状の石核から剥離されたものと考えられ，一側辺に自然面を留めている。刃部の加工は背面から連続して実施しており，舌部は両面から行っている。長さ66.0mm，巾27.5mm，厚さ6.5mmを測る。D－34区出土。

楔形石器〔Fig. 150，237，700，667，533〕

237はｏｂ－ａ製の楔形石器の破片と思われる。長さ15.5cm，巾4.1mm，厚さ4.5mmを測る。G－19区出土。700はｏｂ－ａ製の楔形石器と考えられる。両端の刃潰れがあまり顕著でない。長さ20.9mm，巾12.4mm，厚さ6.0mm。667は赤色チャート製の楔形石器である。石核の破片の可能性もある。長さ21.0mm，巾13.0mm，厚さ5.0mm。J－27区出土。533はｏｂ－ａ製の楔形石器の破片と思われる。長さ26.0mm，巾7.5mm，厚さ6.5mm。D－35区出土。

Ｕｆ〔Fig. 150－796，Fig. 151－773，180，803，583，1026，1065，174，711，858〕

796はｏｂ－ａ製の縦長剥片を利用したＵｆである。一側辺を使用している。長さ27.5mm，巾22.0mm，厚さ8.0mm。I－31区出土。773もｏｂ－ａ製の縦長剥片を利用したＵｆである。打面部を除く全周辺を使用している。長さ24.5mm，巾21.0mm，厚さ5.5mm。G－35区出土。180はｏｂ－ａ製の巾広の剥片を利用したもので，剥片の端辺のその略半分に使用の痕が認められる。長さ35.5mm，巾14.0mm，厚さ3.2mm。I－31区出土。803はｏｂ－ａ製のやや縦長の剥片を利用したＵｆで，その両側辺を使用している。長さ28.0mm，巾19.8mm，厚さ7.0mm。I－35区出土。583はｏｂ－ａ製の縦長剥片を利用したＵｆである。使用の痕は一側辺及び端部に顕著である。長さ28.0mm，巾13.5mm，厚さ4.5mm。F－36区出土。1026はサヌカイト製の縦長の剥片を利用したもので大半を欠損している。一側辺に使用の痕が認められる。長さ25.5mm，巾16.0mm，厚さ2.6mm。I－40区出土。1065はサヌカイト製の横長剥片を利用したＵｆであり，その端辺を使用

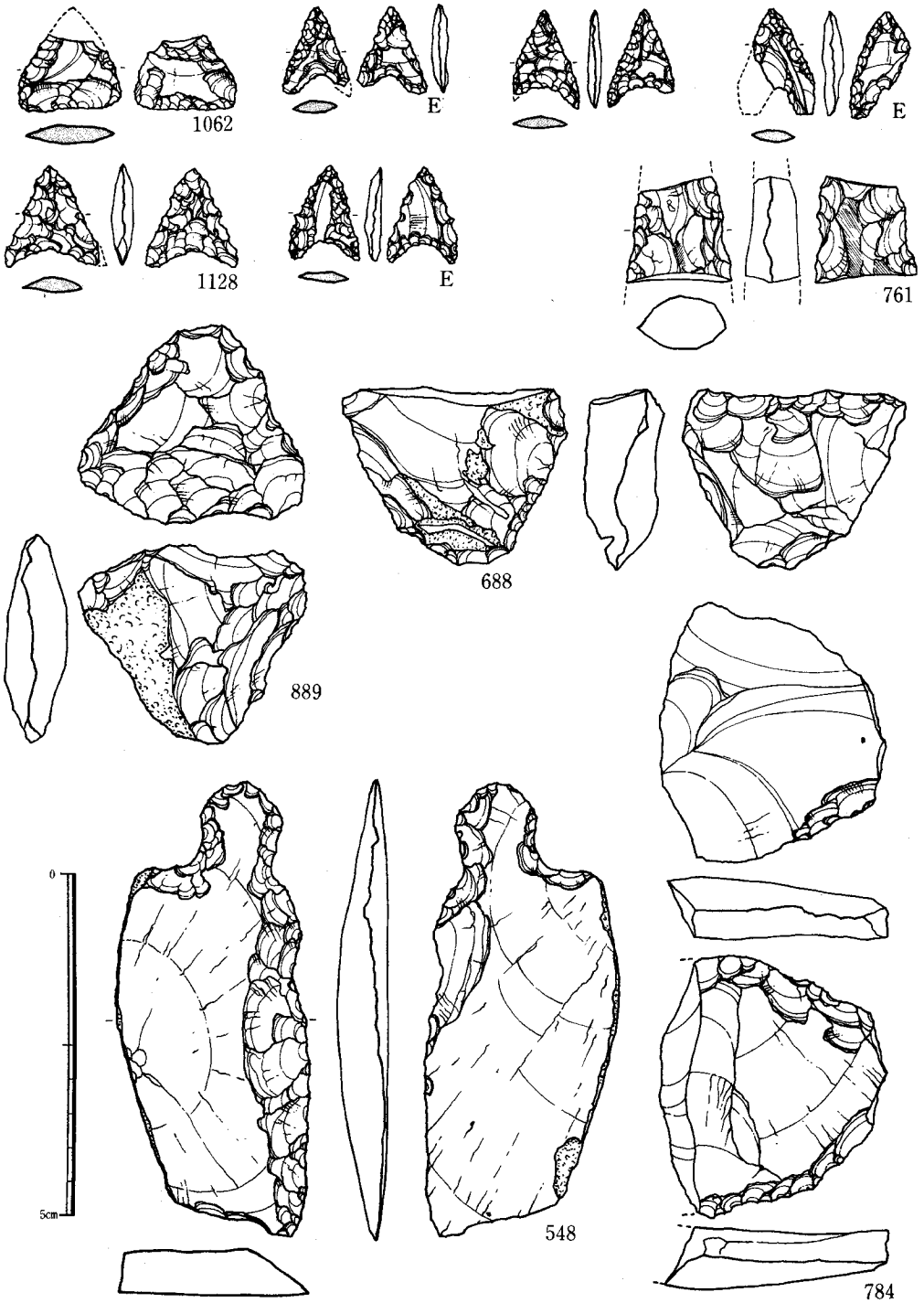


Fig.149　包含層出土石器実測図 II

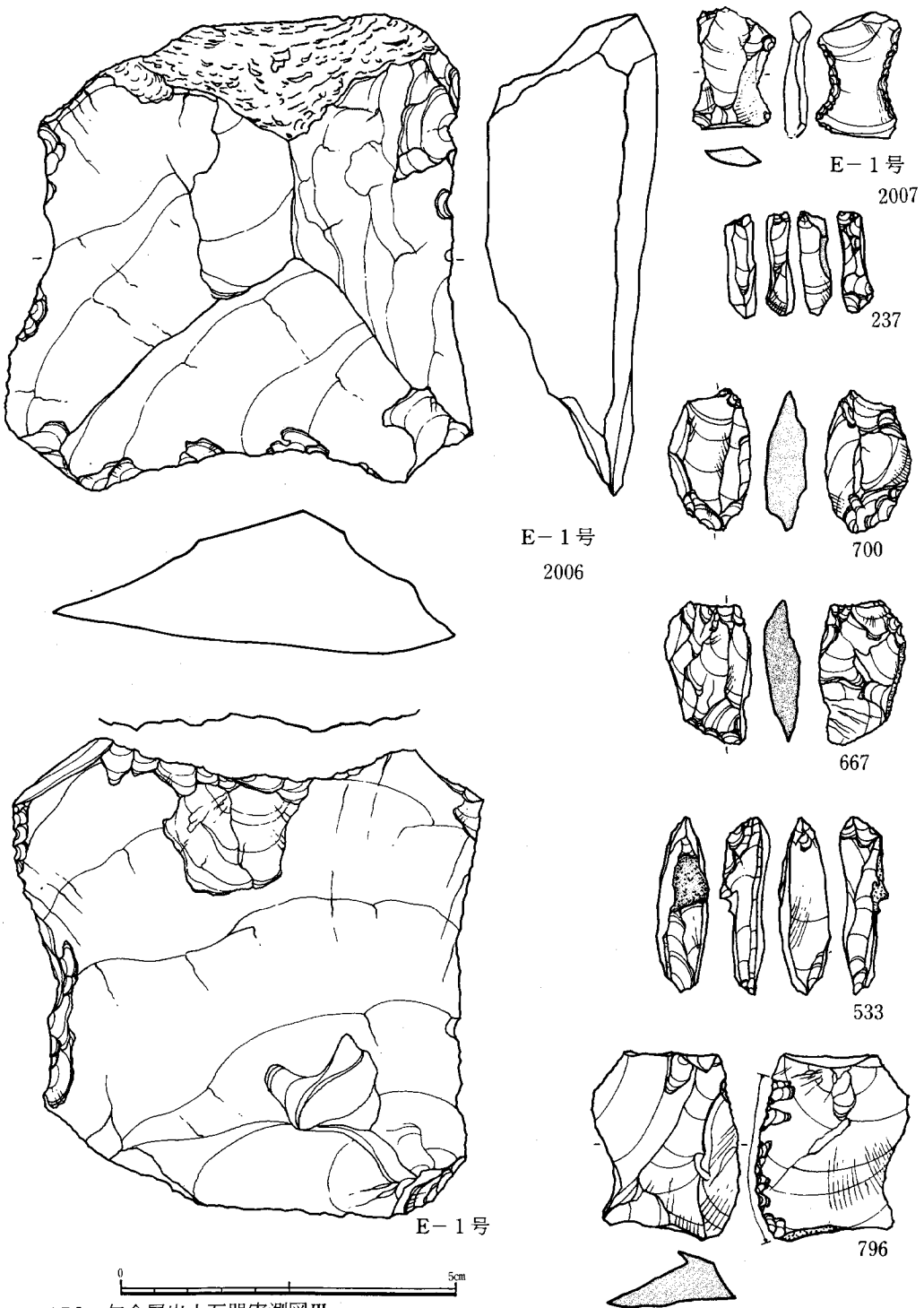


Fig.150　包含層出土石器実測図Ⅲ

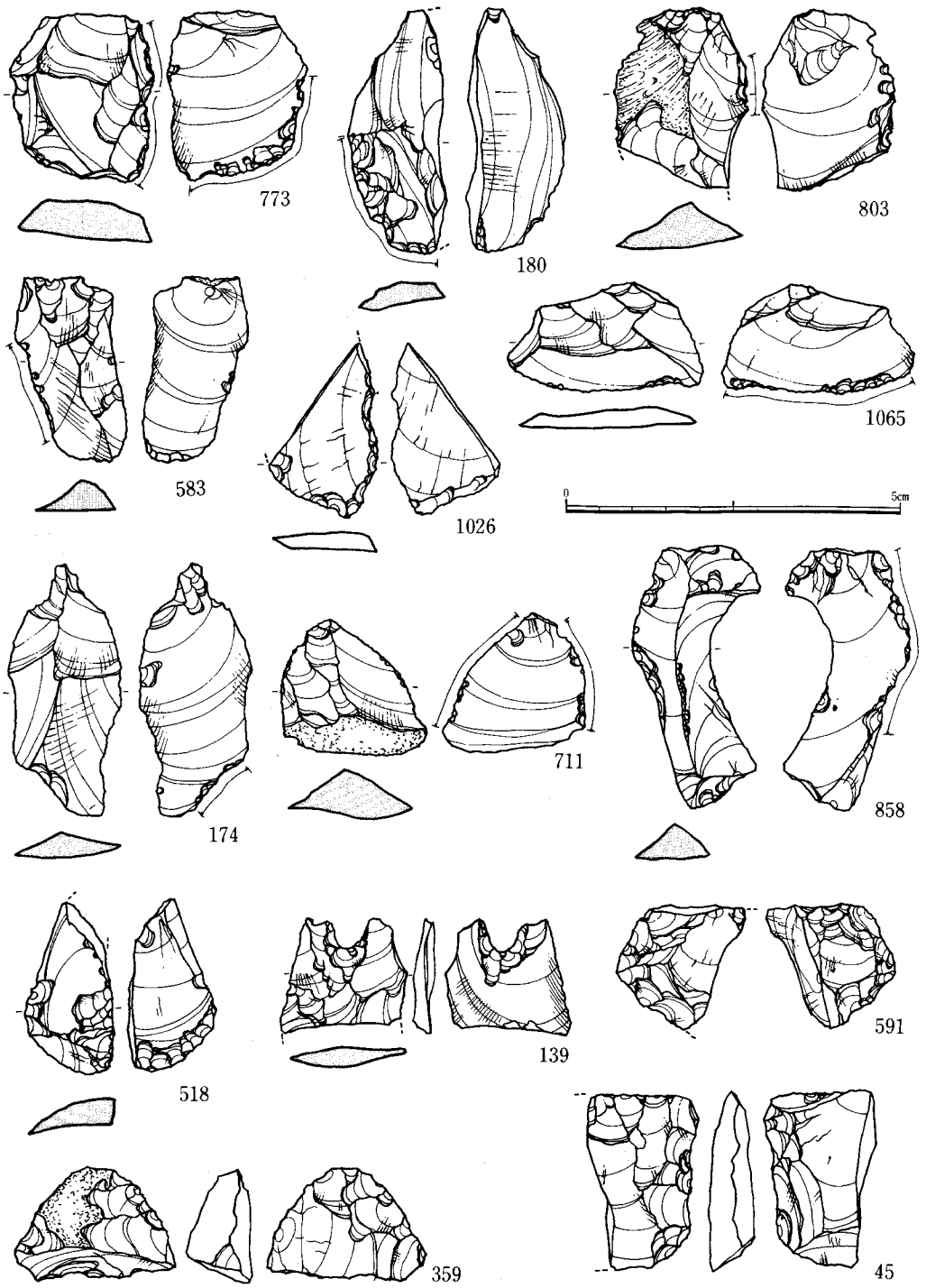


Fig.151　包含層出土石器実測図Ⅳ

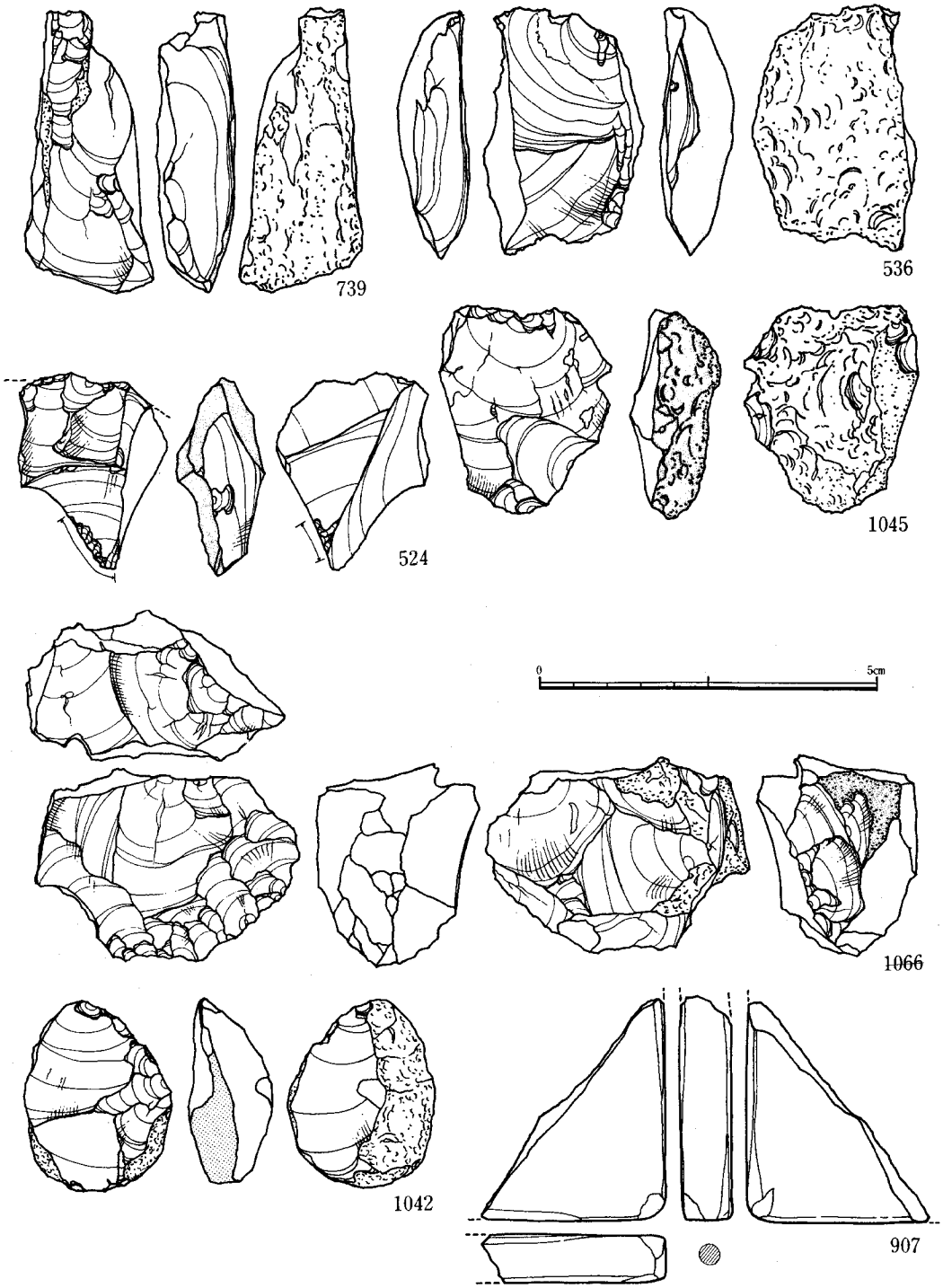


Fig.152　包含層出土石器実測図Ⅴ

している。長さ16.0㎜，巾23.5㎜，厚さ2.6㎜。B－32区出土。174はｏｂ－ａ製の縦長剝片を利用したＵｆである。一側辺の一部に使用の痕が認められる。長さ20.0㎜，巾21.5㎜，厚さ7.0㎜。Ｉ－40区出土。858はｏｂ－ａ製の縦長剝片を利用したＵｆである。断面形が△角形をなし，その三つの稜部にそれぞれ使用の痕が認められる。長さ38.5㎜，巾16.0㎜，厚さ5.5㎜。D－15区出土。

Ｒｆ〔Fig. 150－2007，Fig. 151－518，139，591，359，45〕

2007はｏｂ－ａ製の縦長剝片の両側辺に細かい加工を施したもので，両端が内弯している。長さ18.0㎜，巾11.5㎜，厚さ2.8㎜を測る。Ｅ－１号墳調査時出土。518はｏｂ－ｂ製の不定形剝片の端部及び背面に加工を施したものである。長さ26.0㎜，巾12.5㎜，厚さ4.0㎜。C－35区出土。139はｏｂ－ａ製の剝片の打面側に両面よりノッチ状の加工を施したものである。端部を欠損している。長さ16.5㎜，巾18.0㎜，厚さ3.0㎜。H－30区出土。591はサヌカイト製の両面加工品の一部である。石核の破片の可能性もある。長さ18.5㎜，巾16.0㎜。G－37区出土。359はサヌカイト製の剝片に両面より加工を施したものである。スクレイパーの破片の可能性もある。長さ16.0㎜，巾23.5㎜，厚さ9.5㎜。F－20区出土。45も同じくサヌカイト製の両面加工品の一部である。石核の破片の可能性もある。長さ25.5㎜，巾16.5㎜，厚さ6.5㎜。F－20区出土。

石核〔Fig. 152－739，536，524，1045，1066，1042〕

739はｏｂ－ａ製の剝片を利用した石核である。素材剝片の主要剝離面側を作業面として剝片剝離を実施している。両端は分割面。打面には調整痕は認められない。D－37区出土。536はｏｂ－ａ製の剝片利用の石核である。739と同じく背面に自然面を残した剝片を利用している。主要剝離面側を剝離面として作業を行うが，打面は素材剝片の背面（自然面）を直接使用し，新たに作出していない。両端は分割面である。D－34区出土。524はｏｂ－ａ製の剝片素材利用の石核の破片と思われる。その後一部を刃部として使用している。D－35区出土。1045はｏｂ－ａ製の第一次剝片を利用して細部の剝離を実施したものである。加工途上のものとも考えられる。D－36区出土。1066はｏｂ－ａ製の石核である。石材中に白い気泡及び斑点が入る。打面は随意に90度転移しており，作業面　打面とその剝離を実施している。打面調整の痕は認められない。Ｉ－38区出土。1042はｏｂ－ｂ製の石核である。５cm大の円礫から剝離された板状の剝片から剝離を実施している。K－43区出土。

砥石〔Fig. 152，Ｐ907，Fig. 153，2008〕

Ｐ907は砂岩製の板状の砥石である。破片ではあるが，両面及び側面が砥面として利用されていたことがわかる。Ｉ－17区出土。2008も同じく砂岩製の砥石である。両面が砥面として利用されており凹面を持つ。残存している側面も利用され，平坦である。Ｅ－１号墳調査時出土。

磨石〔Fig. 153－2009〕

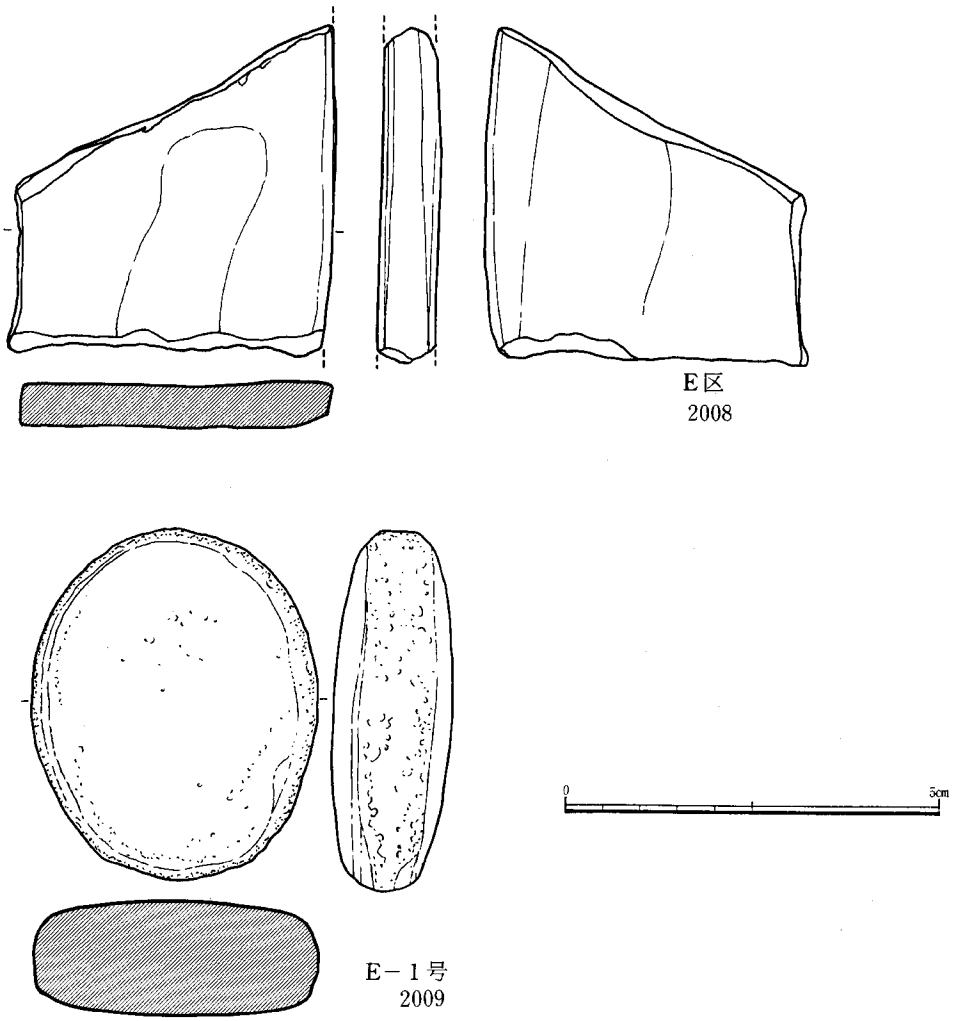


Fig.153　包含層出土石器実測図Ⅵ

2009は多孔質の安山岩系の河原石を利用した磨石で，隅丸の石鹸型に近い形を呈している。Ｅ－１号墳調査時出土。

第6章　まとめ

A－1遺跡，E遺跡について説明してきたが，ここで若干のまとめをしておきたいと思う。A－1遺跡については小結部で問題点を指摘したので，同一の遺跡とみられるA－2遺跡の報告でまとめて考察を加えたいと思う。ここではE遺跡を中心として問題点を指摘して今後の検討にゆだねたいと思う。

1．遺構について

E遺跡で検出した遺跡は竪穴住居址104基，土壙49基である。土壙の中で形態，状況から土壙墓と考えられるものが28基ある。

竪穴住居址としたものは大型の竪穴で内部に柱穴状のピット，土壙をもつものに限定した。厳密な意味での住居址とするには，さらに検討が必要である。同様の遺構が多数検出されたA－2遺跡，K遺跡の報告を終了して検討を加えてみたいと思う。

ここでは竪穴住居址とした土壙の中でいくつかのタイプに分類することができるので指摘しておきたいと思う。

第一型　柱穴状のピットが竪穴の床面あるいは壁部に，床面を囲むようにめぐらされるタイプ。SC－009，021，062，084などが典型例である。

第二型　床面をはさんで相対する2個（3個もある）の柱穴状のピットをもつタイプ。このタイプが最も多く，SC－040，041，042，061などが典型例である。

第三型　柱穴状のピットは存在するが，配置に規則性がなく，各所にピットが存在するタイプ。SC－004などを典型例とする。

第四型　柱穴状のピットをもたず，土壙状の掘り込みのみをもつもの。SC－001，016，029，030，077などが典型例である。

以上の四型であるが，さらに検討を加えていけばその機能，用途について追求できそうである。竪穴内部には炉址の存在はない。柏原F遺跡で石囲い炉が多く検出されたのに対し，本遺跡では炉址は皆無である。ただし，竪穴内には焼石が投棄されている例はある。これに対して竪穴住居址状の遺構はF遺跡に極端に少ない。このことは遺跡立地と大きく関係があり，竪穴住居址状の遺構はE遺跡，K遺跡などの段丘平坦面に立地する遺跡に多く，F遺跡のような山陰に形成された平坦面に立地する遺跡は竪穴住居址状の遺構は少なく，逆に炉址が多いことが指摘できる。このことの意味が何を示唆しているのか今後の検討が必要であるが，季節的な移動によるものとの考え方もできる。

土壙墓と考えられる遺構についても整理して今後にそなえたい。土壙墓と考えられる土壙はいずれも長方形の箱形をしており，内部の埋土は包含層と比較しきれいである。埋めもどしに際して意識されたものであろう。規模としては屈葬位で現代人でも楽にはいる大きさである。SK－01は二人同時埋葬もＰＬ．20－(2)に示したように可能である。土壙墓の深さについては一様に深くりっぱである。特にＳＫ－29，37は1.8mの深さもあり，またSK－37には半截した丸太で組んだ木棺（木槨）が存在するなど死者に対する畏怖の念が感じられる。歳近，発見例が増加しつつある覆石墓などとの共通点が指摘できる。また土壙墓には枕をもつものがある。SK－18は頭部に粘土塊が検出でき，SK－34では枕状に削り出しの段がある。SK－39では頭位に扁平な石が置かれていた。この他，床面に粘土を敷いた例，SK－15～17，土壙上縁に粘土を使用したSK－48などもある。副葬品とみられるものには，SK－23床面に大形の石鏃１点があったが，清掃中に紛失し提示できないのが残念である。以上の所見から土壙墓としたものは，ほぼ土壙墓として認定してよいものと思われる。同様の遺構はＦ遺跡，Ａ－２遺跡，Ｋ遺跡にも存在する。改めて検討したいと思う。

２．土器とその分布について

Ｅ遺跡から出土した土器には条痕文土器，刺突文土器（豆粒状のハリ付け文をもち，地文は条痕），櫛歯文土器，撚糸文土器，縄文土器，貝殻腹縁押圧文土器，平栫式土器，押型文土器，無文土器があり，時間的にも大きな幅がある。土器の編年的位置については稿を改めて考察を加えるので，ここではその分布についてみていきたいと思う。

条痕文土器，刺突文土器，櫛歯文土器，縄文土器の一部は発掘区南半部に集中して出土し他からは出土しない。四種類の土器も細かく検討すれば若干の分布の違いを指摘できる。貝殻腹縁押圧文土器はSC－41を中心とした地区に分布する。押型文土器は南半部，SK－01を中心とした部分，発掘区中央部，発掘区北半部のSK－37の周辺の三カ所に分かれて分布し，土器からみれば，同じ押型文土器でも，時期に時間差が存在している。簡単にみても土器の平面的分布は地区によって異なり，集落構造についての手がかりを与えてくれる。土器の分布と石器の分布は密接な関係があり，平面分布の検討が編年的にも利用できそうである。

3．石鏃について

本遺跡からは遺構内，遺構外及び古墳調査時の資料も加えると，総計65点の石鏃が出土している。しかしそのほとんどが尖端および脚部を欠損しており，完形はわずか22点（34%）である。欠損の部位は尖端部20に対し脚部33である（Fig. 154－C）。石材は黒曜石とサヌカイトの2種で，その中でもob－a製が大半を占めている。

形態の特徴としては，長／幅の指数を求めると，およそ正規分布を示しており，その中でも1.0～1.5に集中している。これはその基本形が二等辺三角形ないし，正三角形であることを示している。しかし，その正規分布をはずれるものとして背の低い678と，背の極めて高い1038の石鏃がある。大きさから言えば黒曜石に比べサヌカイトに大形品が多いという傾向がうかがえる。

これらの石鏃を白石浩之氏の形式と類型(註1)に従って分類すると，全体形が復元可能なもの55点のうち，1BII，1CII，1DIIが各8点，これに次いで2BII，2CIIが各5点と多く，こ

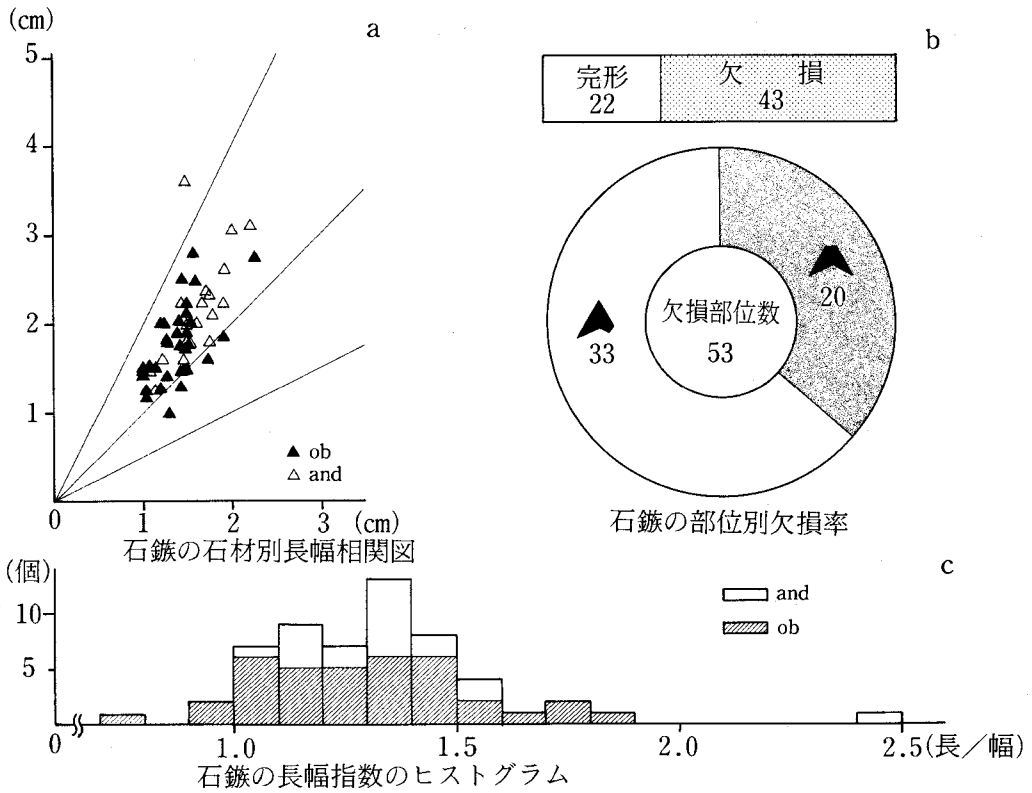


Fig.154　石鏃の計測

れらが全体の約6割を占めている。よって基本形が二等辺三角形で，基部に三角形の抉りをもつ形態の石鏃が多いことを示している。これらは石鏃の表裏面を研磨した局部磨製石鏃や，その大きさが1.5cm以下(註2)の小形石鏃の形態の大半を占めるものである。石鏃の大きさは小形石鏃44点，中形石鏃8点，大形石鏃1点で，特に2cm以下に約70%近くが集中している。

石鏃はその分布をみると相対的に調査区の中で偏在している。局部磨製石鏃と小形石鏃および鍬形鏃に注目してみると，前二者が調査区の南半に，後一者が北半にそれぞれ重なるように分布していることがわかる。特に局部磨製石鏃は南側に偏って出土している。これは土器群の分布状況からして，局磨・小形石鏃→鍬形鏃の変遷を示すものと考えられる。また，その他の石鏃でも先に述べた1B～D，2B・C類が南半のグループに偏在している。これらは，これまでの草創期～早期の石鏃の変遷と符合している。

剝片剝離について

本遺跡では数種類の剝片剝離技法が存在しそうである。

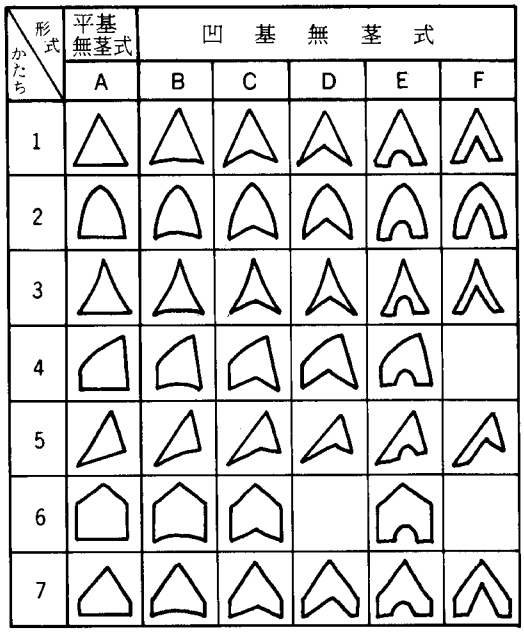


Fig.155　石鏃の形式とその類型
（白石浩之 1982より修正・加筆）

形式 かたち		平基無茎式 A	凹基無茎式 B	C	D	E	F	計
1	I	1 (1.82)	2 (3.64)	1 (1.82)	1 (1.82)			5 (9.09)
	II		8 (14.55)	8 (14.55)	8 (14.55)	2 (3.64)		26(47.27)
2	I	1 (1.82)	1 (1.82)					2 (3.64)
	II	1 (1.82)	5 (9.09)	5 (9.09)		4 (2.27)	1 (1.82)	16(29.09)
3	I							
	II			1 (1.82)	1 (1.82)	1 (1.82)		3 (5.45)
4	I							
	II							
5	I							
	II				2 (3.64)			2 (3.64)
6	I							
	II		1 (1.82)					1 (1.82)
7	I							
	II							
計		3 (5.45)	17(30.91)	15(27.27)	12(21.82)	7 (12.73)	1 (1.82)	55(100.0)

E遺跡出土石鏃の形式・類型と個数
（ ）内は%　I…三角形　II…二等辺三角形

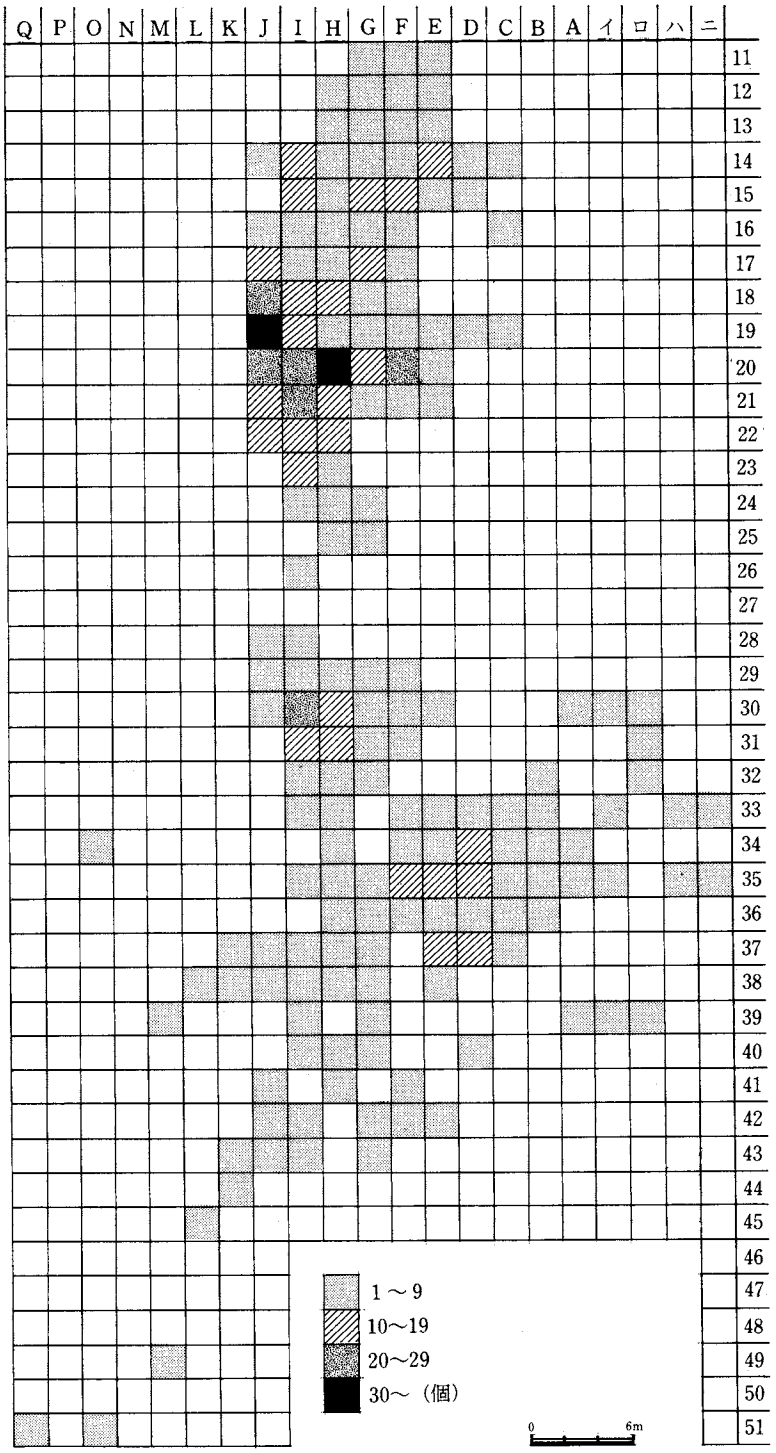


Fig.156　石器のグリッド別個数の分布

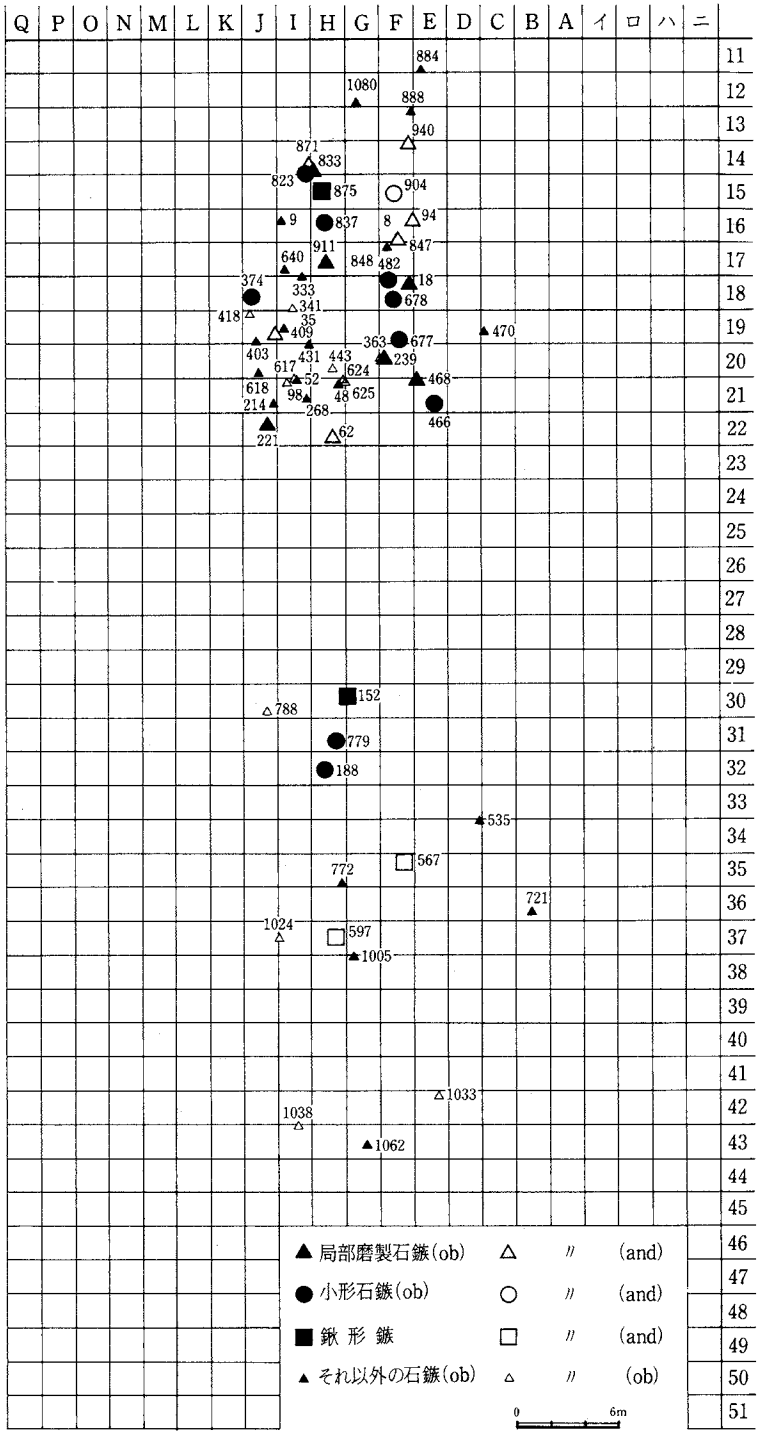


Fig.157　石鏃の分布図

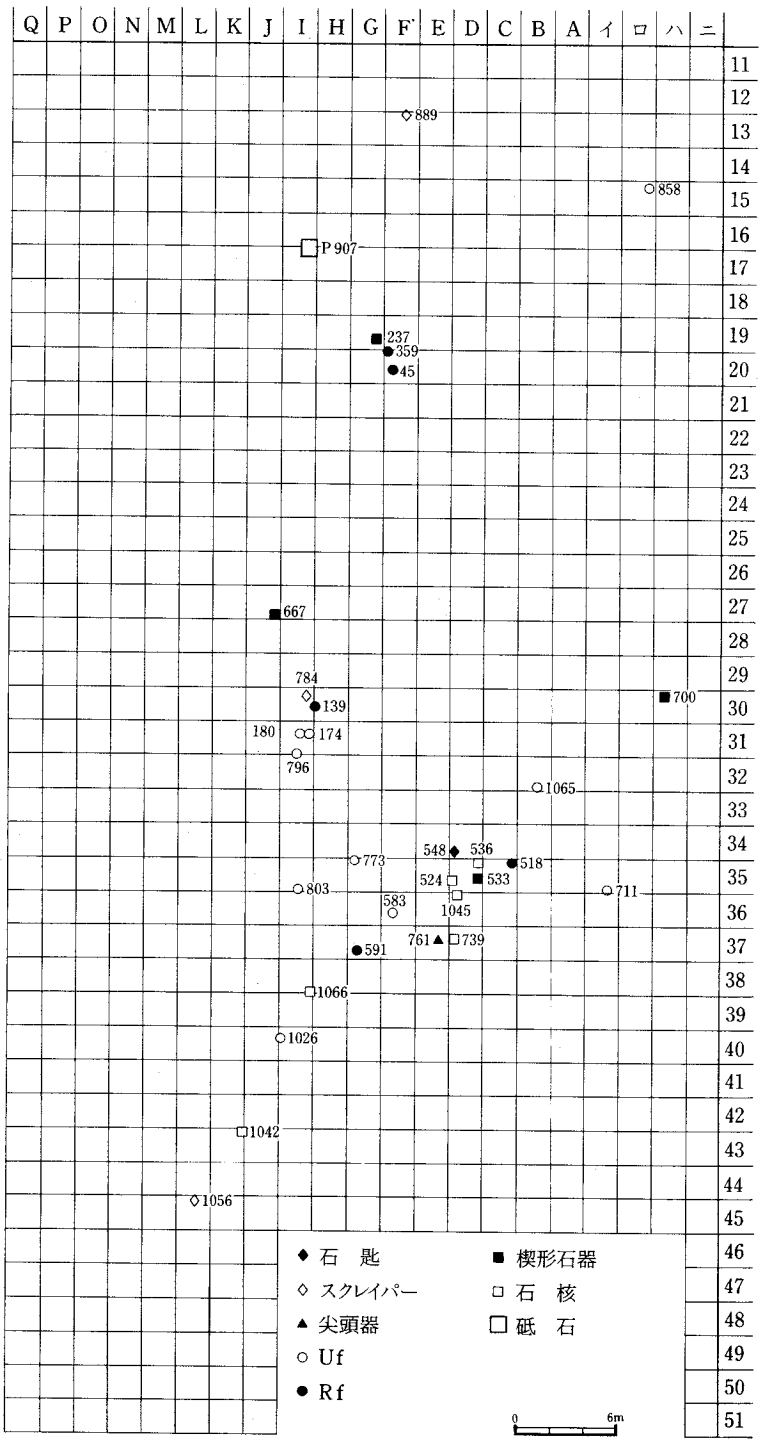


Fig.158 遺構外出土石器分布図（石鏃は除く）

（付　編）

福岡市柏原遺跡出土の炭化木

島　倉　己三郎

福岡市南区柏原のＦ区から出土した炭化木の樹種を調査した。

試料は20点で，多くは数mmから１cm内外の木炭片で，これらの破断面を反射顕微鏡で観察した。炭化による変形が著しいものや，破断面をつくるとき薄片状に分離するものもあり，樹種を決めるに至らない試料もかなりある。

調査の結果は次のようになった。

No.	層　位	出土場所	樹　種	炭片数	註	No.	層　位	出土場所	樹　種	炭片数	註
1	J－5 g	－	カエデ？	1		11	T－4	炉　跡	ザイフリボク？	2	
2	〃	P－204g		1		12	〃	炉周辺	カ　ヤ	1	
3	L－1	炉辺周辺	カ　ヤ	6		13	〃	〃	カシ類	8	
4	〃	〃	カ　ヤ	9		14	T－5	3　層	カ　ヤ	1	
5	M－6	〃	コナラ	8		15	〃	〃	カシ類	5	
6	〃	3　層	コナラ	6		16	最下層	炉		6	
7	〃	〃	トネリコ？	1		17	〃				
8	N－2	〃	カエデ？	1		18	〃			1	
9	〃	〃	カ　ヤ	5		19	〃		ムクノキ？	1	
10	T－4	炉	アオダモ？	1		20	〃			4	

針葉樹はカヤ１種であるが最も多く，広葉樹ではカシ・コナラが目立つ。炭片数は必ずしも量比を示すものでないが，かりにそれを集計してみるとカヤ22，カシ・コナラ27で，試料，数の約半分，炭片数の約70％となる。その他の広葉樹にはカエデ類？，トネリコ属のある種類，ザイフリボク？，ムクノキ？その他の環孔材散孔材があるが，炭化の際切線方向の収縮が著しく，放射孔状に見えるものもあり，樹種を判定できなかった。

図　版

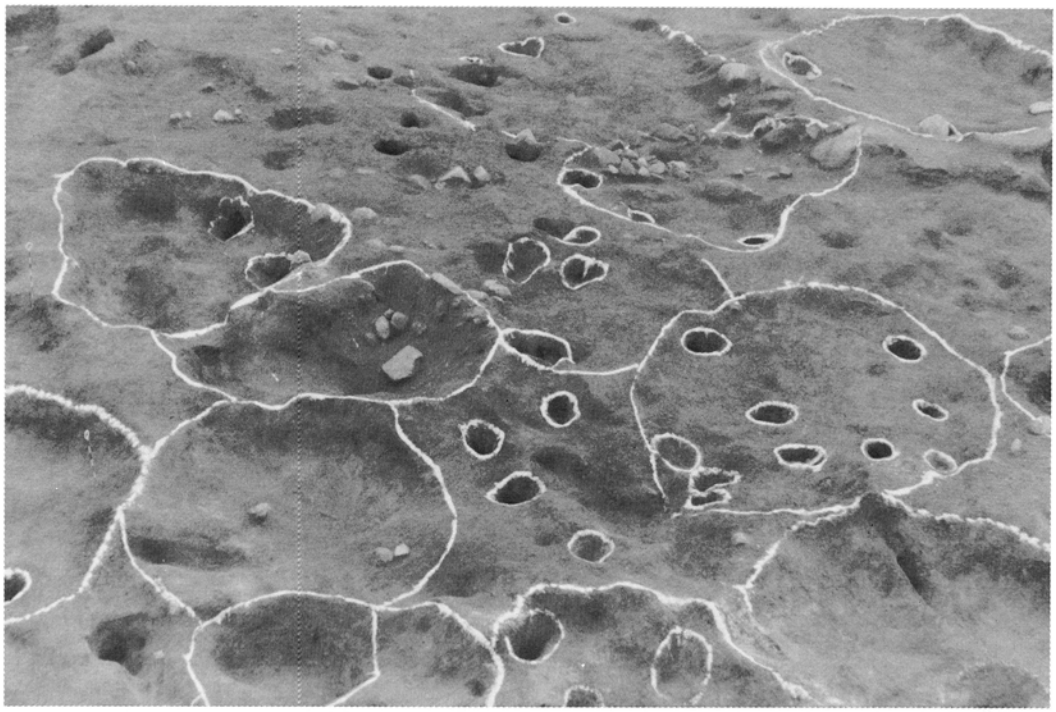
PLATE

(1) E遺跡全景（南から）

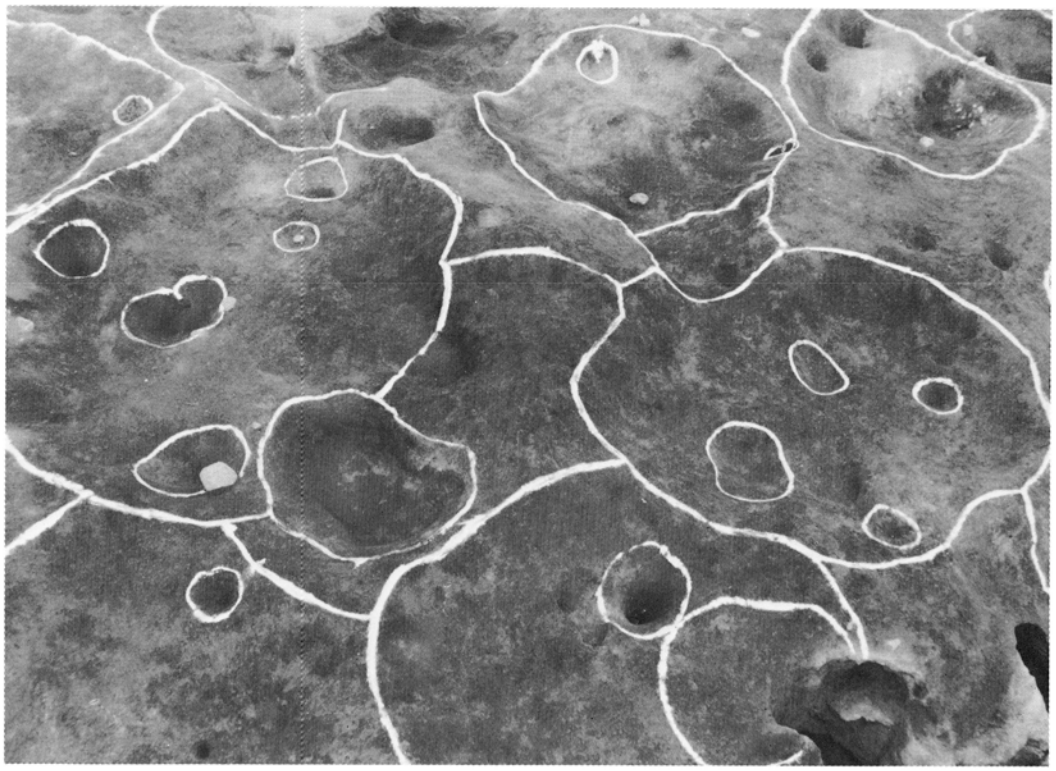
(2) E遺跡の立地（東から）

(1)　E遺跡調査区北半部全景（南から）

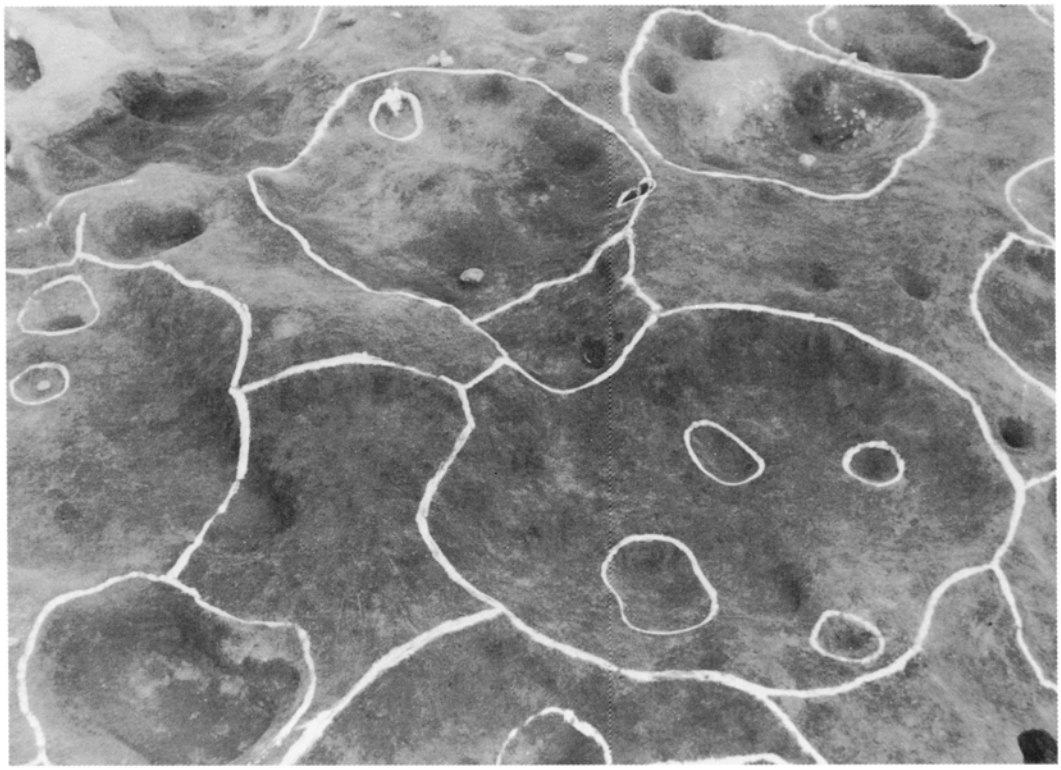
(2)　E遺跡調査区南半部全景（西から）



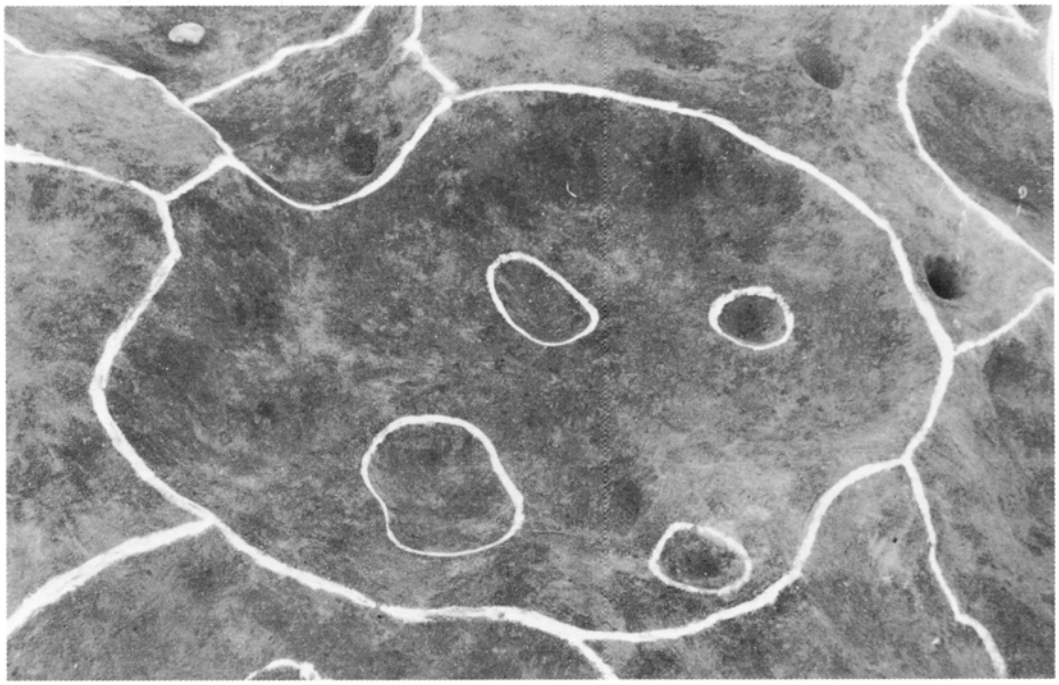
(1) E遺跡南半部竪穴住居地群（南から）



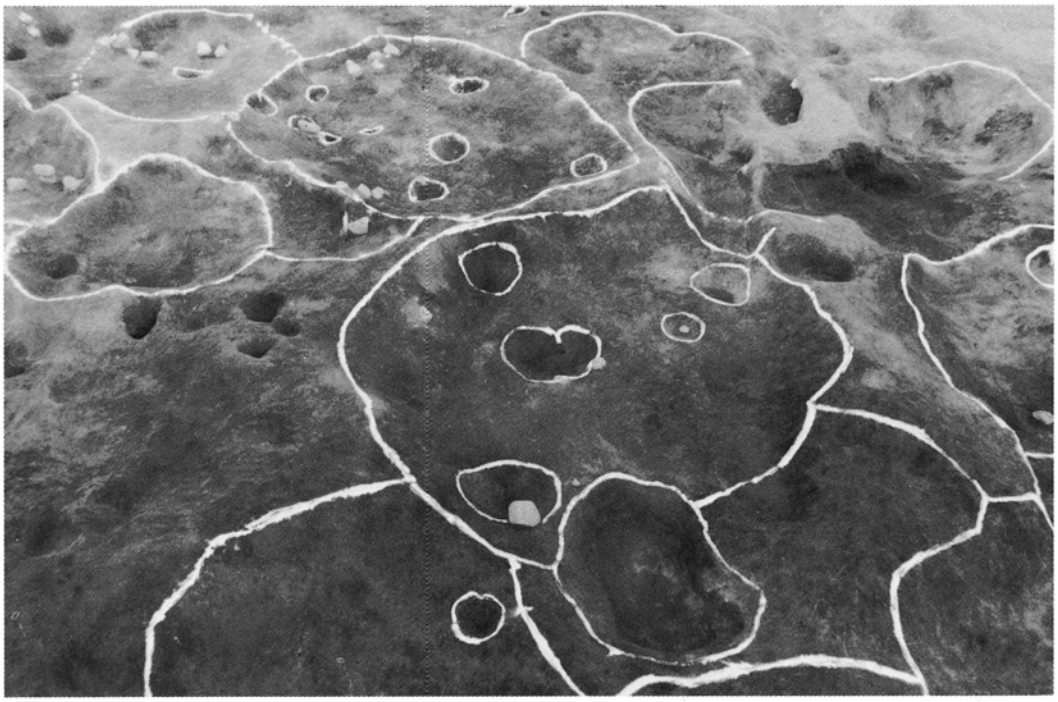
(2) SC－012、016～019近景（東から）



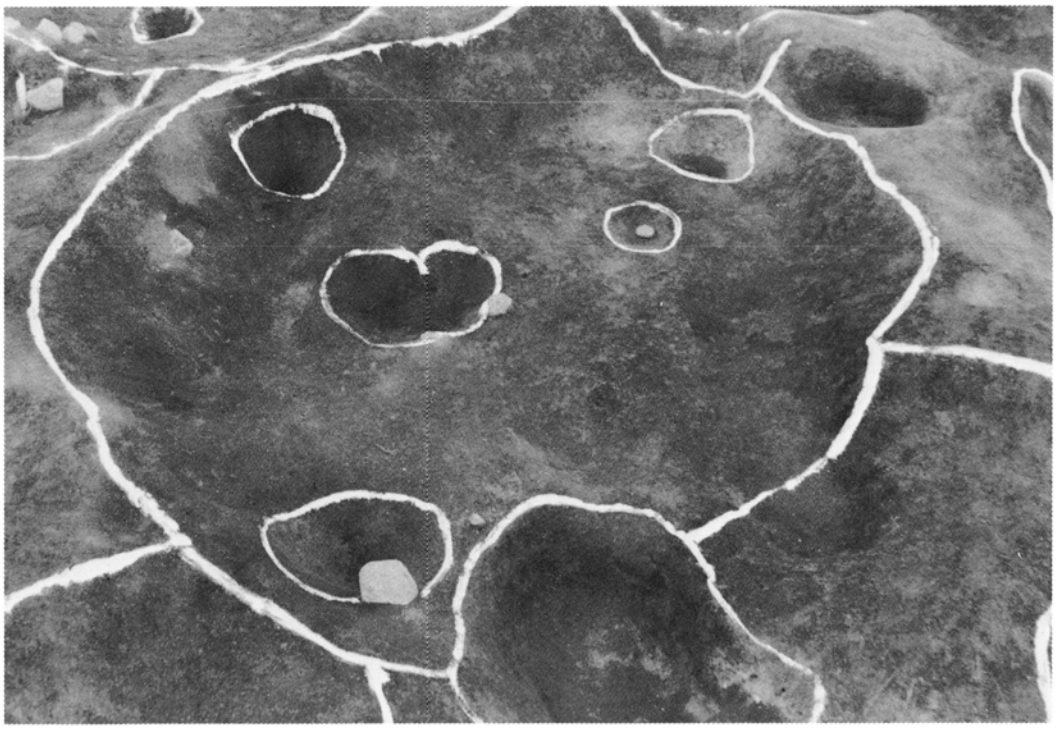
(1)　E遺跡南半部竪穴住居址（SC－018）



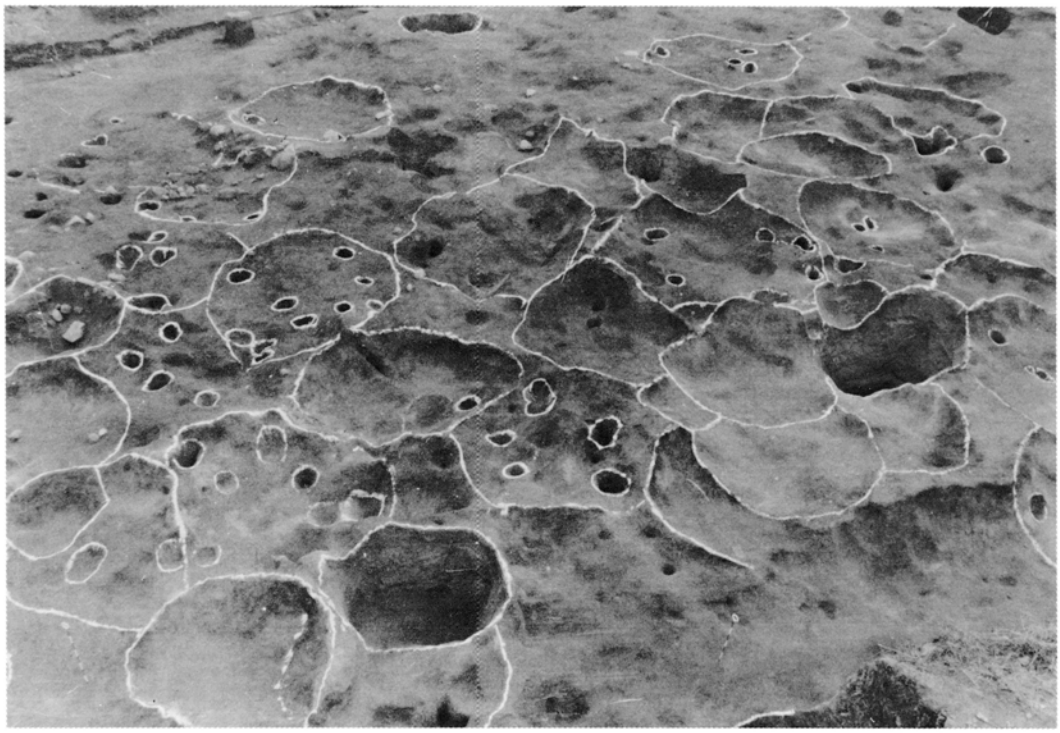
(2)　SC－018近景（東から）



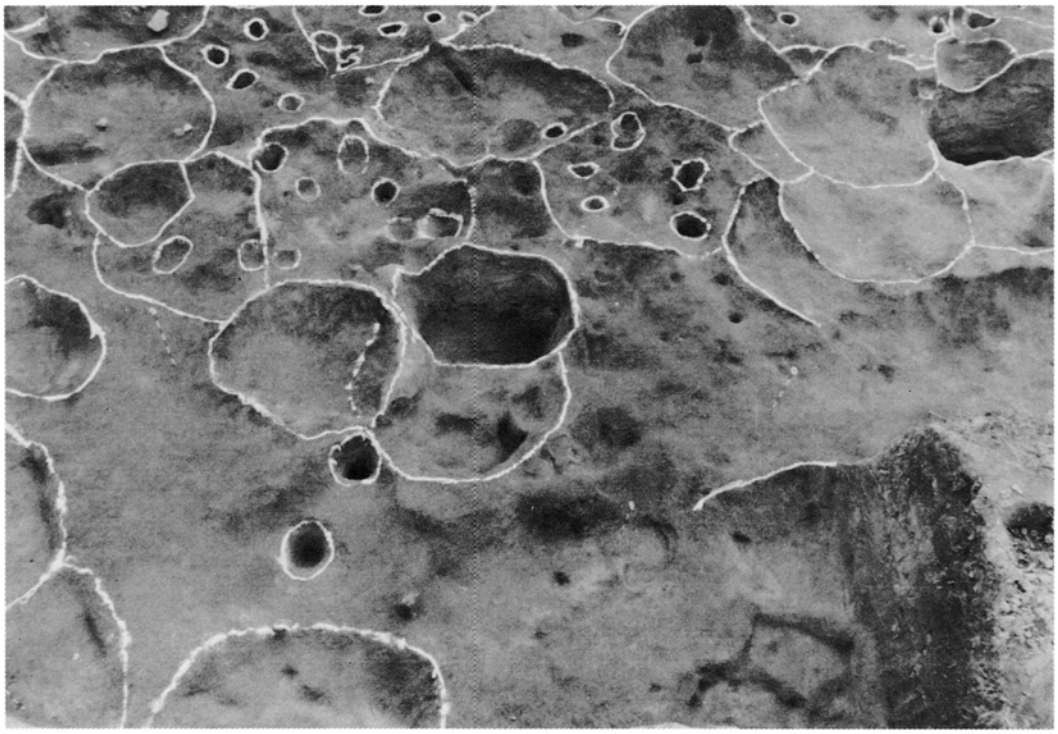
(1)　E遺跡南半部竪穴住居址



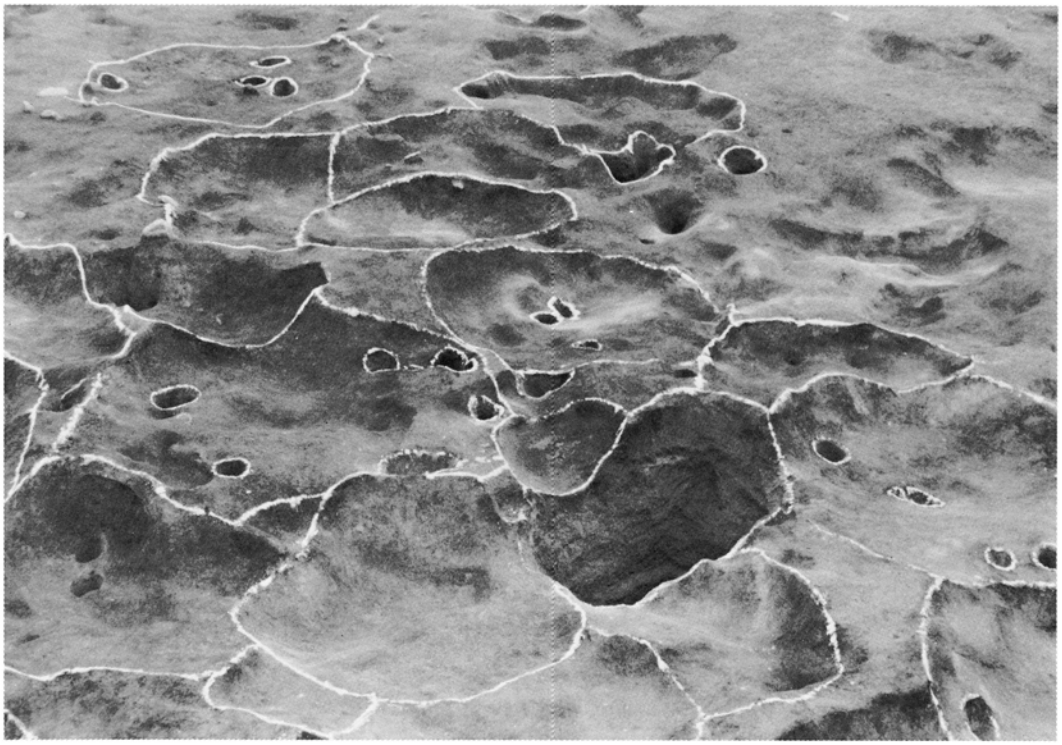
(2)　SC－012近景（東から）



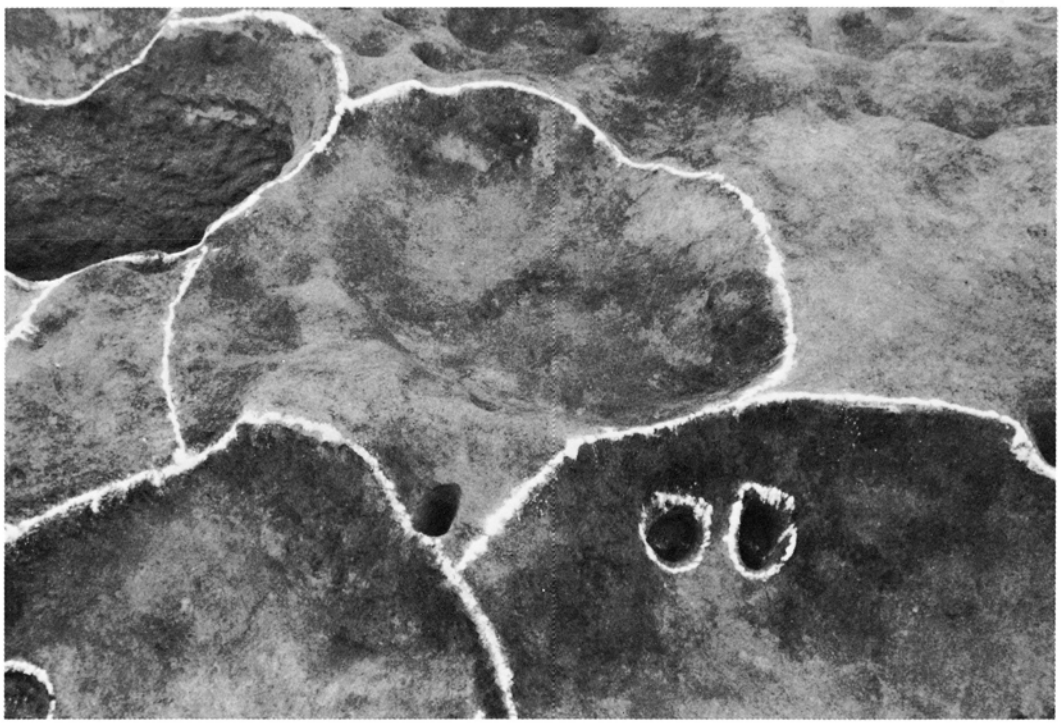
(1) E遺跡北半部竪穴住居址（西から）



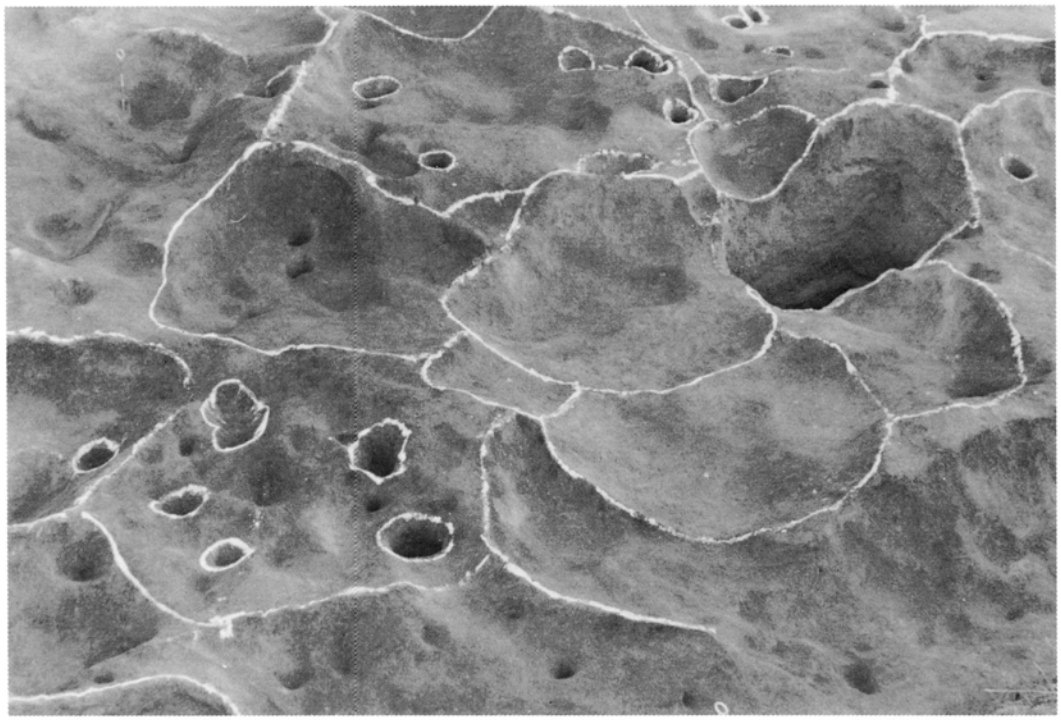
(2) E遺跡北半部遺構（SK－48）



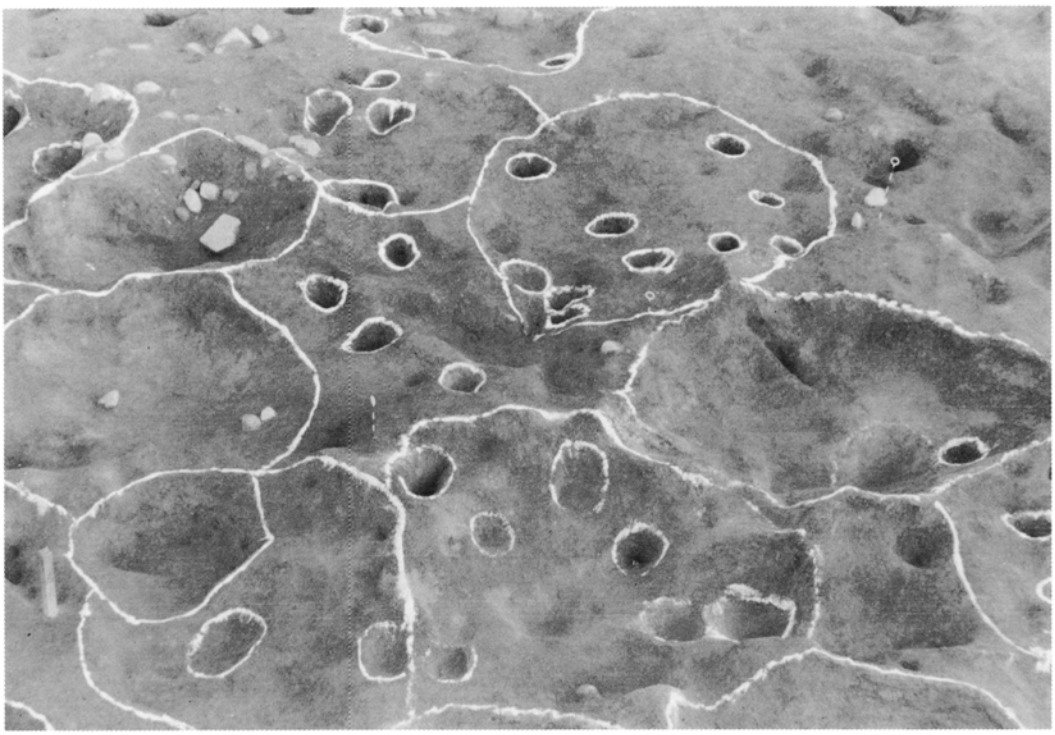
(1) E遺跡北半部遺構（SK－37を中心に）



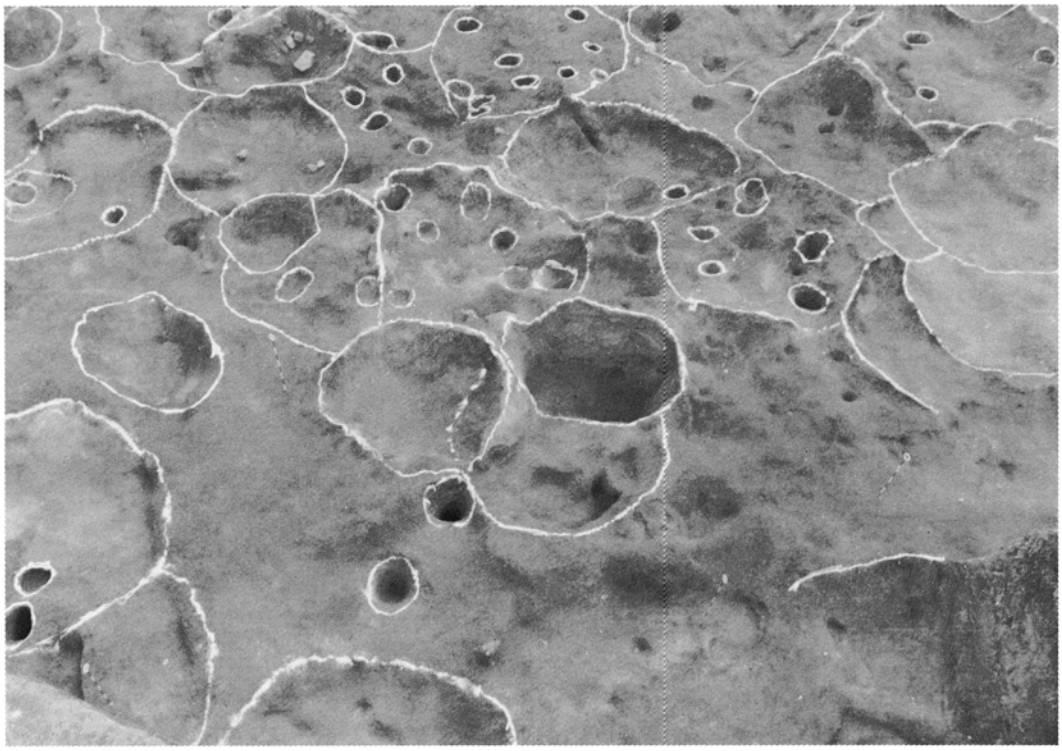
(2) SC－076近景（西から）



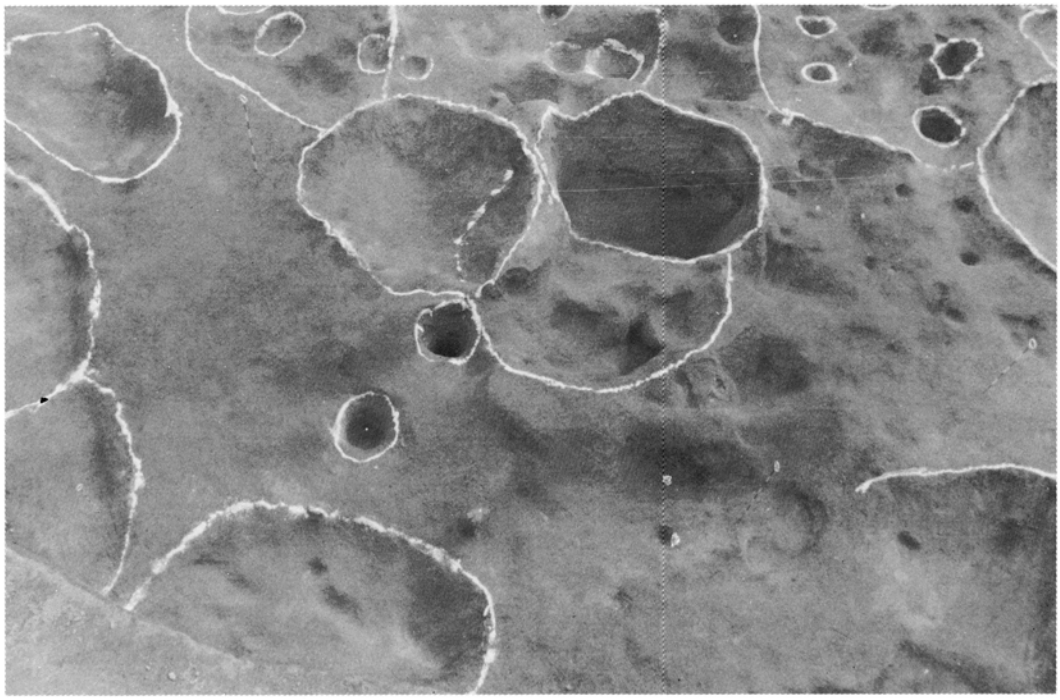
(1)　E遺跡北半部遺構（SC－079を中心に）



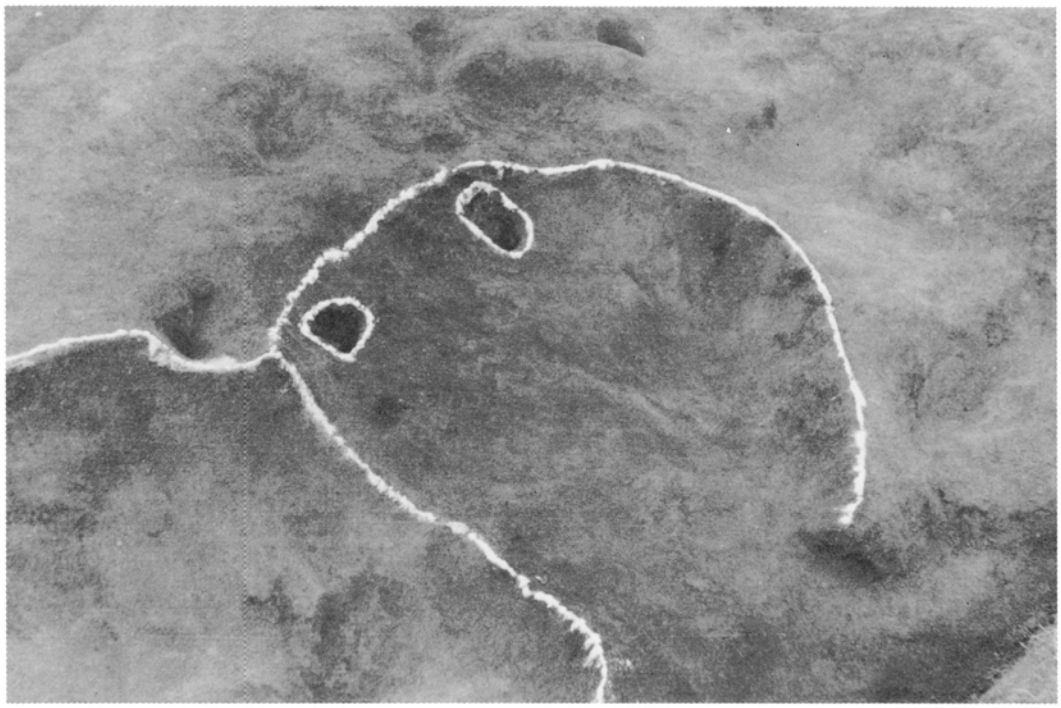
(2)　E遺跡北半部遺構（SC－092を中心に）



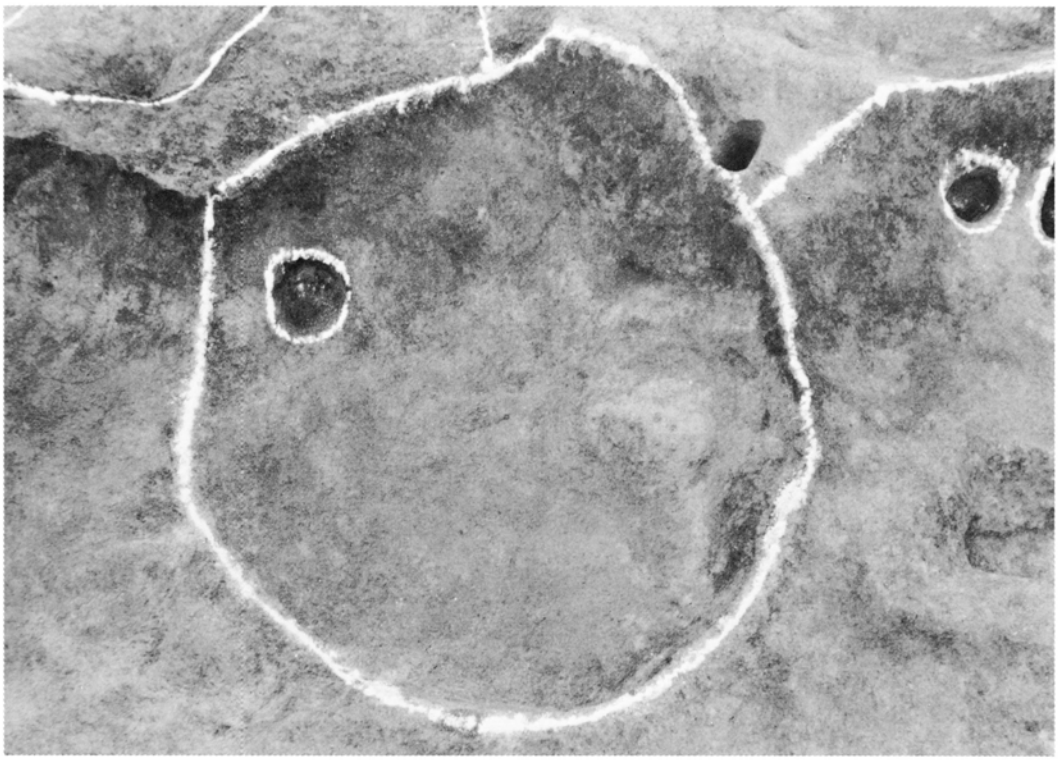
(1)　E遺跡北半部遺構（SK－48を中心に）



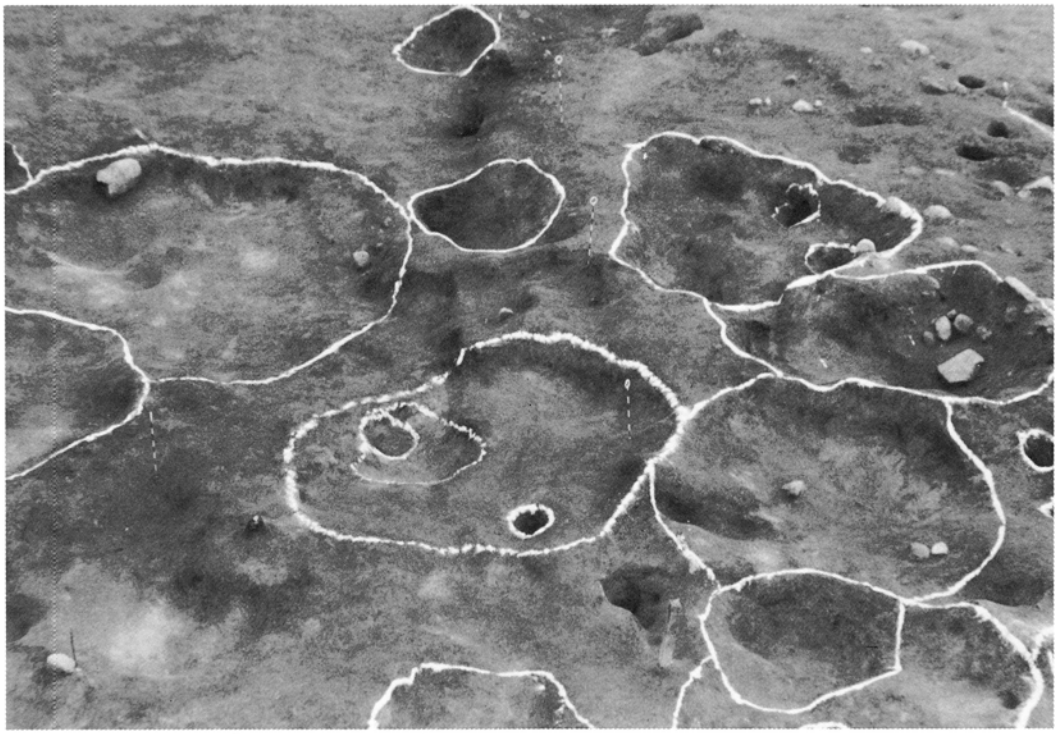
(2)　E遺跡北半部遺構近景（西から）



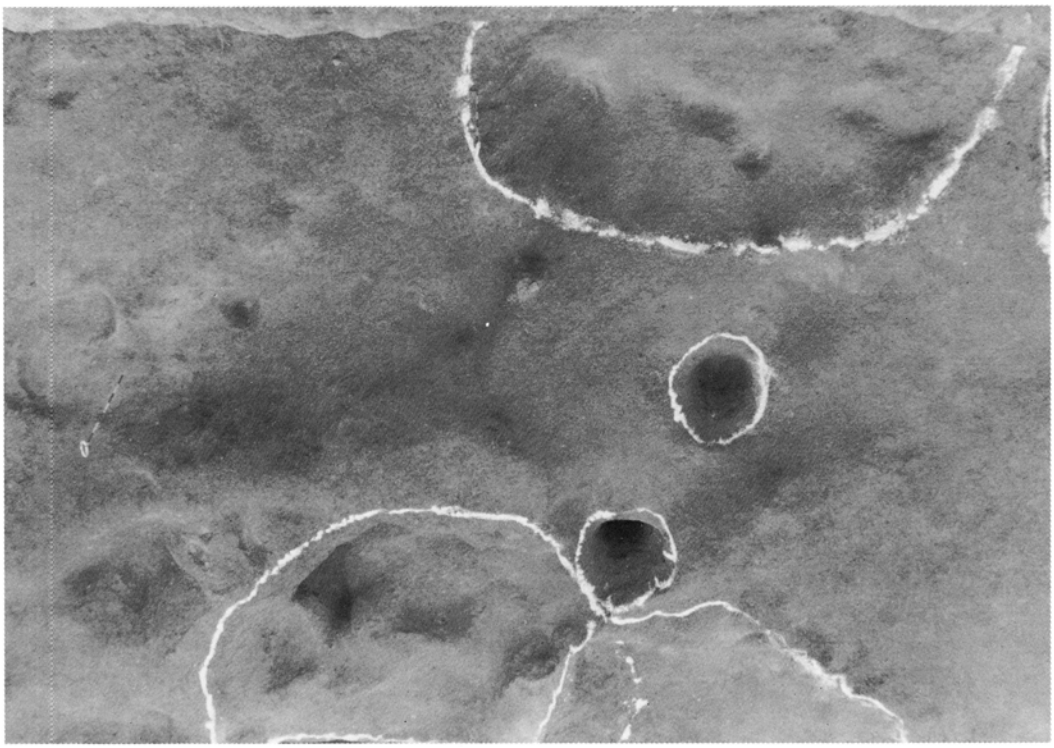
(1) SC－071近景（西から）



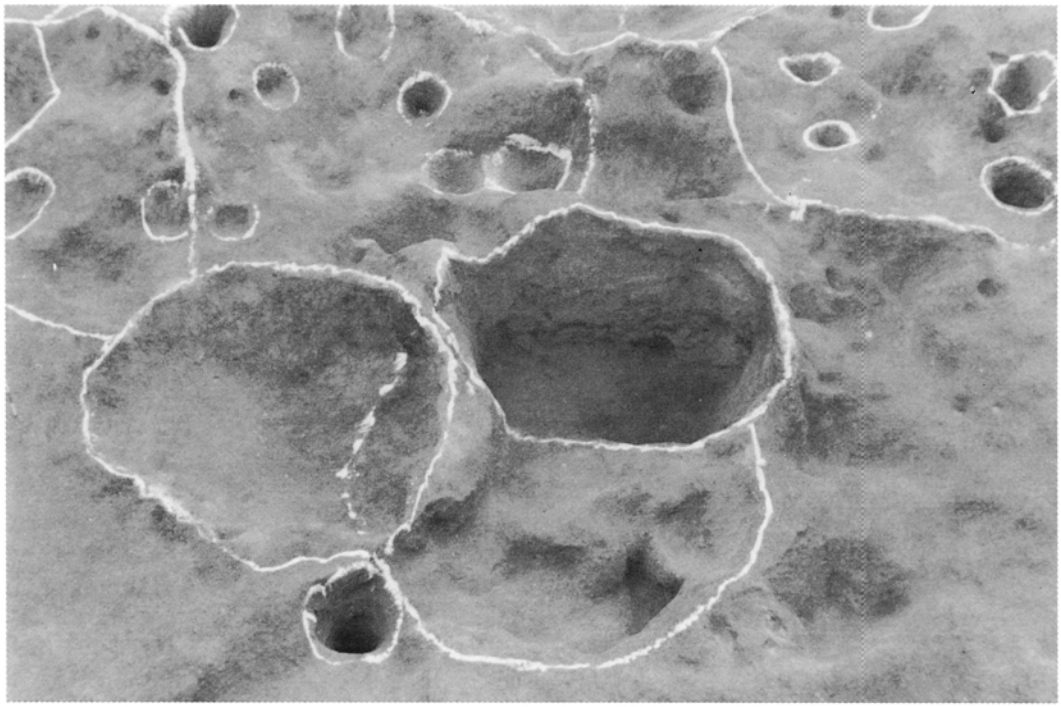
(2) SC－104近景（西から）



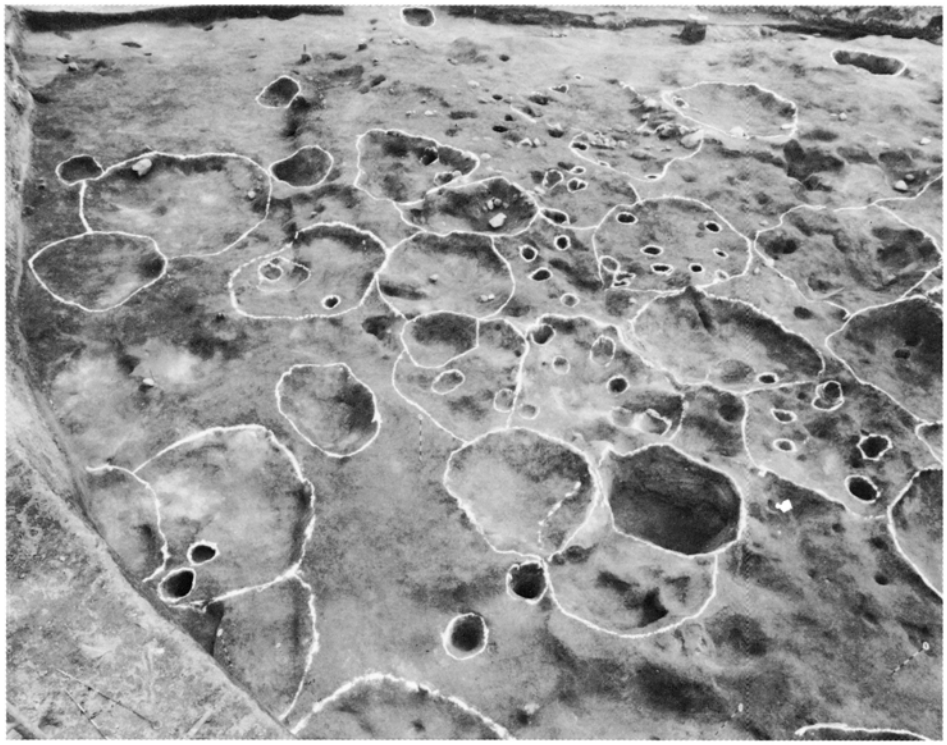
(1)　E遺跡北半部遺構（SC－101を中心に）



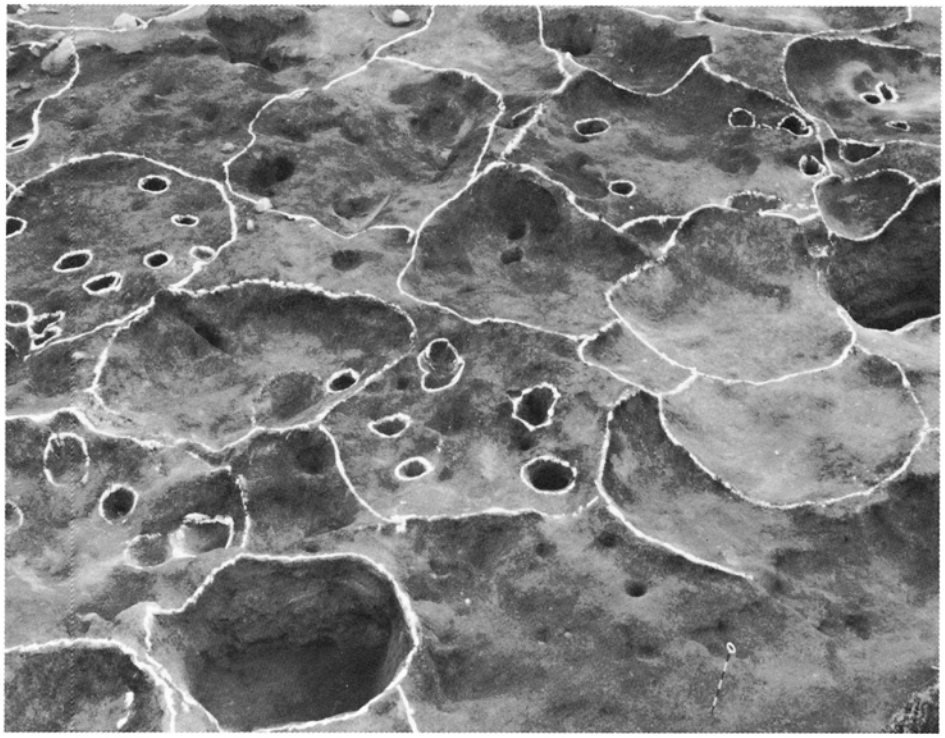
(2)　SC－097近景（東から）



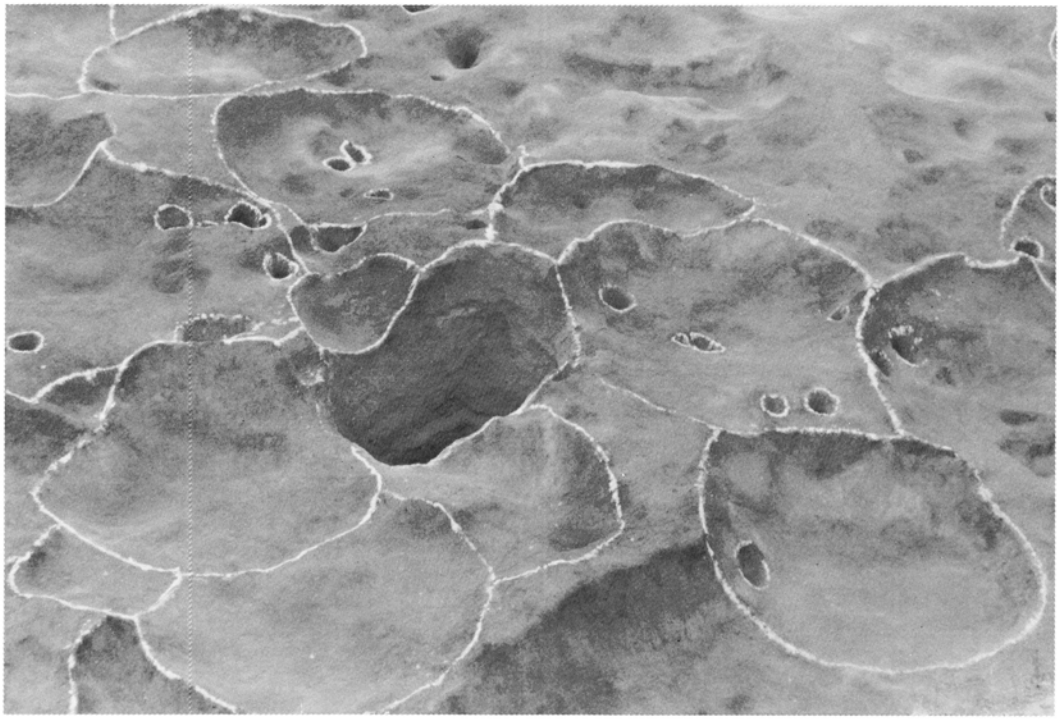
(1) E遺跡北半部遺構（SC－095、096、SK－48）



(2) E遺跡北半部遺構（南西から）

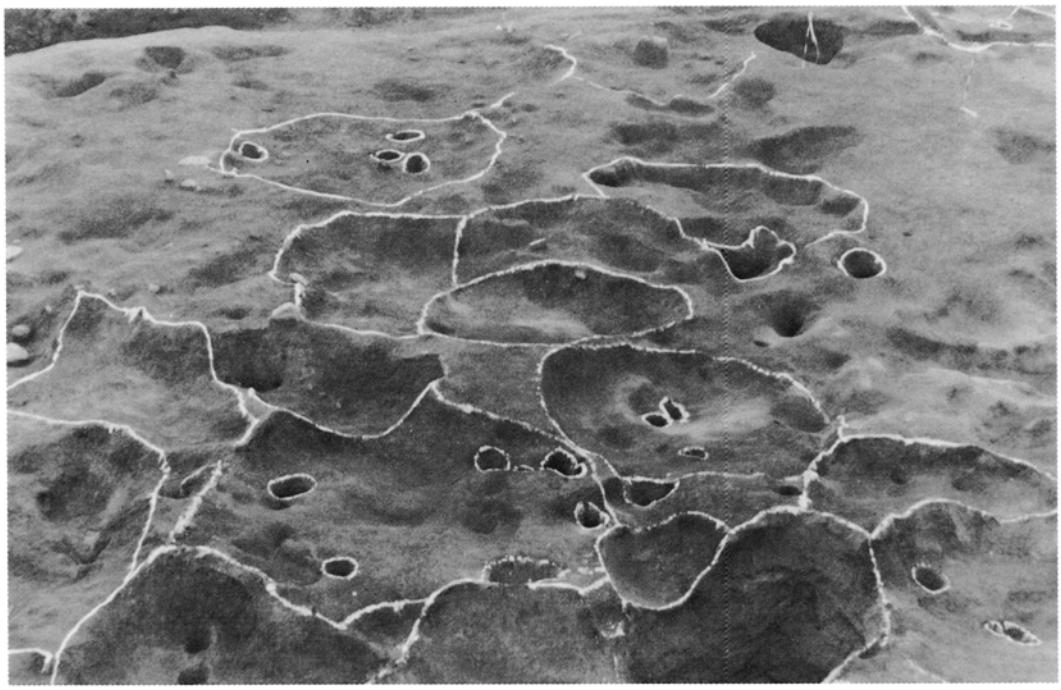


(1)　E遺跡北半部遺構（SC－084を中心に）

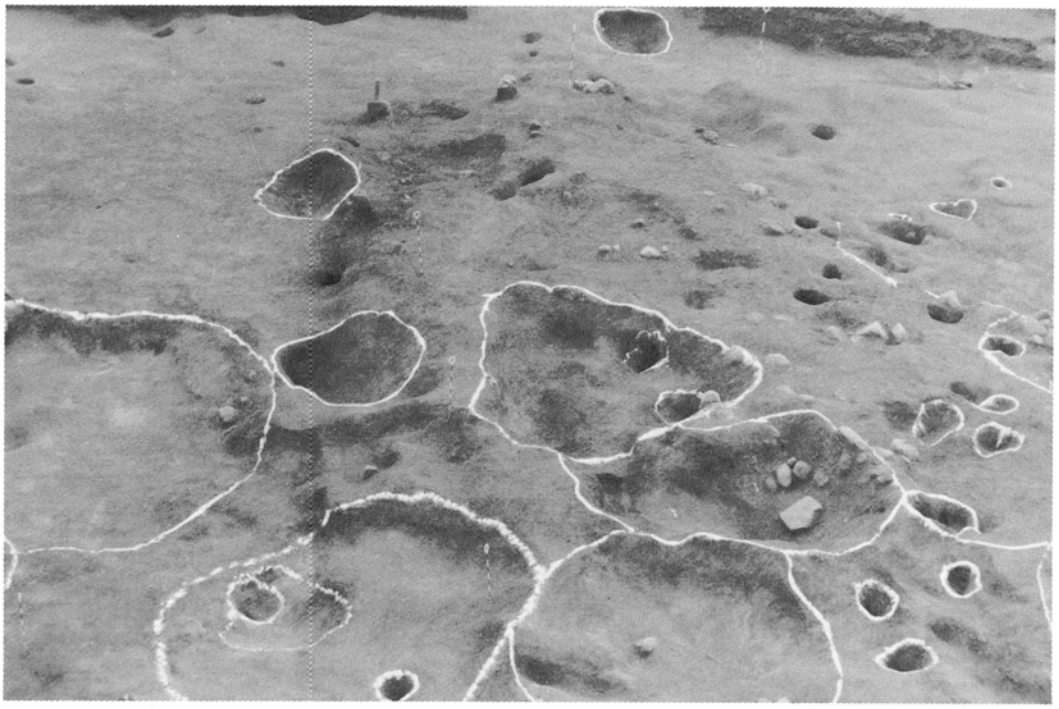


(2)　E遺跡北半部遺構（SK－37を中心に）

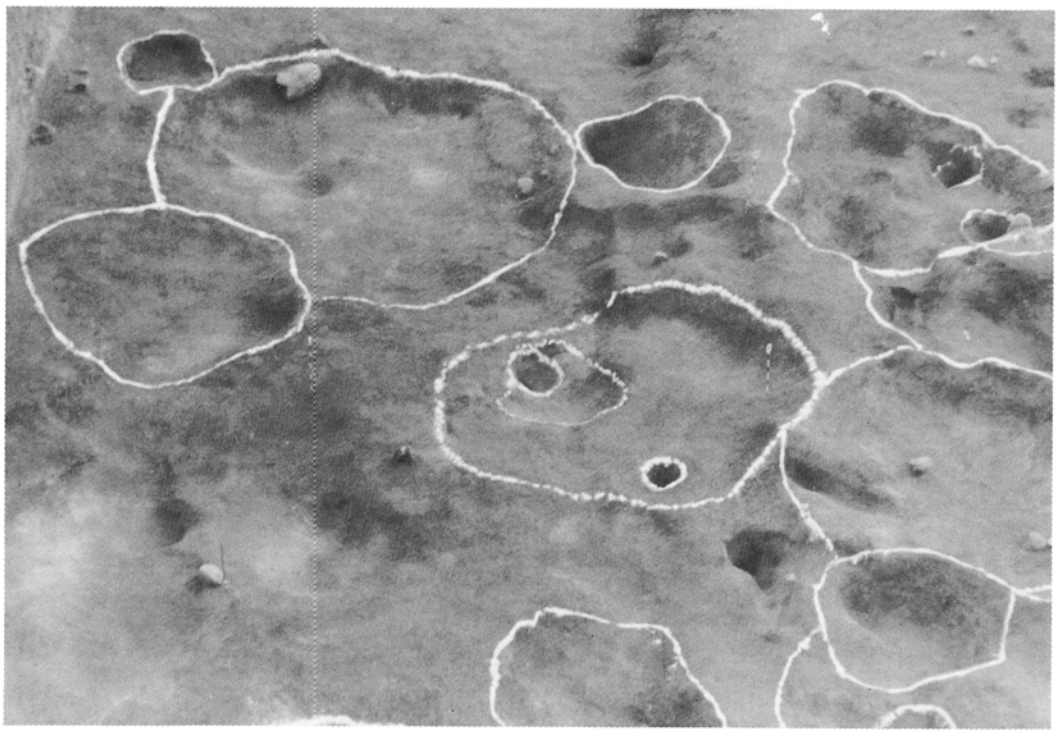
(1)　E遺跡北半部遺構（北西から）



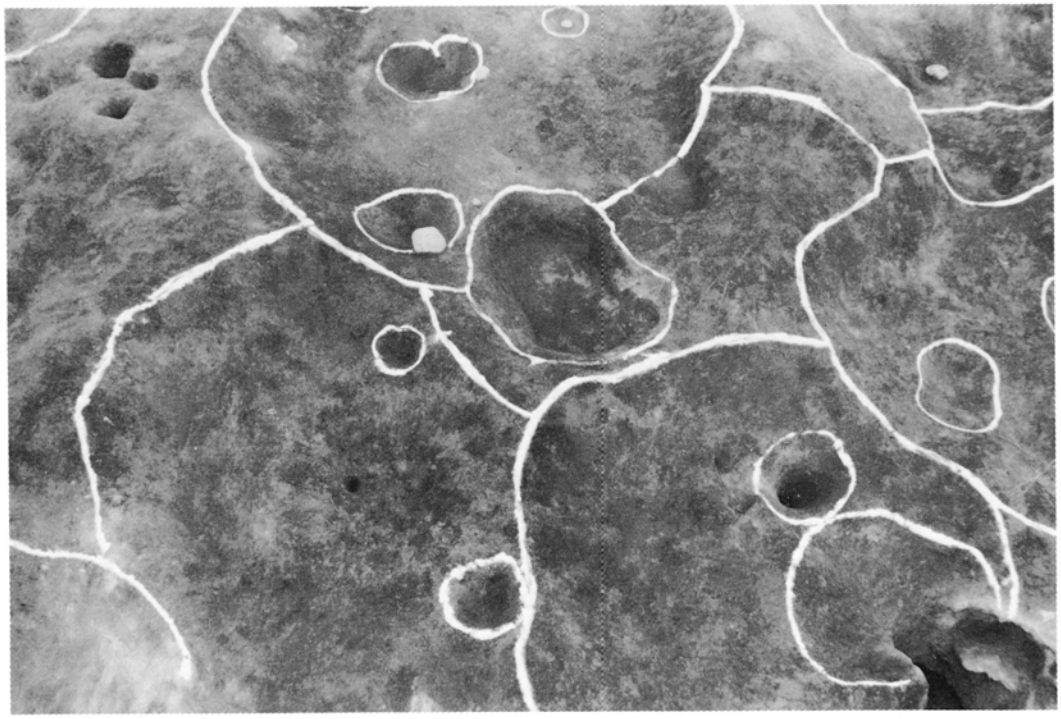
(2)　E遺跡北半部遺構近景（北西から）



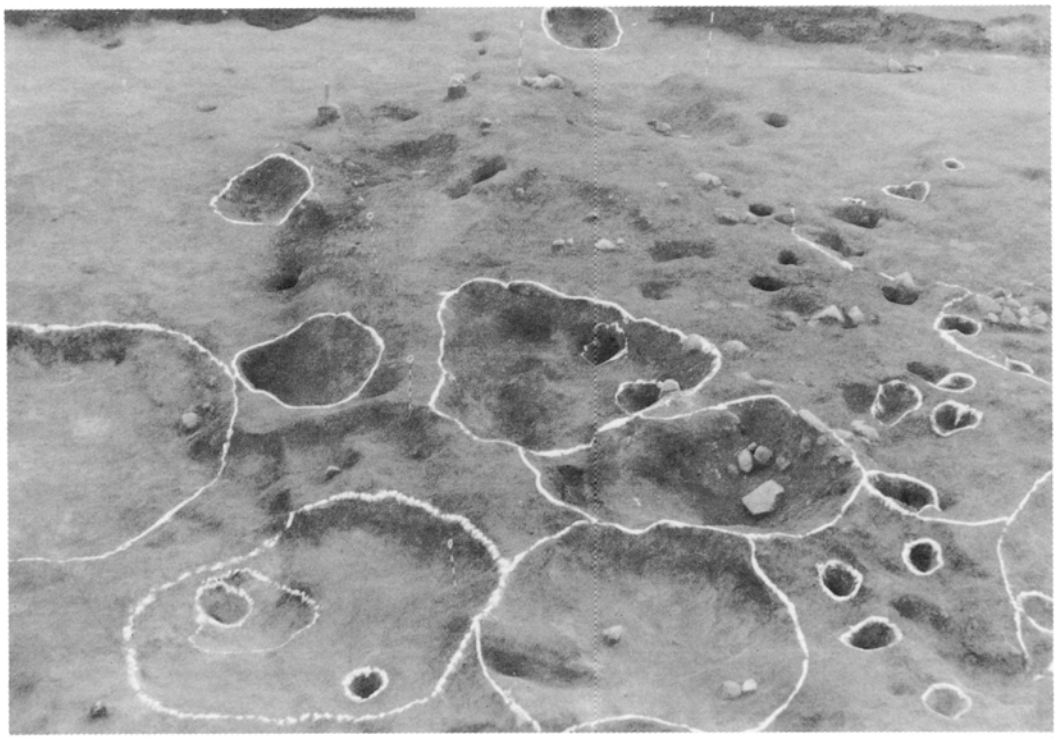
(1) E遺跡北半部遺構（SC－091を中心に）



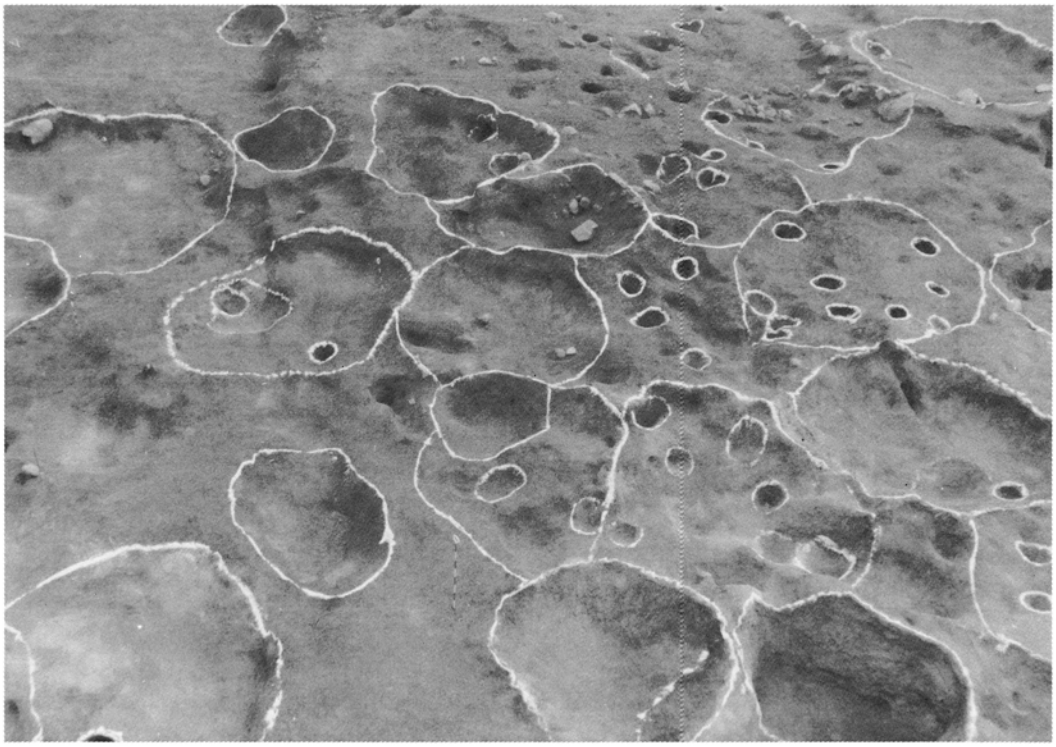
(2) E遺跡北半部遺構近景（SC－101を中心に）



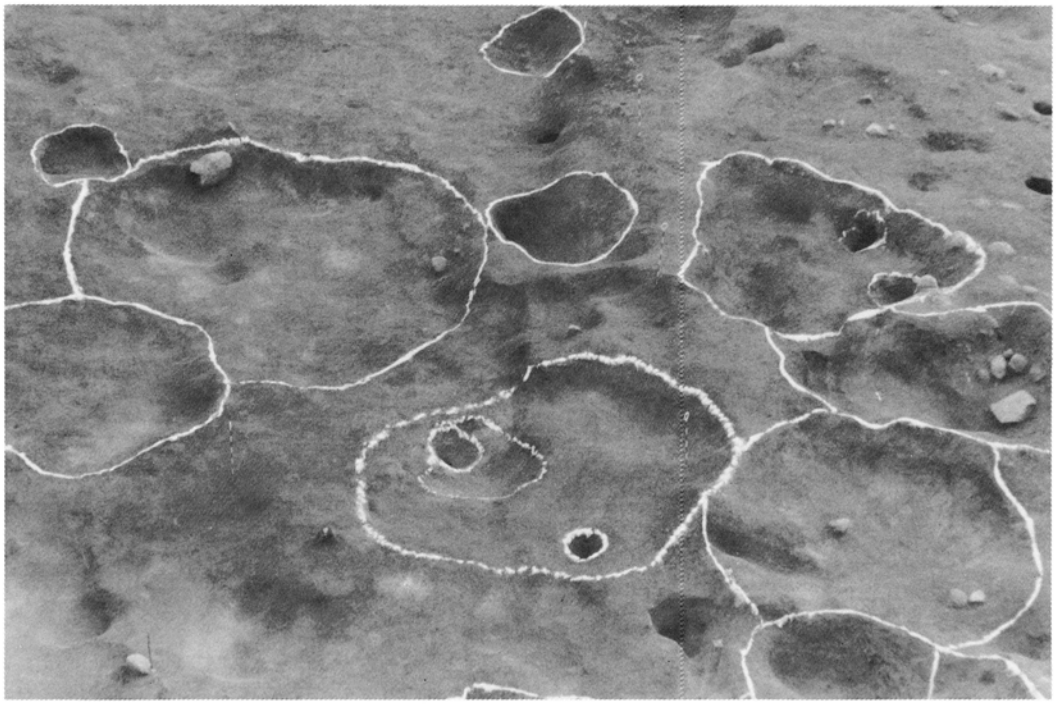
(1)　E遺跡南半部遺構近景（SK－02を中心に）



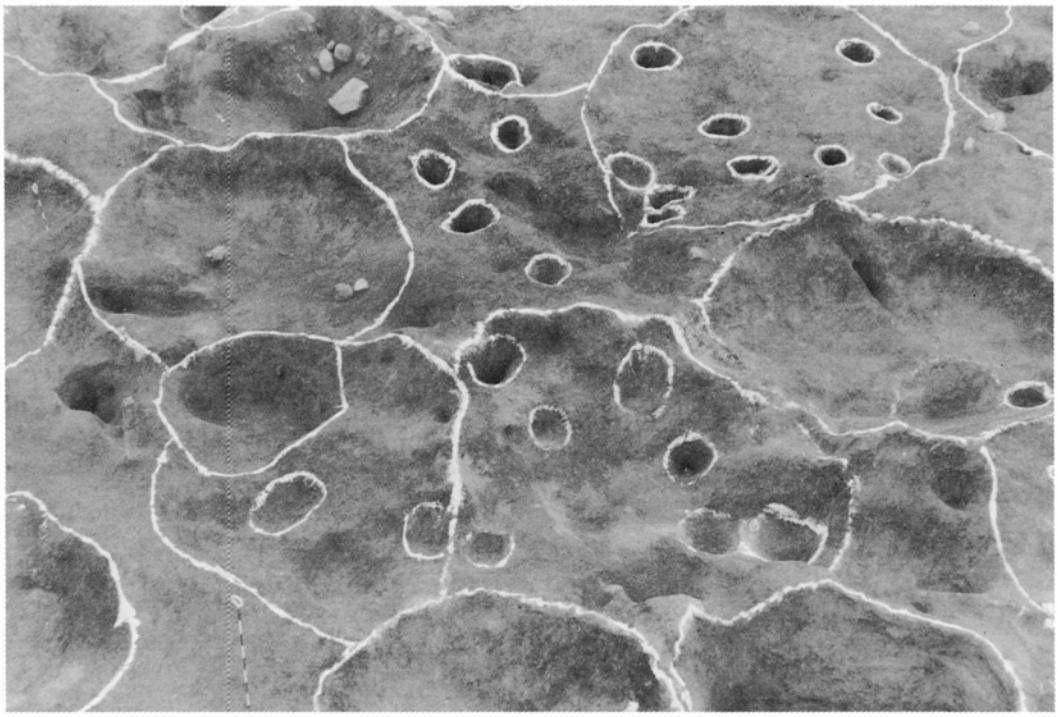
(2)　E遺跡北半部遺構近景（SC－091を中心に）



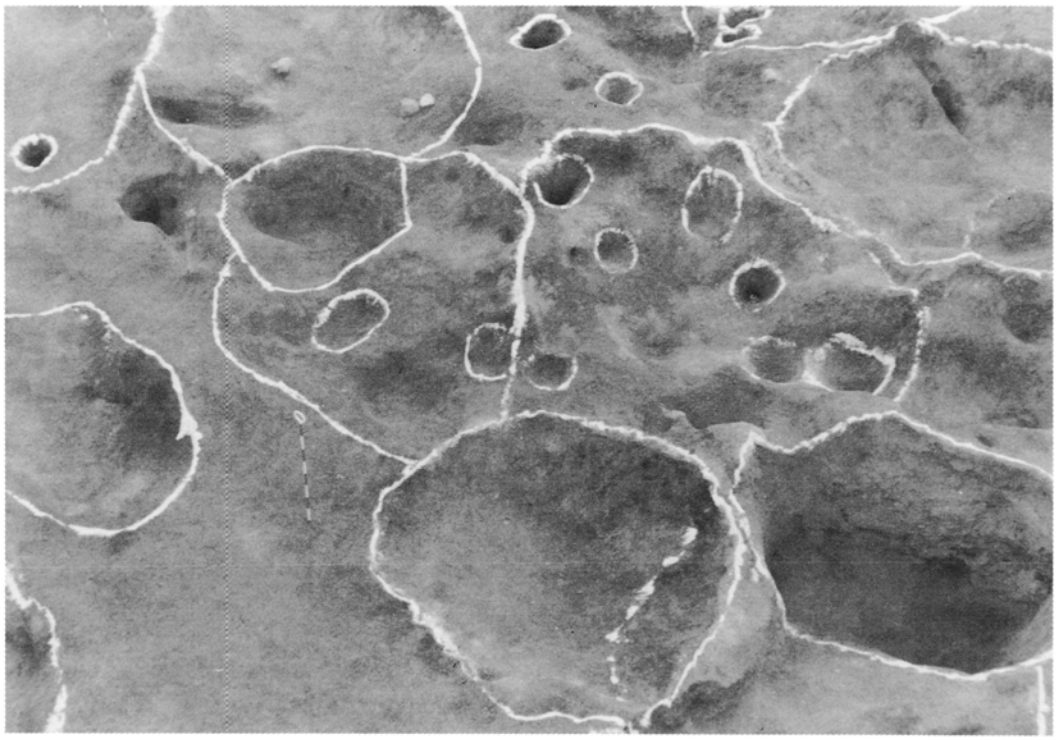
(1)　E遺跡北半部遺構（SC－093を中心に）



(2)　E遺跡北半部遺構近景（SC－101を中心に）

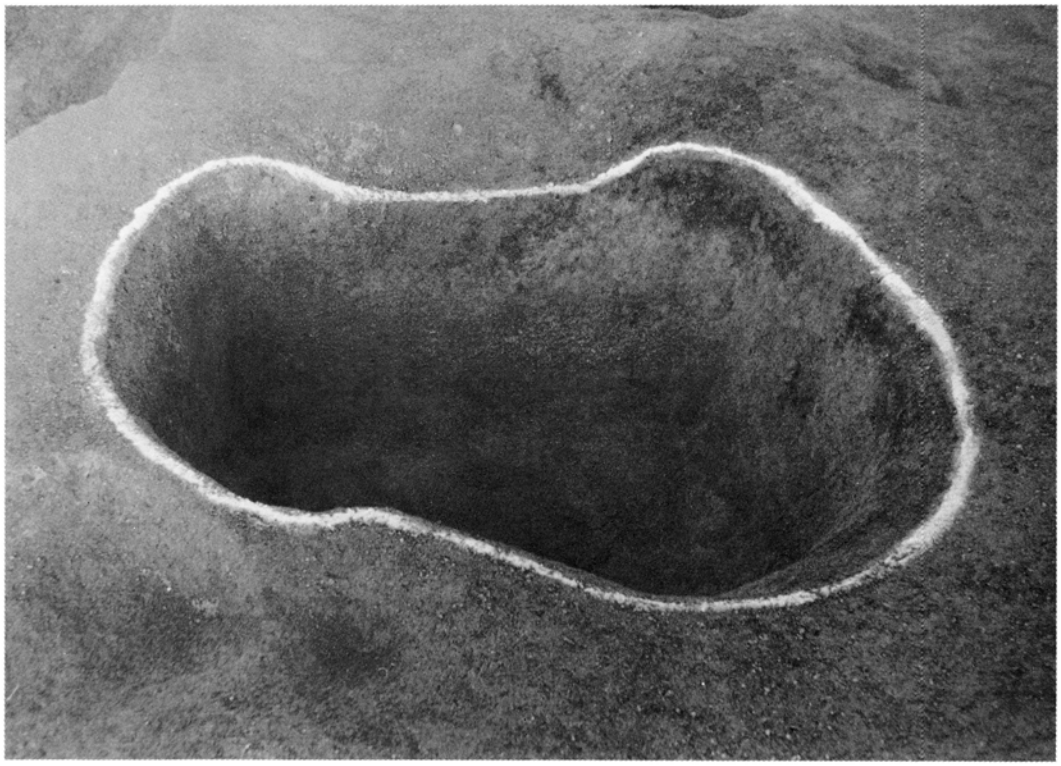


(1)　E遺跡北半部遺構（SC－094を中心に）

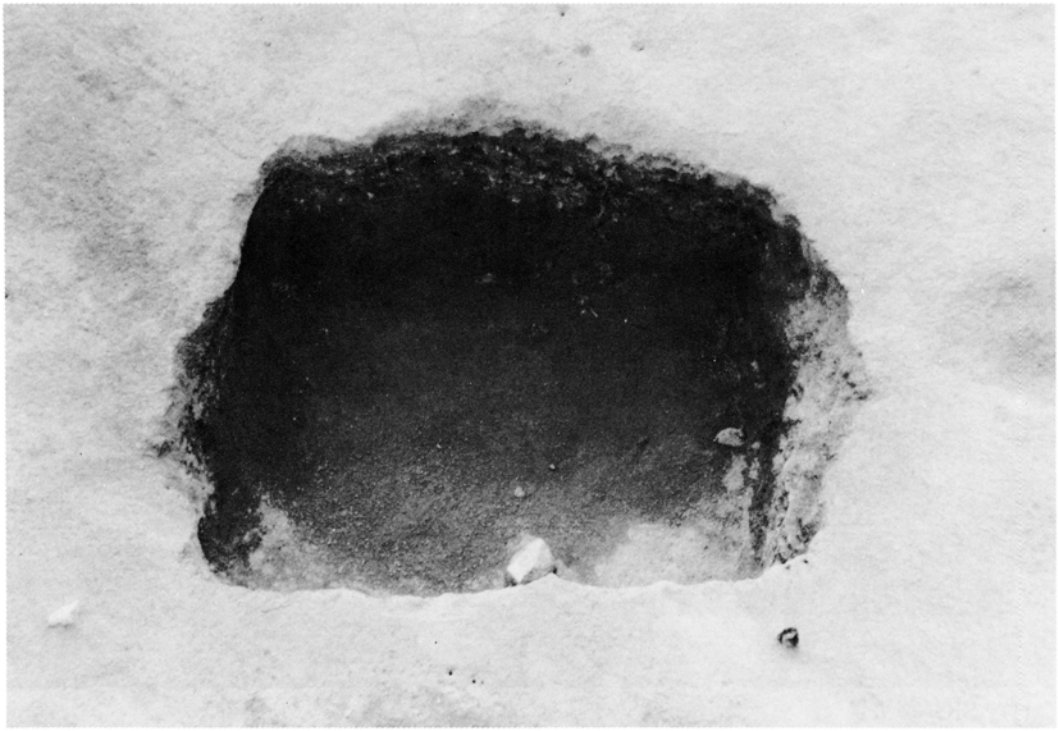


(2)　E遺跡北半部遺構（SC－093、094を中心に）

(1) SK－28近景



(2) SK－22近景

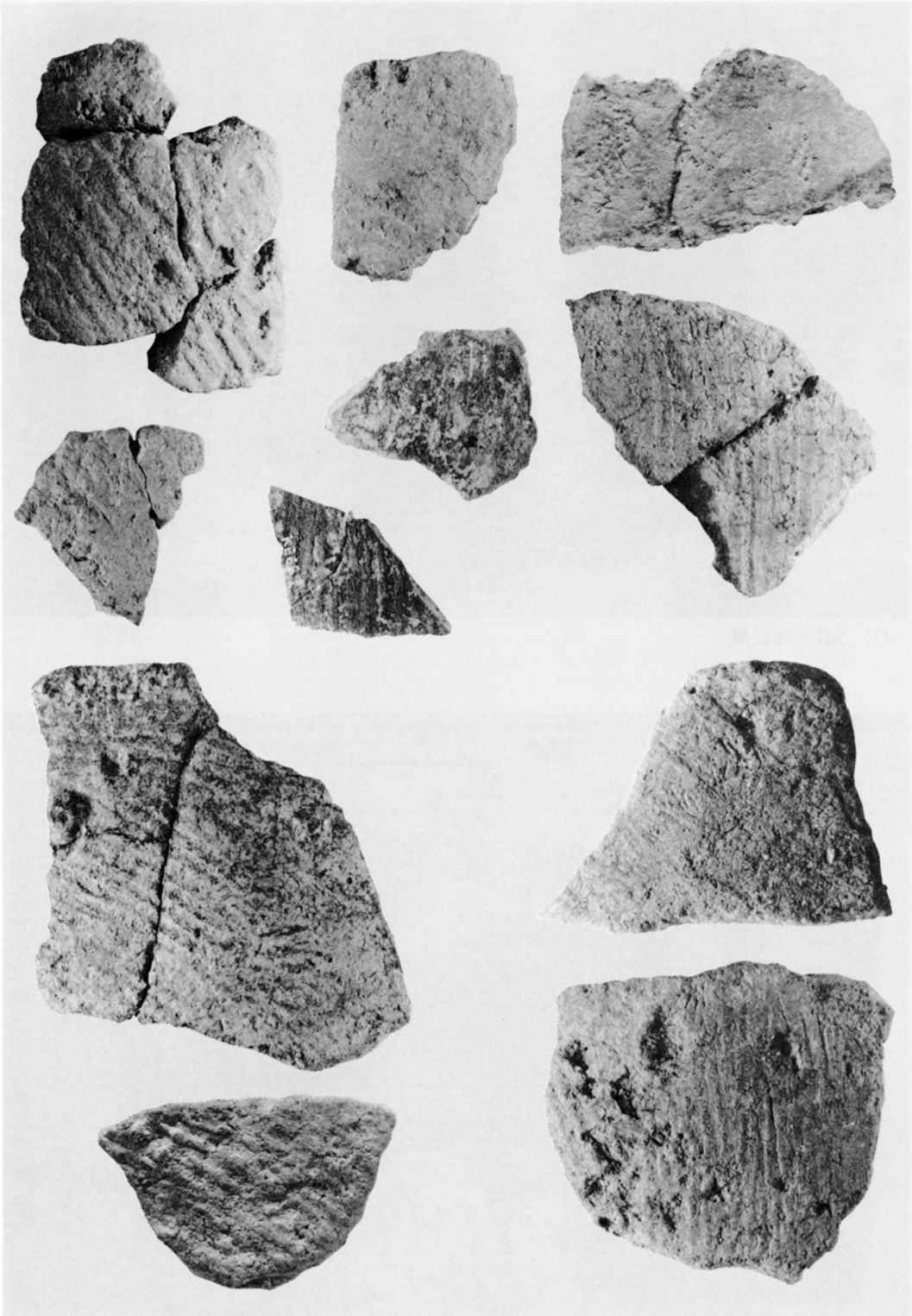


(1)　SK－01近景

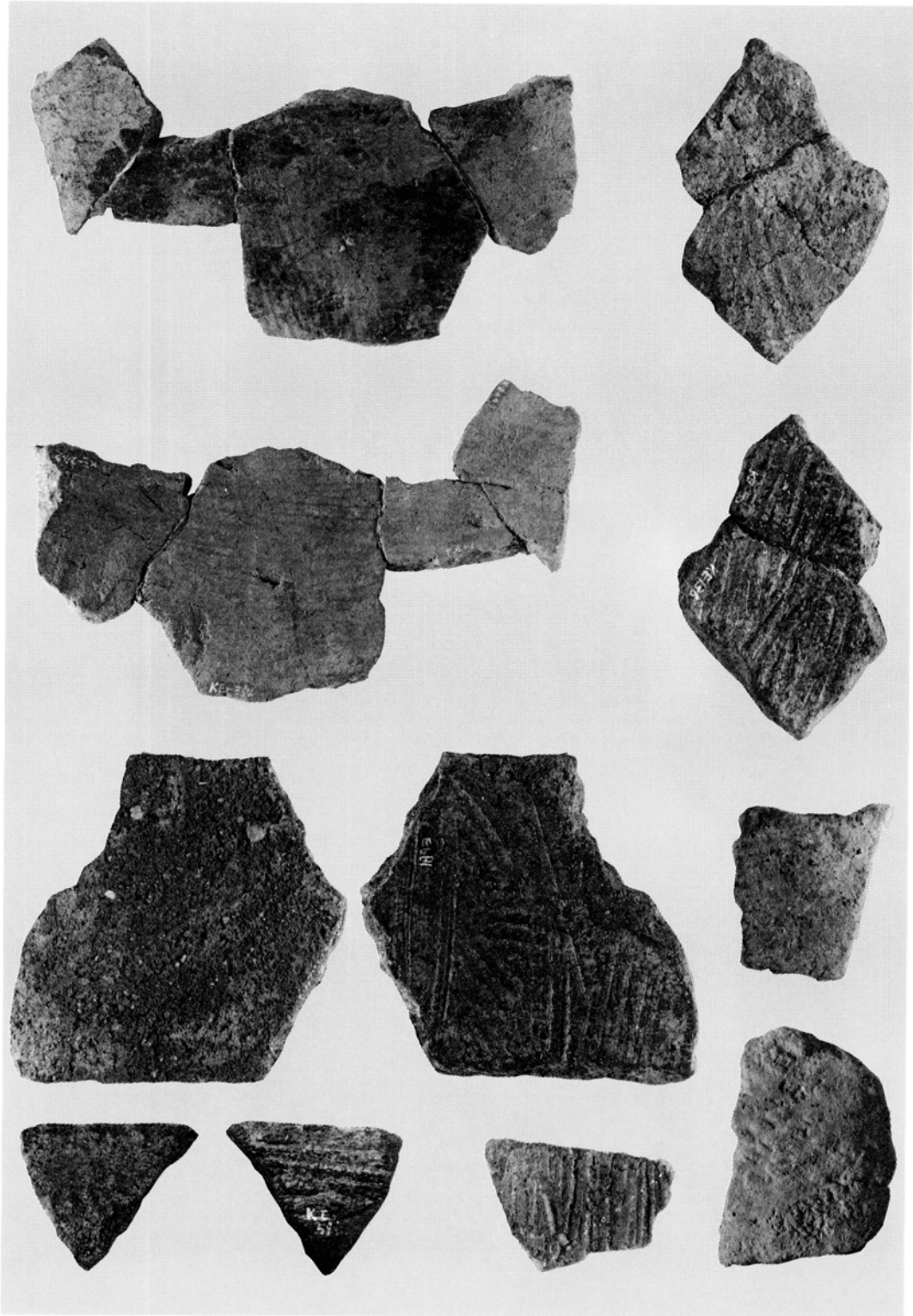
(2)　SK－01近景

(1)　SK－29近景

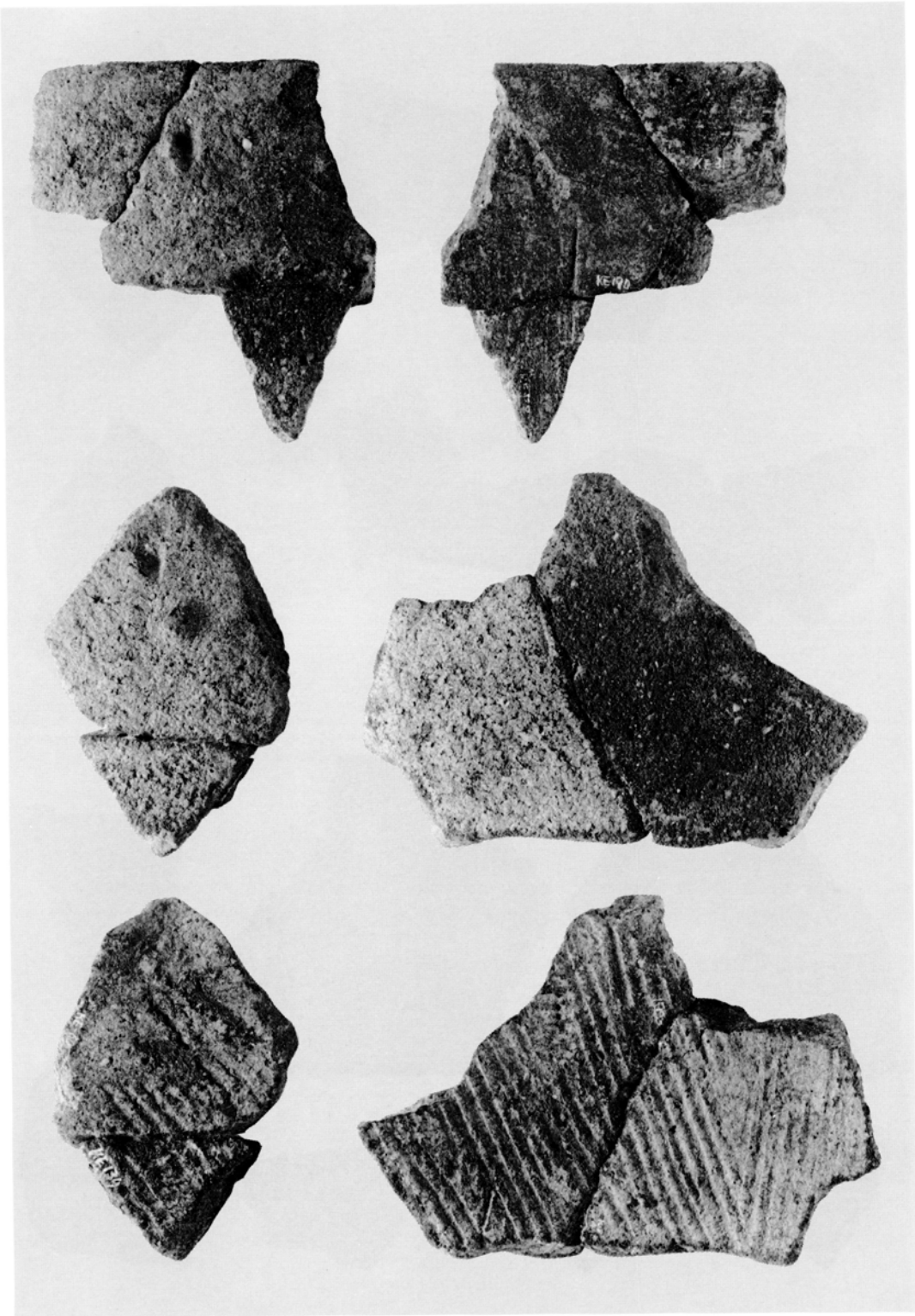
(2)　SK－37近景



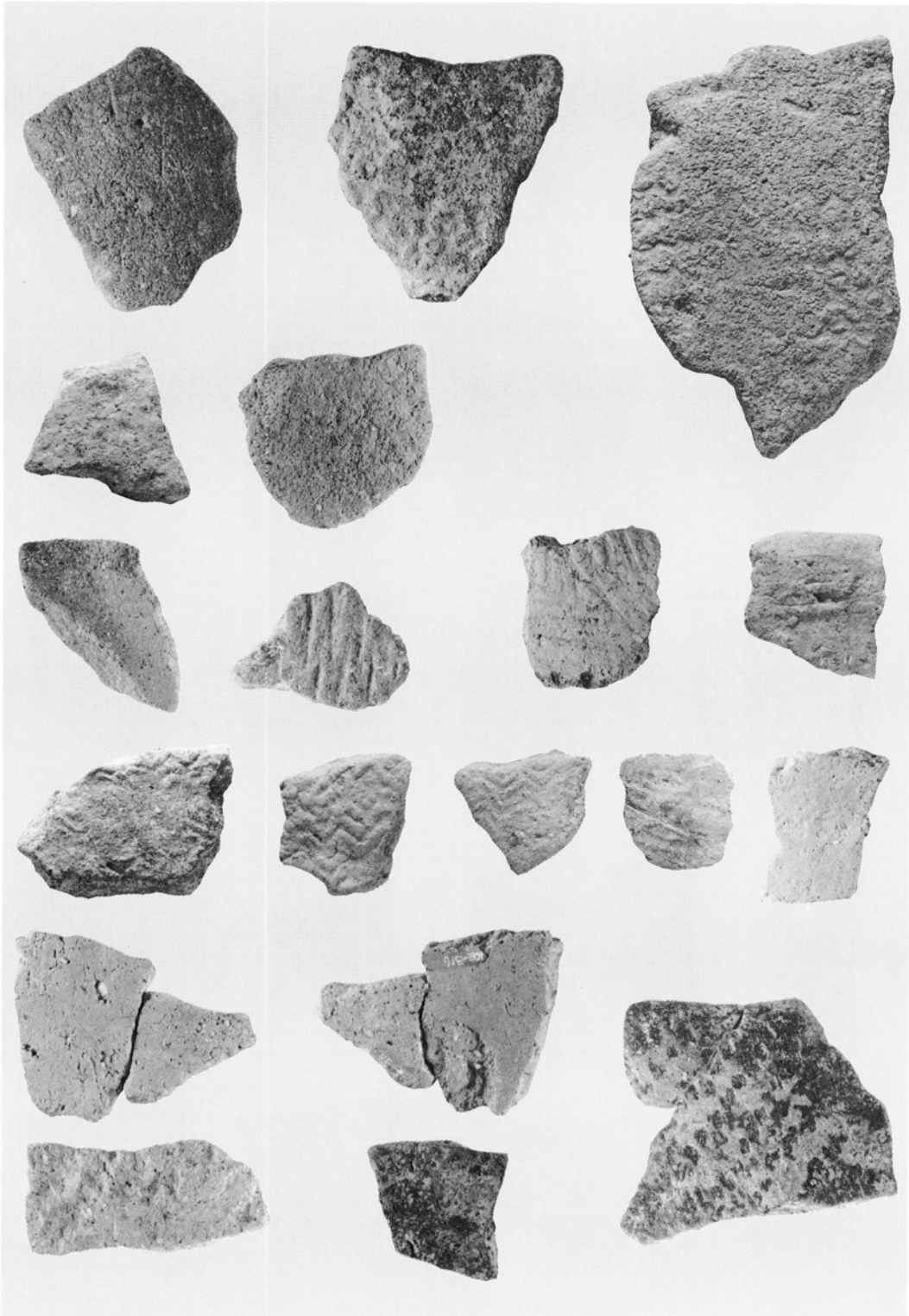
遺構出土土器 I



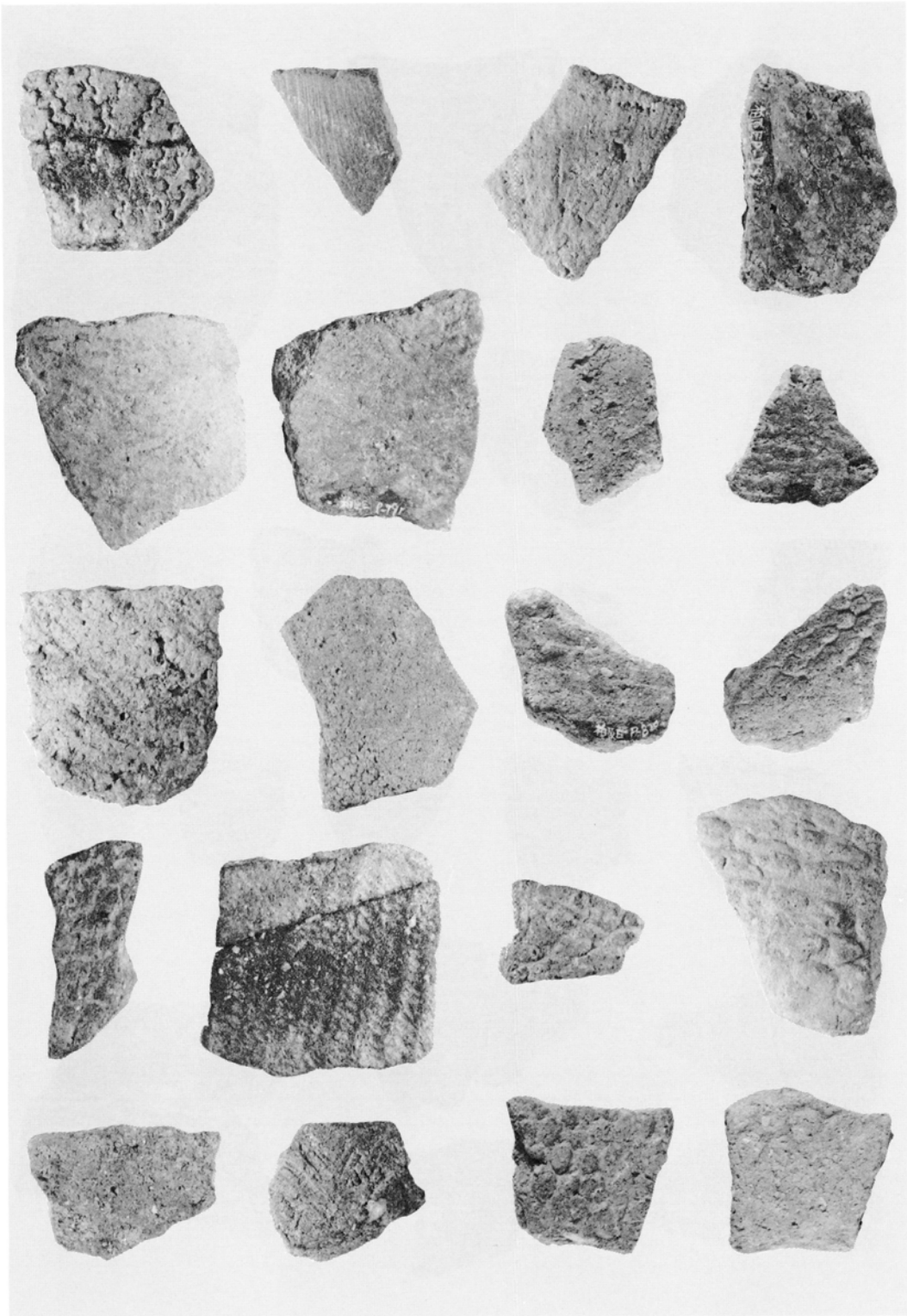
遺構出土土器 II



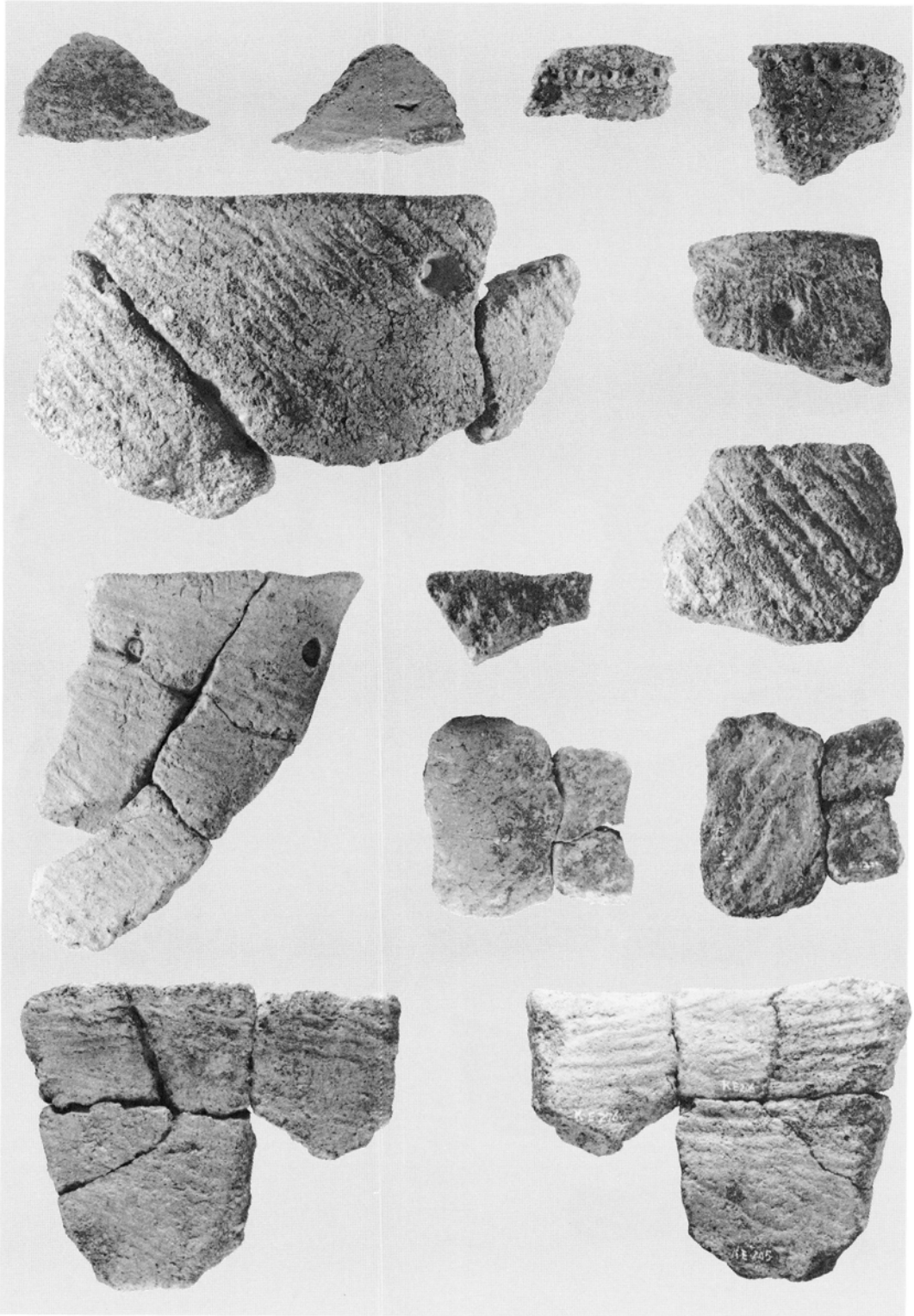
遺構出土土器Ⅲ



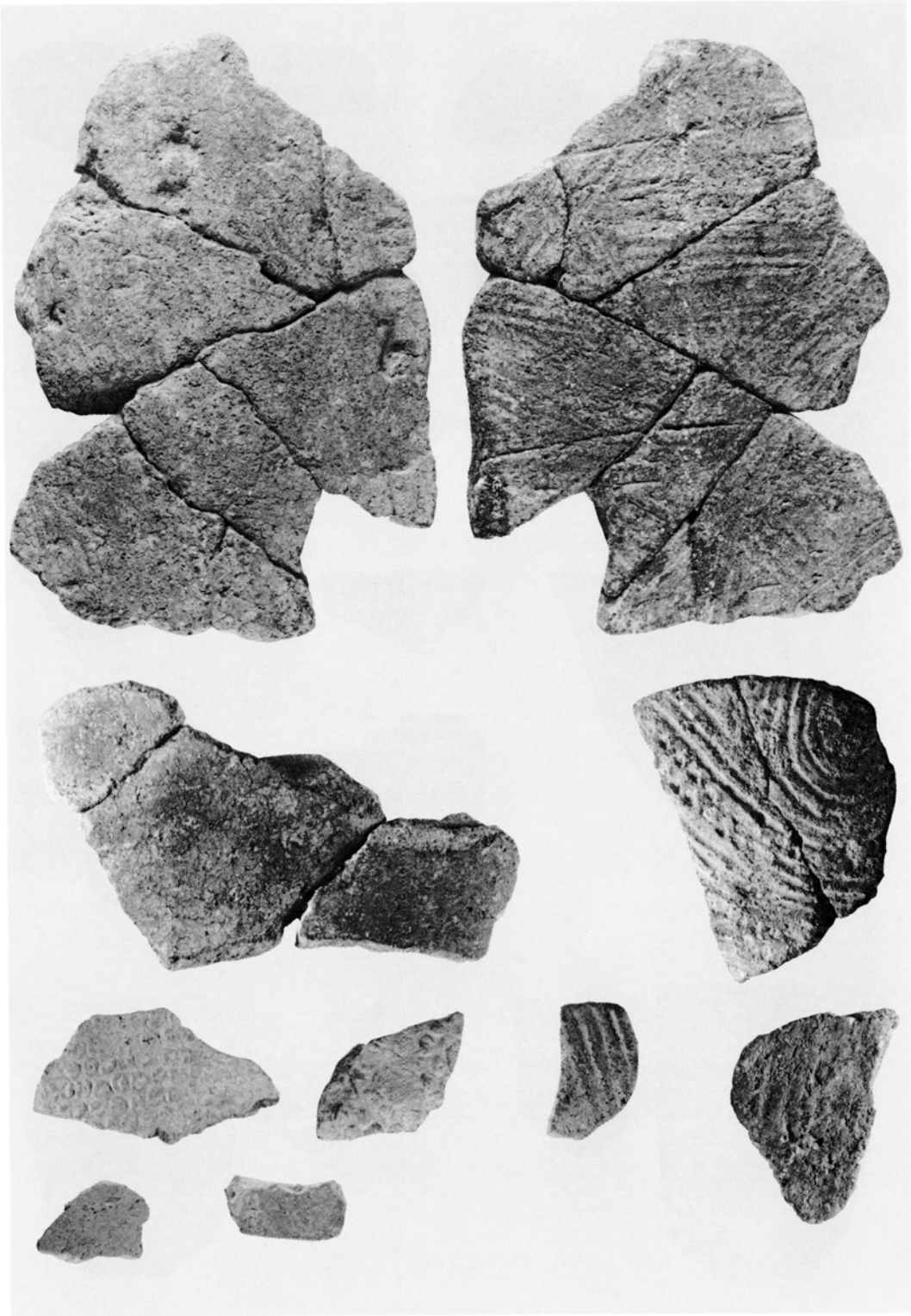
遺構出土土器Ⅳ



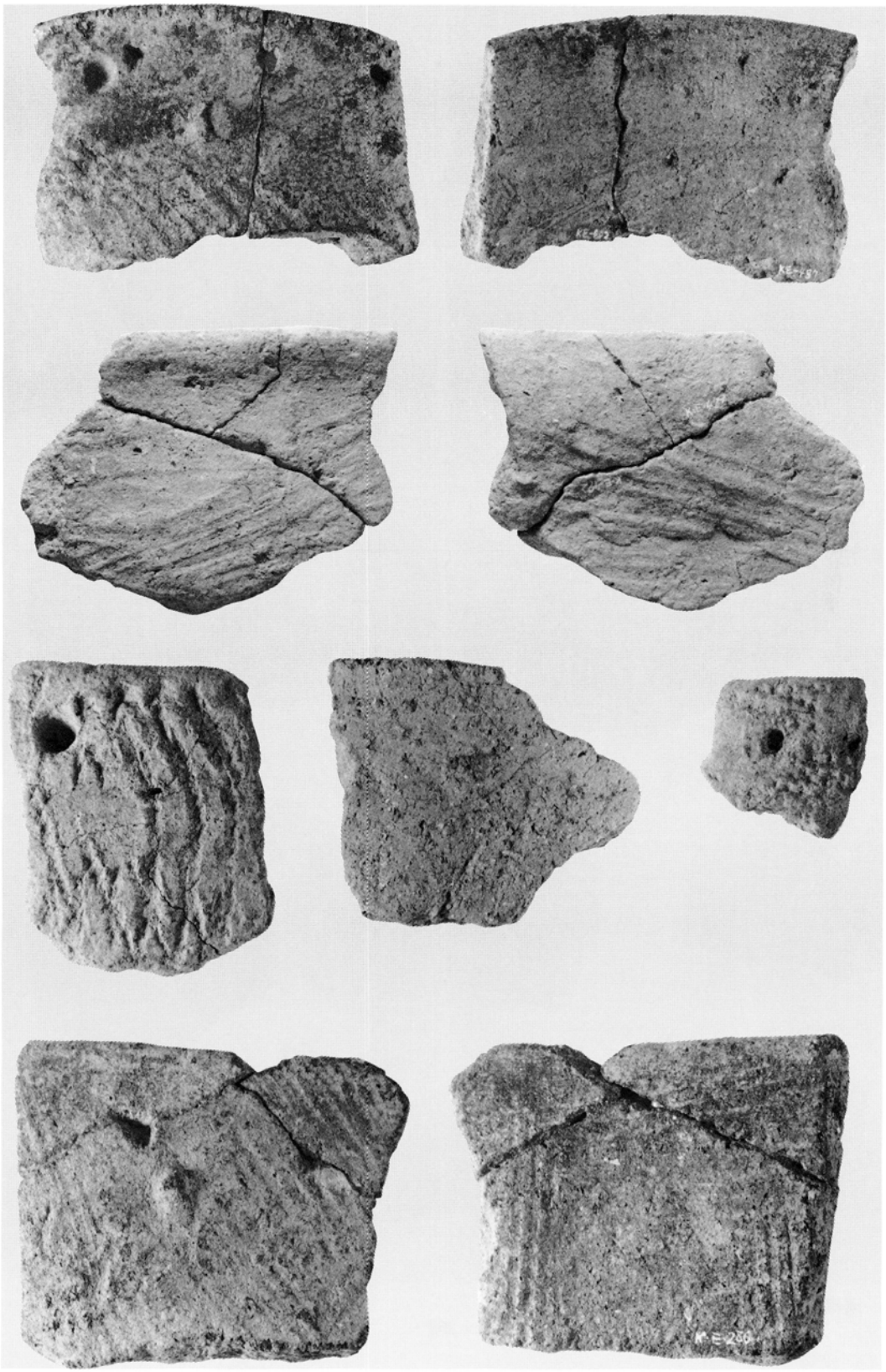
遺構出土土器 V



遺構出土土器 VI

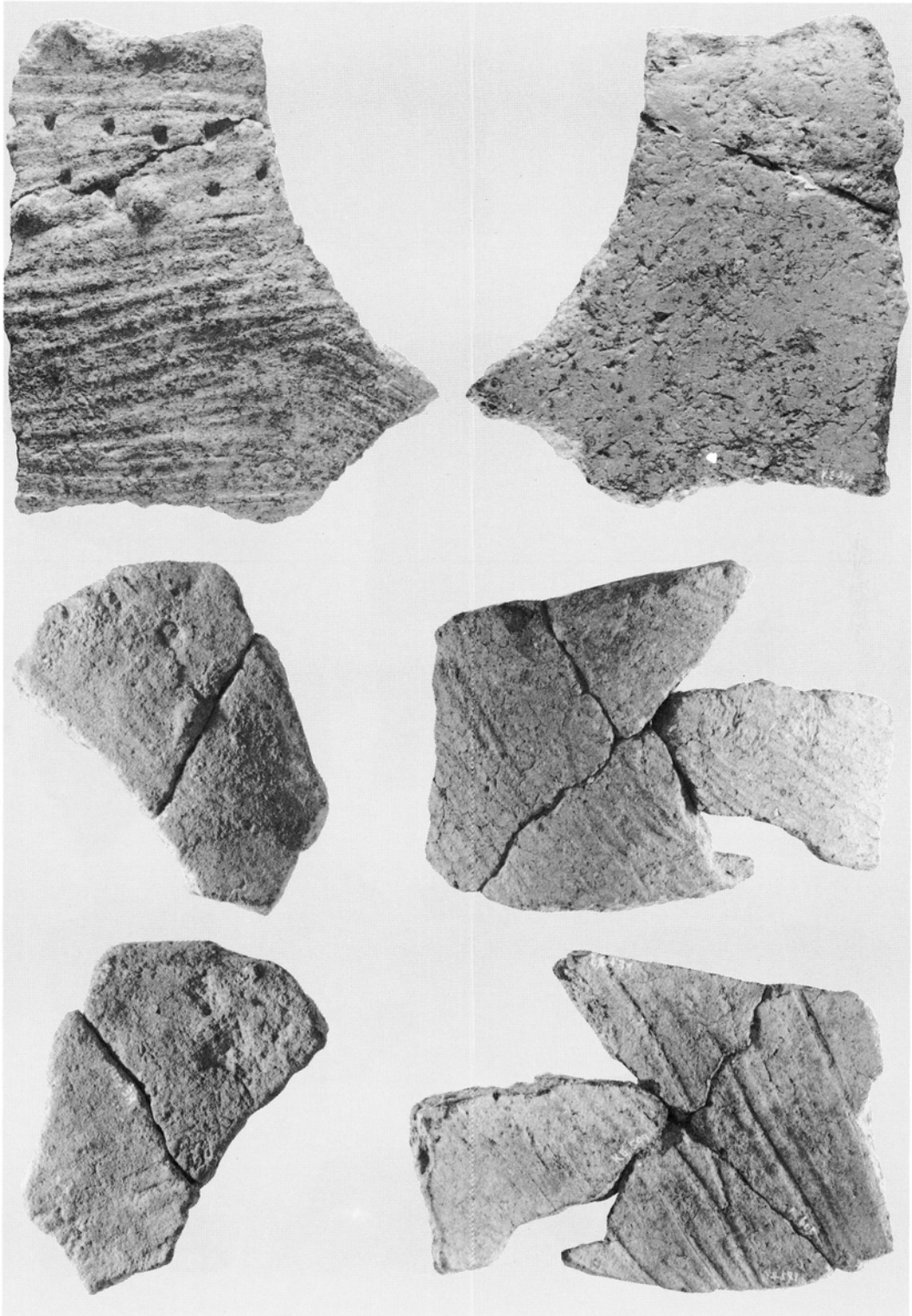


遺構出土土器Ⅶ

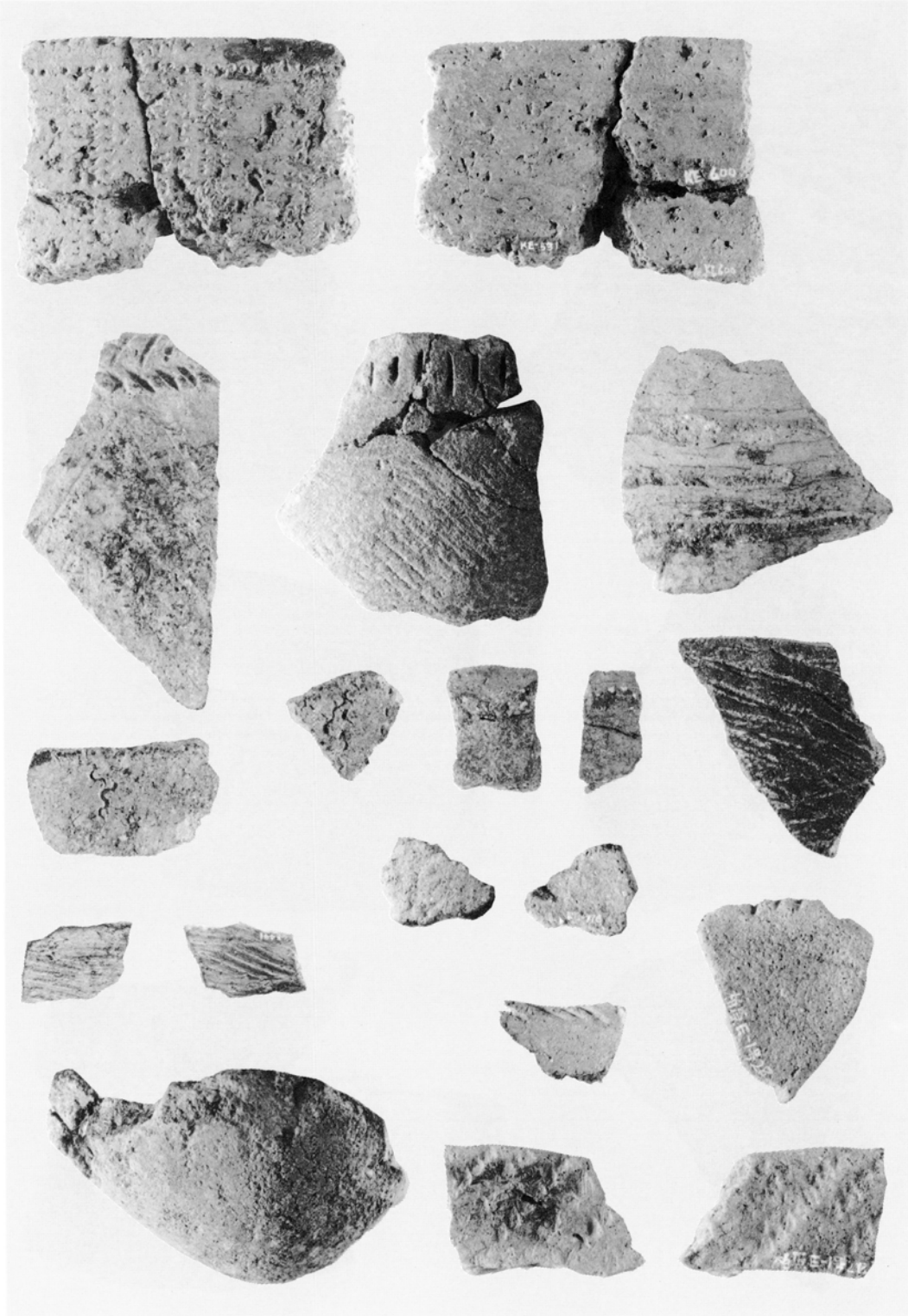


遺構出土土器Ⅷ

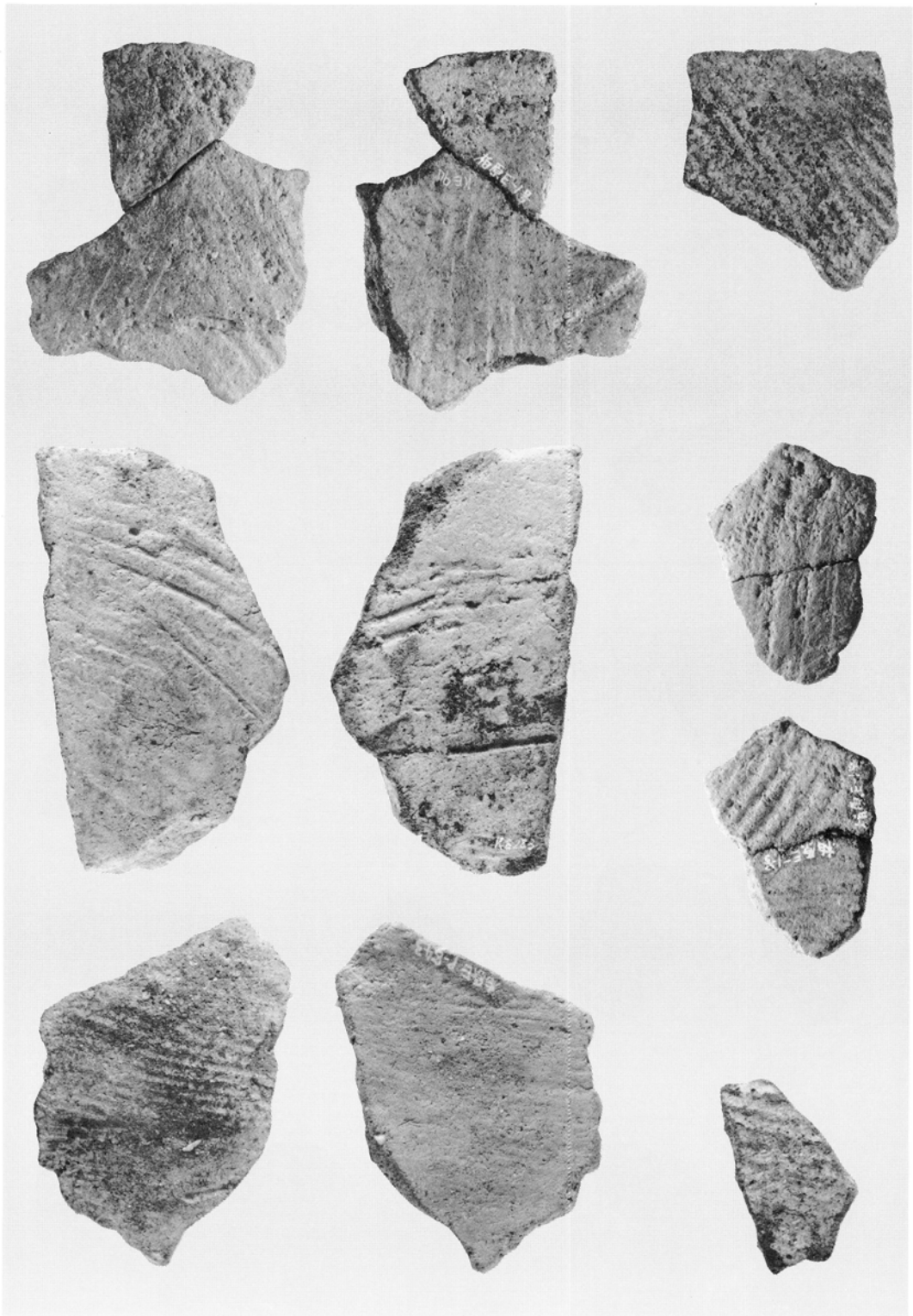
遺構出土土器Ⅸ



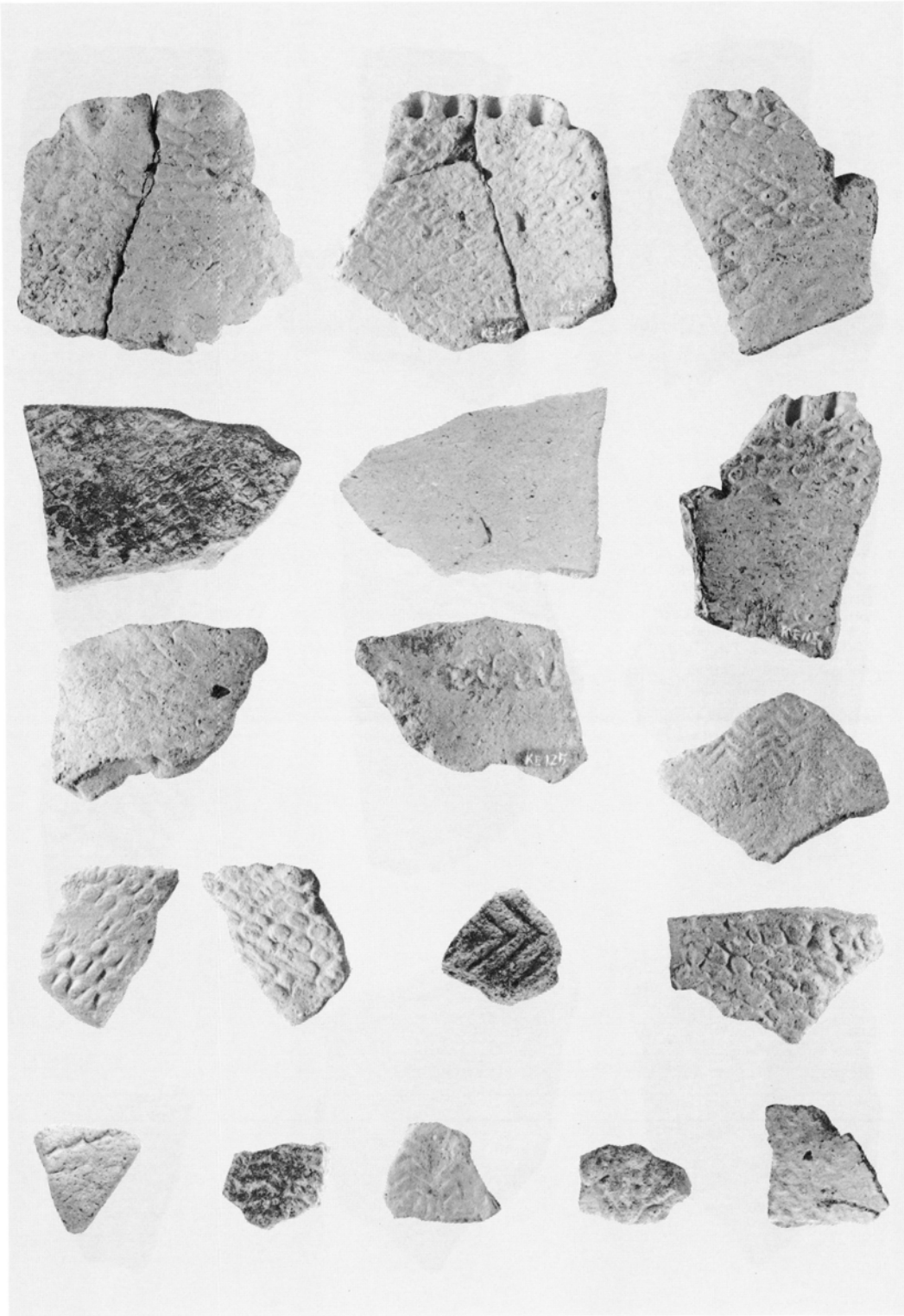
包含層出土土器 I



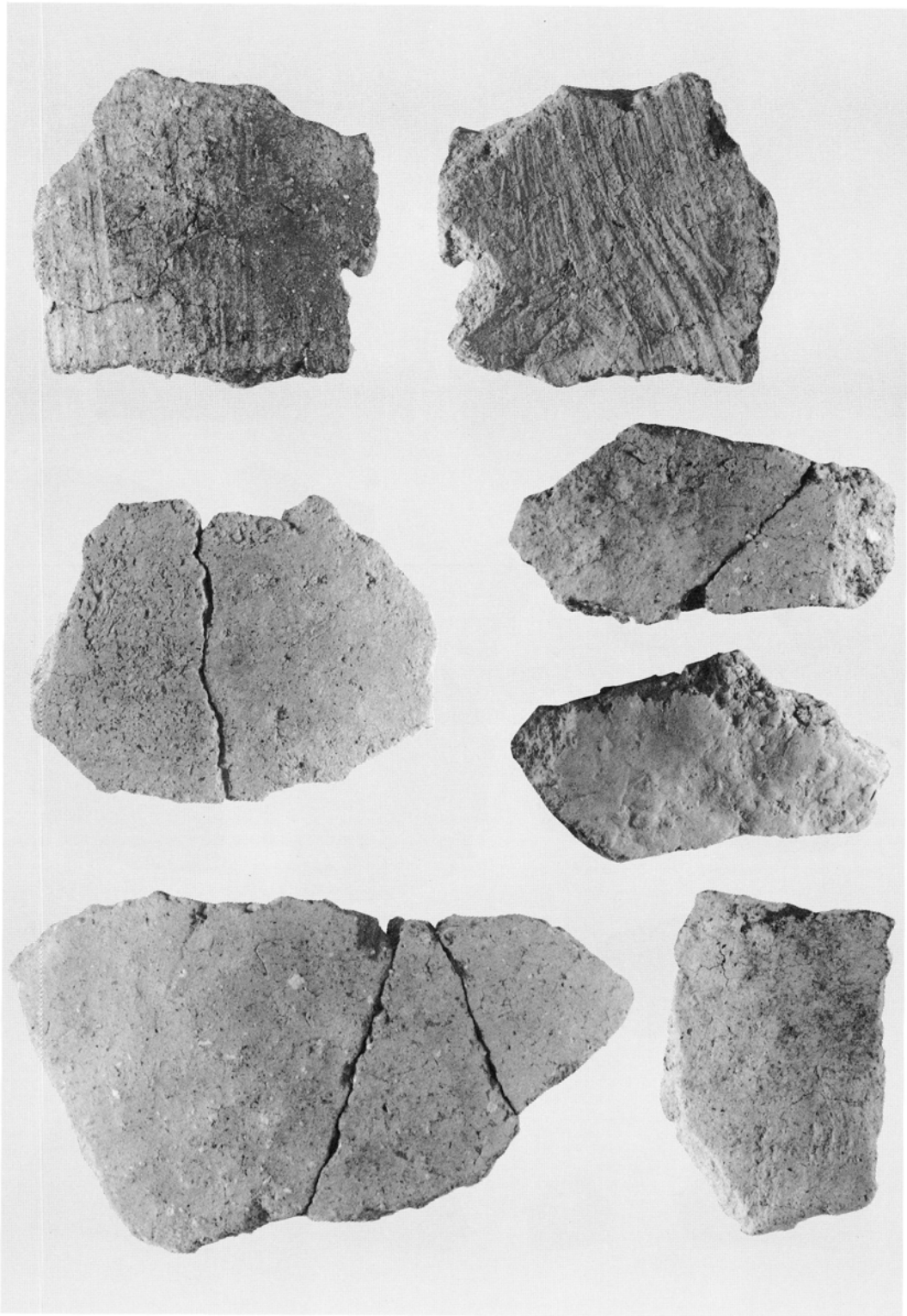
包含層出土土器II



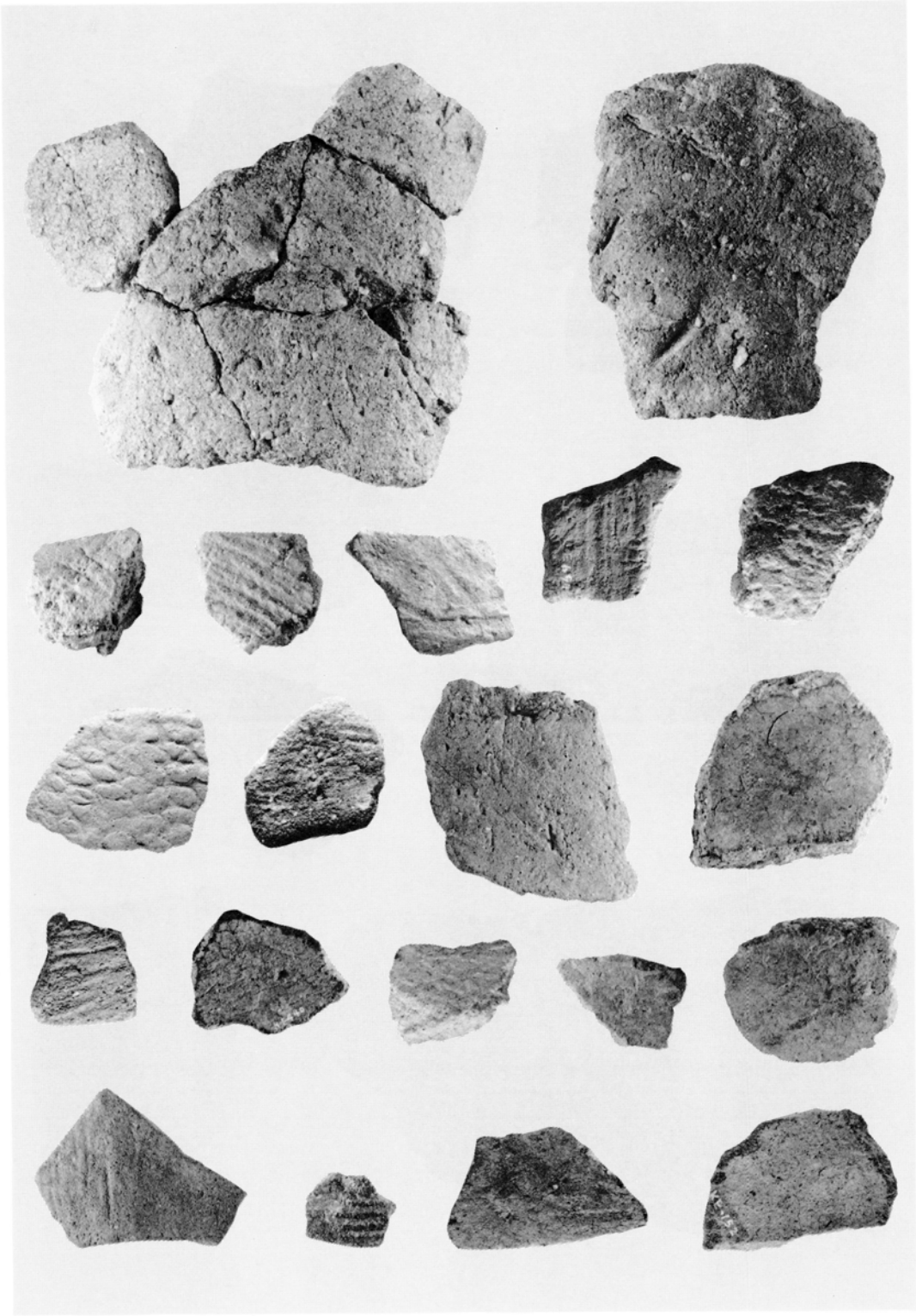
包含層出土土器Ⅲ



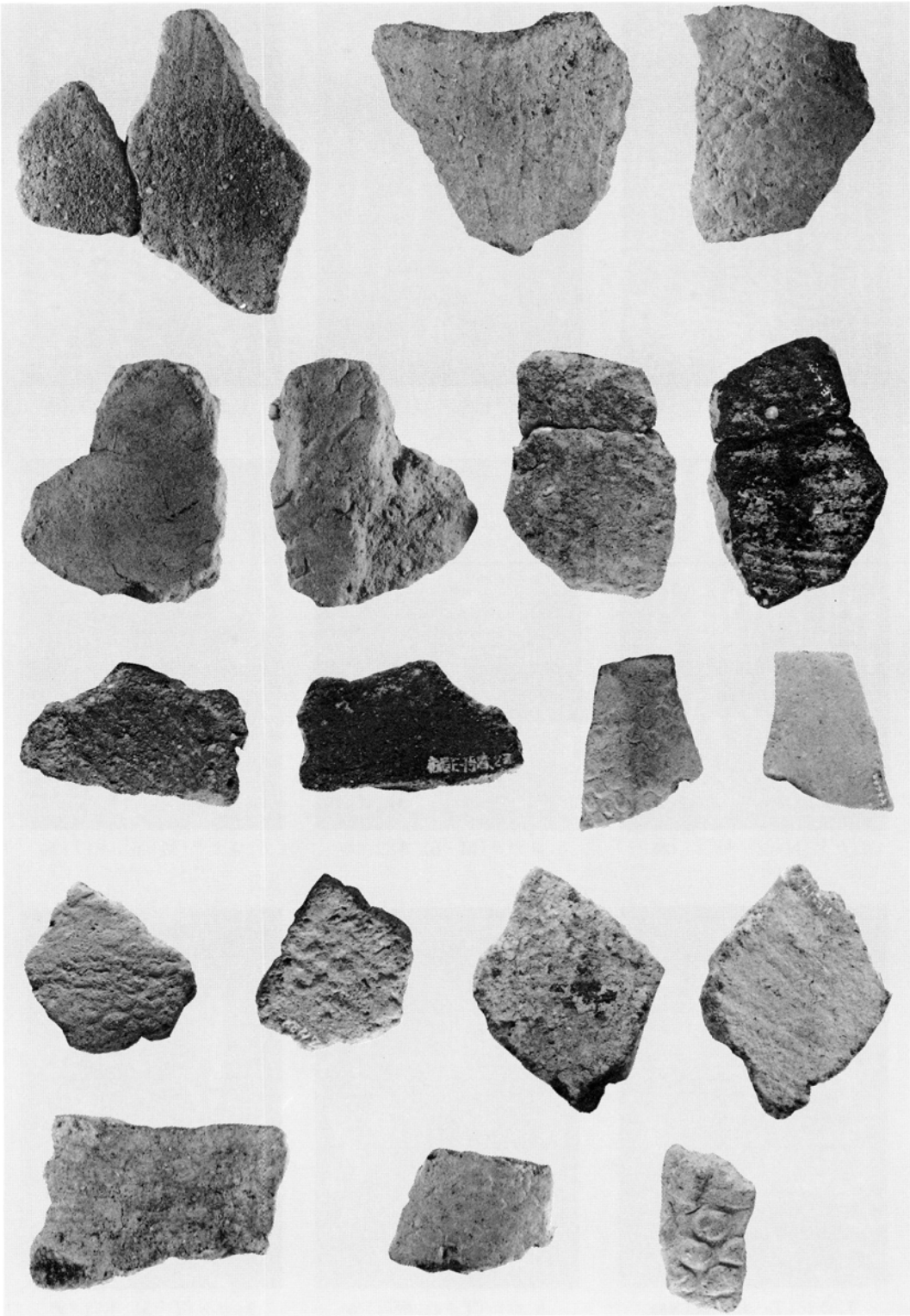
包含層出土土器Ⅳ



包含層出土土器 V



包含層出土土器Ⅵ



包含層出土土器Ⅶ

PL. 38

1.カヤ(L−1) 木口 ×60

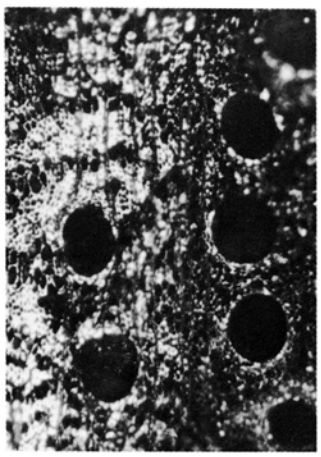
2.カヤ(L−1) 板目 ×120

3.カヤ(N−2) 木口 ×60

4.カヤ(N−2) 柾目 ×120

5.コナラ(M−6) 木口 ×30

6.コナラ(M−6) 木口 ×60

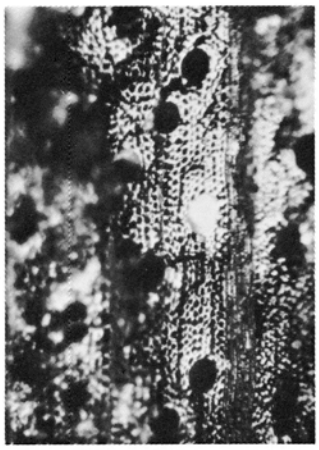


7.カシ(T−4) 木口 ×60

8.カシ(T−4) 板目 ×60

9.カシ(T−5) 木口 ×60

10.カシ(T－4) 木口×60



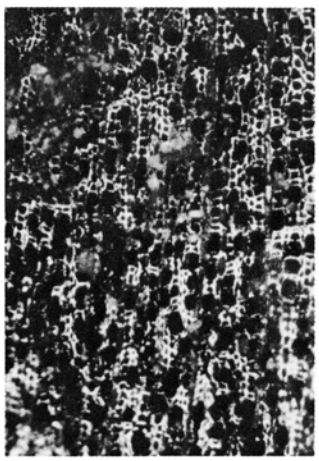
11.カエデ類(N－2) 木口

12.カエデ類(N－2) 板目

13.カエデ類(J－5G) 木口

14.カエデ類(J－5G) 柾目

15.カエデ類(J－5G) 板目



16.サカキ？(J－5G)

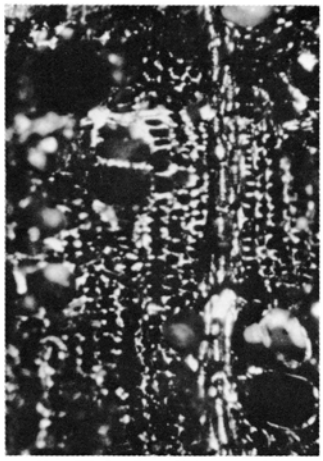
17.サカキ？(J－5G)

18.散孔材(T－4)

PL. 40

19.トネリコ(M−6)⑤

20.トネリコ(M−6)



21.アオダモ？(T−4,10)

22.カエデ？

23.アオダモ

24.ムクノキ

25.ムクノキ(19.最下層)

26.ムクノキ

27.ムクノキ

柏　原　遺　跡　群　Ⅳ

―縄文時代遺跡Ａ－１・Ｅ遺跡の調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第158集

1987年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名２丁目10番29号

印　刷　栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800